高知市文化財調査報告書第23集

鴨部遺跡

―― 市立鴨田小学校体育館・プール増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ――

2002. 3

高知市教育委員会

鴨部遺跡

―― 市立鴨田小学校体育館・プール増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ――

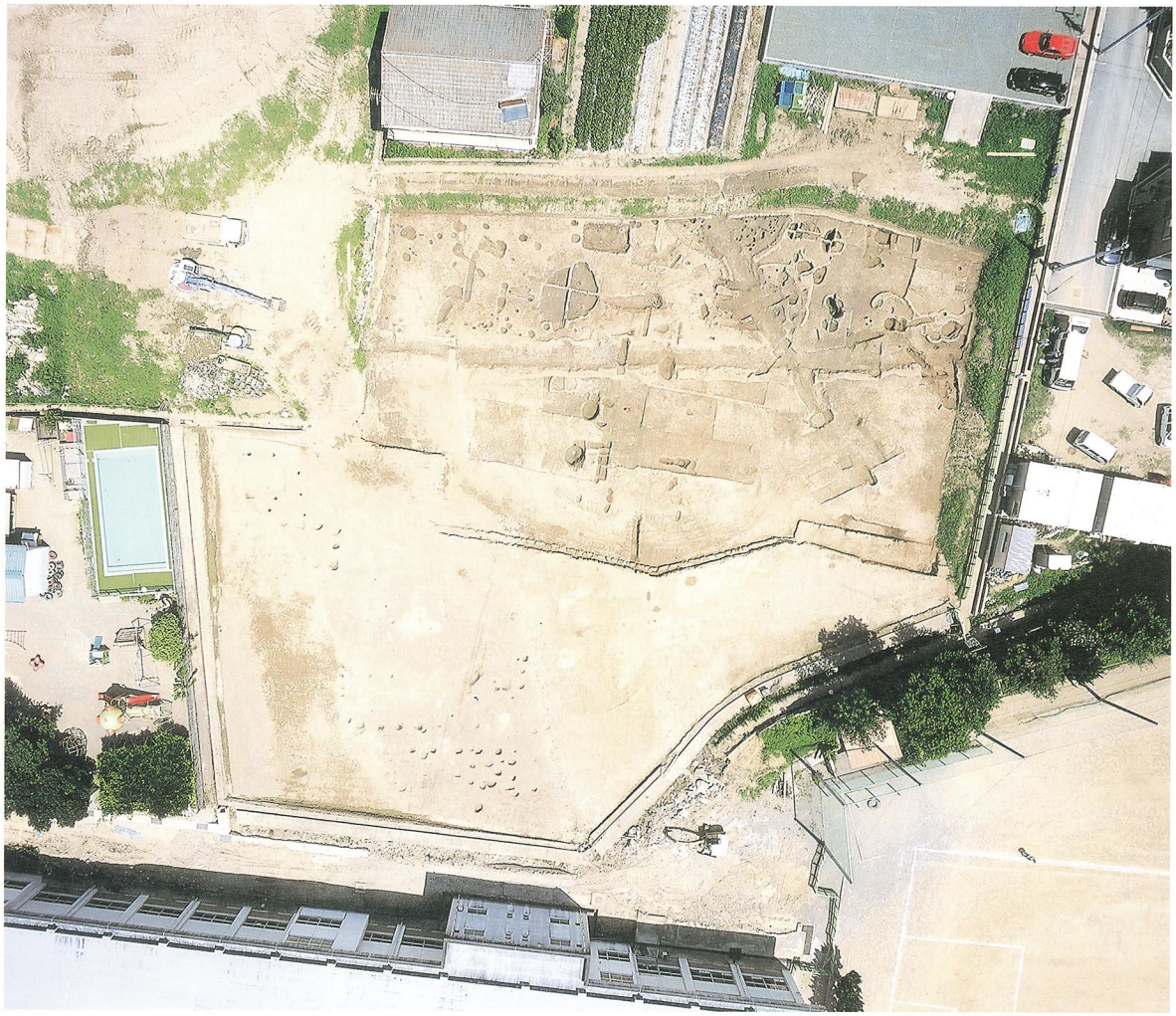
2002. 3

高知市教育委員会

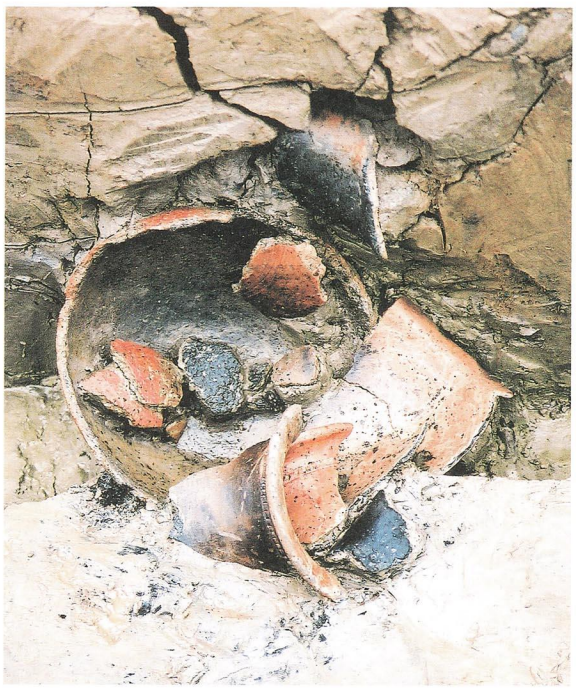
1—a　鴨部遺跡を上空より望む；手前より発掘調査区・能茶山・鏡川・旭町・北部丘陵

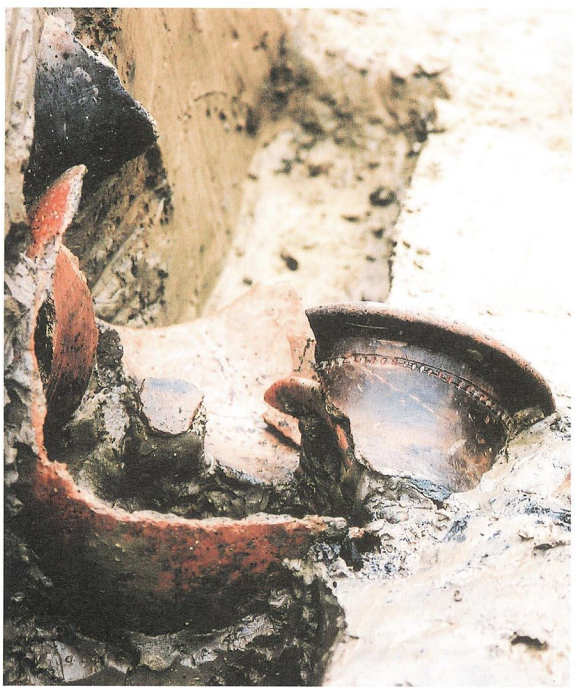
1—b　本調査着手直前の地上風景（南西を望む）

1—c　本調査着手直前の地上風景（北東を望む）



2—a　発掘中途の調査区全景（2001年7月22日，空中より撮影）





2—b・c　調査区北トレンチ底弥生前期土器出土状況（No.286. 289. 291）

1．能茶山(中央左寄り)・神田川(下右寄り)・鏡川(中央右端)の遠景[2002年，筆山霊園より西北西を望む]

2．A4区南部の弥生遺構面(左)を切る旧鏡川分流河道の埋積土上面(右)

3．A2・A1区の竪穴住居跡を貫流した自然流路SR－1(下は古代溝跡SD－17)

4．A3区で検出した旧鏡川分流河道跡の埋積砂礫層

5．A2区竪穴住居ST－1の埋積層と床面(床面はピット検出の状態)

鴨部遺跡周辺の遠景・調査区内流路跡と遺構群

6．A2区竪穴住居ST－1壁際の埋積層（写真下方は周溝に流入した炭灰焼土）

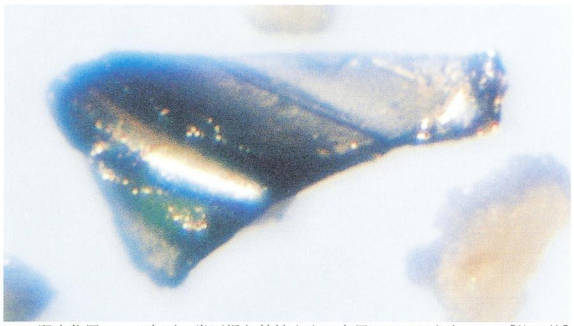
7．A1区竪穴住居ST－1床面直上の植物炭化物[目盛は1㎜]

8．A1区SK－10を埋積する炭灰焼土挟在層（検出面では包含層と不整合）

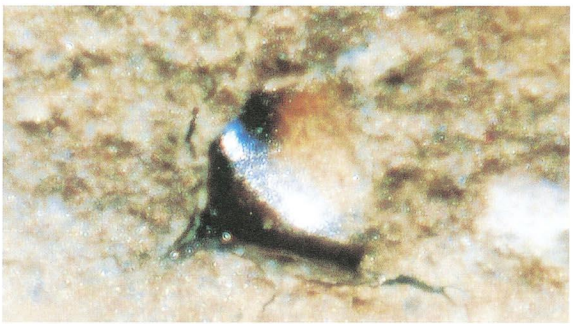
9．A1区SK-10を埋積する炭灰焼土挟在層（検出面では包含層と不整合）

10．能茶山の非固結泥質層に含まれ粗粒砂[約70倍；能茶山中腹採取]

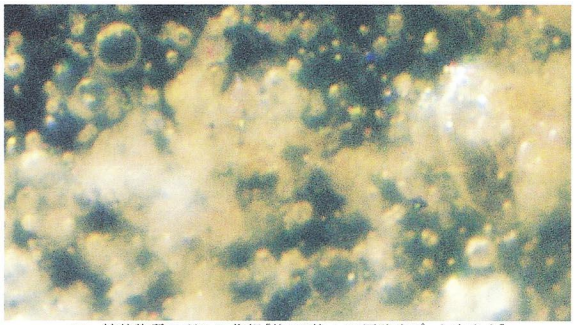
11．縄文晩期以前と見られるシルト質砂土層の粗粒砂[約70倍；A3区SR－2底下]



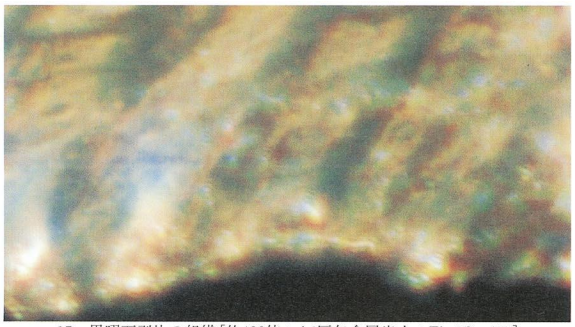
12．竪穴住居ST－1床面の炭灰混り粘性土中の鬼界アカホヤ火山ガラス[約80倍]



13．弥生前期木葉文土器片中の火山ガラス[約80倍；A2区SK－32出土；Fig.73－319]



14．被熱物質のガラス化相[約100倍；A1区弥生ピット内出土]



15．黒曜石剥片の組織[約400倍；A4区包含層出土；Fig.78－457]

遺構内埋積層・埋積物・遺物の細部

序

鴨部地区は，西隣の朝倉地区とともに高知市内でも早くから鏡川の沖積作用による陸地化が進み，人々の居住が広がった地域であり，すでに奈良時代のはじめには「鴨部郷」として文献にも登場しています。それ以前の先史・原始時代においても低地に集落が形成されており，今回調査を行った鴨部遺跡は，約1キロメートル西南の朝倉地区に位置する柳田遺跡などとともに，低地遺跡の代表的なものです。

調査のきっかけは，公立学校の教育条件改善の一環として市立鴨田小学校の体育館とプールの増築計画にともなう事前調査として今回の発掘調査を実施しました。

調査の結果，高知市の平野部では初めての住居跡の発見や，市内の弥生時代遺跡としては最も早い段階の土器が出土する等の，大きな成果を上げることができました。

発掘現場には大勢の保育園児や小学生が見学に訪れ，また，現地説明会には炎天下のもと約100名の見学者があり，関心の高さがうかがえました。この報告書が本市，特に鴨部地区の歴史や文化財についての研究や理解を更に深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査に関わられた方々にお礼申し上げると共に，関係各機関のご理解とご協力に感謝いたします。

平成14年３月　　高知市教育委員会

例　　言

1．本報告書は高知県高知市鴨部に所在する「鴨部遺跡」の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は財団法人高知市学校建設公社が四国土建株式会社に委託し，高知市教育委員会が全般的な指導を行った。

3．発掘調査は2001年2月27日から8月24日まで行った。整理作業は現地で発掘と平行して行い，2002年3月29日まで行った。遺物は高知市教育委員会で保管している(遺物の注記はKA－00とした)。

4．本書の編集は高知市教育委員会の総括のもと，編集全般を武吉が行った。また，整理作業・編集に澤江和美の協力を得た。本文は調査に至る経過を田上，それ以外を武吉がそれぞれ執筆した。

5．発掘調査および整理作業において下記の方々の協力を得た。(順不同・敬称略)

発掘調査	岡林 福三郎・槇本 実・亀井 利治・田代 勝・岡田 晃・島津 忠利・上田 善右・深瀬 博水・大崎 一虎・土居 一彦・土居 豊・森尾 導・西笛 純二郎・中山 一寛・川野 孝典・坂本 洋子・亀井 清恵・野村 満子・大八木 邦子・山崎 初美・中村 栄喜・大崎 数恵・岡林 清子・森田 悦子・関 宮子・西笛 恵子・中山 清・田村 明・上村 敦彦・和田 雅弘・武市 正雄・畠中 貴行・田村 美賛子・松岡 るみ子・川村 典江・岩本 美穂・大賀 幸子・竹内 誠・鈴木 康将
整理作業	土居 初子・佐藤 淳子・樫尾 洋子・尾崎 富貴・飯田 縁・佐藤 雅子
発掘調査掘削工事	共運工業 株式会社
航空測量	アイシー 株式会社
基準点測量	株式会社 工栄

6．発掘調査並びに報告書作成に当たり，下記の諸氏・諸機関から助言，教示を賜った。記して感謝したい。(順不同・敬称略)

山崎 寛一郎・土居 庄次(地元)
松田 知彦・畠中 宏一・坂本 裕一(県教育委員会文化財保護室)
出原 恵三・森田 尚宏・前田 光雄・松村 信博・坂本 憲昭(県埋蔵文化財センター)

本文目次

第Ⅰ章　調査に至る経過 …… 1
第Ⅱ章　鴨部遺跡周辺の地理的・歴史的環境 …… 2
　第１節　周辺の地理的環境
　第２節　周辺の歴史的環境
第Ⅲ章　調査の概要 …… 10
　第１節　調査前の現況
　第２節　調査区の設定
　第３節　調査の方法
　第４節　表層部の状況
　第５節　B区の層位設定と地層堆積の特徴
　第６節　A区の層位設定と地層堆積の特徴
第Ⅳ章　表層部の調査成果 …… 14
　第１節　表層部の遺物
　第２節　砂礫客土の来源と畝形成の在地例
　第３節　空中写真との照合
　第４節　畝溝跡出土窯道具
　第５節　遺構形成の一つのモデルとして参考とすべき点
第Ⅴ章　B区の調査成果 …… 17
　第１節　遺構分布の特徴と遺存状況
　第２節　弥生終末～古墳移行期の土坑：SK－1
　第３節　古代期の掘立柱建物跡（SB－1・2・3）
　第４節　古代期の柵列
　第５節　出土遺物
第Ⅵ章　A区の調査成果 …… 20
　第１節　遺構分布の特徴と遺存状況
　第２節　古代期の溝跡
　第３節　弥生の自然流路跡SR－1・SR－2
　第４節　A１区の弥生遺構と出土遺物
　第５節　A２区の弥生遺構と出土遺物
　第６節　A３区の弥生遺構と出土遺物
　第７節　A４区の弥生遺構と出土遺物
　第８節　A４区縄文晩期包含層・残留ピットおよび出土遺物

第Ⅶ章　鴨部遺跡発掘調査成果のまとめ ……40
第Ⅰ期―生活地盤形成期(縄文晩期初頭以前)
第Ⅱ期―生活痕出現期(縄文晩期)
第Ⅲ期―生活空白期(縄文晩期後半)
第Ⅳ期―弥生集落形成期(弥生前期前半～中期中葉)
第Ⅴ期―弥生不明瞭期(弥生中期末～後期前半)
第Ⅵ期―弥生集落終末期(弥生後期後半～終末期)
第Ⅶ期―空白期(古墳時代)
第Ⅷ期―建物・溝形成期(奈良末～平安末)
付考　朝倉推定条里遺構と鴨部遺跡の古代遺構について ……51
座標系について ……52

挿図目次

Fig. 1　周辺の遺跡分布と鴨部遺跡発掘調査区の位置図
Fig. 2　調査前年の空中写真に見る鴨部遺跡周辺
Fig. 3　昭和終戦直後の空中写真に見る鴨部遺跡周辺
Fig. 4　鴨部遺跡発掘調査の区割図；試掘トレンチ配置図(縮尺1/500；1/1000)
Fig. 5　鴨部遺跡発掘調査：A区遺構完掘全図(縮尺1/200)
Fig. 6　鴨部遺跡発掘調査：B区遺構完掘全図(縮尺1/200)
Fig. 7　A区北トレンチ北壁の地層断面図(縮尺1/50)
Fig. 8　A区東トレンチ東壁の地層断面図―北部～中央区間―(縮尺1/50)
Fig. 9　A区東トレンチ東壁の地層断面図―南部区間―(縮尺1/50)
Fig.10　B区南壁の地層断面図(縮尺1/50)
Fig.11　B区西壁の地層断面図(縮尺1/50)
Fig.12　A区西壁の地層断面図(縮尺1/50)
Fig.13　A区東部耕作土下の畝溝跡群SD－1～16の遺構図（縮尺1/100；1/200)
Fig.14　B区掘立柱建物跡SB－1・2の遺構図(縮尺1/100)
Fig.15　B区掘立柱建物跡SB－3；柵列跡SA－1の遺構図(縮尺1/100)
Fig.16　B区柵列跡SA－2；SA－3；土坑SK－1の遺構図(縮尺1/100)
Fig.17　A区土坑SK－2の遺構図(縮尺1/40)
Fig.18　A区古代溝跡SD－17の遺構図
Fig.19　A区古代溝跡SD－17の断面図(縮尺1/40)
Fig.20　A区古代溝跡SD－17の断面図(縮尺1/40)
Fig.21　A区自然流路跡SR－1・SR－2の断面図(縮尺1/50)
Fig.22　A区自然流路跡SR－3断面図(縮尺1/50)

Fig.23　A1・2区弥生竪穴住居跡ST－1完掘平面図(縮尺1/50)
Fig.24　A1・2区弥生竪穴住居跡ST－1の断面図(縮尺1/50)
Fig.25　A1区ST－1床面に分布する植物炭化物(縮尺1/25)
Fig.26　A1・2区弥生竪穴住居跡ST－2を中心とする遺構完掘平面図(縮尺1/40)
Fig.27　A1・2区弥生竪穴住居跡ST－2の断面図・エレベーション図(縮尺1/40)
Fig.28　A1区弥生竪穴住居跡ST－2床面の遺物出土平面図(縮尺1/20)
Fig.29　A1区SK－3・4；SX－2の遺構図(縮尺1/40)
Fig.30　A1区土坑SK－4遺物出土平面図(縮尺1/25)
Fig.31　A1区土坑SK－5・6・9の遺構図(縮尺1/40)
Fig.32　A1区土坑SK－10の遺構図(縮尺1/40)
Fig.33　A1区土坑SK－11・12・13・14・15及び周辺ピットの重合状況(縮尺1/40)
Fig.34　A1区溝状土坑SK－17・18の遺構図(縮尺1/40)
Fig.35　A1区Pit－68・69の遺構図・遺物出土平面図(縮尺1/40；1/20)
Fig.36　A2区土坑SK－21・22・35の遺構図(縮尺1/40)
Fig.37　A2区溝状土坑SK－23・Pit－133の遺構図(縮尺1/40；1/20)
Fig.38　A2区性格不明の窪みSX－7・土坑SK－24の遺構図(縮尺1/40；1/20)
Fig.39　A2区土坑SK－27及び周辺Pit－148・151・154・155の遺構図(縮尺1/40)
Fig.40　A2区土坑SK－25・26・33・34の遺構図(縮尺1/40)
Fig.41　A2区土坑SK－32の遺構図(縮尺1/40)
Fig.42　A2区溝状土坑SK－32の遺物出土平面図(縮尺1/20)
Fig.43　A2区性格不明の大型掘込遺構SX－4・5の平面図(縮尺1/40)
Fig.44　A2区性格不明の大型掘込遺構SX－4・5の断面図(縮尺1/40)
Fig.45　A3区性格不明の掘込遺構SX－8及び溝状土坑SK－36の遺構図(縮尺1/40)
Fig.46　A3区溝状土坑SK－38・39・40と内外ピットの遺構図(縮尺1/40)
Fig.47　A3区自然流路跡SR－2・3の合流部及び周辺Pit－167・175の遺構図(縮尺1/40)
Fig.48　旧河道氾濫の影響が顕著なA4区の弥生遺構面堆積の断面図(縮尺1/50)
Fig.49　A4区東端部土坑SK－42・43の遺構図(縮尺1/40)
Fig.50　A4区切合土坑SK－44・45・46及びSK－72の遺構図(縮尺1/40)
Fig.51　A4区溝状土坑SK－74・80及びSK－65；Pit－223の遺構図(縮尺1/40)
Fig.52　A4区中央弥生土坑群最密集部の完掘平面図(縮尺1/40)
Fig.53　A4区土坑SK－47・49・50・53・75・76・77・78・81及びPit－202・203の断面図・エレベーション図(縮尺1/40)
Fig.54　A4区中央の遺構最密集群における弥生土器出土平面図(縮尺1/20)
Fig.55　A4区弥生の切合土坑SK－56・57・79及び縄文晩期のPit－215の遺構図(縮尺1/40；1/20)
Fig.56　A4区弥生土坑SK－57の遺構図・遺物出土平面図(縮尺1/40；1/20)
Fig.57　A4区西北部における弥生土坑SK－58・59・60・61・62・63・64の遺構図(縮尺1/40)
Fig.58　A4区中北部の深底型土坑列の遺構図(縮尺1/80)

Fig.59　A4区西北部縄文晩期包含層における遺物及び焼土面の平面検出状況とそれらの垂直分布(縮尺1/25)
Fig.60　A区耕作土下；B区出土遺物実測図：A区畝溝SD－1・8・9・12；B区ピット群・SK－1
Fig.61　A区出土遺物実測図：SD－17
Fig.62　A区出土遺物実測図：SD－17
Fig.63　A区出土遺物実測図：SD－17
Fig.64　A区出土遺物実測図：SD－17；SR－1･2；ST－1
Fig.65　A1区出土遺物実測図：ST－2；SK－3
Fig.66　A1区出土遺物実測図：SK－4・5・6
Fig.67　A1区出土遺物実測図：SK－7・9・10・11・12
Fig.68　A1区出土遺物実測図：SK－15・17・18・19；Pit－55・60
Fig.69　A1区出土遺物実測図：Pit－42・47・63・68；SX－1・2
Fig.70　A1区出土遺物実測図：弥生遺構検出面；遺物包含層(弥生)
Fig.71　A1区出土遺物実測図：遺物包含層(弥生)；北トレンチ
Fig.72　A2区出土遺物実測図：ST－1・2；SK－21・22・23・24・25・26・27・29・30・31
Fig.73　A2区出土遺物実測図：SK－32・33
Fig.74　A2区出土遺物実測図：SK－33・34・35；Pit－100・103・148・155・157；SX－5
Fig.75　A2区出土遺物実測図：SX－5
Fig.76　A2区出土遺物実測図：SX－5
Fig.77　A2区出土遺物実測図：SX－7；遺物包含層(弥生)
Fig.78　A2区出土遺物実測図：遺物包含層(弥生)
Fig.79　A2区出土遺物実測図：遺物包含層(弥生)
Fig.80　A3区出土遺物実測図：SK－36・37・41・Pit.164・SX－8・遺物包含層
Fig.81　A4区出土遺物実測図：SK－57・58・75・81；Pit.215；遺物包含層(弥生・縄文晩期)
Fig.82　A4区出土遺物実測図：遺物包含層(縄文晩期)全調査区採取遺物の実測図を付載
Fig.83　昭和終戦直後の空中写真に見る鏡川沖積扇の旧河道跡

表目次

Tab.1～18　遺物観察表1～18
Tab.19・20　石器・石製品観察表1．2

図版目次

巻頭写真．1－a　鴨部遺跡を上空より望む；手前より発掘調査区・能茶山・鏡川・旭町・北部丘陵

1－b　本調査着手直前の地上風景(南西を望む)

1－c　本調査着手直前の地上風景(北東を望む)

巻頭写真．2－a　発掘中途の調査区全景(2001年7月22日，空中より撮影)

2－b・c　調査区北トレンチ底弥生前期土器出土状況（No.286. 289. 291）

巻頭写真．3　鴨部遺跡周辺の遠景・調査区内流路跡と遺構群

巻頭写真．4　遺構内埋積層・埋積物・遺物の細部

PL.1　A区遺構・遺物出土

PL.2　A区縄文・弥生遺物

PL.3　A区調査区・SD－1～16

PL.4　B区SK－1；A区SD－17

PL.5　A区SD－17・SR－1・2

PL.6　A区SR－1～3；A1区

PL.7　A1区ST－1・2

PL.8　A1区SK－3・4・6・10・15・17

PL.9　A1区SK－19・Pit－68

PL.10　A1区検出面・包含層

PL.11　A2区SK－21・23・24

PL.12　A2区Pit－133・包含層

PL.13　A2区SK－32

PL.14　A2区SK－32

PL.15　A2区SK－32

PL.16　A2区SX－5

PL.17　A2区SX－5・包含層

PL.18　A2区包含層；A3区SX－8・包含層

PL.19　A4区SK－42・44・45・53・74

PL.20　A4区SK－57

PL.21　A4区SK－75・81

PL.22　A4区SK－75・81

PL.23　A2・4区SK－21・22・53・66；A4区縄文包含層

PL.24　A4区縄文包含層

PL.25　作業風景

PL.26　出土遺物：B区ピット・SK－1；A区SD－12・17

PL.27　出土遺物：A区SD－17

PL.28　出土遺物：A区SD－17
PL.29　出土遺物：A区SD－17・SR－1；A1区ST－1
PL.30　出土遺物：A1区ST－1・2
PL.31　出土遺物：A1区ST－2・SK－4
PL.32　出土遺物：A1区SK－4・6
PL.33　出土遺物：A1区SK－6・9・10
PL.34　出土遺物：A1区SK－11・12・15・17
PL.35　出土遺物：A1区SK－17・18・19・Pit－42・47・60
PL.36　出土遺物：A1区Pit－68・SX－1・2
PL.37　出土遺物：A1区検出面・包含層
PL.38　出土遺物：A1区 包含層・北トレンチ
PL.39　出土遺物：A1区北トレンチ；A2区ST－1・SK－21・23・24・26・29・30
PL.40　出土遺物：A2区SK－32・33・34
PL.41　出土遺物：A2区SK－34・35・Pit－100・SX－5
PL.42　出土遺物：A2区SX－5
PL.43　出土遺物：A2区SX－5
PL.44　出土遺物：A2区SX－5・包含層
PL.45　出土遺物：A2区包含層
PL.46　出土遺物：A2区包含層
PL.47　出土遺物：A2区包含層；A3区SX－8；A4区SK－75・76・包含層；参考資料
PL.48　出土遺物：石鏃
PL.49　出土遺物：石斧
PL.50　出土遺物：石斧・錐形石器
PL.51　出土遺物：石庖丁
PL.52　出土遺物：分類不明石器・紡錘車・敲石・砥石

第Ⅰ章　調査に至る経過

鴨部遺跡は以前から弥生土器が採集される遺跡として周知されていたが，これまで発掘調査の機会がなく，その詳細についてはよく知られていなかった。

この度，高知市教育委員会では，高知市立鴨田小学校の敷地に隣接する約3,000㎡の土地にプール及び体育館の増築を計画し，財団法人高知市学校建設公社に建設を委託した。この予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地である鴨部遺跡が含まれることから，教育委員会では学校建設公社の了解を得て平成13年1月に建設予定地内において，遺構・遺物の有無を確認するための試掘調査を行った。

試掘調査においては明確な遺構とともに弥生時代前期末を中心とする土器・石器が多量に出土した。この試掘調査の結果を受けて，高知市教育委員会と学校建設公社との間で直ちに協議が行われ，建設予定地のうち工事によって改変を受けない部分をのぞく約2,700㎡を対象として記録保存を目的とする本格的な発掘工事が行われることとなり，整理作業は鴨田小学校の旧用務員棟を利用することとなった。なお建設部分のうち掘削深度が直接及ばない部分についてもできうる限りの調査を行うことになった。

調査期間は平成13年2月27日から平成14年3月24日，調査体制は以下の通りである。

事業主体及び事務　財団法人高知市学校建設公社
設計協力　高知市建設下水道部道路維持課
調査主体及び事務　高知市教育委員会社会教育課

現地での調査は以下の体制で行われた。
調査員　田上　浩(高知市教育委員会社会教育課)
　西森重夫(同上)
調査補助員　武吉眞裕(四国土建株式会社)
測量補助員　澤江和美・土居初子
発掘現場管理　笠井　寛(四国土建株式会社，平成13年3月まで)
　岡橋信一(同上，平成13年4月以降)

第Ⅱ章　鴨部遺跡周辺の地理的・歴史的環境

鴨部(かもべ)遺跡は，高知平野西部の沖積扇に孤凸する「能茶山(のうさやま)」南麓に位置し，主として弥生遺物の分布地として知られてきた。この能茶山の開発は，遅くとも中世城館築営(神田旧城跡)に始まると見られるが，近世に至っては藩営尾戸窯御用の陶土採掘場となり，更には幕末文政三年(1820)に当地への同窯移設を経て，明治3年以降その民窯への転換と消長に加え墓地の造営と宅地化等，相次ぐ開発によって上部を削失するため，現況では標高5m前後の麓平地に対して21m程の比高を辛うじて保つに過ぎない。また，能茶山北麓にルートを採る国道56号線バイパス(土佐道路)の昭和57年開通を機に，広い田園・湿原地帯を縁取る山裾や微高地に小規模集落が点在した沿線一帯の景観は，交通量の激増を追う宅地化と商業地化の最前線へと変貌した。以来，往時の自然地形を偲ぶ視界を次々と遮蔽する地表環境の激変下に，能茶山には視覚上の存在感低下という新たな事態も加わるが，その地理的重要度は，鴨部遺跡立地の拠り所に止まらず，史料に見える鴨部郷成立の地理的・歴史的条件を解く重要な糸口を握る。

本章では，この鴨部遺跡消長の背景を成す地域的環境条件を，地理的側面・歴史的側面の順に概観する。

第１節　周辺の地理的環境

１．地質環境

鴨部遺跡が麓拠する能茶山は，秩父累帯中帯と南帯の境目に沿って東西に長径をもつ独立丘陵であり，砂岩・泥岩を基質としてチャート砕屑岩を含む。この地層中には非固結層・或いは風化層を伴う部分が見られ，砂礫～シルトに至る粒度のチャート岩片が含まれるが，泥質物の勝る部分は可塑性を具え，水簸を経て陶土に用い得る。近世土佐唯一の藩営尾戸窯が用いた陶土は，この種の泥質物を主成分とする。類似の非固結型泥質層を含む砂岩・泥岩互層がチャートを挟む岩相は，南限を仏像構造線で界する秩父累帯南帯の山地に多く見られ，鴨部遺跡周辺の半径3kmに限定して列挙すれば，筆山・皿ヶ峰・幸崎に良好な露頭が現存する。また，高知市内での分布範囲で言えば，浦戸湾以西の高知市を見下ろす山地に多く，ほぼ，筆山から伊野町境付近の針木峠を結ぶ一帯に断続すると見てよい。これらの地層は，粘土～シルト級の細粒子供給源として高知平野の形成に一定の役割を果たすと共に，その水成二次粘土が，過去に一部土器類の製作に用いられた可能性は十分に考えられる。

一方，北側から高知平野に砕屑物を供給する高知市北郊の山地は，秩父累帯北帯と中帯にまたがり，蛇紋岩とその捕獲岩類を特徴とする黒瀬川構造体が両帯間に介在する。ここでは，砂岩・泥岩互層中に非固結泥質層を挟む型と，それらがチャート質の礫岩や砂岩を含むタイプが存在する。前者は，鴻ノ森南麓の福井町緩斜丘陵部付近から万々・東久万・前里に伸びる。これまでの踏査に関する限り，後者の露頭は，万々の山中に孤立するものを認めるのみであり，南国市八幡の典型

例とは比較にならない小規模である。

いずれにしろ，可塑材・耐火材或いは漏水止め等として汎用性の高い泥質層が高知平野の周辺に露頭する点は，ここでの生活史の展開を支える不可欠な要素の一つとして重要である。

次に，完新世における高知平野西部の生活面として，次第に重要度を増したと考えられる沖積扇の形成自体は，秩父累帯北帯の山地を主な水源とする鏡川が主役を担い，久万川・江ノ口川・或いは神田川等の小川は，補助的・局地的あるいは時代限定的な役割を果たしたものと見られる。これらの河川による運搬砕屑物は，山地・丘陵と谷部が皺のように東西に並走する高知平野の原地形を東向きに埋積しつつ，広い内湾を有した浦戸湾を後退させている。この埋積深度と時間軸の交点として有用な鍵層には，鹿児島南西沖海底の鬼界カルデラ噴火によって約6300年前に降下・堆積したアカホヤ火山灰層があり，鏡川沖積扇の「朝倉付近で(海抜)0m付近，上町付近で－10m以上，最深部は(浦戸湾)湾奥部の弘化台付近で－30m」[注1]以上とされている。この扇頂下から扇端を経て湾底に至るアカホヤ火山灰の堆積深度差は，鏡川沖積扇下の基盤地形が浦戸湾に向けて急低する様子を示す。鴨部遺跡発掘の原因である小学校体育施設建設に先立ち実施されたボーリング地質調査[注2]のデータでは，同試杭No.2地点において，海抜－3m前後の層準に40cm厚の淡灰色火山灰層を検出しており，「ややガラス質な均一細砂」と記載されている。県下で検出される広域火山灰としては，アカホヤ(K－Ah)火山灰の他，約22000年前の鹿児島湾で生じた姶良カルデラを給源とするAT火山灰が存在する。ATが苦鉄度の極低い高珪酸型に属して無色ガラスを主とするのに対し，K－Ahは，より苦鉄分を含み，黒褐色ガラスを多含する。このため，鴨部遺跡の現地表下8m強の付近で検出された上記試杭コア・サンプルの「淡灰色火山灰層」とは，やや珪酸度の低い方のアカホヤ火山灰層と見てよい。沖積扇に占める鴨部遺跡の位置は，朝倉と上町の中間付近に在る。朝倉付近における海抜0m，上町付近における海抜－10mというアカホヤ火山灰層の埋積水準に照らした場合，この海抜－3m前後の水準におけるアカホヤ火山灰層の検出は，妥当な数値と言えよう。

また，同試杭コアの記載では，当該の火山灰層が砂質シルトに挟まれている。この砂質シルトは，高知平野第四系の基本層序中，旭町付近を分布限界とする縄文海進時の第Ⅰ泥質層に相当すると考えられる。縄文海進に続く河成層(第Ⅰ砂礫層)は第Ⅰ泥質層の上位にあり，同試杭位置では，鴨部遺跡発掘調査における包含層掘削下限に相当する標高3.8m～2.0mの水準に堆積する。なお，同試杭では，海抜－6m強以下の水準に粘性土を基質とする砂岩・泥岩基盤の風化帯を捉えており，この地域に露頭する一次粘土資源が沖積層や洪積層下に埋没して広がる様子が窺える。

2．地理環境

鴨部遺跡は，現行地名の「鴨田地区」に属す。鴨田地区は，鏡川下流右岸(南岸)に接する沖積扇の一部を占め，南に神田川を挟んで「神田」と接する。その東境は，能茶山の東麓線で「城山町」と接し，西境は「朝倉地区」と接する。「鴨田」名は明治の市町村合併で生じた二村名の合字であり，この地区の古名である「鴨部」と隣村「神田」の頭尾を採る。神田川は鏡川の一支流であり，高知平野西端から伊野町方面に伸びる「針木」の谷部に水源を発し，約5.5km下流の大原町で鏡川

に注ぐ。その改修以前の河道が不安定で，氾濫を頻発した原因の一つに，源流域を初めとする流域地質が細粒の泥質成分に富む一方，河床勾配が緩く，容易に河道の閉塞を来たした点が挙げられよう。

鴨部遺跡の地勢は，鏡川と神田川に挟まれた独立丘陵である能茶山南麓にあり，その西・南・東面には，旧鏡川主要分流の蛇行河道跡地形が認められる。この能茶山周辺部は，昭和40年現地調査の国土調査第61号地形分類図で三角州(デルタ)に区分[注3]されており，前項のボーリング・コアや本発掘調査の表層精査結果を総合すると，能茶山麓下の基盤地形は急傾斜で埋没して，谷状の凹地が廻ると考えざるを得ない。この地形ゆえに，西から東に向かう鏡川扇状地の形成過程では，能茶山の麓下に網状流路の流入する期間は長期に及び，その西面に達した河道は南北の二手に分かれる(Fig.3)。能茶山北面の平面形は，高知平野西部の条里地割方位と推定されるN16°Wと直交するE16°Nの直線を呈し，過去には鏡川分流のみならず，主河道の側方侵食をも繰り返す地勢に在る。一方，能茶山南麓では，鴨部遺跡範囲西隣の微高地よって，南に迂回した河道跡が認められる。鴨部遺跡現存部は，この鏡川分流の南凸蛇行路の凸岸に相当する点から，根本的な侵食を免れた部分である。

鴨部遺跡調査区の南半では，弥生中期～古墳初頭頃の期間に形成された河成砂礫堆を検出している。昭和22年極東米軍撮影の空中写真に検出される旧河道FCR－1(Fig.3)は，この河成砂礫堆を遺した鏡川分流の南遷河道跡と見られ，鴨部遺跡の東面に回り込み，能茶山の南斜面を侵食した後，城山町付近で神田川の河道に合したものと見られる。現神田川の左岸(北岸)に自然堤防を形成した河川は，むしろ旧河道跡FRC－1として地形検出される鏡川の主要分流と見てよく，明治創設の鴨田小学校は，水害の難を避けやすい自然堤防上に立地する。

鴨部遺跡付近における鏡川現流と神田川現流の最短距離は，約500mを測るに過ぎない。平野部では数条の旧河道沿いに高みを持つ自然堤防を除くと，前記国土調査でデルタに分類される低地であり，歴史的には洪水の常襲地帯に該当する。高知平野の普遍的課題の一つに治水問題が存在するが，この地区における重要度は特に高く，古代条里の施行に当たっては，測量結果に基づく複雑な計算を要した地域の一つと考えられる。この測量との関連で注目すべき地理環境が能茶山に存在する点が，早くから大脇保彦氏によって指摘[注4]されている。すなわち，高知平野西部の展望名所としては，従来より北部山地の「鴻ノ森」(327.0m)と南部山地の「烏帽子山」(358.7m)が親しまれるが，約6250m離れた両山の頂点間を結ぶ直線は，高知平野西部における古代条里地割の推定値と一致する上，能茶山中西部と鴨部遺跡東辺を経由する。能茶山の山形が平野の独立丘陵である点は，四方に対する眺望性から基準点測量の観測基地として機能し得る。更に，鴨部遺跡の本調査結果に顕れる弥生中期中葉を境に一旦消息を没する現象にこの特殊な地理環境が関わる可能性は，一考に価する。

第２節　周辺の歴史的環境

１．周辺の遺跡分布

高知市西部の沖積扇に関しては，鏡川右岸の朝倉地区を中心とする条里地割の良好な遺存が指摘される一方，これら平野部の先史時代に関しては，地面は遺跡の存在し得ない内湾底下という見方が支配的であった。しかし，1981年，朝倉甲字柳田における土佐道路関連用水整備工事に際して，弥生前期末土器群の一括出土が発見され，[注5]先史時代の生活面水準に対する根本的な見直しを迫る初例となる。その後，この柳田遺跡の発掘では，縄文後期から古墳に至る多量の遺物のほか，弥生前期末の大篠式土器片と焼土を伴う土坑が検出されており，沖積層内の遺構遺存が確認されている。この柳田遺跡は，鴨部遺跡の立地する沖積扇面のやや上流側に位置しており，その直線距離は，約1000mである。

高知市中西部に於ける既発見の遺跡は，丘陵麓あるいは山中に拠る城館跡や古墳が多く，弥生時代の散布地等がこれに次ぐ。この状況は，鴨部遺跡周辺に関しても例外ではない。Fig.1付表は，鏡川右岸の鴨部遺跡周辺に分布する登録遺跡の内容を略記したものである。この付近では，前述の柳田遺跡と本調査の対象となった鴨部遺跡の両発掘調査に於いてのみ，土器片を主とする縄文包含層の存在が確認されており，前者では，後期から晩期の包含層，後者では晩期の包含層およびピットと焼土面が検出されており，いずれも低地遺跡である点が注目される。また，弥生時代の遺跡分布にを拾えば，鴨部遺跡と柳田遺跡以外の低地遺跡としては，神田川右岸の鷺泊橋付近遺跡(鴨部)を挙げるのみであり，確認調査で弥生土器が出土している。山丘や独立丘陵に立地する遺跡は，鴨部遺跡の南～東面を囲むように分布する点が目を引く。山丘に立地するものとして，シルタニ遺跡(神田字汁谷)・神田ムク入道遺跡(神田ムク入道・泉川)が挙げられ，独立丘陵に拠るものに，船岡山遺跡(神田字船岡山)・神田遺跡(神田字中山北1317－2)・久寿崎ノ丸遺跡(神田字久寿崎2619)がある。しかし，これら弥生遺跡の詳細は不明であり，弥生中期中葉に至って一旦消息を断つ鴨部遺跡や柳田遺跡との関係も憶測の域を出ない。

古墳の分布は全て山丘もしくは独立丘陵に拠り，ウグルス山古墳(鵜来巣字ウグルス山)・船岡山古墳(神田字船岡山)・高座古墳(神田字中高座)・小石木山古墳(小石木町)等がある。古代の遺跡では，平地に立地する例として，須恵器高杯脚部の表採された鍛冶屋敷遺跡(鴨部字鍛冶屋敷)が知られるが，鴨部遺跡発掘調査で検出した掘立柱建物跡や柵列・溝跡と，これらに伴う遺物類の出土は，地域史の考証により具体的資料を提供するものとなった。いまの所，山丘や独立丘陵に拠る古代遺跡では，断片的資料が出土もしくは採取されているに過ぎない。中世に至っては，山丘や独立丘陵に拠る城館跡が平野部を囲むように分布する様子が際立つ。

以上，鴨部遺跡周辺を例に，検出の希少な縄文時代を例外とし，弥生以後の遺跡分布が高所に偏り分布する状況を一覧した。しかし，比較的深い層準に先史時代の包含層や遺構が埋没する低地遺跡として，柳田遺跡に続き鴨部遺跡が知られるに至った今日，この地域における地下埋蔵の実態が上記の高所偏重型遺跡分布と均衡するとは，更に言い難い。

2．史料に見る「鴨部郷」

古代の土佐には，西より「幡多」「高岡」「吾川」「土佐」「長岡」「香美」「安芸」の七郡が設置された。高知平野中西部は土佐郡に属し，郡下には「土佐」「高坂」「鴨部」「神部」「朝倉」の五郷が置かれる。この五郷の比定現在地としては，土佐郷が，市中北部の布師田～一宮～秦泉寺地区一帯，高坂郷が市中央の大高坂山・小高坂山および久万周辺，鴨部郷が鴨部周辺（現行の鴨田地区）および旭地区，神部郷が神田・鴨田地区，朝倉郷が朝倉地区に当てられる。[注6] 明治の市町村合併以後，新たな「鴨田」名と旧「鴨部」名が並存するため，名称とその指示する地区に混乱を生じているが，城山町と朝倉地区に挟まれた一帯に「鴨部」の地名が存在する点と，同地おける式内社郡頭神社の存在が，ここを鴨部郷に比定する根拠となっている。

一方，古籍所見の「鴨部」としては，天平勝宝四年（752）「造東大寺司牒」所載の施入封戸の中に「土左郡鴨部郷五十戸」と見え，鴨部郷は奈良東大寺の封戸となっている。また，保延三年(1137)の「石清水八幡宮検校光清譲状案」では，「鴨部庄」とする。なお，『続日本紀』神護景雲二年(768)の条に見える「土左郡人神依田公名代等冊一人賜姓賀茂」中の三十一人を，土左郡の鴨部在住の者[注7]と解する見方がある。

注釈

注1.『日本の地質8—四国地方』：日本の地質・四国地方編集委員会編，1991年6月25日。

注2. 高知市立鴨田小学校屋内運動場及びプール建築工事地質調査，鑑定者・種田行展，平成12年。

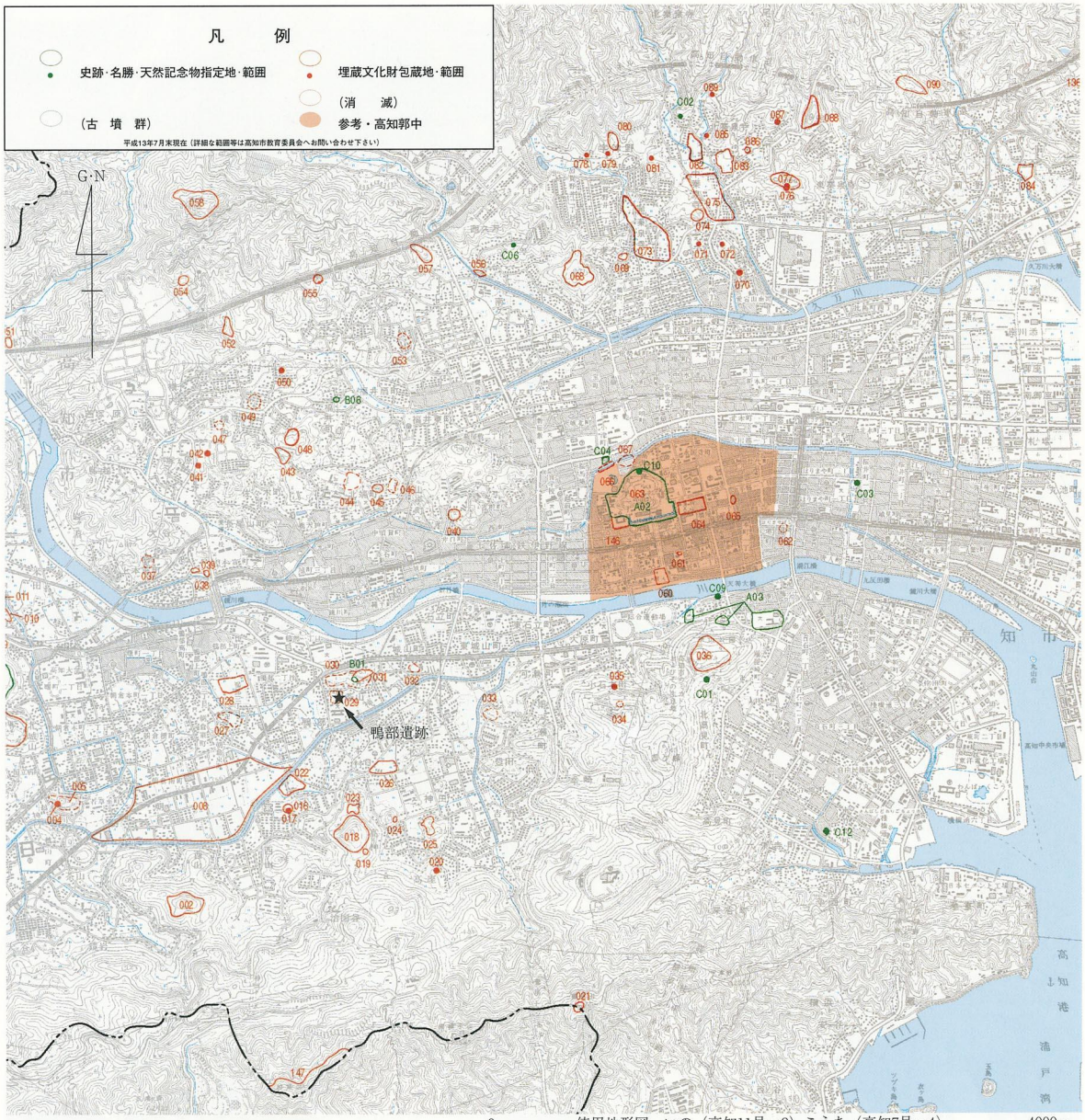
注3.『土地分類基本調査図(国土調査)第61号』：昭和40年現地調査，昭和41年経済企画庁発行。

注4.『土佐の条里—その復原再考と補説』『高知の研究第2巻』収録：大脇保彦執筆，昭和57年11月20日発行。

注5.『高知市「柳田遺跡」について』『土佐史談』171号，昭和61年収録：出原恵三執筆。

注6.『高知県史』：高知県編集発行昭和46年，第1章37・38頁参照。

注7.『高知県の地名』：日本歴史地名大系40，1983年，平凡社。



上掲の地図は，建設省国土地理院発行の1/25000地形図に基づく『高知市遺跡地図』（平13四複第82号）の一部を，1/50000の縮尺に複製。

番号	遺　跡　名	種別（ ）内は消滅	時代
2	恵美城跡	城館跡	中世
4	ウグルス山古墳	（古墳）	古墳
5	鵜来巣城跡	（城館跡）	中世
8	柳田遺跡	散布地	縄文～古墳
10	朝倉神社	神社跡	古代～
11	赤鬼山遺跡	散布地	弥生
16	船岡山遺跡	（散布地）	弥生
17	船岡山古墳	（古墳）	古墳
18	神田南城跡	城館跡	中世
19	ケジカ端遺跡	散布地	弥生
20	高座古墳	古墳	古墳
21	鷲尾城跡	城館跡	中世
22	鷺泊橋付近遺跡	散布地	弥生～中世
23	シルタニ遺跡	散布地	弥生・平安

番号	遺　跡　名	種別（ ）内は消滅	時代
24	高神遺跡	散布地	古墳・平安
25	神田遺跡	散布地	弥生～中世
26	神田ムク入道遺跡	集落跡	弥生～中世
27	鴨部城跡	（城館跡）	中世
28	鍛冶屋敷遺跡	散布地	古代～中世
29	鴨部遺跡	散布地	弥生
30	神田旧城跡	城館跡	中世
31	能茶山窯跡遺跡	（民窯跡）	江戸
32	石立城跡	（城館跡）	中世
33	久寿崎ノ丸遺跡	散布地	弥生～中世
34	小石木町遺跡	散布地	弥生
35	小石木山古墳	古墳	古墳
36	潮江城跡	城館跡	中世
147	柏尾山城跡	城館跡	中世

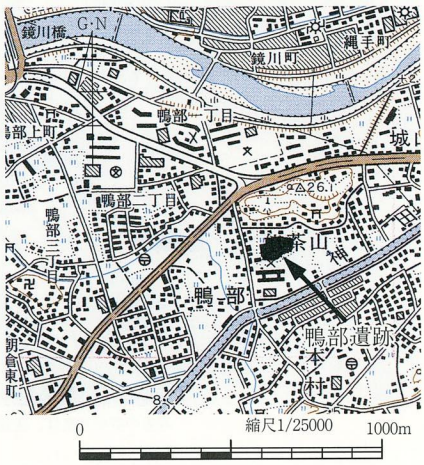


Fig.1　周辺の遺跡分布と鴨部遺跡発掘調査区の位置図

所掲の空中写真は，建設省国土地理院平成12年6月7日撮影のMSI-00-04Y-006-10を複製したもの

Fig.2　調査前年の空中写真に見る鴨部遺跡周辺

所掲の空中写真は，極東米軍昭和22年10月11日撮影のR518-4-26を複製したもの

Fig.3　昭和終戦直後の空中写真に見る鴨部遺跡周辺

第Ⅲ章　調査の概要

本章では，採用した調査方法および調査の基礎とした地層堆積の特徴について述べる。

第１節　調査前の現況

調査前の地表には，栽培を中断した畑畝が起伏する。作付けは，キャベツ・ブロッコリー・ネギ・トウモロコシ等であり，一部に水稲作付けの水田面も遺る(巻頭写真1－b・c)。調査対象地の地表面(畝を除く)はほぼ水平を維持しており，標高5.30mを前後する。また，地表面には，過去に能茶山の陶磁焼成に用いた近世末～現代の窯道具や陶磁片の分布が目立つとともに，弥生土器・石器・土師器・須恵器の破片も散見される。

第２節　調査区の設定

本調査における調査区の設定は，事前の試掘調査による遺物・遺構の分布状況と想定される本調査の完掘深度等を考慮して，それが浅いと想定される調査対象地の南半部分1350㎡を「B区」，深いと想定される北半部分1576㎡を「A区」に設定した。その区割り状況は，Fig.4-1図・注記事項1のとおりである。

第３節　調査の方法

調査の方法は，下記のところとした。

１．表土掘削

表土は，ほぼ現耕作土の厚みに相当する約20㎝を標準に，調査区全面を重機によって剥除した。

２．トレンチ掘削

地層観察と排水を目的とする上部幅2.8mの大型トレンチを，調査区の東辺と北辺に設定し，それぞれ東トレンチ(E-TR)，北トレンチ(N-TR)と名称した。

３．包含層掘削

機械掘削は，各時代の遺物包含層上面までとし，遺物の分布を確認した時点で人力掘削に切り替える。包含層の掘削は遺構の検出面までとし，同面が包含層の場合は，遺構完掘・記録後に包含層の人力掘削を繰り返す。

4．遺構検出

遺構検出は雨後，或いは散水後に行い，遺構の平面形が明瞭になるまで，地面の薄剥ぎを反復。遺構の平面範囲が不明瞭な場合は補助トレンチを開削し，断面の埋積層理によって範囲を探索した。

5．遺構掘削

遺構掘削はすべて人力による。小型ピットに対しては，埋積土の半裁状態で断面を記録した後，残る半分を完掘した。半裁方位は，遺構の平面形や切り合い状況等に応じて，規模や遺構形成の前後を把握するのに効果的と考えられる方位に設定している。円形に近いものについては，東西(Y軸)方位で半裁したものが多い。

6．測量基準点

測量の基準点は，GPS観測の対象とした調査区外縁のK-2・K-1に拠る。これらに基づき，調査に当たっては光波測量機を用いて調査区内の必要箇所に4mメッシュの杭列を設定した(Fig.4・5)。

基準点	B	L	N	X(m)	Y(m)	Z(m)
K—2	33°32′37″.8988	133°30′37″2895	−0 0 20.61	60306.912	961.812	5.564
K—1	33°32′39″.7475	133°30′38″3264	−0 0 21.18	60363.861	988.553	5.810

7．実測図

発掘調査の過程において，記録に用いた出土状況平面図は，遺物については縮尺1/10，遺構については縮尺1/20を基本とした。また，地層断面図に関しては，縮尺1/20を基本としている。

8．記録写真

発掘調査の過程における記録写真には，ブローニー：モノクロ・カラーリバーサル／35ミリ：モノクロ・カラーリバーサル・カラーネガを用いた。

9．空中写真および空中測量

空中写真および空中測量記録は，既掘部分の状態劣化が深刻化する以前に行うものとし，掘削中途の7月22日に実施している。

第4節　表層部の状況

表層部は畑作土と水田耕作土からなり，特に前者には砂礫が多量に混じる。調査区東部では，10～20㎝厚の畑作土の下位に砂勝ち砂礫の薄い客土層が見られ，更にその下方に砂礫の詰まった畝溝跡(Fig.13)が存在する。これら砂礫中に北面の能茶山窯からもたらされた物原の一部というべ

き窯道具や破損製品・未製品等が多量に含まれる。現耕作土中の窯道具等は，耕作の攪拌によってこれら砂礫とともに地表に現れたものであり，弥生土器片や古代の土師器・須恵器等の混在は比較的少ない。

第5節　B区の層位設定と地層堆積の特徴

B区では，その中東部の現耕作土下に河成砂礫堆が埋もれており，この砂礫堆上面付近から，古代のピット群と弥生終末～古墳初頭期の土坑SK-1(Fig.6)が検出されている。B区の層位設定は，このエリアの南端と西端に開削したトレンチ壁の地層断面(Fig.10・11)を基準とした。

現耕作土の厚みは15～20cmであり，南壁では，現耕作土(Ⅰ層・Ⅱ層)と河成砂礫堆(Ⅷ-1層以下)の間に暗褐色シルトが介在するが，これは遺存深度約0.7mの小流路跡である。既存の河成砂礫堆が強い掃流作用によって侵食された後，沈降した堆積物であり，層理に乏しい点から，一時の洪水によって埋積したものと見られる。この侵食を免れた砂礫堆の表面にピット群や土坑が検出される。これら掘り込み遺構の検出水準は，標高5.20m前後の水準である。転礫のサイズは，径3～5cm前後が多く，鏡川や国分川の上流に露頭の多い玄武岩質溶岩の砕屑粒子を含む。また，砂成分中には，磁鉄鉱粒子の含量が多く，神田川の上流域の岩相とは明らかに異なる。この砂礫堆形成も，旧鏡川の河成作用による。

第6節　A区の層位設定と地層堆積の特徴

A区では，表土以下～完掘面付近までの地層としては，東トレンチ東壁・北トレンチ北壁東部・A2区西壁・A4区西壁について観察記録している。東トレンチと北トレンチの壁面は，5月2日の集中豪雨で崩落を来たしたが，北トレンチ中西部区間については，測図・観察・記録が未了であった。このため，同区では，A1・2・3・4区の全体にわたる基本層序設定が不可能となり，上記各壁毎の層序立てとしている。各壁の層序については，Fig.7～9・Fig.12図と付載の注記事項に譲るものとし，ここでは，A区全体について地層堆積の概要と特徴を述べる。

A区の地層は，全般的に砂質シルトが優勢であり，シルト質砂土がこれに次ぐ。A区東部の表土下に分布する砂勝ち砂礫の客土と畝溝跡(SD－4・6・8・9；SD)は，次章で触れるように昭和終戦頃の畑作跡である。これらの直下は，古代後期～末と見られるⅤ－1層に至るまで無遺物層が続き，中世～近世にかけては包含層・遺構ともに皆無である。古代の包含層は，東トレンチ東壁のⅤ－1層に含まれる土師器類の細片を通じて断片的な遺存が推定される。この層位は，北に傾斜する水成層の一部と見られ，高度範囲は標高5.00m付近から4.75mの間に在る。また，古代溝跡SD－17埋積土出土を除く古代遺物の面的出土は極めて少数かつ散発的であり，平面上は包含層の遺存範囲を確認し得ない。

弥生包含層は，シルト質砂土に覆われるケースが多く，竪穴住居跡ST－1・2をはじめ，上部を

削失したピットや土坑類が多見される点等の状況から，弥生中期中葉以後に洪水による侵食と再堆積を経たものと考えられる。転礫層は，東トレンチ底の南端付近とA3・4区の南辺部に認められる他，A4区西壁では，弥生包含層の侵食部を充填する河成砂礫堆が現地表面に露出する(Fig.12－2)。また，古代末に埋没したと見られる溝跡SD－17でも，底部付近に砂礫の成層が観察される(Fig.8，SD－17M2・3・4)。これらの砂礫も，B区の砂礫堆と同様に，鏡川上流域の岩相を顕わしている。なお，A4区西端部を中心に，シルト質砂土からなる縄文晩期の包含層が遺存するが，分離した砂粒子には，多色チャートが目立つほか，塩基性緑色岩類や磁鉄鉱粒子がやや突出した量を占め，鏡川上流水系の浸食崖に圧倒的割合を占める秩父累帯北帯～中帯間の岩層を非常に強く反映する。サンプル資料の鏡下観察結果では，A区においても，一部客土を除く自然堆積層の骨格は，基本的に鏡川の沖積作用もしくは河成作用による運搬堆積物と見なし得る。

また，A区内の粘土量の分布傾向に関して言えば，B区と接するA3・A4区では，粘土成分がより乏しく，北側のA1・A2区では北側に向けて，粘土成分が増す。更に，A2区内では，特に西端部において，最も粘りの強い重埴土が支配的となる。一方，耕作土の下位から弥生包含層に至る堆積層理は，東トレンチ東壁の断面において，緩い北傾斜を見せている。これらの点から，かつて本調査対象地の北～北西側に，滞水しがちな区域が存在した可能性が強いと考えられる。

包含層および遺構検出面の標高水準に関して言えば，弥生包含層は標高4.20m付近で検出しており，最大30cm前後の厚みを持つ。縄文晩期の遺物包含層は，標高4.00m付近の弥生包含層直下で検出し，最大厚は約20cmである(Fig.12－2)。また，同期の焼土面2箇所は，包含層下にある(Fig.59)。これらは，自然堆積したシルト質砂土が被焼して明褐色に酸化したものであり，標高3.80mを前後する。

第Ⅳ章　表層部の調査成果

事前の試掘調査により，特に調査対象地の東部における多量の窯道具をはじめとする能茶山窯業関連資料の埋蔵が判明している。窯道具類は，窯体の素材や構造および胎・釉の原料とともに，古陶磁類の生産技術復原に最重要かつ有効な実物資料であり，窯業技術の現代化進行の一方で，収集保存を行う価値は十分に高いと考えられる。本調査では，この種資料の中で埋蔵量最多と見込まれる窯道具類に重点を置き，参考収集するとともに，これらを埋蔵する掘削跡について，一定の調査を加えるものとした。対象の資料が現代に及ぶ点から，本章では，地元談等を交えつつ，その調査成果について報告を行う。

第１節　表層部の遺物

鴨部遺跡の一角に小さな祠があり，地元では「サタヤシキさま」と伝えている。「眼病に効く神様」として敬われ，かつては大勢の参詣者で賑わったという。元々は，本調査区の西側で祀られていたが，鴨田保育園建設に際し，北側に移されている。この「サタヤシキさま」にちなんで，本調査区の土地も「サタヤシキ」と伝えられている。この表層部からは，各地の祠等で常見する祀り用の小徳利等も採取される点から，陶磁片の中には，在地の祭祀に用いたものが幾らか混在する可能性もある。

調査区の表層耕作土や，その直下の旧畝溝跡には，製陶を主とする能茶山窯業に用いた多量の窯道具類が含まれる。共出する遺物の古手には，江戸後期の18世紀末から幕末19世紀前半にかけて肥前を中心に制作の広まった広東碗や幕末～明治初期の手法と見られるトビガンナ施紋の陶磁片類等がある。それ以後の遺物あるいは物件には，屋号入燻瓦，ゴム入の地下足袋，合成樹脂製の三角定規，歯ブラシ，ガラス製化粧瓶，現存メーカー商号付の酒瓶等日常的な廃品類があり，その種類は凡そ広範にわたる。これらのうち，新手の廃品の素材や仕様から，旧畝溝跡の形成は昭和終戦後の余り年数を経ない時期と推定される。

第２節　砂礫客土の来源と畝形成の在地例

上記の畝溝に埋積する砂礫には二種がある。一種は山砂であり淡い黄色が基調である。いま一種は，砂勝ちの川砂利であり，灰色を基調とする。山砂の前者では，全体として黄色味を帯びる角形の泥質岩砕屑片と灰白～緑灰色のチャート粒子(円形～角形の砂礫)が目立ち，第Ⅱ章で述べた能茶山の非固結泥質層に含まれる固結岩片の特徴そのものである。すなわち，能茶山の製陶に用いた原土の水簸滓である。これら畝溝の一つに地元の土居庄次氏在窯で昭和終戦後の間もない頃に制作した陶器の破片が含まれるとの事であり，同氏の回顧談から，畝溝跡に関して相当詳しい経緯が判明している。

同氏によると，往時地元の農家では，農用地の嵩上げが必要であり，現鴨田小学校敷地の北境を流れる用水路を泥ざらいする度に，そこに混じる川砂を揚げてその用に充てていた。また，幾度か，農家の求めで能茶山の窯場に溜まる水簸滓が麓に運ばれ，その行く先は付近の比較的広範囲に渡るという。これに廃品となった窯道具や陶片類，すなわち物原の一部が伴うこととなる。一方，同氏は，釉薬に用いるシルトを求めて，麓の表層部を採掘することがあり，その際，溝状に細長く掘削して採土し，そのシルト採掘跡に農家が砂を詰めて，畑畝を作る段取りであったという。

第3節　空中写真との照合

ところで，戦後間もない昭和22年10月11日に極東米軍によって空中より撮影されたこの地域の写真では，鴨部遺跡範囲内の畝筋は全て南北向きに並列する(Fig.3)。一方，本調査で参考発掘した畝溝跡SD－1～16(Fig.13)では，ほぼ正確に地理上の南北向きに並ぶSD－10～16と，東―西～東北東―西南西向きの扇形に並ぶSD－1～9の両グループが存在するが，両者に詰まる砂礫は全て土居氏談の「川砂」である。前者では最大幅2.53m，最小幅0.90m，平均深度約0.25mを測る。後者では最大幅1.66m，最小幅1.20m，平均深度は前者とほぼ等しい。なお，参考発掘の対象グループの南側では，更に浅黄色系の山砂の詰まる畝溝跡がA区とB区に跨って南北向きに並列する状況を確認しており，Fig.3の空中写真に写る畝筋の状態に近い。これらの点から，調査対象に関する限り，川砂の畝筋と山砂の畝筋は形成時期が接近するが，時期小差が存在すると考えられる。

第4節　畝溝跡出土窯道具

畝溝跡出土の窯道具類には，数的に突出するハマを筆頭に，焼結した道具土，円柱形の焼台等があり，通常陶質素地を用いる。これらの内，道具土は窯内で器の置勢を安定させる場合や，器同士あるいは器と窯床・棚板などとの熔着を防ぐ目的で，必要に応じ様々な形状とする。ハマと円柱形の焼台は，いずれも中国大陸起源の形態を示し，前者は漢語の「支釘(してい)」，後者は漢語の「支座(しざ)」に相当する。ハマは重焼時に器間の熔着を防ぐ間敷であり，輪形板状台部の片面に錐形のハリを貼付する。Fig.60－1～5は，川砂詰の畝溝跡から出土したハマであり，台部はいずれも円柱形の素地から合わせ引きの糸切りによって切り取る。4以外の4個体では，台部中央に円孔を設け，5以外の4個体では片面にハリを貼付する。ハリの数は，1・5が4支，3・4が5支とする。同図版に例示する中では，外径は5が最小で5.3㎝，3が最大で10.0㎝を測る。なお，Fig.60－6は，SD－12の底部付近から出土した平安後期の土師器杯であり，10世紀後半代頃の形態を示す。同期の土師器類は調査区内から少量出土しており，畝溝形成の過程で混入した可能性が考えられる。

第５節　遺構形成の一つのモデルとして参考とすべき点

過去に，能茶山周辺の平野部から窯道具類が出土する旨の情報が幾度か話題となっている。俗に投げても届かない比較的遠方からも出土する点が不可解の核心であった。実際，地元では子供の頃に能茶山に散乱するハマ類を拾い，投げて遊んだ経験を持つ人が少なくないと聞く。本調査を機に，遠投の届かない地点から窯道具類が出土する現象について，その背景と実体の一端が判明した。すなわち，畑作物の水ストレス対策として特に砂を貴重とする一時期があり，少なくとも二種の合理的な解決法が採用された。一種は水路掃除による砂の確保であり，いま一種は陶窯場に溜まる膨大な水簸滓の除去による砂の確保である。後者では，農耕と窯道具という接点の乏しい組み合わせが，畑作所用の砂自体に窯道具が混じる背景の存在で完全にリンクする。

また，一部にしろ，畑作の土台として用いる畝溝が実際には釉剤採掘によって形成された点は，遺構全般の性格を考える際に，二重あるいは多重の性格を視野に納めるべき実例として貴重と言える。また，その性格の重なりには，全く意想外な組み合わせも在りえる点は，物を有用に活用した時代にあっては尚更と思われる。

第Ⅴ章　B区の調査成果

第１節　遺構分布の特徴と遺存状況

B区では，92基のピット群と1基の土坑が検出されている(Fig.6)。これらは，洪水の産物と見られる北北東～南南西方位の自然流路による侵食を免れた遺構群の一部であるため，同方位の遺構分布として標高4.90m前後の水準で検出されている。ピット群からは，古代の掘立柱建物跡3基(SB－1～3)，柵列3基(SA－1～3)が復元される。また，SK－1は弥生終末～古墳初期の遺構であり，周辺に比較的口部の広いピットを伴うが，それらとの時期関係は不明である。これら遺構の検出面が砂礫堆の表面である点や，ほぼ耕作土直下と言える埋蔵状況等から，いずれも歴史過程において人的あるいは洪水による上部の削失を経たものと見られる。また，上記の状況と関連するが，出土遺物が極少量である上，遺物遺存も少数のピットと土坑に偏る。

遺構・遺物の限定的遺存から，建造物跡の年代把握は困難な面を持つが，B区所出の土師器や須恵器類は概ね8世紀後半～9世紀後半代の範囲にあり，SB－3では8世紀末～9世紀後半代の特徴を示す。この状況と遺構方位の一致あるいは近似から，SB－2・SB－3およびSA－1・ SA－2は，平安前期の9世紀後半までに存在したものと考えられる。

第２節　弥生終末～古墳移行期の土坑：SK－1

SK－1(Fig.16－3)は長径2.51m，短径1.65mの大型土坑であるが，遺存深度は最深部でも0.29mと浅い。標高4.93m付近で検出している。底部からは，ほぼ完形に近い土器甕(Fig.60－22)が出土している。

第３節　古代期の掘立柱建物跡(SB－1・2・3)

掘立柱建物跡3基は，いずれも洪水性の流路によって西部を切られており，遺存ピットの配列が「コ」字形を呈す。最北のSB－1(Fig.14)がほぼ東西方位に近いE2° 30′ Nの棟行を持つのに対し，その南南西に位置するSB－2(Fig.14)・SB－3 (Fig.15)の両棟では，それぞれE8° 20′ N～E10° 00′ N，E10° 30′ Nの傾きを持つ。

SB－1：棟行3間以上，梁間2間の建物跡であり，7基のピットが遺存する。棟行，梁間の柱間は，それぞれ平均1.60m，1.45mを測る。

SB－2：棟行2間以上，梁間2間の建物跡であり，7基のピットが遺存する。棟行，梁間の柱間は，それぞれ平均2.12m，2.15mを測る。

SB－3：棟行3間以上，梁間2間の建物跡であり，7基のピットが遺存する。棟行，梁間の柱間は，それぞれ平均1.70m，2.48mを測る。

第4節　古代期の柵列

柵列では，SA－1(Fig.15)がSB－2と完全に同方位であり，SA－2(Fig.16)がSB－3(Fig.15)の方位に近い。SA－3のみ，他の建造物跡と傾斜が逆であり，E－13° 00′ Sの方位を持つ。

SA－1：7基のピットが遺存する。E10° 30′ Nの方位に並ぶピット6基の平均柱間は，約2.00mを測る。

SA－2：5基のピットが遺存する。ピット間の平均柱間は，約1.57mを測る。

SA－3：5基のピットが遺存する。ピット間の平均柱間は，約1.27mを測る。

第5節　出土遺物

B区出土遺物は，古代の土師器・須恵器および弥生終末～古墳初頭期の土器から成る。

土師器(Fig.60－7～10)

手法・形態の上で須恵器と共通するものが主流であるが，9では畿内の影響も加わる。7(Pit－40)は皿と見られ，口縁内面に回転ナデ痕を留める。8(Pit－11)は輪高台付杯であり，高台際の外面に横ナデ痕が遺る。9(Pit－17)は蓋縁であり，端部の内外面に水曳き調整痕を留める一方，内面にはミガキを施した形跡が見られる。10(Pit－16)は復元口径8.4cmの祭祀用小型蓋であり，内外面にベンガラ塗朱を施す。胎中の岩片粒子は，7が0.05mm以下の無色珪質岩片少含に止まる例を除くと，最大粒径が0.6～2.5mmの範囲にあり，いずれもチャートと砂岩・泥岩を含み，在地産の範囲に在る。また，10の祭祀用蓋では，径0.4mm以下の赤色チャートに加えて径0.3mm以下のアカホヤ火山灰(K－Ah)も含まれる。

須恵器(Fig.60－11～18)

杯・壷・甕体部の細片を得ている。

杯：11(Pit－41)は平底であり，体部内外面に回転ナデ痕を留める。12・13・15は，いずれもSB－3のPit－16から出土している。輪高台を貼付する12・13は同形態であり，いずれにも回転台右旋回のナデ痕が認められ，内底中央には，更に横～横斜のナデを加える。また，12では輪高台内部にヘラ切り痕が遺る。15は口縁片であり，軟質である点や復元外傾度の強さから，12・13より時期が降ると見られる。16の体部片も15に近い復元外傾度を持つ。11～13は8c末から9c前半代，15・16については，9c後半頃の製品と見られる。

壷：輪高台付底部片一点のみの出土である。外面には回転ナデ，内面には縦横ナデの調整痕が遺る(Fig.60－14)。

甕：いずれも体部の細片である。18(Pit.8)・17(包含層)のいずれも外面に平行叩目を施し，17では

内面に同心円紋が遺る。

胎原料に関しては，13・15に二次粘土の特徴が強く，15では，径0.4㎜以下の火山ガラスを含む。土器：19～22の甕を得ている。19(Pit－11)は外傾接合の胎壁が薄めであり，収束した上胴から短い外反口縁に転じる。調整痕を留めない。20～22では，丸い胴部の上端から口縁を「く」字形とする。20(Pit－28)の口縁外面は，縦ハケメとする。21(西トレンチ)では，上胴以下に平行叩目を施し，胴部最大径付近から縦ハケメを加える。22では上胴以下に平行叩目を施し，上胴以上をハケメ調整とする。

19に関しては，胎内岩片が在地産の特徴を示すが，時期が不明である。20～22は，在地様式上のヒビノキⅡ以降に属し，弥生終末から古墳初頭への移行期の製品と捉えられる。これら土器類は，いずれも二次粘土を原料とするが，器面観察に関する限り，テフラに関しては19に 微量のK－Ah(0.2㎜)を認めるのみである。

第Ⅵ章　A区の調査成果

A区では，古代・弥生前期～中期中葉，同後期末～古墳初頭の遺構や縄文晩期の生活面を検出した。古代では，平安後期～末頃に埋没した溝跡1条；弥生時代では，竪穴住居跡2棟・土坑79基・ピット192基・性格不明の掘込8基・自然流路跡2条；縄文晩期前半では，焼土面2所が出土している。

第1節　遺構分布の特徴と遺存状況

調査区の南端部は，第Ⅱ章で述べたように，弥生中期中葉以後に河道SR－3による急角度の侵食を受けたため，遺構の空白を生じている。また，この河道の接触に遅れて自然流路跡SR－1，SR－2(本来1条の流路跡)が調査区内の東部に北偏西39度(N39° W)の方向から流入し，北部に埋没していた2棟の竪穴住居跡ST－1，ST－2を貫通した後，河道SR－3に注いでいる。また，古代に至っては，直線的な1条の溝がE10° 55′ Nの方位に掘り込まれ，弥生の包含層と遺構及び埋没済の自然流路(SR－1・SR－2間)を切っている。この自然流路跡と溝跡がA区中東部で交差するため，A区の遺構検出面は，それらによる4分割の平面形を呈している。この種の流路による侵食や掘削を別としても，埋没遺構の上面は，ほぼ全面的に地表流による侵食を受けている。また，遺存遺構面には弥生遺構同士の切合や重合が多い。これら諸々の背景から，標高4.20～3.90m付近の水準に堆積する一連の弥生包含層には，攪拌を受けた部分が多いと見られ，下位が上位より新しい遺物包含状況は珍しくない。

また，調査区西端部を中心に最大厚10㎝程度の縄文晩期包含層が遺存するが，その削失面を弥生包含層が覆い，弥生包含層は後発の砂礫堆によって侵食されている。

第2節　古代期の溝跡

A区で検出した古代の遺構は，上記の溝跡SD－17(Fig.18)とこれを切る土坑SK－2(Fig.17，18)である。

SK－2

長径2.40m短径1.36mの隅丸方形状を呈するが，遺存深度は最大でも0.20mと浅い。内部からは，須恵器甕の細片と弥生土器片が少量出土している(詳細は，Fig.17－注記事項1)。

溝跡SD－17

溝跡平面形が明瞭となる水準は，標高4.30m付近であり，底部の水準は，標高4.10～3.60m付近を上下する。上部最大幅は3.06mを測り，延長50.50mの区間を調査した。溝筋はE10° 55′ Nの方位を向く。底部の勾配は，概ね東に向かって緩やかに低下し，この地域の水文地理と合致する点から東向きの送水であった点は，確実と考えられる。溝跡に埋積する遺物中，土器の年代が弥生前期まで，須恵器類の年代が古墳時代まで遡るのに対し，土師器類の年代は10世紀中葉～12世紀代に集中す

る。このため，SD－17の埋積時期は，12世紀と考えられる。

SD－17出土遺物

出土遺物には古代の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器のほか，既存の包含層や遺構から混入した多量の弥生土器と石器がある。

土師器：Fig.61－23～32は，古代後期～末の回転台土師器である。23～25は平底杯であり，いずれの外底にも，回転ヘラ切り痕が遺る。26・27は輪高台付杯であり，後者は足高高台型に属す。いずれも高台内の外底には，回転ヘラ切痕が遺る。28は輪高台付皿である。29～31は平底皿であり，29・30の外底には回転ヘラ切り痕が認められる。また，31はアカホヤ多含の腐植集積層に原土を採る。32は，円盤状高台型の碗である。これらの回転台土師器は，平安後期～末の手法・形態を示し，最も後出のものは27・28・31と見られ，11世紀後半～12世紀代の特徴を持つ。

羽釜：Fig.61－33～36は，摂津型の羽釜であり，10世紀の製品である。

黒色土器：Fig.61－37～39は，内面のみ炭素を吸着させるA類の碗であり，在地産の範疇に属す。37・38の胎内には，チャートやアカホヤ火山灰が含まれる。これらは，10世紀後半～末の製品と見られる。

須恵器：Fig.61－41・42の杯，43～54，Fig.62－55～57の甕，及びFig.61－49の高杯脚部を得ている。Fig.61－42は完形の平底小杯であり，8世紀末頃の形態を示す。甕では，外面に叩目を遺すものが多いが，45・46のように，カキメ調整を加える古手も存在する。このため，古墳時代の遺物も少量混在するもようである。45のカキメ原体は，約7歯を具える櫛ヘラ状の工具と見られ，調整痕の曳跡は轆轤左旋回を示す。

緑釉陶器：Fig.61－ 40は，緑釉陶皿の細片であり，胎色は純白に近い。一点のみの出土である。

弥生土器：SD－17の周辺に弥生の遺構が多在する点や，実際上部や側方を削られた弥生遺構の一部が溝底に露呈する等の状況から，混入土器の多くが当遺跡内の遺構や包含層に所属していた点に疑問はない。また，土器の破片に磨耗が少ない点も，遠方からの流入に否定的である。Fig.62－58～95は，これら弥生土器の一部である。

Fig.62－58は，遠賀川式土器壷の口縁片である。口頚界の段が明晰な古いタイプに属し，弥生前期初頭に位置づけられる。胎内の岩片は，径3.0㎜以下の砂岩・泥岩・及びチャートが主体であり，粒形は円～角に跨る。砂岩には，石英砂岩も存在し，在地産に標準的な組成と言える。59は，遠賀川式の形態を遺す土器壷の頚胴部である。頚胴界に繊細な一条沈線を回らし，その上下のミガキに強弱をもたせる手法で微かな段部を作り出す。胴部最大径の上位に下弦の双線重弧紋を沈線描きする。成形・沈線施条の各工程に遺された痕跡は，器に対して左周りの施順を示す。在地様式の西見当Ⅱ式に該当し，前期中葉に位置付け得る。胎内岩片は，主として径2㎜以下の砂岩・泥岩・チャートから成る。60～64は，遠賀川式の系譜を引く壷の上位部であり，口頚界や上胴部にヘラ描直線文の多条化傾向を生じており，前期後葉に位置付けられる。65は壷の口頚部であり，口縁の外反度が弱い。口唇面に縦刻目を一列する。前期後半の資料と考えられる。66は，遠賀川式の系譜上に細頚化と口縁の外反度を強めた壷の口縁片であり，口唇面に1条沈線を横走した後，口唇面

の全幅に右傾する刻目を一列する。外面調整は，縦ハケメに横ハケメを重ねる。胎内岩片には，砂岩・泥岩・チャートのほか，極微量のアカホヤ火山灰が含まれる。67～70は，球胴壷の胴部片であり，各々ヘラ描直線文間に山形文や刻目状貼付列点文，あるいは貼付浮文等を配す。前期末に属す。

71～73は，中期初頭の特徴を持つ壷の破片である。71は，口縁を強く外反し，口唇の下半に縦刻目を一列する。また，口縁部には，径2.5㎜の円孔をほぼ等間隔で内面穿孔する。72は球胴壷の胴部であり，櫛描沈線文帯間に波状文を施す。更に下位の沈線文帯下には三角形の刺突文を一列する。73は，細頸壷の頸部である。頸部外面に幅約14㎜の突帯を貼付した後，その中央に断面V字の深い1条沈線を施す。これによって上下2帯に分断された突帯に，ヘラ状原体を用いて擬似刻目の押圧列点を各々一列する。個々の押圧列点には，それぞれ「=」形の刻目が施される。主な胎内岩片としては，砂岩・石英砂岩のほか，径0.4㎜以下のアカホヤ火山灰が多量に含まれる。

74は中期後半の形態を呈する壷の胴部であり，上端が収束する。外面は縦横のハケメで覆われる。

甕は，西見当Ⅱ式の資料が多い。Fig.63－75～80がこれに該当し，およそ前期中葉と位置づけ得る。上胴に対して頸部の収束する79を例外として，口縁部がやや強めの外反を呈し，口唇面に縦刻目を一列する。口胴界に3条程度の沈線文帯を施すものと，この部位を無文とするものがある。82は，口胴界に4条，胴部最大径の直上に3条構成のヘラ描き直線文帯を左曳する。口唇面には断面V字の縦刻目を一列する。ここには，前期末の大篠式へと降る過渡的形態が認められる。また，当個体の胴部ヘラ描直線文帯は，三箇所において縦ナデによって潰されている。胎は灼熱減量性の多孔質を呈し，0.3㎜以下のアカホヤ火山灰もやや顕著に認められる。所用の原土は，明らかにアカホヤ堆積域付近で採掘されている。

83・84は，在地産の小型逆L字口縁甕であり，83では，含有岩片中に赤味の強い泥質岩片が目立つ。85・86は，南四国型甕(旧称「土佐型甕」)である。前者は口縁片であり，両面穿孔が施される。後者の上胴端には3条構成の摘み出し微隆起線文帯が回る。88は鉢形の器であり，口縁外端の一部に小さな素地を貼付する。接合部の耐久度は弱い。91は蓋であり，内外面をミガキとする。前期の製品である。92～95は，下胴～底部の破片であり，90は，前期後半～末の壷と見られる。

石器：Fig.64－96～101は弥生の石器である。96は，身長6.15㎝の頁岩転礫加工品であり，一方の先端部を片刃形に緩い角度で研磨する。ノミ状石斧の場合に基端部に相当する一方の端部では，片面のみ外径4.0㎜の穿孔が未貫のまま，中断されている。用途の特定が困難な石製品としておく。97・98は，小型方柱状片刃石斧であり，前者は無抉式に属す。また前者は厚みが刃幅を上回り，後者では厚みと刃幅がほぼ等しい。いずれも緑色片岩を石材とする。99はノミ状石斧であり両刃とする。頁岩の転礫を用いる。100は太型蛤刃石斧であり，結晶質緑色片岩の転礫を石材とする。101は，サヌカイト製の打製凹基式石鏃であり，全身を押圧剥離する。102は，双孔付き直線刃半月形石庖丁であり，片刃型に属す。石材は赤色の凝灰質頁岩を用いる。穿孔に際しては，細かい叩打を重ねて最深2㎜に達する外孔を両面側から予穿した後，回転錐によって貫通する。

第3節　弥生の自然流路跡SR－1・SR－2

既述のSD－17によって南北二つの部分に切断された弥生の自然流路を，それぞれSR－1・SR－2として識別している。この切り合い関係は，Fig.19－4の断面図によって明らかであり，SD－17より約0.2m深いSR－1の底面が遺存している。その底面標高は約3.65mを測る。SR－1・SR－2を通じて遺物の出土は，SR－1の部分に偏っている。これは，SR－1の部分で二つの竪穴住居跡を切る結果と考えられる。

SR－1出土遺物

SR－1では，弥生前期前葉から後期に至る土器とともに石斧類が出土している(Fig.64－103～107)。

土器：Fig.64－103は前期前葉の甕であり，口胴界に1条沈線を回らす。104の甕は後期に属すが，ST－1の上位に若干の後期包含層が遺存した結果と見られる。105の高杯脚外面には，ミガキが施される。

石器：Fig.64－106は蛇紋岩製の扁平片刃石斧である。107は片刃のノミ状石斧であり，頁岩の転礫を用いる。

SR－2出土遺物

土器：Fig.64－108では，直線文帯上に反転流水文状の櫛描を重ねる。中期中葉に属す。

石器：Fig.64－109は，両刃のノミ状石斧である。

第4節　A1区の弥生遺構と出土遺物

A1区では，竪穴住居跡ST－1，ST－2の2棟を検出したほか，大型の土坑としてSK－3～SK－18の16基が出土している。うち，SK－14～18の5基は，細長型の溝状土坑に類する。ピットの出土が70基を数えるほか，性格不明の掘り込み3基を数える。

竪穴住居跡ST－1

ST－1(Fig.23～25)は，SR－1の流入侵食にる分断地形に従って区画したA1・A2の両区に跨り，西北西――東北東方位の遺存長径は10.32mを測る。また，これと直交する遺存短径は，北トレンチまでの3.60mを測る。竪穴内部に付随する遺構としては，ピットがA1区側で28基，A2区側で13基を数える他，A2区側では周溝1条或いは2条，さらに最大幅約1.00mを測る溝状の浅い窪みが挙げられる。また，斑状の焼土面はA1・A2の両区に跨り，植物炭化物を伴う。ピット数の過密とA2区側遺存における周溝の一部重複等，一時の竪穴ではなく，ほぼ同位置での複数回の建替えが行われたと考えざるを得ない。

ST－1出土遺物：出土遺物の年代も上記の状況と矛盾せず，前期前半～中葉の西見当式(Fig.64－113，甕)から前期末(Fig.64－114～117)・中期後半頃(Fig.64－111，壷)を経て，後期後半の資料(Fig.64－110壷)をも含む。

出土遺物

土器：Fig.64－110の壷は，頚胴界外面に平行叩目を施した後，縦ハケメを重ねる。頚部内壁は直立とし，口縁は「く」字形に反る。口唇面には強圧の横ナデを施し，平坦とする。後期後半のヒビノキⅠ式に属す。111の壷口縁は，強く外反した後，口唇面に強圧のナデを施し，凹線状とする。114～117の胴部細片では，ヘラ描き沈線帯と山形文・刺突列点文等の組み合わせが文様構成の基調であり，前期末の特徴を表す。118は，極微細な網代状の圧痕で横位の文様を印す。119・120は櫛描波状文を施しており，中期中葉以前の製品と見られる。121は南四国型甕の上胴細片であり，中期に属す。125は，小型壷の底部付近であり，ミガキを施している。126は，土器転用の紡錘車であり，薄胎型の南四国型甕を素材とする。127は，サヌカイト製凹基式石鏃である。

竪穴住居跡ST－2

ST－2(Fig.26・27・28)は，壁部の要所をSR－1やSK－8・SK19・SK－31等によって切られるため，その平面形を復元し難いが，円形竪穴住居跡を隅丸方形型の竪穴住居跡が切る可能性が考えられる。

ST－2出土遺物

出土遺物は，土器と石器である。土器の様式年代は広範に渡り，弥生前期末(Fig65－128)・中期初頭(129)・中期(130・131)と後期後半～終末グループ(135～143)に大きく分かれる。石器は敲石と石斧各1点を得ている。

土器：Fig.128は大篠式の甕であり，口縁以下の外面に下地調整の縦ハケメを施した後，上胴端に6条構成，胴部最大径直上に7条構成のヘラ描沈線帯を施す。口唇外端に木理付きの縦刻目を一列する。口縁内面には，横ハケメ調整が施される。129は，広口壷の口縁片であり，端部は水平に反る。その内端に断面V字の刻目を回らし，やや内側に孔径2㎜の円孔を内面穿孔する。胎内には，多量の白雲母を含む。所含のチャートは多色であり，赤・緑・灰白色がある。130の壷では頚部が筒状を呈し，口縁を外反する。131は，南四国型甕の口頚部であり，口縁外端に断面四角の粘土紐を貼付し，突帯状の外肥帯とする。胎は薄い。132の甕・135・136の鉢は，弥生後期後半に属し，137の鉢・142・143の甕又は壷は，弥生終末～古墳初頭に属す。

石器：Fig.65－144は結晶質緑色片岩の転礫を用いた敲石である。145は，緑色片岩製の無抉式柱状片刃石斧である。刃縁線は正確に片理と直交する。

土坑SK－3

A1区東端部のSD－17北辺の標高3.967mの水準で検出した土坑であり，長径1.09m，短径0.72m，相対深度0.56mを測る。埋積土はシルト・シルト質粘土から成る。土坑内部に過去の地震による砂脈化を生じており，最下の埋積土の成分が遺構面を覆う(Fig.29－1)。この底面では勾玉1点Fig.65－151が検出されいてる。出土遺物は，このほか土器としてFig.65－146・147・148・149・150がある。

146は，在地産の東瀬戸内型甕に属す。上胴端には，櫛描沈線文帯が施され，遺存部では，平行性の高い6条の沈線が認められる。胎内岩片は，主として石英砂岩・細粒砂岩・泥岩・多色チャー

トおよび径0.5㎜以下のBW型火山ガラス等であり，秩父累帯に特徴的な構成を持つ。149・150は，外肥口縁型の広口壷であり，外肥面には指頭圧痕が一列する。胎内岩片は，いずれも泥岩・チャート・アルコース砂岩を主とする。これらは，弥生中期に属す。Fig.65－151の勾玉1点は，緑色のタルク製であり，板状の勾形とする。孔部は両面穿孔する。

土坑SK4

SK4は，A1区中南部のSX－2底面において，標高3.833mの水準に平面プランを検出した有段形土坑であり，長径2.04m，短径1.13m，相対深度0.96mを測る。その上面は，SX－2の底面にも跨る集石に覆われていた。この検出状況から，SK－4の埋積がSX－2の埋積に先行するものと判定される(Fig.30，注記事項1に詳述)。SK－4出土遺物には，Fig.66－152～155の弥生土器と156の筋砥石がある。

出土土器：Fig.66－152は広口壷の頚胴部であり，前期末に位置づけられる。頚部外面にヘラ描双線帯を7帯重ね，各双線帯の直下に刺突列点を一列する。上胴外面に7～8条以上の多条沈線文帯をヘラ描した後，その上端に縦長の刺突列点を一列する。口縁内面ではヘラ描沈線下に，縦長の列点を刺突している。154は，甕口縁であり，口唇面と口縁外端下に押圧小列点を連ねる。胎は砂礫を多含し，脆い。弥生中期中葉～後半の製品である。

出土石器：156はアルコース砂岩製の筋砥石であり，火焼を受けている。

土坑SK－5

SK－5は，ST－2の東にあり，その北端をSK－6に切られている。平面形は楕円を呈し，長径1.61m短径1.00mを測る。標高3.89mの水準で検出しており，相対深度は0.36mと比較的浅い(Fig.31－1)。

出土土器：出土した弥生土器(Fig.66－157～160)の細片は，いずれも多条沈線文を器面装飾の基調としており，前期末に位置付けられる。

土坑SK－6

SK－6は，不整円形の大型土坑であり，長径2.08m，短径1.91mを測る。標高3.931mの水準で検出しており，相対深度は1.58mと深い。埋積土には，焼土や炭化物の成層部分が存在する(Fig.31－1)。出土土器は比較的多く，前期中葉～中期に及ぶ

出土土器（Fig.66－161～173)：前期中葉に遡るFig.66－167の甕も出土するが，主流は前期末～中期の資料が占める。161・163は細頚壷であり，口縁部に径2～3㎜の円孔を内面穿孔する。161の頚部施文に際しては，1条沈線で口胴界を界し，刻目状の貼付列点文間に4条構成のヘラ描沈線文帯を配す。163では，口唇外面に右傾の小圧痕を一列する。頚部外面には，ヘラ描沈線文帯の一部が遺る。164・165は，前期末から中期初頭に移行する時期の製品と見られる。164は壷の口胴部であり，口唇下端に縦刻目を一列する。口縁には，径2㎜の円孔を内面穿孔する。頚部と上胴部にそれぞれ回らす4条構成のヘラ描沈線文帯を区画として，櫛描3条沈線を単位とする5列の縦線文帯を配し，その隣には，変形山形状の屈折文を同じ櫛原体によって右曳する。

165は壷の胴部である。外面の施文は上位より，櫛描波状文・貼付環形浮文・16状構成櫛描沈線

文帯間への刻目状貼付突帯3条の配置・縦線区画間の斜格子と重弧文の沈線描き・4条単位の櫛描沈線文帯重ねとする。また，上胴部に貼付した環形浮文の上から内径5.5㎜の円孔を焼成前穿孔している。上胴部と胴部最大径付近にはヘラミガキが認められる。胎内の主要岩片は，砂岩・泥岩・赤色チャート・径0.3㎜以下の火山ガラス等である。166は小型壷であり，口縁外端を貼付によって三角形に突起する。口唇直下には，小圧痕が一列する。

168～170・172は南四国型甕である。168は口唇面の所々に小指頭痕を留め，内外面をハケメ調整とする。169では，口縁外端に縦刻目を一列し，口唇直下の外面に櫛目痕の不揃いな直線文を施す。口縁内面は横ハケメとする。170は，含砂極多の薄胎器であり，胎の厚みは3.0～4.0㎜に止まる。口縁外面に断面三角の素地を貼付し，これに断面V字の右傾刻目を一列する。胎内岩片は，石英砂岩とチャートが主体であり，胎内未分解炭素が濃残する。口部のすぼむ甕であり，口胴界に微段を持つ。口縁端下の外面に指頭圧痕が一列し，胴部内面には，左旋回の指頭圧痕が並ぶ。

出土石器：石器としては，Fig.66－174の扁平片刃石斧1点を得ており，石材は蛇紋岩である。

土坑SK－7

ST－2の北東に在ってSX－3を切る。標高4.057mの水準で検出した楕円形の土坑であり，長径1.67m，短径0.96m，相対深度0.65mを測る(Fig.33)。

石器：太型蛤刃石斧1点(Fig.67－175)を得ている。結晶質緑色片岩の転礫に局部磨製を加えた石斧であり，片理と直交の剥離を生じている。刃縁線は正確に片理と直交する。

土坑SK－9

ST－1の東至近において，標高4.026mの水準で検出した土坑であり，長径2.31m，短径1.48m，相対深度0.43mを測る(Fig.31－2)。

出土土器：Fig.67－176は，甕胴部細片であり，前期末の特徴である多条ヘラ描直線文帯が見られる。177は，薄胎型の南四国型甕であり，外貼した口縁帯に何らかの小原体による押圧列点を一列する。

土坑SK－10

SK－9の東において，標高3.994mの水準で検出した大型の深い土坑であり，底部が狭く屈曲する。長径2.13m，短径2.11m，相対深度1.07mを測る。埋積土の状況は，SK－6と似ており，焼土や炭灰の成層を含む(Fig.32)。

出土土器：Fig.67－178・179を得ている。178は，多条直線文と山形文をヘラ描する。179は南四国型甕であり，上胴端に細長い粘土粒を3条に貼付連結した後，それらを断面三角に摘み出す。

土坑SK－11

北トレンチ際において標高3.875mの水準で検出した大型の土坑であり，底部が比較的平坦である。長径1.95m，短径1.06m，相対深度0.63mを測る(Fig－33)。

土器：Fig.180～187のうち，180～183の壷4点は，いずれも弥生前期後葉の資料であり，頚部の沈線が5～6条に多条化しているが，なお遠賀川式土器の系譜に繋がる。184は，在地性の強い南四国型甕に属し，前者のグループより年代が降る。

土坑SK－12

SK－10の東において標高3.818mの水準で検出した小型楕円形の浅い土坑であり，長径1.33m，短径0.86m，相対深度0.17mを測る(Fig.33)。

出土土器：Fig.67－188・189を得ている。188は甕であり，口部を収束した後，端部を直立に転じている。内外面にハケメ調整の形跡が残る。189は壷であり，頚部に2条のヘラ描沈線が施される。これらは，前期後半～後葉の製品と見られる。

溝状土坑SK－15

A1区中央北部において，標高4.179mの水準で検出した細長型の土坑であり，検出長4.06m，最大幅0.87m，相対深度0.32mを測る(Fig.33)。

出土土器：Fig.68－190～192を得ている。190は前期末の大篠式甕であり，上胴端に7～8条のヘラ描き沈線が遺存する。191は，前期末から中期初頭の壷細片である。

溝状土坑SK－17

SD－17の北辺において，標高3.744mの水準で検出した細長型の土坑であり，遺存長2.74m，最大幅0.85m，相対深度0.39mを測る(Fig.34)。

出土土器：Fig.68－193～202を得ており，前期中葉から中期前半までの資料が出土している。遠賀川式の特徴を持つ193を皮切りに，前期末に属す194の大篠式壷を経て，中期初頭頃と見られる200の球胴壷等，遺物の年代幅が広い。

出土石器：Fig.68－203・204の石鏃2点が出土している。いずれも小型の平基式に属し，前者はサヌカイト・後者は緑色チャートを石材とする。本調査を通じチャート製の石器の出土は，204の石鏃が唯一例である。

溝状土坑SK－18

SD－17の底部において，標高3.741mの水準で検出した細長型の土坑であり，遺存長3.36m，最大幅0.67m，相対深度0.51mを測る(Fig.34)。

出土土器：Fig.68－205～208のうち，205・206は南四国型甕の薄胎器に属す。ともに口縁端に刻目を施すが，205では，口縁外端下に小突帯を貼付して，刻目帯を二段とするうえ，上胴端には貼付摘み出し列点を連結して，微隆起線状とする。

出土石器：Fig.68－209の石鏃1点を得ている。サヌカイト製凹基式に属し，先端を欠損する。

溝状土坑SK－19

その東部がSR－1に侵食された細長型の土坑であり，標高4.105mの水準で検出している。遺存長3.78m，最大幅0.71m，相対深度0.62mを測る(Fig.26)。

出土石器：大篠式の祖型に当るFig.68－210や在地産東瀬戸内型と見られる211の甕等を得た。

Pit－42

埋積したSX－1を掘り込むピットであり標高4.052mの水準で検出している。長径0.77m，短径0.600m，相対深度0.19mを測る。

出土土器：Fig.69－215・216は，ともに広口壷に属し，内外の口縁端部に刻目を一列する。弥生前

期末～中期初頭の製品と見られる。

Pit－55

SK－15の南端に接するピットであり，標高4.157mの水準で検出している。長径0.80m，短径0.70m，相対深度0.42mを測る。

出土土器：Fig.68－213は球胴壷の上胴部片であり，上位より櫛原体による波状文帯・直線文帯・上弦下弦の重弧紋帯を配す。

Pit－60

SK－13の東に位置する楕円形のピットであり，標高4.149mの水準で検出している。長径1.08m，短径0.73m，相対深度0.19mを測る。

土器：Fig.68－214は，甕の口縁であり南四国型の薄胎器に属す。

Pit－63

埋積したSK－15を掘り込むピットであり，標高4.198mの水準で検出している。長径0.33m，短径0.30m，相対深度0.27mを測る(Fig.33)。

出土土器：Fig.69－218は，球胴壷の上胴部片であり櫛描直線文帯間に斜格子文を沈線描きする。

Pit－68

SX－2の北で検出した楕円形のピットであり，標高4.149mの水準で検出している。長径1.28m，短径0.30m，相対深度0.89mを測る。(Fig.35－1・3・4)

出土土器：Fig.69－220は南四国型甕の口胴部であり，口縁の貼付外肥帯に縦刻目を一列する。上胴端に微隆起線状の摘み出し列点を3帯に連結貼付する。221は口縁外反度の弱い壷の口頚であり，頚部に3条のヘラ描沈線が遺存。

出土石器：Fig.69－223は扁平片刃石斧であり，蛇紋岩を石材とする。224は頁岩転礫利用のノミ状石斧であり，刃縁の研ぎ出しは片理と直交する。225は，3孔の石庖丁であり，片刃の直線刃半月形とする。石材は緑灰色の玻璃質頁岩を用いる。弥生中期と見られる。226は双孔の石庖丁であり，片刃の直線刃半月形とする。石材は黒色頁岩を用いる。

SX－1

A1区東端の標高4.090mの水準で検出した性格不明の浅い掘り込みである。長径1.28m，短径0.30m，相対深度0.89mを測る。

出土土器：弥生中期の資料が多数を制す。Fig.69－227は外肥口縁の小型壷であり，胎の特徴は南四国型甕の中に同類が多い。228は口縁の外反度が弱く，口唇の内外端に刻目を施す。230は広口壷であり，口唇下端に刻目を一列する。231は細頚壷であり，口唇中央を横ナデによって窪ませた後，その内外端に刻目をそれぞれ一列する。232は，在地の原土を用いる東瀬戸内式の逆L字型口縁甕であり，口縁外端に縦刻目を一列する。口縁直下に並行度の高い遺存条数7条のヘラ描き直線紋帯を施す。

SX－2

SK－6東側の標高4.115mの水準で検出した性格不明の浅い掘り込みである。長径2.56m，短径

1.81m，相対深度0.32mを測る。

出土土器：Fig.69－235は壷の上胴部と見られ，縦三段の刺突列点を二重に横列し，ヘラ描縦線文に転じる。縦線文下には二重の管状刺突列点を反転，或いは交差させている。236の胎は，南四国型甕の系譜下にあると見られる。瘤状浮文を配す。237は，櫛描き直線紋帯間に波状文を施す。238は在地産の東瀬戸内型甕であり，口縁外端に縦刻目を一列する。

出土石器：Fig.69－239は偏平片刃石斧であり，蛇紋岩もしくは蛇紋岩に伴う超塩基性岩の一種を石材とする。

検出面

出土土器：Fig.70－240～260は検出面出土の土器類である。調査区全体を通じての傾向であるが，弥生前期後葉以前の資料の方が遺存が良く，弥生前期末後の資料は細片に破砕されたものが圧倒的である。

241は，前期前半の小型甕と見られる。240は前期後葉の壷であり，頚部上端の外面に5条構成のヘラ描き直線文帯を施す。242・247・249・250・254は前期末の資料である。これらのうち，242は口縁内端を貼付によって肥厚するタイプであり，本調査では極少数の検出を得たのみである。弥生前期末～中期初頭の資料は比較的多く，243・245・246等がその例である。243は，胴端に列点状の摘み出し微隆起帯もしくは摘み出し列点帯を施し，その下位に刺突列点文を横列する。また，中期初頭における在地での簾状文初現期の状況を示すと見られる248では，ヘラ描沈線帯に簾状文が押曳されている。調査区内に数少ない弥生中期末ころの製品としては，253の長頚壷があり，垂直の口唇面に縦刻目を浅く押刻する。

このほか，260は蓋と見られるが，ミガキの形跡が認められない。また，A区を通じて外底面が揚げ底状を呈する例が少なくないが，257ではむしろ「高台」形に近く，その典型といえる。

包含層

出土土器：包含層出土の土器類には，Fig.70－261～270がある。前期後半～末の製品には，261・265・268・269の壷類や，266の小型甕があり，前期末～中期では南四国型甕の264や類似の系譜と見られる267がある。中期では263の壷，後期後葉ではヒビノキⅠ式に所属する262の甕が見られる。

出土石器：包含層の石器にはFig.70－271～285がある。271は有抉式の柱状片刃石斧であり，片理に沿って剥離している。抉りは2連とし，その反対側に当たる前主面を中心に，細かい敲打痕が密在する。272～274は凹基式の石鏃であり，サヌカイトを石材とする。275は，双孔・両刃の直線刃型石庖丁であり，泥質結晶片岩を石材とする。276は粗粒砂岩の転礫を利用した打製刃器であり，片面のみの押圧剥離によって刃先は鋸歯状を呈す。277は，一方の先端を錐形とする磨製品であり，用途不明である。278～280は，転礫の端部を刃部状に研ぐ「ノミ状石斧」である。283では玄武岩質緑色岩の小転礫を研いで錐とする。

281は黒色頁岩の全面を研磨して，断面・平面ともに長方形とした後，一方の端部を尖形とするが，尖端を欠損する。282は頁岩の転礫を用いて一方の端部を錐形とするが，錐先に稜が顕著で回

転摩擦の形跡は無い。284は，凝灰質砂岩の砥石であり，扁平な転礫の両面に，各々2状の研筋が遺る。285は頁岩製の小利器であり，身長30.5㎜の全面を研磨するが，先端には刃潰し状の研磨が加わる。一つの可能性として石鏃の未製品が考えられる。

北トレンチ出土遺物

A1区北トレンチからは，弥生前期前半～後葉を中心とする土器類が出土している(Fig.71－286～293)。このうち，壷の286・289は同一個体と見られるが，割口付近を欠損する。また，291の甕は，左記の壷に共伴した。この共伴状況および口縁直下の施文，すなわち2条沈線間に刺突列点文を施す手法が同一である点から，西見当Ⅱ式に相当する弥生前期中葉頃の製品と考えられる(巻頭写真2－b・c)。287の壷は，頚部のヘラ描沈線が4条と多条化傾向を見せており，前期末・大篠式への前段階に当たる前期後葉の形態と捉えられる。290・292の甕では，口胴界に屈曲を持たない290が前期前葉の西見当Ⅰ式に相当し，292は在地化した前期末の大篠式に該当する。

第5節　A2区の弥生遺構と出土遺物

竪穴住居跡ST－1

SR－1によって侵食されたST－1の西部遺存であり，南北方位の遺存径3.60mを測る。標高4.005mの水準で検出している。相対深度は0.40mを図る(Fig.23；24)。

出土土器：Fig.72－294は壷の口縁であり，中期の枠で押え得る。外端貼付によって拡張した口唇面にヘラ刻目を回らし，外反する口縁内面には櫛描波状文を施す。295は胴部細片であり，ヘラ描直線文帯間に斜格子文を配す。これは前期末の特徴が濃い。

出土石器：Fig.72－296は結晶質緑色片岩製の平基式の太型蛤刃石斧であり，刃部の半ばを欠損する。297は石英斑岩製の敲石であり，顕著な敲打痕は中央に集中する。

竪穴住居跡ST－2

SR－1によって侵食されたST－2の西部遺存であり，南西～北東方位の遺存径0.95mを測る。標高4.004mの水準で検出している(Fig.26)。

出土石製品：Fig.72－298は，粘板岩製の磨製紡錘車であり，半ばを欠損する。軸孔は回転錐による両面穿孔としている。

土坑SK－21

SD－17の南辺～底面で検出された弥生土坑の遺存であり，南辺の標高4.191mの水準で検出している。長径2.53m，短径1.68m，相対深度0.88mを測る(Fig.36)。

出土土器：Fig.72－299・300を得ている。299は蓋であり，外面にハケメ調整を施した後，内外面にミガキを加える。300は壷の口頚部であり，口頚界に2条沈線を回らすほか，口唇中央に1条沈線を施す。外面は，ハケメにミガキを重ねる。壷は，前期後半～後葉の製品と見られる。

土坑SK－23

A2区西部の標高4.193mの水準で検出した半溝状土坑であり，長径2.31m，短径1.05m，相対深度

0.22mを測る(Fig.37)。

出土土器：Fig.72－303の壷は，口縁を方形貼付外肥とし，頚部に櫛描簾状文の横曳が認められる。

土坑SK－24

その東端部がSK－33を切る土坑であり，標高4.207mの水準で検出している。長径1.65m，短径1.15m，相対深度0.20mを測る(Fig.38)。

出土土器：Fig.72－304～307の胴部細片は，いずれも多条のヘラ描直線文帯を基調としており，前期末の特徴を帯びる。

土坑SK－26

SK－34北西の標高4.108mの水準で検出した半溝状土坑であり，長径1.21m，短径1.03m，相対深度0.27mを測る(Fig.40)。

出土土器：Fig.72－309は，大篠式甕であり，胴部上端に7条構成のヘラ描直線文帯を左曳する。前期末の製品である。

出土石器：Fig.72－308は，緑色片岩製の有抉式柱状片刃石斧の断片である。

土坑SK－27

SK－34南側の標高4.241mの水準で検出した半溝状土坑であり，長径2.21m，短径1.41m，相対深度0.40mを測る(Fig.39)。

出土土器：胴部細片を得ている。Fig.72－312では刺突列点，313ではヘラ描直線文帯が施される。前期末の製品と見られる。

土坑SK－29

その北西端をST－1に切られる溝状土坑であり，標高4.172mの水準で検出している。長径4.410m，短径2.150m，相対深度0.34mを測る(Fig.23)。

出土土器：Fig.72－314・315を得ている。314の胎は南四国型甕に近く，中期の可能性が考えられる。

溝状土坑SK－32

A2区東部の大型溝状土坑であり標高4.373mの水準で検出している。長径6.110m，短径2.090m，相対深度0.56mを測る(Fig.41・42)。

出土土器：Fig.73－318～323を得ている。318・319は壷であり，前者の口頚界には段部が遺こり，後者の胴部細片には，木葉文がヘラ描きされる。320は大型の鉢であり，321・323は甕である。321ではハケメ調整，323ではミガキ調整を仕上げとする。前者の口唇面には，木理付きの刻目が一列する。これらの土器類は，前期前半～中葉に位置づけられる。322の外底には，植物繊維の痕跡が多く，藁敷成形等の手法が考えられる。

出土石器：Fig.73－324～327を得ている。324・325は転礫利用のノミ状石斧，326・327は石庖丁である。326は粘板岩の片理に沿って剥離した剥片状態で出土している。327は，硬質砂岩製であり，双孔が両面穿孔される。直線刃半月型に分類される。

溝状土坑SK－33

A2区西部の大型溝状土坑であり，標高4.132mの水準で検出している。その規模は，長径5.81m，短径1.70m，相対深度1.08mを測る(Fig.40)。弥生前期の遺物類に少数の縄文晩期土器片が混じる。

出土弥生土器：Fig.73－328～Fig.74－343

Fig.73－328・329は壷であり，前者は内外面ともに丁寧なミガキが施され，後者では，ミガキの合間に下地のハケメが相当遺る。また，後者の口頸界には，明瞭な段が認められるとともに，頸胴界には，幅9㎜の扁平な突帯を削り出している。これらの壷は，弥生前期前半～中葉の資料と考えられる。330の口縁には円孔を回らせ，口唇下端には刻目を一列する。頚部のヘラ描沈線間には断面V字の縦刻目を一列する。331の壷では，口唇面に1条沈線を施した後，木理付きの縦刻目を一列する。頚部には1条の突帯を埋込み，押刻によって刻目状に起伏する扁平型突帯に仕上げる。これらの壷は，前期末に該当する。337・339・340は，遠賀川式の甕であり，胴部上端のヘラ描沈線帯は，337・339が2条構成，340が3条構成とする。これらの甕は，前期中葉に位置づけられる。338は在地産の範疇で捉え得る東瀬戸内式甕である。342・343は外底中央を穿孔する点から甑と考えられる。

出土縄文土器：Fig.73－333・334

A4区西端の深鉢及び黒土ＢⅠ・滋賀里Ⅲa並行期の磨研浅鉢との比較上，333が外面に沈線を施す点等，334が口縁に沈線を欠く点で異なるが，胎内岩片種はそれら晩期前半資料と一致する。

出土石器：Fig.73－335・336

335はサヌカイト製凹基式石鏃である。336は，粘板岩製の局部磨製両刃石斧に類するが，左右の側縁部には，打製によって鋭い刃が設けられる。既成の石斧を再加工した可能性も考えられる。

溝状土坑SK－34

A2区中西部，SK－33北沿いの標高4.143mの水準で検出した溝状土坑であり，長径3.11m，短径0.72m，相対深度0.52mを測る(Fig.40)。

出土土器：Fig.74－344～348

345・346は細頚壷に類す。前者では，口唇中央を1条沈線で画し，その上位に刻目を一列する。344は小型甕と見られ，胴部上端に2条のヘラ描沈線を施す。接合部で口縁端付近を欠損した可能性がある。

溝状土坑SK－35

A2区西部において，標高3.724mの水準で検出した南北方位の溝状土坑であり，長径2.51m，短径0.93m，相対深度0.38mを測る(Fig.36)。

出土土器：Fig.349－351を得ている。

349は大篠式甕であり，上胴部に6条構成のヘラ描き直線文帯を施す。350は，南四国型甕であり，4条構成の摘み出し微隆起線文帯を上胴端に配す。

Pit－100

A2区SK－32の西端に掘り込まれたピットであり，標高4.313mの水準で検出している。長径0.53m，

短径0.500m，相対深度0.38mを測る(Fig.41・42)。

出土土器：Fig.73－352を得ている。壷の頚胴部である。頚部上端付近にはヘラ描沈線下に刺突列点文を配し，頸胴界では，2条沈線の区画間に刺突列点文を施す。外面は全面ミガキとする。

性格不明の掘込みSX－5

A2区中央部の標高4.271mの水準で検出した性格不明の大型掘り込み遺構であり，長径7.190m，短径4.950m，相対深度0.67mを測る(Fig.43・44)。遺構切合等の詳細は，Fig.44の注記事項に在り。

出土土器：Fig.74－357～Fig.76－402

壷はFig.74－357～Fig.75－363を得ている。壷のうち，357～358は弥生前期前半～中葉頃の遠賀川式に属し，361～363は在地化した前期末の大篠式の範疇に在る。357・360では口頚界に明瞭な段を有する点から，前期前半の製品と捉え得る。359では，この部位が1条の削り出し突帯に変化するため，前二者より若干時期が下るものと見られる。但し，出土時の位置関係は，削り出し突帯を有する359の内部に，明瞭な段を有する360が収まった状態であり，廃棄後の二次移動がもたらした偶然の結果でなければ，一つの変化期を示す共伴資料と言える。なお，358では，口頚界の素地接合ラインに沿って，段差1㎜前後の微段を設けている。

361は広口壷であり，口唇中央を1条沈線によって画し，その上下の口唇面に刻目を施す。また，口縁部には，径2.5㎜の円孔を設ける。頚部外面には9条以上から成る多条直線文帯をヘラ描きした後，4条沈線を隔てて押圧列点文付きの扁平突帯を埋め込む。362・363はヘラ描き多条直線文を基調とする細頚壷に類す。363では，最少12条から成るヘラ描き直線文帯間に，2条の刻目列点文帯を貼付する。特に下位の刻目列点文帯では，左傾のヘラ痕が明瞭に遺り，ヘラ先による列点の削り出しが明らかとなる。また，口唇部の下位寄りを1条沈線で画した後，この沈線をも切り込む深い刻目を口唇部に一列する。

甕はFig.75－364～Fig.76－387を得ている。

これら甕類のうち，364では，上胴成形時の接合位置に上位肥厚の段を設け，これに指頭圧を連ねる。急反した口部の口唇面には木理付きの刻目を一列する。366～368では口胴界に繊細な1条沈線を配し，口唇部に小さめの刻目を1列する。これらは，上胴部が直立に近いグループであるが，同じ装飾を用いる371では，胴部最大径がより下方に在り，胴部外面の器表剥離箇所で胎に含まれた籾の圧痕が露呈している。383では，上胴端に施す横位のヘラ削りによって，段を作り出す。この工程で口縁に接触したヘラ角が数条の細線を遺したものと見られる。369は，頚部に幅約4㎜の太い1条沈線を施し，口唇部外端には木理付きの刻目を一1列する。上記した7点の甕類は，前期前葉の西見当Ⅰ式の段階に相当する資料と見られる。Fig.75－365・Fig.76－382も，上記グループの時期に近い資料と見られる。

370・372～374・381は，胴部上端付近に2条以下のヘラ描き沈線文を施し，その内部または外側に1～2列の刺突列点文を配する。また，口唇部外端～下端を中心として，小さめの刻目を一列する。刺突列点に関しては，370・374が木理を伴う。これら5点の甕類は，前期中葉頃の西見当Ⅱ式の段階に相当すると見られる。Fig.75－375～377は，上胴部を膨らませる形態である。375では，上胴端

に3条構成のヘラ描直線文を配す。376は無文とし，377では，上胴端に繊細な2条のヘラ描き沈線が認められる。

Fig.76－384～387は，薄胎の南四国型甕であり384・387では摘み出しの微隆起線文を施し，387では細小な瘤状浮文の列点が加わる。385は貼付した外肥口縁帯に深い刻目を一列する。

Fig.76－388は，体部の丸い鉢であり，外面にハケメ，内面にミガキ痕が遺る。

Fig.76－401の底部片では，外底面に網代の圧痕が遺る。

出土石器：Fig.76－403・404・406の3点を得ている。403は，砂岩製筋砥石の破片である。404は，頁岩転礫の一方の先端を両刃研ぎしたノミ状石斧である。406は，本調査で検出例の希少な平基式磨製石鏃であり，頁岩を石材とする。

出土石製品：Fig.76－405は粘板岩製の紡錘車であり，磨製・両面穿孔とする。

性格不明の掘込みSX－7

A2区中西部の標高4.235mの水準で検出した性格不明の大型掘り込み遺構であり，長径1.75m，短径1.01m，相対深度0.12mを測る(Fig.38)。

出土土器：Fig.77－407の鉢を得ている。外面は全面風化しており，内面では，最終調整をナデとした形跡が見られる。

包含層

出土土器：包含層からは，Fig.77－408～451の弥生土器類を得ている。

壷にはFig.77－408～423がある。408は，遠賀川式大型壷の口頸部であり，頸部上端に断面三角の突帯を貼付する。外面の最終調整は全てミガキとする。内面では口縁部にハケメを遺し，頸部をミガキとする。この壷は，前期初頭に位置づけられる。409は，口頸界に1条沈線を施す。これは，前期前半代の位置づけが可能と見られる。412は，遠賀川式小型壷であり，口頸界と頸胴界に各々繊細な2条沈線を描く。口頸界には，ハケメ調整を先行した形跡が遺り，底部際から接地部にかけての外面には，縦ミガキが認められる。基本的に，通常サイズの器と同様の手法を用いている。410では，口頸界に断面三角の突帯を貼付した後，その稜部に木理付きの刻目を一列する。この壷は，前期後葉頃の製品と見られる。413・415は，412の時期に近い前期中葉～後葉の製品と見られる。413は，器高の半ばに胴部最大径を持ち，下地調整のハケメを施した後，上胴端付近に断面四角の突帯を貼付して，その突帯上面に木理付きの縦刻目を一列する。外面全体および口縁部内面の仕上げ調整は横位優勢のミガキとする。415では，口頸界に2条沈線文をヘラ描きし，この区間内に円形刺突の列点文を一列する。また，口縁内面には，3～4条構成のヘラ描縦線文を配す。特に内面には丁寧なミガキが遺り，外面では口縁に下地調整のハケメと，仕上げのミガキ調整痕が認められる。口頸界の文飾は，本調査区で得た弥生前期中葉頃と見られる製品に同例がある。

ヘラ描き沈線文の多条化傾向が顕著化し始める前期後葉の壷には，417・422・423及びFig.78－433がある。このほか，沈線文の多条化が既に顕在するFig.77－416・Fig.78－431の細頸壷や435の球胴壷は前期末の大篠式に属す。更に沈線の条数を増し，櫛描へと転換する前期末から中期初頭の間に位置付け可能な資料に420・421の球胴壷がある。420では左旋回の回転台を用いて7条と5条

で構成するヘラ描直線文帯の間に双線山形文を配している。Fig.77－418は，この時期の広口壷口縁と見られる。そして，Fig.78－434の球胴壷では，既に中期移行の指標である櫛描を用いる。

Fig.77－411・419の壷は中期の資料であり，後者は本調査を通じて出土の希薄な中期末の特徴を持つ。

甕の資料には，Fig.78－425～432・436がある。上胴端に2条沈線を回らす426～429は西見当Ⅱ式に相当し，428・429では，沈線間に竹管状の刺突列点を施す。いずれも口唇部に刻目を一列する。430は，左記の段階から沈線文多条化の進行した前期後葉の資料に該当し，前期末・大篠式の前段階に当たる。

436は逆L字型口縁を特徴とする東瀬戸内型の甕であるが，胎内の含有岩片は在地産の範疇に在る。前期末頃の製品と見られる。なお，425の甕は，後期の資料と見られる。

鉢は，Fig.77－424・Fig.78－437がある。前者の外面は縦ハケメを留め，後者の外面は全面にミガキが施される。後者は有孔の小型鉢であり，口縁端下に径3.5㎜の円孔を内面穿孔する。この穿孔は焼成前に行われている。また，外底面には植物組織の圧痕が散見される。

壷・甕類の底部(Fig.78－438－451)も多数を得ており，揚底状の平底型を呈するものが目立つ。

出土土製品：土器転用の紡錘車1点(Fig.78－452)を得ている。軸孔の穿貫は，回転錐による両面穿孔とする。

出土石器：石鏃・石斧・石庖丁を得ている。Fig.78－453～456は，サヌカイト製の打製凹基式石鏃である。

Fig.78－458は，緑色片岩製の尖基型磨製石斧であり，この型式としては本調査で唯一の出土資料である。459～465は扁平片刃石斧である。これらのうち，459・461・462・465では，蛇紋岩または蛇紋岩に伴う塩基性岩を石材とする。463では，緑色片岩の転礫，464では玄武岩質緑色岩の転礫を用いる。以上の扁平片刃石斧の石材は，超塩基性岩～塩基性岩の範疇に在る。一方，460の扁平片刃石斧では，酸性岩に属す凝灰質頁岩を石材とする。

Fig.78－466～469は石庖丁であり，469の未製品を含む。466～468は粘板岩を石材として磨製する。このうち，466は直線刃型片刃に属し，最少2孔を両面穿孔する。467は外弯刃型片刃に属し，背部間近に単孔を両面穿孔する。大型の468では，両面穿孔した1孔が遺存部の幅中央に設けられる。469は，粗粒砂岩製打製石庖丁の未製品であり，1孔を両面側から敲打穿孔する間に破断した状況を留めている。

石製品：緑色タルク製の勾玉1点(Fig.79－470)を得ている。子持形とし，孔部穿貫は回転錐を用いて両面側から行う。

剥片：黒色の黒曜石1点(Fig.78－457)を得ている。

第6節　A3区の弥生遺構と出土遺物

溝状土坑SK－36

A3区北東角の標高3.755mの水準で検出した溝状土坑であり，遺存長径3.51m，短径1.25m，相対深度0.45mを測る。その北西側はSD－17によって切断されている(Fig.45)。

出土土器：Fig.80－471の壷を得ている。頚胴界に一条沈線を施し，その直下に縦長の刺突列点文を一列する。

溝状土坑SK－37

A3区南東の標高3.268mの水準で検出した溝状土坑であり，遺存長径2.74m，短径1.26m，相対深度0.42mを測る。その南東側はSR－3によって切断されている。

出土石器：Fig.80－472～474を得ている。

472はサヌカイト製の凹基式石鏃である。473は粘板岩製の磨製石庖丁であり，紐部に2孔が遺存する。穿孔に際しては，細かい敲打で予穿した後，回転錐を用いる。474は，泥質砂岩製磨製石庖丁の未製品であり，敲打による予穿箇所で破断している。

性格不明の掘込みSX－8

A3区北東角において，標高3.939mの水準で検出した性格不明の大型掘り込み遺構であり，遺存長径2.98m，短径2.84m，相対深度0.42mを測る。その北西側をSD－17，南西をSK－36によって切断されている(Fig.45)。

出土土器：前期前半から中期に至る資料を得ている(Fig.80－477～481)。

477は広口壷であり，頚胴界に1条沈線と刺突列点文が遺存する。中期前葉頃の製品と見られる。他の土器類は全て甕に属す。中期の形態を持つものは480の南四国型甕であり，口縁外肥帯と頚胴界に縦刻目を施す。

478・479は，前期前葉の資料と見られる。いずれも口唇面に細めの刻目を一列する。479では，上胴部を繊細な2条の沈線で区画した後，この区画内に1条突帯を削り出す。この突帯にも細小な刻目を施す。

出土石器：Fig.80－482～484を得ている。

482は両刃のノミ状石斧であり，玄武岩質緑色岩の転礫を石材とする。483は，扁平片刃石斧であり，蛇紋岩に伴う超塩基性岩を石材とする。484は頁岩製磨製有茎式石鏃であり，先端を欠損する。

SK－41・Pit－164

SK－41は，A3区北側において標高3.787mの水準で検出した溝状土坑であり，遺存長径3.31m，短径0.70m，相対深度0.35mを測る。その北側上部をSD－17によって切断されている。Pit－164は，SK－41西端において標高3.809mの水準で検出した楕円形の掘込であり，長径0.56m，短径0.69m，相対深度3.809mを測る。

出土土器：Fig.80－475・476の甕を得ている。

475は，口胴界「く」字形に強く外反し，その口唇面に縦刻目を一列する。胴部外面はハケメ調整痕に覆われる。476は，直立する上胴から口縁を強い角度で外反する。上胴に1条の沈線を回らす。ともに西見当式の範囲に在り，475は前期中葉頃，176は前期前葉頃の製品と見られる。

包含層

出土石器：Fig.80－485は扁平片刃石斧であり，蛇紋岩を石材とする。

出土石製品：Fig.80－486は深緑色の管玉断片である。

第7節　A4区の弥生遺構と出土遺物

土坑SK－57

A4区西端において，標高3.941mの水準で検出した土器溜まり状の浅い土坑であり，長径2.21m，短径1.34m，相対深度0.27mを測る。

出土土器：Fig.81－487の甑底部を得ている。穿孔は焼成後に施される。

土坑SK－58

A4区西端部のSD－17南辺において，標高4.029mの水準で検出した土坑であり，長径1.300m，短径1.10m，相対深度0.54mを測る(Fig.57)。

出土石器：Fig.81－488の打製石庖丁を得ている。硬質粗粒砂岩の転礫を石材とし，両端に抉りを設ける。

土坑SK－75

A4区中央の遺構密集部の一角において，標高3.825mの水準で検出した東西向きの溝状土坑であり，長径2.35m，短径0.78m，相対深度0.39mを測る(Fig.53・54)。

出土土器：Fig.81－489の甕を得ている。南四国型に属し，口縁外端に貼付した断面四角外肥帯に縦刻目を一列する。同様の刻目は，胴部上端にも施される。中期の製品である。

溝状土坑SK－81

A4区中央の遺構密集部において，標高3.768mの水準で検出した東西向きの溝状土坑であり，長径1.94m，短径1.30m，相対深度0.38mを測る(Fig.54)。

出土土器：Fig.81－490の甕を得ている。南四国型の祖形にあたり，前期末に位置づけられる。口唇面とその下端には，爪痕付指頭圧痕が右上位に連なる。同じ指頭圧痕は，上胴端に摘み出した微隆起線文の上下にも明瞭に認められる。器面の下地調整は，すべてハケメとする。

包含層

出土土器：Fig.81－491～494を得ている。491の鉢は，体部は丸く，内外面にミガキを重ねる。口縁端下の対称位置に一対の円孔を焼成前穿孔する。この円孔は，径6㎜を測る。弥生前期の製品と見られる。492は，口縁片であり，口唇面に矢羽文を刻む。頚部には，ヘラ描き直線文帯が施される。493は，縄文晩期の粗製深鉢口縁片であり，内外面ともに横位の条痕文で覆われる。

出土土製品：Fig.81－494の土製紡錘車一点を得ている。土器片を転用し，穿孔は回転錐による両

面穿孔とする。

出土石器：Fig.81－496～500を得ている。

496はサヌカイト製の凹基式打製石鏃である。497は，石英砂岩製の砥石であり，研痕は全面に及ぶ。局部的に酸化している点やクラックを生じる点等から，被焼した可能性が考えられる。498は，粘板岩の転礫を用いたノミ状両刃石斧である。499・500は，扁平片刃石斧であり，蛇紋岩に伴う超塩基性岩を石材とする。499では刃先付近から剥離を生じている。

第8節　A4区縄文晩期包含層・残留ピットおよび出土遺物

A4区西部に遺存する縄文晩期包含層下には，炭化物・角礫等の混在が極めて希薄なシルト質砂土主勢の自然堆積層が観察されている。過去にこの地で縄文人が活動した形跡としては，このシルト質砂土層の表面で検出したピット1基の他に焼土が2箇所検出されている。この焼土面の一つには，粗製深鉢片の分布が認められるが，上位の弥生包含層や遺構の影響を受けた形跡が皆無であり，後世の混入を考え難い。この西部域の焼土面付近の水準に分布する遺物や岩片類を列挙すると，土器として縄文晩期の深鉢・浅鉢があり，石器としてパミス製砥石・砂岩円礫の敲石，岩石の剥離片として姫島黒曜石・粘板岩・赤色頁岩・チャート等がある。また，長径50センチを測るチャート礫礫岩は，所属地層の土性からは人為の結果と考える他ない(Fig.59上図)。この縄文の地層から出土した遺構や遺物は比較的寡少ながら，その出土状況は，縄文晩期前半頃の生活面が，標高3.80m(Fig.59下図)付近の水準にかつて実在したことを実証するには，ほぼ十分に近いと思われる。ここに分布する浅鉢の型式は，晩期前半新段階の黒土ＢⅠ・滋賀里Ⅲaの並行期の範疇に属す。

Pit－215とその出土遺物

A4区西端部の縄文包含層直下において，標高3.758mの水準で検出した皿状のピットであり，長径1.07m，短径0.95m，相対深度0.15mを測る(Fig.55)。出土遺物は下記の砥石1点である。

石器：Fig.81－495の砥石を得ている。高珪酸質のパミス製であり，表裏両面には研筋が溝状に窪み，側縁部には刻目状の研痕が遺る。

縄文包含層出土遺物

土器：粗製深鉢(Fig.82－501・502)と磨研浅鉢(Fig.82－503～505)

501は深鉢口胴部の破片である。内収する上胴から口縁を直立し，内外面に条痕を施す。502は胴部細片であり，外面に条痕，内面に縦横のナデ調整痕が遺る。これらの胎内岩片は，石英砂岩・泥岩・チャートを主とし，微量のアカホヤ火山灰も混じる。503は浅鉢口縁部の細片であり，緩やかな波状を成した可能性がある。口縁と体部間の器壁は内面側に窪む。口唇を含む内外器表の全面を磨研する。胎内には原土起因の未分解炭素が多留するが，燻焼による外部からの炭素吸着深度は，0.2㎜程度に止まる。504は浅鉢口縁～上体部の破片であり，口縁部と体部の界が内折して稜を成す。口縁は強く外反した後，その端部を短く直立する。口縁外端に1条沈線を回らし，内外器表の全面を磨研する。胎内には原土起因の未分解炭素が多留するが，燻焼による外部からの

炭素吸着深度は，0.3㎜程度に止まる。504の胎内岩片は，主としてチャートと砂岩であり，径0.8㎜以下のアカホヤ火山灰が混じる。505は，504の同型器であり，主な胎内岩片は，石英砂岩・泥岩・チャート等であり，径0.6㎜以下のアカホヤ火山灰が混じる。

＊Fig.82－506～527掲載の「全調査区表採遺物実測図」の対象については，全て観察表に譲る。

鴨部遺跡出土土器・陶磁器類の破片点数集計表

	縄文土器 晩期	弥生土器 前期～終末	土師器 主に古代	須恵器 主に古代	黒色土器 古代	緑釉陶器 古代	窯道具 能茶窯	陶磁器 近世末～現代
B　区	—	346	215	8	—	—	—	—
A区表層	—	316	29	3	—	—	607	279
SD－17	27	2673	44	33	3	1	—	—
A1区包含層・遺構	—	29481	47	19	—	—	—	—
A2区包含層・遺構	—	58398	2	1	—	—	—	—
A3区包含層・遺構	—	4837	1	—	—	—	—	—
A4区包含層・遺構	4069	10621	—	—	—	—	—	—
総　計	4096	106672	338	64	3	1	607	279

参考文献

『下分遠崎遺跡(Ⅰ)』香我美町教育委員会埋蔵文化財報告書第4集，1989年3月。
『拝原遺跡』香我美町教育委員会埋蔵文化財報告書第5集，1993年3月発行。
『柳田遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第17集，1994年3月発行。
『栄エ田遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第22集，1995年3月発行。
『里改田遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第45集，2000年1月発行。

第Ⅶ章　鴨部遺跡発掘調査成果のまとめ

鴨部遺跡は，これまで弥生時代の遺物分布地として知られていたが，遺跡全域の南東部約2,900㎡を実掘した今回の発掘調査によって，その前史が少なくとも縄文晩期前半に遡る点や，弥生時代には集落を形成していた点，更に奈良～平安期に至って掘立柱建物や溝が築造されていた点等が新たに判明した。また，この間の消長が，海退と沖積扇の成長による浦戸湾汀線の後退を開幕とし，以後，主として鏡川河道と感潮水位の変遷に規定される姿を捉えている。この水文環境推移の中で消長・変化する地形や遺構・遺物分布の様相を時代順に分期整理すると以下の状況となる。

第Ⅰ期―生活地盤形成期（縄文晩期初頭以前）

約20,000～18,000年前の最終氷期最寒冷期の海水面は，現在の海抜－100m付近と想定されている。これに続く後氷期には，幾度かの小寒冷期を挟みながら気候の温暖化とともに海水面は上昇に転じた。この後氷期に世界の土器文化が発生しており，その最古級に日本列島の縄文文化が位置付けられる。更新世(洪積世)と完新世(沖積世)を分期する約10,000年前は，縄文早期初頭に相当し，その海水面は現海抜－40m前後の水準と考えられている。この時期までの後氷期は海進初期に相当し，高知平野中央部では，現浦戸湾を囲むデルタ域の地下，海抜－40～－30m付近の水準に河成砂礫が堆積して，「下知面」と呼ばれる平坦な沖積基底礫層[注8]を形成した時期と解されている。因みに，この地層は汲み上げ可能な帯水層であるとともに，建造物の支持層として活用される点から，いわば，現高知市都市化の土台に当たる。この下知面は，鏡川下流地下の深い谷地形に沿って西に伸び，鴨部遺跡の東北東約2kmの神田川合流点付近まで分布する。

約9,000年前頃から，海水温と海水面の上昇が更に加速し，海水面が最高位に達する約6,000年前を中心とする時期は，特に縄文海進最盛期と称される。一方，地下のマグマは，縄文海進最盛期に当たる約6,300年前に，鹿児島県佐多岬の南西沖約40kmの海域で鬼界カルデラの巨大火砕流噴火を生じており，九州南部に栄えていた貝殻文円筒土器文化(縄文早期)を壊滅するとともに，偏西風下の広域に流紋岩～デイサイト質の火山灰を降下させた。この火山灰は，給源火山と火山灰の在地名に因んで「鬼界－アカホヤ(K-Ah)」と称され，四国全域にも降灰を及ぼしている。鴨部遺跡発掘調査の原因となった学校体育施設建設に先立つボーリング地質調査のデータ[注9]では，鬼界－アカホヤに相当する火山灰層の記載は現地表下約8m，海抜－3m前後の層準に見られる。地盤と海水位の地域的偏差や方法論の相違等から，縄文海進期の最高海水位に関しては，現海抜0mに対して＋2m～＋5m前後の範囲内で数値が提示されている。『高知地盤図』(1992)では，この縄文海進に対応する浦戸湾拡大期の最大汀線を「現海面基準からいって＋5m前後であったと考えられる」とし，海進速度が鈍化して停滞期に入る時期を「7,000年B.P.頃」と捉えている。これまでの所，高知市域の平地・丘陵山地を問わず，この7,000年B.P.頃，すなわち考古年代の縄文早期に遡る遺構や遺物は未発見であり，市域では浦戸湾西岸の長浜字チドノの段丘地表下5mで発見された縄文前期の羽島下層式土器片を最古とする。

仮に，7,000年B.P.頃の浦戸湾拡大期における最大汀線として提示される現海抜＋5m前後の水準面を鴨部遺跡に投影した場合，現耕作土直下の標高4.90m前後の河成砂礫堆上面における奈良～平安期の柱穴群検出面の水準に近い。また，今日では縄文時代の早期と前期を画期する鍵層として重視される鬼界－アカホヤ火山灰層は，6,300年B.P.頃の降下当時，海進停滞期に在った浦戸湾海面下約8m前後の浅海底(現海抜－3m付近)に眠る鴨部遺跡域の一部に堆積して，層厚40㎝前後[注10]の海成細砂層(火山灰の粒度は一般に砂級)を上乗せした図式が導かれる。鴨部遺跡域地下の鬼界－アカホヤ火山灰層の上下を挟む砂質シルト層は，高知平野第四系基本層序中の第Ⅰ泥質層(海成)相当期の堆積と見られ，沖積層に属す。洪積層は，その下位の淡灰色シルト或いは淡緑青・黄茶褐色礫混じりシルト[注11]として遺存する可能性が考えられるが確証は無い。これに覆われて，秩父累帯中帯と南帯の境界に沿う砂岩・泥岩基盤の風化帯上面が海抜－6m強付近[注12]で捉えられている。

以上の点から，鴨部遺跡の生活地盤形成期における地形景観と確実性の高い時間軸の交点は，まず基盤岩の風化帯上面を約3m厚の細粒堆積物が覆っていた6,300年B.P.に求められ，浦戸湾の浅海底を成していた地面の一部を，鬼界－アカホヤ火山灰が覆う。やがて，海退に転じて浦戸湾汀線域も縮小に向かう中で，3,000～2,700年B.P.前後に想定される縄文晩期前半～中葉には，現海抜＋3.80mの地面に焼土遺留やピット掘削が可能な平坦陸地面と化している。

第Ⅱ期—生活痕出現期（縄文晩期）

鴨部遺跡域における鬼界－アカホヤ火山灰層から縄文晩期前半～中葉に至る約3,600年間の堆積厚は6.80m前後であり，単純計算では年平均1.89㎜程度の堆積速度となる。この数値は，それ以後現代までの約2,700年間における年平均0.55㎜程度の堆積に比して約3.4倍の速度であり，縄文海進停滞期から海退に至る先史時代の海成・河成を合わせた沖積は，相当高速に展開したと考えられる。

ところで，第四紀末の海面変動を16段階に整理・系統化したR.W.フェアブリッジ(Fairbridge)が1961年に提示した数値では，7,500～6,200年B.P.(－10m)；6,000～4,600年B.P.(＋3～＋5m)；4,600～4,000年B.P.(－3～－4m)；3,400～3,200年B.P.(－1～－2m)；3,000～2,600年B.P.(－3m)；2,600～2,100年B.P.(＋1.5m)；2,100～1,600年B.P.(－2m)；1,600～1,000年B.P.(＋0.6～1m)；700年B.P.(－2m)としている。これを適用した場合，縄文海進最盛期の後，縄文中期中葉～後半に当たる4,600～4,000年B.P.と縄文晩期前半～中･後葉に当たる3,000～2,600年B.P.に現海抜－3m程度に達する海退ピークを生じており，鴨部遺跡A4区の西端部で検出した縄文晩期の生活面は，当時の海面水準を6.8m前後上回る比高を背景に形成された可能性も考えられる。また，鴨部遺跡の南西約1kmの鏡川右岸沖積扇端に立地する柳田遺跡(朝倉字柳田地区；地表標高約7m)の平成4年発掘調査では，流路による侵食を免れた微高河成層の標高4.5m前後の層準を中心に中津式並行期と考えられる縄文後期初頭～前半の土器片が出土しており，焼土や炭化物の集中を伴う点から，高知市域における生活痕の最古例を画している。前掲した海面変動値の系統を柳田遺跡の縄文後期に重ねると，縄文中期中葉頃に終止符が打たれる縄文海進最盛期に続き，4,600～4,000年B.P. に－3～－4mの水準まで低下した海面が，再び上昇に向かう時期にあたる。この数値を代入した場合，磨消縄文や貝殻腹縁文で深鉢を飾る人々が柳田遺跡に進出した縄文後期初頭頃には，その地面の7.5～8.5m下位に当時の

海面が存在しており，浦戸湾は川のように縮小・後退した図式となる。少なくとも数値的には，縄文中期以降，現在の沖積扇端方向に向けて生活圏水準を降下する条件が整いつつあり，この趨勢の一端を柳田遺跡出土の縄文後期初頭～前半・同晩期後半や鴨部遺跡出土の縄文晩期前半～中葉の資料が垣間見せる状況と言える。

本報告書の第Ⅲ章第6節「A区の層位設定と地層堆積の特徴」で触れたように，縄文晩期の生活痕が印される鴨部遺跡のシルト質砂土層には，秩父累帯北帯と同中帯間に介在する黒瀬川構造帯の苦鉄岩片粒子が目立ち，超塩基性の蛇紋岩や塩基性緑色岩類に含まれる磁鉄鉱粒子も多含する。ここには，左記条件を充たす鏡川上～中流水系の影響が濃厚な反面，流域を秩父累帯南帯に終始する神田川の影響は軽微と言わざるを得ない。また，このシルト質砂土層は，弥生中期以後に流入する鏡川分流のSR－3(FRC－1)によってA区南辺部分を蝕失するが，SR－3より北の部分では，弥生包含層下に遍在するのみならず(巻頭写真.4－11)，調査区と隣接する東・北・西方に連続する様相を見せている。土色は一様に淡黄色を帯び，灰黄色～黄灰色の範囲にある。この色調は，土壌中の鉄分が弱酸化状態で固定した結果であり，比較的長期にわたって酸化環境，すなわち大気系とのガス交換を継続し得る地表環境に存在したことを示している。この点は，弥生の包含層と同様に炭化物を除く植物体が腐植のレベルに分解している状況と一致する。このシルト質砂土層の厚みは1mを上回り，下位では砂層に漸移する様相をSR－3のトレンチや弥生大型土坑の下部壁面等で確認している。土器片とも焼土片とも識別し難い径数㎜以下の赤化微片がこのシルト質砂土中に広く点在する点は，本調査初期の大トレンチ掘削時以来の留意事項であったが，明瞭な生活面と土器片分布の姿における検出は，A4区西端部の標高4.00～3.80m付近の層準に限定される。生活痕を遺す縄文晩期の地面として最も明瞭な状況は，同期遺物集中域約50㎡のうち東部約6㎡部分(Fig.59)であり，20㎝厚の包含層に覆われた標高3.80m前後の平坦な層面(黄灰色)における浅鉢8片，深鉢41片，砂岩転礫製敲石1，姫島産黒曜石薄片6，外部から持ち込まれた長径50㎝・短径34㎝のチャート礫礫岩(角礫)等のほか，少量の炭化物を含む焼土面2箇所の分布に認められる。これらを覆う包含層と下位の堆積層ともに土性はシルト質砂土の範囲にあるが，前者に対して後者は腐植や炭化物の密度を著しく低減する点から，今次調査区最古の生活面に位置づけられる。

この生活面に分布する浅鉢片は，上体部～口縁部まで復元し得たFig.82－504との照合結果，いずれの胎も堆積岩片とアカホヤ火山灰混じりの腐植集積粘土を原料とする点で同質であるほか，特徴的な部位には各々形態上の相似関係が認められ，単一型式に属すと考えられる。すなわち，碗形の下体部から一旦上体を内折した後，弧形の外反に転じて，直立した口縁の外面に1条沈線を回らす。また，器の全面に横方向の磨研を施す。高知平野に於ける類例は，南国市岡豊町定林寺の栄エ田遺跡Ⅲ区における谷川性自然流路上層の包含層(標高12m前後に堆積)から出土した広範な時期の縄文晩期土器中に「浅鉢1類a」として報告されるのみであり[注13]，晩期前半新段階の黒土BⅠ(瀬戸内)・滋賀里Ⅲa(近畿)並行期と捉えられる。また，高知平野以外の県下の類例としては，土佐町の八反坪遺跡での出土が紹介されている[注14]。

栄エ田遺跡では，晩期前半の深鉢が空白であるが，鴨部遺跡の上記生活面に分布する深鉢片には，内収する上胴から直口に転じるFig.82－501が含まれ，内外面に条痕を施すほか無文である。

深鉢は全般に大型のため，口縁片の量は相対的に少なく，器壁立位の特定が困難な小片が主流である。この生活面の場合も型式照合に耐える破片数に乏しく断定し得ないが，分布する浅鉢片の単一型式状況から，同期の深鉢である可能性は留意に値すると思われる。

生活面を覆う縄文晩期の包含層においても，浅鉢は上例と同じ型式が主流であるが，Fig.82－503では体部上端を内屈した後，口縁を外伸しており，栄エ田遺跡で「浅鉢2類b」とする晩期中葉古段階，篠原古段階(近畿)・南溝手土器溜り1・舟津原古段階(瀬戸内)並行期の型式[注15]に近い。このほか，包含層出土の浅鉢には，晩期中葉の中段階～新段階に降ると見られる細片も若干存在している。浅鉢片の胎型は，いずれもバブルウォール型火山ガラス混じりの腐植集積粘土を可塑材とするうえ，砂岩・泥岩・チャート粒子を含む点で共通しており，広域テフラの堆積域付近で原土を採掘したものと考えられる。一方，深鉢では，火山ガラスのサイズ・含量ともに極めて微少の域に止まる。

A4区西端部の縄文土器集中域から出土した石器としては，縄文晩期包含層下で検出した皿状のPit－215出土の珪酸質パミス(軽石)製の砥石1点を数えるのみであるが，岩石剥片類には，姫島産黒曜石・サヌカイト・チャート・粘板岩が分布しており，当地において石器を製作していた点に疑問はない。この点，弥生の遺構埋積土と包含層から出土したサヌカイト製石鏃の平均重量が約0.96g(小欠品を含む)と軽く，0.33g(包含層，Fig.81－496)・0.50g(SK－17，Fig.68－203)のような微小品も存在する状況から，単品出土のチャート製石鏃(SK－17，Fig.68－204)と共に，縄文晩期の地層から混入した部分が存在すると考えられる。この種の混入は，A2区弥生包含層出土の磨製尖基型石斧(緑色片岩製；Fig.79－458)や黒色の黒曜石剥片(Fig.78－457)に関しても可能性が非常に濃厚である。特に黒曜石については四国に産出せず，高知県下では縄文晩期まで大分県姫島産の黒曜石のみが石鏃やスクレイパー等の打製利器の石材として搬入されるが，弥生前期までにこの流通が途絶し，以後，黒曜石自体が無縁の石材となる状況が周知されている。その姫島産黒曜石は，苦鉄分の少ない火山性天然ガラスであり，薄部の断口はA4区縄文晩期生活面出土例(PL.2－右最下写真)のように透光性が強く，厚部の断口は通常灰白色に近い色調を帯びる。これに対して，1点のみA2区弥生包含層から出土した黒曜石剥片(12.92g；Fig.78－457)は，PL.2－右3段目写真のように光沢の強い黒色を呈し，姫島産以外に属す点は一見して明白である。国内の主な黒曜石産地としては，北海道に十勝・白滝・置戸・赤井川の4所；本州では中部～東北に大町・和田峠・霧ヶ峰・浅間・箱根・天城・神津島・大白川・高原山・板山・月山・脇本・戸賀・大館・深浦・下湯川などの約21所；山陰に隠岐久見・隠岐東郷の2所；九州に姫島・壱岐・牟田・腰岳・古里・淀姫・阿蘇・出水・三船・指宿などの13所，計40所が知られている。弥生包含層から出土した当該の黒曜石剥片は，断口の肉眼観察では，九州佐賀県伊万里市の腰岳産黒曜石のサンプルと同様であり，鏡下観察では，断口表面の微細なフィッシャーの間隔や，内部の斑晶サイズがほぼ等しい。晶子形態に関しては，当該剥片の非破壊を前提とするため，棒状および針状～羽状の晶子形態に一部類似を認めるに止まる。おそらく，腰岳産と見られるが，非破壊の理化学分析による確認を必要とする。なお，当該剥片の一部縁辺は，スクレイパー状の鋭角を有するが，鏡下では，擦痕や摩滅等の使用痕は認められない(巻頭写真.4－15)。いずれにしろ，県下に希少な出土例に相違ない[注16]。

鴨部遺跡の生活史開幕を告げる縄文晩期生活面は，後の弥生時代と比べて地面がよりドライな

環境を保ちやすい水文地理的に安定な環境にあったと見られ，生活用具である土器類が晩期前半～中葉に及ぶ点や石器製作を示す岩片剥片類の分布，更に火の使用を示す焼土斑の遺留等を綜合する場合，定住集落の縁辺部である可能性が強く浮かび上がる。縄文晩期生活面の遺存を確認したエリアの西壁地層断面(Fig.12－2)では，縄文晩期包含層(Ⅸ－J)が調査区西限の西方に延続する状況を示し，生活面と繋がる包含層基底面も5cm前後増高している。調査区西北西の能茶山西口周辺には微高地形が存在するため，生活面を覆う縄文晩期包含層の形成に，この方面からの流入が関与した可能性は高く，定住集落の想定先としては，当該の微高地が最も妥当性を帯びる状況に在る。

第Ⅲ期—生活空白期(縄文晩期後半)

鴨部遺跡・栄エ田遺跡ともに縄文晩期前半古段階を空白としており，晩期浅鉢に関しては，前半新段階から中葉段階まで瀬戸内や畿内型式との並行関係を共有する。その後，鴨部遺跡の場合，縄文晩期後半の資料に再び空白を生ずるのに対し，栄エ田遺跡では，続く晩期後半の刻目突帯文土器出現期を空白とした後，晩期後半最終段階に当たる船橋・津島岡大・百間川沢田並行期の資料を得るが，再び弥生前期後葉以前の資料が空白となっている。栄エ田遺跡の場合，縄文後期の土器片が多く晩期と混在して出土する状況等[注17]の相違もあるが，鴨部遺跡との関係では，縄文晩期について後半最終段階を除き空白期の一致が注目される。また，鴨部遺跡が高知平野西部に，栄エ田遺跡が高知平野東部に所在して立地標高や地質・水系を異にするが，いずれも北面に山丘を背負い，南面に小河川を臨む点で局地的な地勢条件を共有する。すなわち，鴨部遺跡では能茶山と神田川および旧鏡川分流(過去に埋没)，栄エ田遺跡では北部山地と国分川支流の山崎川のセットがこれに当たる。報告書『栄エ田遺跡』の中で調査者は，同遺跡の地形条件に照らし，“今後，高知平野周辺の「小河川に接して，北に丘陵のある微高地」という立地の遺跡から，「晩期前半～後半の栄エ田遺跡Ⅰ期～Ⅴ期に対応する時期」の土器が出土することも予想される”[注18]と記述しているが，そのⅠ期(黒土BⅠ・滋賀里Ⅲa並行期)を中心としてⅣ期(谷尻並行期)に至る資料の鴨部遺跡出土は，その予想を大筋において充たす結果と言える。前項で鴨部遺跡晩期集落の立地を想定した能茶山西口周辺の微高地形部は，栄エ田遺跡の場合に縄文集落の展開が推定された「北に丘陵のある微高地」と対応する。

今次調査に関する限り，鴨部遺跡調査区で検出した縄文晩期生活痕の印される基底層には，弥生中期中葉以前に流入した河道の形跡が無いほか，地震による大規模な地盤液状化や地割れ，あるいは山津波による土石流災害等の形跡等も皆無であった。一般に，集落の命運を大きく左右する水文環境に関しては，鴨部遺跡の縄文晩期～弥生中期前半は安定期であった点を調査結果は示している。これと関連して，鴨部遺跡と同じく鏡川右岸の沖積扇端に立地する高知市朝倉の柳田遺跡では，標高3.7～4.5mの層準で縄文晩期後半の1条刻目突帯・口縁刻目・無刻目等の型式要素を持つ深鉢中心の土器類や磨製石斧・敲石・勾玉等が出土しており，後期前半で消息を断った後，再び縄文終末期に人跡の一端を垣間見せている。その包含層は80cmの厚さを持ち，起伏に富む水成層理とともに，比較的不安定な水文環境下に早い速度で堆積したことを示している。鴨部遺跡の縄文晩期前半から弥生中期中葉に至る地表面の高度変化は，標高3.80m→4.40m前後の付近(後に

活発化した地表面の蝕失として0.2mの推定値を加算)であったと見られ，この高度幅を柳田遺跡における縄文晩期後半の包含層に水平スライドさせた場合，上流側に位置する後者の標高3.7～4.5mの幅に悠々と納まって余り有る。この長期低速型の堆積測度は，年間平均1㎜程度であったと試算され，水文上，ドライな安定環境に在った点は，数値的にも裏付けられる。

縄文晩期後半は高知県下でも沖積平野部に遺跡が展開し始める時期であり，柳田遺跡や栄エ田遺跡の他に，田村見当遺跡(南国市)・倉岡遺跡(土佐市)・中村貝塚・入田遺跡・有岡遺跡・具同中山遺跡群(以上中村市)等，河川と密着して立地する低地遺跡から当該期の遺物が出土しており，この趨勢の中で，鴨部遺跡に人跡が途絶える理由は見当たらない。鴨部遺跡縄文晩期後半の空白期の問題は，現段階では縄文集落形態上の面的規模の変化，或いは伸縮の結果に帰納すると推定している。鴨部遺跡で確認した縄文晩期生活面の西北西約80m地点を中心に，長径200m･短径100m前後の微高地が古くから存在したことは，西方から流下した旧鏡川分流FRC－1がその部分を回避して更に二手に分流した状況から明らかであり，縄文集落や弥生集落の中心が依拠するに足る面的規模を具えている。昭和7・8年度に整備された鴨田中央線(能茶山西口―舞高橋―本村間)は，この推定域を南北に縦断している。将来，この方面に調査が及ぶ場合，鴨部遺跡の歴史は，更に古い時期へと遡る可能性や，空白期が充たされる可能性をも秘めている。

第Ⅳ期―弥生集落形成期（弥生前期前半～中期中葉）
第Ⅴ期―弥生不明瞭期（弥生中期末～後期前半）
第Ⅵ期―弥生集落終末期（弥生後期後半～終末期）

鴨部遺跡の弥生時代に関しては，中期中葉以後に流入する河道や自然小流路の影響等によって既存の包含層や遺構に侵食・洗掘・攪拌・充填・再堆積等の現象が生じ，遺構と遺構内遺物の関係に通常以上の混乱が想定される。特に鏡川分流である流入河道は推定規模が大きく，対地層関係では前後双方の時期に影響するため，画期毎の記述は重複過多を避けがたい。このため，弥生時代に関しては，第Ⅳ･Ⅴ･Ⅵの三つの分期を一括記述する。

弥生時代の包含層は，上項で詳述した縄文晩期包含層を直接覆うほか，縄文晩期生活面の延長あるいは同環境下の堆積である黄灰色～灰黄色の砂質シルト層を20～40㎝の厚さで直接覆う。この弥生包含層の基底を成すシルト質砂土は，調査区北トレンチ東部や東トレンチ北部付近に至って粘土優勢へと漸移するが(Fig.7，Ⅺ－1層；Fig.8，Ⅺ－2層)，弥生包含層の基底を成す点に変化はない。また，この基底面は，東西方向の平坦性が顕著である。弥生包含層検出の最高位はA2区中東部における標高4.38mであり，遺構はこの水準から標高3.80m付近にかけて検出を見ている。遺構は全て掘り込みであり，竪穴住居・土坑・ピット・性格不明に分類されるが，それら大部分の埋積層理が上面の包含層と不整合であり，上部を削失している(巻頭写真.4－8･9)。まず，A区の南辺は，弥生中期中葉以後に流入したと見られる鏡川分流SR－3によって深い角度の侵食を受けており，地盤もろとも遺構を喪失するほか，付近に残存する遺構にも，川砂利を伴う地表流の侵食や洗掘を受けた部分が存在する。その影響は，検出した弥生遺構の全てに及ぶと見られ，それらを覆う包含層には，しばしば流失や攪拌・再堆積が生じたであろう点は言うまでもない。更に，

成層する川砂利によって内部が充たされた大型土坑や小ピットも存在しており，特に，大型土坑の場合には，中空に近い状態における川砂利流入を推定せざるを得ない状況が認められる。次いで，弥生後期以後，能茶山西部の方向に当たる北西より幅約2mの小自然流路SR－1・SR－2(本来1条)が埋積済の竪穴住居跡2基を貫通して鏡川分流SR－3に合流する(巻頭写真.3－3)。なお，E10°55′Nの方位でA区の長径を貫通するSD－17は，古代期に掘削された溝跡であり，弥生面に対する影響は溝跡部分に限られる。

包含層・遺構ともに，弥生土器の様式年代は前期前半から終末に及ぶが，中期後半～後期前半に関しては極めて微量であり，帰属の不明瞭な破片も見られる。弥生土器の破片総数は，約106,600点余りにのぼり，前期前半～中期初頭が圧倒的量を占める。また，破片遺存の顕著な傾向として，前期前葉～前期後葉段階が遺存最良であり，破片も比較的大きい。前期末以後の破片には，より細かい破片が多く，復元性も劣る。この現象からも，中期以後の洪水頻発が上層の遺物により大きな損傷や転動をもたらした可能性が推定される。石器には，実測図版に掲載する石鏃19・石斧39・石庖丁14・敲石1・砥石3が有り，石製品としては勾玉2・管玉1・紡錘車2のほか，それら製品の破片類がある。

遺構内には，全般的に様式年代の異なる土器片が混在し，実際の埋積年代の判定が困難な場合が非常に多い。個々の埋積土が色調差に乏しい点を背景として，主因は二つと考えられる。第1は，埋積後の洪水による影響であり，第2は埋積済遺構内への別遺構の掘り込みである。

検出した弥生遺構の数は，竪穴住居跡(ST)2基・土坑(SK)79基・ピット(P)279基・性格不明の掘り込み(SX)8基である。

竪穴住居跡ST－1は円形であり，周溝の重複やピットの過密から複数回の拡張や，廃棄後における同位置での築営が行われたものと考えられる。出土遺物は，土器片2027点・石鏃1・太型蛤刃石斧1・敲石1・石製紡錘車1・土器転用紡錘車1である。土器片の時期幅は広範にわたり，前期の西見当式甕・前期末の大篠式壷細片・前期末～中期前半頃の南四国型甕・中期の壷・後期後半のヒビノキⅠ式広口壷等を含む。とりわけ，大篠式の破片はサイズが細かい。この混在状況から，最終的な埋積の時期を後期後半のヒビノキⅠ式段階頃と推定せざるを得ないが，竪穴の初営期については前期まで遡る可能性を想定する必要がある。

竪穴住居跡ST－2場合では，少なくとも前期末の小型円形竪穴住居に弥生終末期の隅丸方形型竪穴住居が重合した状況が考えられる。出土土器片は868片であり，前期末の大篠式土器甕完形品のほか，櫛描簾状文を施す中期前半の壷や弥生後期後半～終末期の鉢・壷・甕類が出土している。

これらの住居跡を串刺しするような平面形で貫通する幅2mの流路跡SR－1・SR－2(本来１条)からは，前期前葉の西見当Ⅰ式甕や後期の形態を具える甕の口胴部等が出土しており，石器は石斧3点が出土している。この自然流路が貫入した当時，竪穴住居跡は既に埋積済であるため，その貫入は弥生終末期以後となる。また，その自然流路(SR－2部分)の南端は鏡川分流SR－3に注入する地点で急降する状況から，その当時SR－3も河川として機能していたこととなる。SR－3に関しては北岸側5箇所のトレンチ調査に止まるが，左記注入点の南西方面にはB区の河成砂礫堆が微高する。古代のピット群が分布するその砂礫面で，唯一検出された弥生終末期～古墳初頭期の土坑

SK－1から完形甕が出土しており，この時期の景観復元に一つの資料を加えている。そこでの河成砂礫堆は，A区の弥生遺構群検出水準より0.7～0.8m高い比高をもつ。このB区の南側は，昭和22年の空中写真(Fig.3；Fig.83)において，鏡川主要分流の旧河道跡FRC－1が弯流する様子を明瞭に検出し得る部分であり，調査区で検出したSR－3や砂礫堆は，旧河道地形の埋没部分であったと見られる。同写真に見る限り，この河道跡の幅は70m前後にも達する様相を見せている。いわば，今次調査対象地の南半部は，この旧河道跡の地下潜伏部分であり，その流入期間を通じて調査区北半は生活地盤の根本的侵食は免れ得たが，既に水害常襲の一角と化していた筈であり，より比高の高い地面か，他の場所に旋居したものと考えられる。

次に，鴨部遺跡で特徴的な遺構として，円～楕円形と細長形の大型土坑の多在が挙げられる。円～楕円形のものでは，長径2.08m，深さ1.58mに達するA1区SK－6や，長径2.43m，深さ1.06mに達するA4区SK－53など20基を数える。SK－6の埋積土には炭化物や焼土成分が成層し，下部は炭化物多含の粘性土で充たされる。出土土器は前期末～中期に渡る。SK－53では内部に砂利が成層する点から，中空に近い状態における埋積と考えざるを得ない。底部直上には厚さ約3cmの砂混じり腐植土が水平分布する。遺物は，砂利に含まれる前期末の大篠式土器細片1点のみである。A1区SK－10に含まれる土器は前期末のみであり，A1区SK－11では，大篠式の前段階に当たる前期後葉の壷を中心とするが，前期末頃の南四国型甕をも含む。このように，円～楕円形の大型土坑は前期末を中心とする様相が見受けられる。内部に川砂利が充填するもの以外は，焼土や炭化物の成層を挟む点や，下部に炭化物が増量する傾向を観察している。遺構検出面にも，焼土斑や水理によって流動した焼土成分・炭化物が分布するため，大半はそれらの流入とも見受けられる。構造物の一部というより，素掘の井戸や貯蔵穴の可能性が強いと考えられる。

細長形の土坑は，本報告書において「溝状土坑」と仮称している。坑口の幅は0.6～1.4m，長さは3.5～6.0m程度の規模であり，最大深度はA2区SK－33の1.08mである。このSK－33出土の土器片には，縄文晩期前半新段階の浅鉢片(Fig.73－334)が1点含まれるほかは，西見当式の壷・甕を中心に前期末の大篠式細頸壷や同期と見られる在地産の逆L字口縁型甕などが出土しており，前期末の埋積と考えられる。また，古代の溝跡SD－17によって上部を切られたA1区SK－18では，中期初頭～前半頃の壷・甕片が出土遺物の年代下限を画しており，中期前半頃の埋積と見られる。A2区SK－32では，土坑東端の底部に角～亜角礫を円形に敷き詰めるが，鴨部遺跡では他の土坑に例を見ない。内部から出土した土器類には西見当式の土器が多く，同Ⅱ式段階の木葉文土器片も得ている。石器には，直線刃半月形石包丁・局部磨製両刃石斧・打製凹基式石鏃・転礫製ノミ状両刃石斧等がある。また，この溝状土坑の西端に上から掘り込むPit－100では，ピットのサイズに近い西見当Ⅱ式壷の頚胴部が詰め込まれたような状況で単独出土しており，この溝状土坑が同時期の埋積である可能性を強めている。しかし，溝状土坑の全体的傾向としては，弥生前期末の大篠式土器の段階が埋積時期の中心と見られる。この形態の土坑は，南国市の臨海型低地集落遺跡である田村遺跡群からは比較的多数検出されているが，鴨部遺跡と同じ鏡川沖積扇に立地し，多数の大篠式土器が出土した柳田遺跡の土坑形態には，明瞭な類例を見ない。鴨部遺跡と柳田遺跡は，少なくとも弥生前期末～中期中葉の期間は並存している。この並存期を通じて，ほぼ共通型式の土

器を使用する上，両者間に僅か1kmを隔てるに過ぎない近さ等を勘案する場合，目下のところ不明な用途に応じる条件(集落や住居跡との関係など)が存在したと思われる。両者の並存期について，生産活動の様相を出土遺物で比較すると，幾つかの共通点や相違点が垣間見える。まず，共通点では，漁労具としての土錘や石錘の欠如が挙げられる。柳田遺跡の場合，焼土・灰・炭化物層中に，「タイ，スズキ，ハモ，アユ，コイ，フナ類等の魚骨」が確認されているが，土錘や石錘の出土は見ず[注19]，鴨部遺跡では管状土錘1点(Fig.82－519)を得ているが表採品であるため帰属時期が不明であり，ほぼ無に等しい。鴨部遺跡でも，特に土坑内の炭灰や焼土成分の多い土壌サンプル中に多数の小骨片が含まれるが，未検である。また，用途を確定し得ない特殊な石器として，「ノミ状石斧」と仮称する小転礫端に刃部(多くは両刃)を研ぎ出す一群があり，鴨部遺跡・柳田遺跡のほか，田村遺跡群などに共通する。通常の石器に関しては，石鏃・石斧・石包丁のセットで鴨部遺跡・柳田遺跡は共通する。一方，相違点として，柳田遺跡の場合に石器の出土が少量である点から石器生産に比定的な見方が示されるのに対し，鴨部遺跡では石斧や石包丁の未製品が存在する上，石鏃や刃器の製作によると見られるサヌカイトの小薄片が包含層や遺構内から多出するため，石器生産は積極的に肯定し得る。また，生産具の一つである紡錘車に関して言えば，土製紡錘車の出土が共に見られ，鴨部遺跡の場合には南四国型甕(土佐型甕)の薄胎片転用品も含まれるほか，更に粘板岩製の紡錘車2点を得ている。

高知市域の弥生史初像は，それを前期末に繰り上げた柳田遺跡発見から20年後，同じ沖積扇端に立地する鴨部遺跡の今次調査において，その最初頭直後の段階まで肉迫したと言える。調査区内2箇所にそれぞれ密着重合する竪穴住居跡ST－1・ST－2や，同類の可能性を残す大型掘り込み(SX)等は，実体と分期の解析に課題を残すものの，調査区全面に多数分布する大型土坑やピットの密集，更に前期前半から中期前半にかけて連続する土器様式とその個体資料の充実自体，この間の鴨部遺跡の姿が安定した定住集落であったことを具体的に示している。その姿の特徴として，従来高知平野の弥生母村に位置付けられる南国市の田村遺跡群と同型式の土器群を用い，工具としては小型棒状転礫に局部磨製を加える特殊な「ノミ状石斧」，遺構としては細長い「溝状土坑」を共有する一方，田村遺跡群と異なり漁労具としての土錘・石錘が無に近く，高知県下の弥生遺跡に例を見ない規模の円形～楕円形の大型土坑群を遺している。また，弥生前期末に至って近隣の沖積扇端面に出現する集落的性格の柳田遺跡に生産労働の気配の希薄さが指摘[注20]される状況と異なり，少なくとも石鏃・石斧・石包丁の石器生産を行っていた点がそれらの未製品や薄片の存在によって確認される。この状況は，前述した鴨部遺跡の縄文晩期生活面における姫島産黒曜石やサヌカイト・チャート・粘板岩などの剥片分布が石器生産の履歴を示す状況とも重なり合う。縄文晩期後半頃から弥生前期最初頭にかけての空白期を隔てたこの符合も，今次調査区の西北西至近に存在する微高地形部の地下に空白期を充たす鍵の所在を推測するゆえんの一つである。

第Ⅶ期—空白期（古墳時代）

A1区の竪穴住居跡SX－6およびB区砂礫堆上面の土坑SK－1から出土した弥生終末～古墳初頭の土器類少量を最後に，奈良・平安時期まで直接的な人跡が途絶するため，古墳時代はその冒頭で

空白期に入る。ただし，奈良～平安期の溝跡SD－17からカキメ調整の須恵器甕片が出土しており，古墳後期の遺構あるいは包含層が付近に存在する可能性が有る。

第Ⅷ期—建物・溝形成期（奈良末～平安末）

B区の遺構面を成す砂礫堆上面は，弥生終末～古墳初頭の完形甕を出土した土坑SK－1の存在によって，同期以前の形成であることが知れる。同じ砂礫堆上面では，古代の掘立柱建物跡3棟(SB－1・2・3)，柵列3基(SA－1・2・3)を検出しており，包含層やピットから出土した少数の土師器と須恵器類の形態は，概ね8世紀末～9世紀代の範囲に在る。柱穴出土遺物から廃絶時期が推定可能なものは，9世紀後半頃の須恵器杯が出土遺物の年代下限を画すSB－3の1棟のみであり，他の掘立柱建物跡や柵列に関しては，時期判定困難な微片を得たに止まる。

B区で検出した土坑やピットはいずれも浅く，明らかに上部を削失している。実際，耕作土には砂礫が多混していた上，須恵器や土師器の小片も散見された。また，北西—南東方位の浅い自然流路がB区の遺構面を切っており，ピット群の途絶によって掘立柱建物跡3棟のほか，柵列SA－1に関しては，それら西部の様相や規模が不明である。また，B区南辺付近においてピットの分布数が急減する現象は，弥生終末～古墳初頭頃にはB区の南辺外側に南遷していた旧鏡川分流が，平安以後再度B区側に接近して側方侵食を生じた結果と推定される。更に，B区のピット群を切る自然流路は，南東方位に下って旧鏡川分流に注いだものと考えられる。この点や今次調査区の全体にわたって中世13世紀から江戸後期18世紀末に至る間の遺物が皆無である調査結果を重ね合わせた場合，標高5.20mを前後する砂礫堆上面付近が，少なくとも平安以後，洪水の危険に晒されやすい水文的に不安定な水準と化していた状況を窺わせる。

昭和22年10月11日に極東米軍が撮影した空中写真から明瞭に検出される旧鏡川分流の一つは，朝倉米田の本流扇頂部において鏡川右岸に吐流した後，B区南辺付近を経て東北東に流れ去る河道の埋積跡を遺している。調査区内の地層状況は，弥生終末～古墳初頭頃に分流河道が南遷した状況を示すことから，その南遷以後の河道は，ほぼ昭和22年時点の埋積河道地形に沿うものと推定し得る。B区の調査で検出した古代期の掘立柱建物跡3棟の棟行は，最北のSB－1がほぼ東西に近いE2°30′Nであるのに対し，中間のSB－2と最南のSB－3両棟では各々E8°20′N，E10°00′Nと近似した傾きを持つ。この数値から判断すると，2～3時期の建造と見られ，調査区内に関する限り建物群の一部と称し得る状況ではない。同時期に南側至近の位置を河道とした旧鏡川分流が敷地の南限を画していた点から，可能な敷地は，分流河道から能茶山裾に至る南北幅約140mの範囲に限定される。

B区北隣のA区では，古代の柱穴を見ない。A区では，東西に長い調査区の中央をその長軸に沿うE10°55′Nの方位で南北に両断する古代期の溝跡SD－17を検出しており，その方位は，SB－3の棟行であるE10°00′Nの方位に近い。SD－17は弥生の包含層と遺構の両層準を掘削するため，遺物の大半を弥生土器で占めるが，西方からの流れ込みと見られる古墳後期・奈良・平安期の土師器や須恵器類を含む。それら出土遺物の年代下限は12世紀代であり，SD－17は平安末の埋積と見られる。A区では，弥生包含層の上位に古代期に属す極少数の土師器片を得ているが，古墳～古代期

の包含層を確認していない。このため，SD－17に含まれる当該期遺物類の大部分は，溝床水準が高位に当たる西方からの流入と見られ，その延長線は，能茶山西口付近を中心とする微高地形部の南裾を経て，旧鏡川分流河道跡FRC－1(Fig.3)の左岸に達する。従って，SD－17の性格としては，能茶山西口付近を中心とする微高地形部を回避し，鴨部遺跡の南限に弯流した後，東北東に転じて流れ去るFRC－1の弧型河道を利用したバイパス型用水路であった可能性が考えられる。

付考　朝倉推定条里遺構と鴨部遺跡の古代遺構について

高知平野西部の鏡川右岸(南岸)では，朝倉南町および朝倉甲の南部を中心にN16°W(北偏西16°)の方位で区画された市域屈指の水田地割が古伝する所から，土佐郡朝倉郷の律令制条里遺構に推定される反面，当該地域周辺では従来古代遺構の出土自体を欠く。鴨部遺跡は，朝倉郷東隣に郷域が比定される土佐郡鴨部郷の一角と見られ，今次調査で出土した古代の掘立柱建物跡3棟・柵列3基・溝跡1条・土坑1基等は，この方面に関わる実物資料の初出となった。ここでは，柵列SA－3を唯一の例外として，朝倉推定条里と同じく北偏西方位を基本とする条里の伏線を窺わせるが，その偏西度は全般に低く，朝倉推定条里に対し，－13°30′(SB－1)～－5°5′(SD－17)の偏西差を持つ。これら偏西度の数値が，地形環境形成史における幾つかの終盤段階と密接する点は，以下の符合状況から明らかである。

鏡川扇状地における沖積層基底深度分布では，大きく分けて南北2帯の深部が浦戸湾方向に伸びる。北側の基底深部が現鏡川本流の河道に沿って深化するのに対し，南側の基底深部は鏡川右岸第1の自然吐流口G1(朝倉米田)付近より朝倉神社東際～朝倉城山(＋5m～0m)・鵜来巣山の東際(－5m前後)へと南下した後，市郊南部丘陵北際(－5～－25m)に沿って浦戸湾(－30～－35m)に向かう。また，南側の基底深部では，朝倉地区平野部西面における南下区間と同南面における東下区間が，鵜来巣山東際～海老槇丘陵北際付近を転向点とするN16°WとE16°N前後の矩形を形成するほか，その沖積初期には鏡川本流を凌ぐ規模の河道を擁した点は想像に難くない。N16°W(北偏西16°)方位の水田地割古伝区域とは，この沖積層基底深部の転向点東側に堆積した古い時期の沖積扇状地に他ならない。その北限に近い標高6.0mの地表等高線も，ほぼE16°N前後の方位に連なる点から，N16°Wの地割は，古地形に遠因を遡る自然地形の勾配を最大限活用した利治水設計と言える。

極東米軍1947年の空撮写真(R518－4－25；Fig.83)において，特に鮮明な鏡川分流の埋積河道跡は，朝倉米田のG1で本流右岸に吐流した後，G2(現在のJR朝倉駅前交差点付近)で分水した網状型或いは蛇行型の曲流痕跡群(FRC－1～4)に認められる。これら曲流の主因は，能茶山西方に更新世の埋没扇状地性段丘(愛宕面)と基盤層の高みが断続して，直流を阻む点にあると見られる。また，既に水田面に深く埋没して微地形を捕捉し難いN16°W地割地帯の河道跡に比べ，これらの埋積は，より新しい時期と推定される。鏡川吐流口G1から神田川との合流に至るまで追跡可能なFRC－1は，鴨部遺跡の今次調査におけるA区SR－3埋積砂礫層やB区砂礫堆の形成に直接関与した河道跡であり，調査結果の綜合により，少なくとも弥生中期から平安末頃にかけての機能が推定される。これら新期の分流河道跡周辺では，田畑の地割りが蛇行河道に従って変化する現認の一般状況が合理的であり，かつて一律の地割方位を施行した形跡も見られない。先に指摘したN16°W地割地帯の北限に近い標高6.0m地表等高線の実質は，これら新期蛇行河道跡の南限である。少数箇所に見られる河道跡の切合や，河跡湖状に南垂する弧形河道跡の重なりを考慮すると，南に位置する河道から順に機能を停止した状況と見られ，FRC－2～4等は，FRC－1より若干早く埋積した可能性が考えられる。一方，より古期に河道を埋積したN16°W地割地帯の一角に位置する柳田遺跡の事例では，すでに地表微地形が不明瞭な鏡川分流河道跡の埋積終了が古墳時代と判明している。この点

から，河道跡微地形を明瞭に留めるFRC－2～4等の流路機能が律令施行期まで持続した可能性は，評価の対象であり得ると言えよう。

以上，鴨部遺跡に対する調査結果と周辺地形環境資料を軸とする限定的視点からの結論は，次のように整理される。(1)朝倉南町および朝倉甲の南部を中心とするN16°Wの水田地割古伝域では，その設計に適った緩斜平坦面が遅くとも古代期には自然形成されている。(2) N16°W水田地割古伝域の北限を規定する新期の鏡川分流群(FRC－2～4)は，少なくとも古代期まで鴨部遺跡に影響するFRC－1や，古墳時代に埋積する柳田遺跡検出河道跡との時期関係から，条里施行期に機能していた可能性があり，共に矛盾する状況にはない。(3)鴨部遺跡で出土した古代の掘立柱建物跡や柵列・溝跡等の方位がN16°Wより偏西度が低く，かつ不揃いな点は，能茶山を背とし，至近に不安定な鏡川分流の蛇行を臨む狭隘な地形環境とその変化に即した設計として理解可能なため，郡郷単位の地割方位の及ぶ範囲外と考えられる。

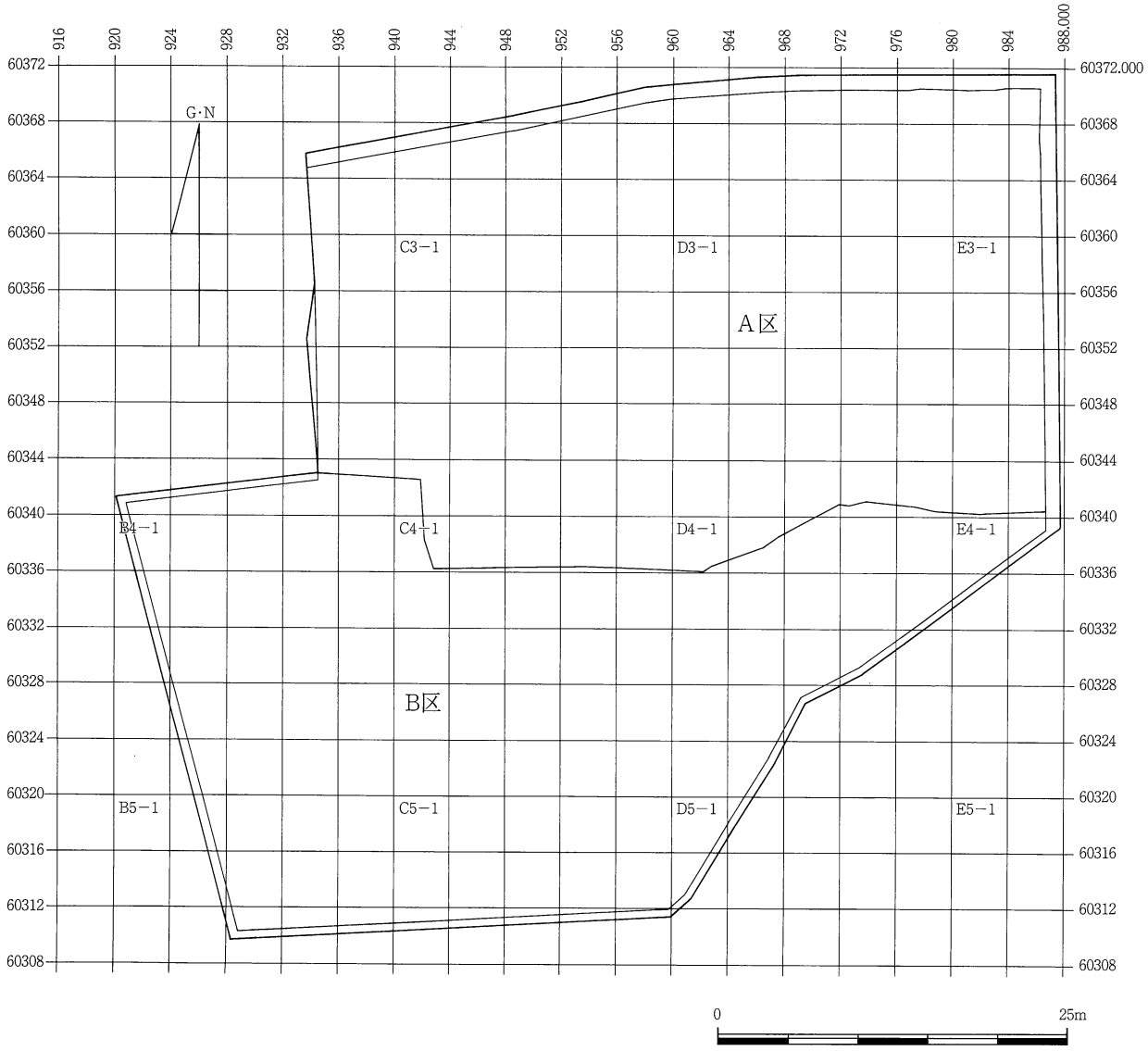
なお付言すれば，能茶山は市郊北部山地「鴻ノ森」(327.0m)―南部山地「烏帽子山」(358.7m)の両三角点を結ぶN16°Wの直線下に位置するのみならず，これと直交するE16°Nの直線下には，点在する微高地とその合間を蛇行する複数の河道跡が存在しており，N16°W地割域の北限もこれに近い。これら微高地の多くは未調査ながら，特に水際立地の志向を際立たせる弥生時代以降，優先的居住区域に画定する環境条件を具えており，鴨部遺跡も同種微高地の縁辺部に当たる。この意味において，鴨部遺跡北背の能茶山に関しては，測量・監視基地という範疇の機能を相当古い時代から担っていた可能性が留意されて然るべきと思われる。

注8：『高知地盤図』高知地盤図編集委員会企画編集，社団法人高知県建築設計監理協会刊行。
注9，10，11，12：高知市鴨田小学校屋内運動場及びプール建築工事地質調査，鑑定者・種田行展，平成12年。
注13，14，15，17，18：『栄エ田遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第22集，1995年3月発行。
注16：姫島産以外の黒曜石の高知県下出土例としては，中村貝塚(中村市，縄文晩期)から出土した佐賀県腰岳産黒曜石の事例がある。
注19，20：『柳田遺跡』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第17集，1994年3月発行。

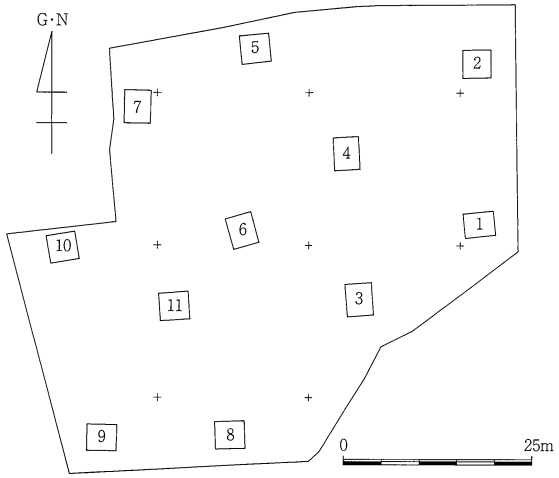
座標系について

本報告書中の本文および図・表に用いる公共座標ならびに緯度・経度は，調査～整理期間(平成13年2月27日～平成14年3月29日)を通じて施行中である旧来の座標系に即しており，平成14年度から施行される新座標系および世界測図への組み込みには，所定の変換を必要とする。

1. 調査区割図



2. 試掘トレンチ配置図



注記事項1 ── 本調査に先立つ試掘調査では，平均4m×3m坑口の方形試掘トレンチ11基を開削し，遺物・遺構の埋蔵状況を探索すると共に，これら層準の地層観察から旧地形の概要を捕捉している。その結果，シルト勝ちの調査区北半において，弥生遺物を主とする包含深度が表土下1.7m前後に達する一方，南半の東部では，シルト優勢ながらも現代耕作土及び客土の下には，ほぼ無遺物層の続く状況が判明した。また，南半東部では，特に粗粒質の耕作土下に河成砂礫が厚く堆積しており，弥生終末～古墳初頭と古代をピークとする少量の遺物，およびピット群が河成砂礫堆の表面付近で検出されている。

このように，調査上の完掘面に想定される層準深度が南浅北深を示す点から，数次の掘削と精査を要する北半と，単次で完掘可能と見られる南半を区分し，前者をA区，後者をB区とした。なおA区では，初期掘削を要する溝跡SD−17と自然流路跡SR−1・SR−2の交差から，調査面地形の四分化を来たしている。これに応じて，A区内部を四小区に細分し，その北東部・北西部・南東部・南西部を占める区画を，各々A1・A2・A3・A4区とした。

Fig.4　鴨部遺跡発掘調査の区割図；試掘トレンチ配置図（縮尺1/500；1/1000）

Fig.5　鴨部遺跡発掘調査：A区遺構完掘全図（縮尺1/200）

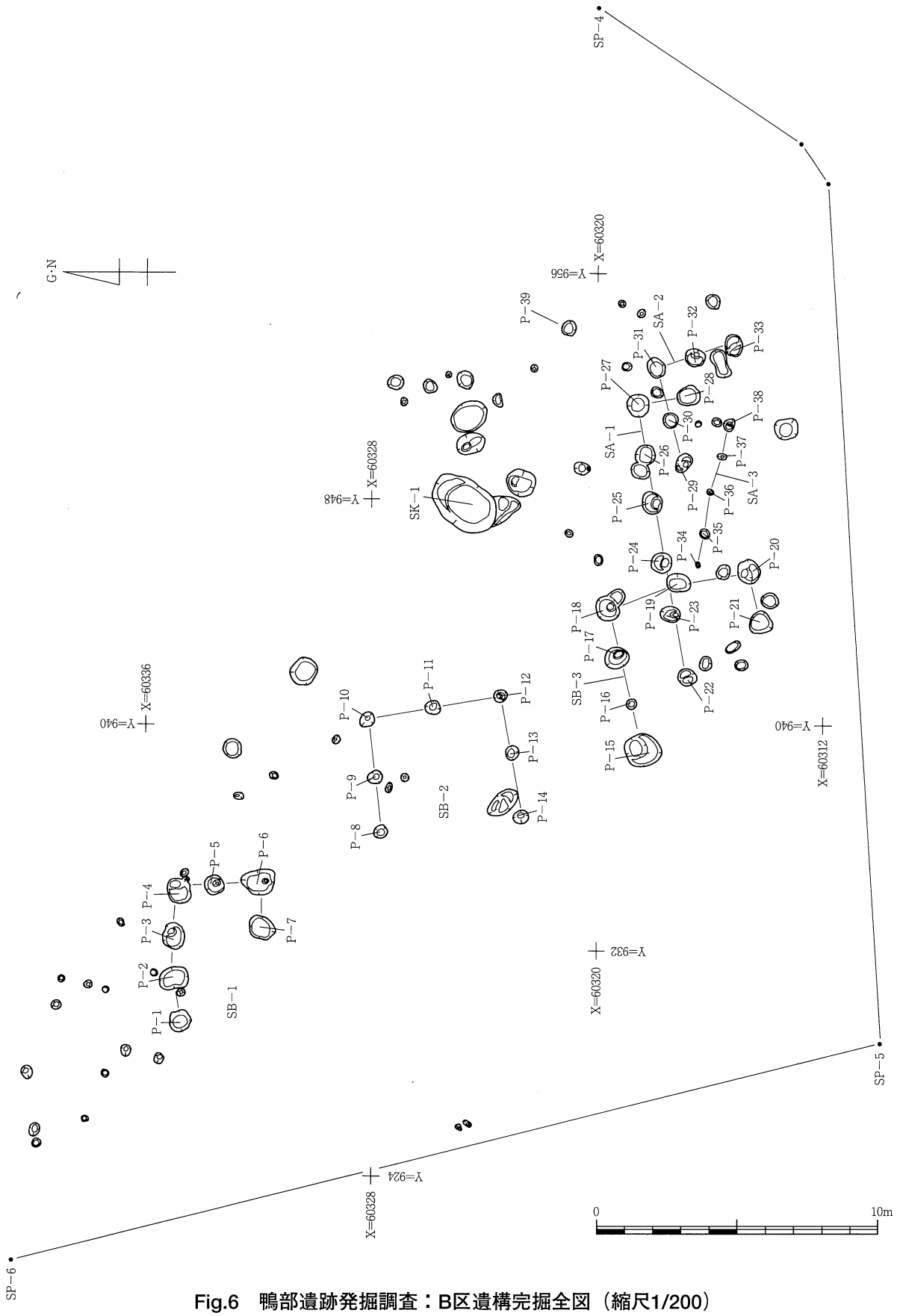


Fig.6　鴨部遺跡発掘調査：B区遺構完掘全図（縮尺1/200）

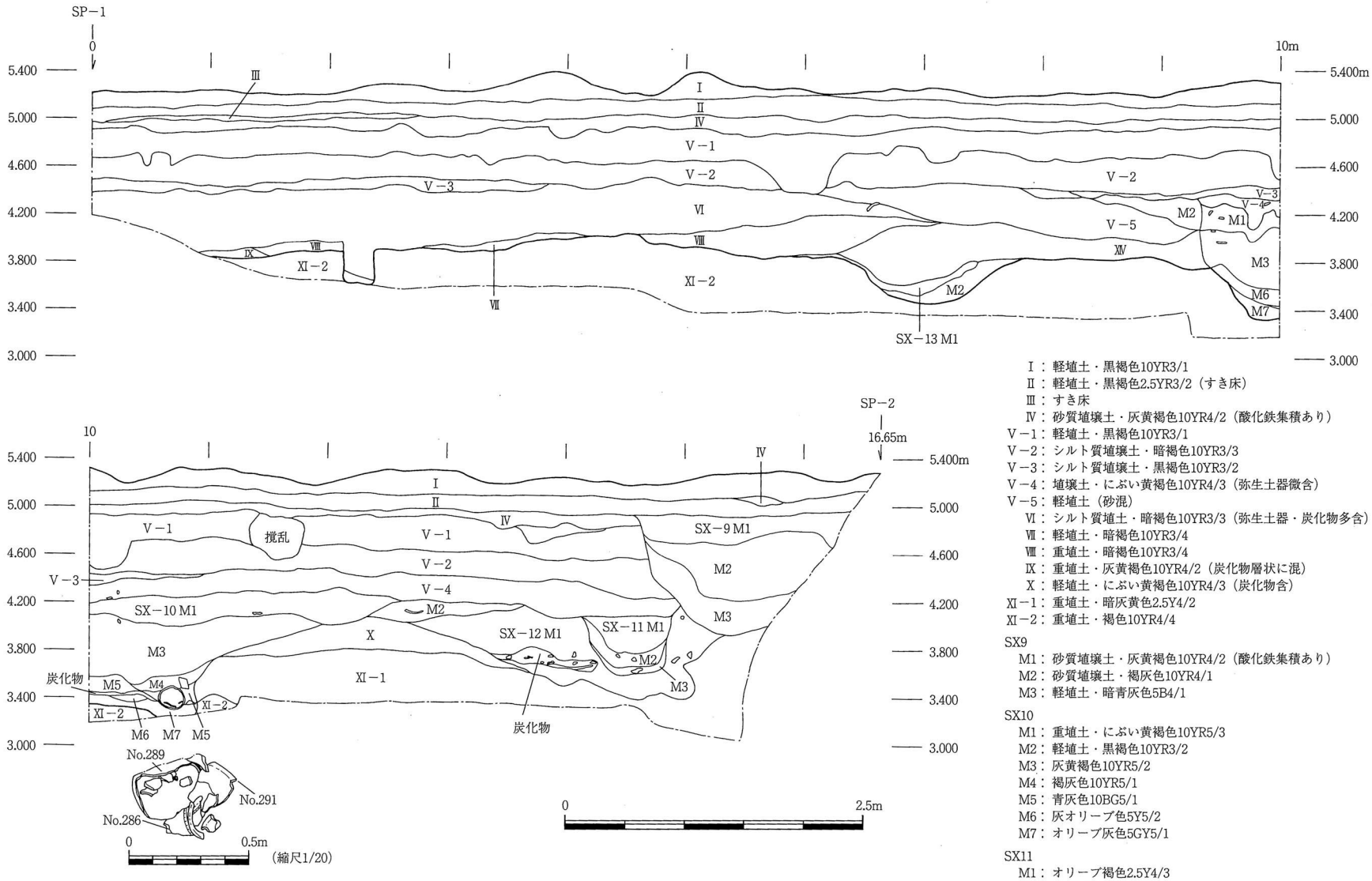


Fig.7 A区北トレンチ北壁の地層断面図（縮尺1/50）

Ⅰ：軽埴土・黒褐色10YR3/1
Ⅱ：軽埴土・黒褐色2.5YR3/2（すき床）
Ⅲ：すき床
Ⅳ：砂質埴壌土・灰黄褐色10YR4/2（酸化鉄集積あり）
Ⅴ−1：軽埴土・黒褐色10YR3/1
Ⅴ−2：シルト質埴壌土・暗褐色10YR3/3
Ⅴ−3：シルト質埴壌土・黒褐色10YR3/2
Ⅴ−4：埴壌土・にぶい黄褐色10YR4/3（弥生土器微含）
Ⅴ−5：軽埴土（砂混）
Ⅵ：シルト質埴土・暗褐色10YR3/3（弥生土器・炭化物多含）
Ⅶ：軽埴土・暗褐色10YR3/4
Ⅷ：重埴土・暗褐色10YR3/4
Ⅸ：重埴土・灰黄褐色10YR4/2（炭化物層状に混）
Ⅹ：軽埴土・にぶい黄褐色10YR4/3（炭化物含）
XI−1：重埴土・暗灰黄色2.5Y4/2
XI−2：重埴土・褐色10YR4/4

SX9
M1：砂質埴壌土・灰黄褐色10YR4/2（酸化鉄集積あり）
M2：砂質埴壌土・褐灰色10YR4/1
M3：軽埴土・暗青灰色5B4/1

SX10
M1：重埴土・にぶい黄褐色10YR5/3
M2：軽埴土・黒褐色10YR3/2
M3：灰黄褐色10YR5/2
M4：褐灰色10YR5/1
M5：青灰色10BG5/1
M6：灰オリーブ色5Y5/2
M7：オリーブ灰色5GY5/1

SX11
M1：オリーブ褐色2.5Y4/3
M2：暗緑灰色5G4/1
M3：緑灰色5G5/1

SX12
M1：緑灰色5G6/1

SX13
M1：重埴土・灰黄褐色10YR4/2（炭化物多含）

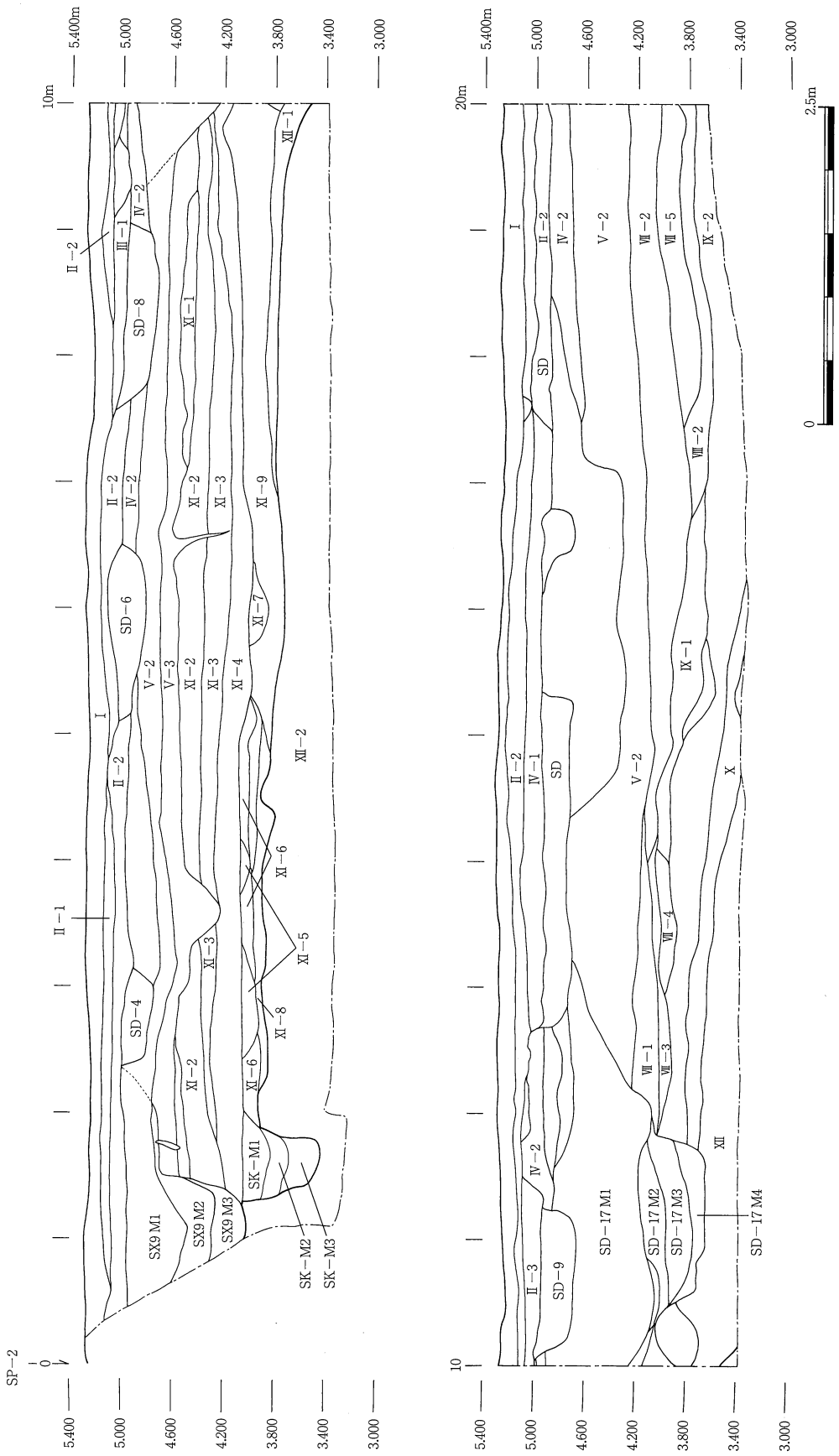


Fig.8　A区東トレンチ東壁の地層断面図ー北部～中央区間ー（縮尺1/50）

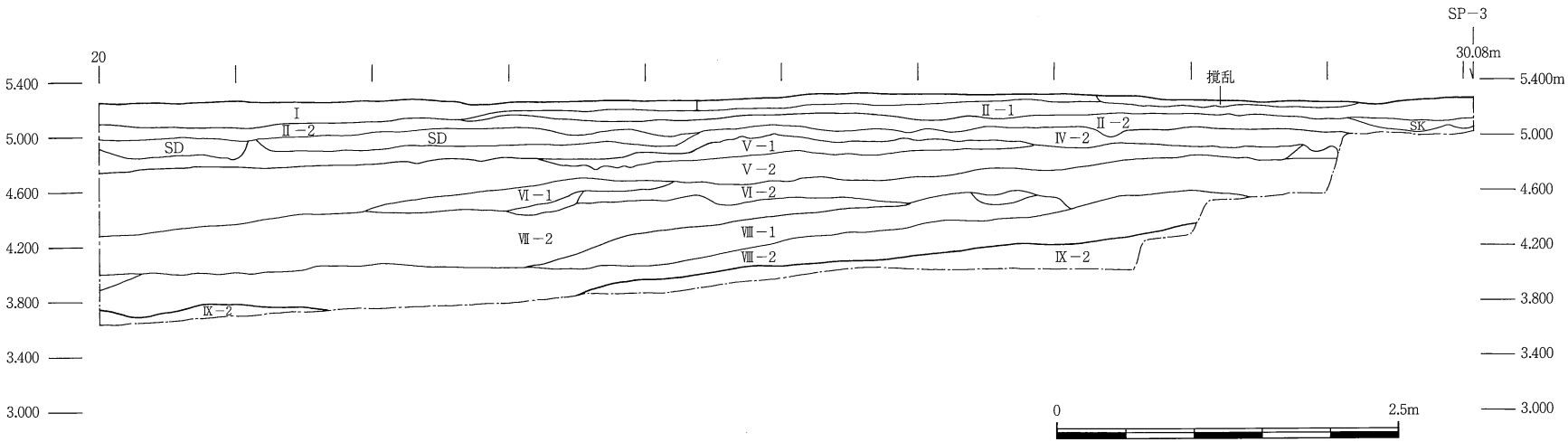


Fig.9 A区東トレンチ東壁の地層断面図ー南部区間ー（縮尺1/50）

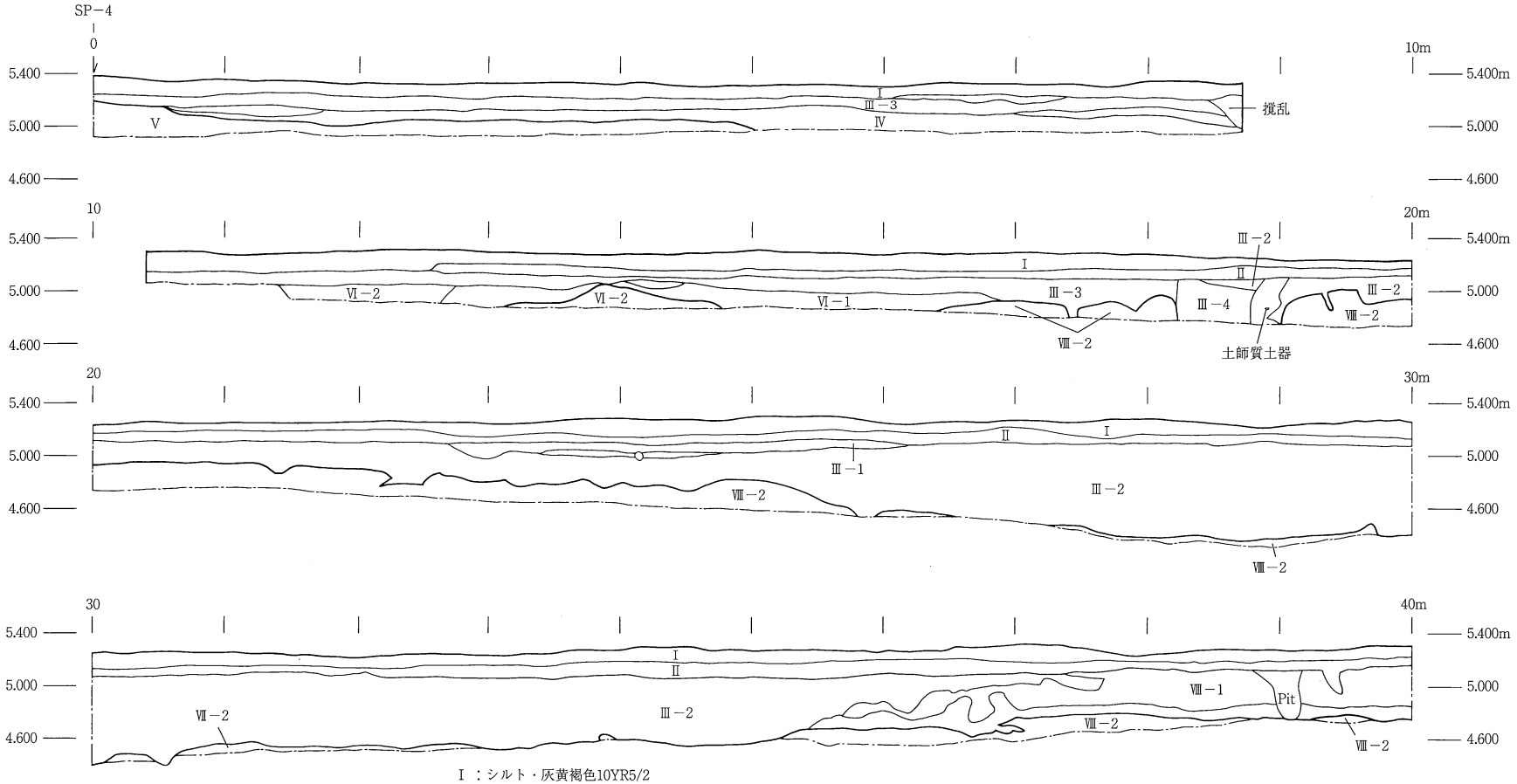
Fig.8と9

Ⅰ：軽埴土・黒褐色10YR3/1
Ⅱ−1：壌土・灰黄褐色10YR4/2（客土）
Ⅱ−2：砂壌土・灰黄色（客土）
Ⅱ−3：シルト質埴土・黄褐色2.5Y5/6（灰色泥；客土）
Ⅲ−1：シルト質埴土・暗灰黄色7.5Y5/2（鋤床）
Ⅲ−2：軽埴土・黒褐色2.5YR3/2（鋤床）
Ⅳ−1：砂壌土・にぶい黄褐色10YR4/3
Ⅳ−2：壌土・にぶい黄褐色10YR4/3
Ⅴ−1：シルト質埴壌土・暗褐色10YR3/3（土師器含）
Ⅴ−2：砂質埴土・黒褐色10YR3/2
Ⅴ−3：シルト質埴土・黒褐色7.5YR3/1
Ⅵ−1：砂壌土・黒褐色10YR3/2
Ⅵ−2：砂壌土・黒褐色10YR3/2
Ⅶ−1：軽埴土・黒褐色10YR3/2（土器多含）
Ⅶ−2：軽埴土・黒褐色10YR3/2（土器・炭化物含）
Ⅶ−3：軽埴土・褐黄褐色10YR4/2（土器多含）
Ⅶ−4：シルト質埴土・黒褐色10YR3/2（土器多含）
Ⅶ−5：軽埴土・暗褐色10YR3/3（細礫混）
Ⅷ−1：壌土・にぶい黄褐色10YR4/3
Ⅷ−2：砂壌土・暗褐色10YR3/4（細礫混）
Ⅸ−1：軽埴土・褐灰色10YR4/1（弥生土器少含）
Ⅸ−2：シルト質埴土・灰色N5/
Ⅹ：重埴土・にぶい黄褐色10YR4/3
Ⅺ−1：シルト質埴土・暗褐色10YR3/3（灰色土混）
Ⅺ−2：シルト質埴土・黒褐色7.5YR3/2（褐灰色10YR4/1混）
Ⅺ−3：シルト質埴土・黒褐色10YR3/2（土器含）
Ⅺ−4：軽埴土・黒褐色10YR3/2（炭化物・円礫少含；土器片多含）
Ⅺ−5：重埴土・にぶい黄褐色10YR4/3（土器少含）
Ⅺ−6：重埴土・にぶい黄褐色10YR5/3（土器多含）
Ⅺ−7：軽埴土・黒褐色10YR3/2（土器少含；炭化物多含）
Ⅺ−8：重埴土・にぶい黄褐色10YR5/3（土器多含）
Ⅺ−9：軽埴土・灰黄褐色10YR4/2
Ⅻ−1：軽埴土・暗灰黄色2.5Y4/2（灰色斑混）
Ⅻ−2：重埴土・暗灰黄色2.5Y4/2

SK−M1：灰黄褐色10YR4/2
M2：暗灰黄色2.5Y4/2
M3：暗青灰色5BG4/1（炭化物混）

注記事項1 ── A区東トレンチの掘削深度は，現表土下1.90mに相当する標高3.50m（北半深部）の水準に及ぶ。その東壁の地層断面は緩やかな北傾斜を呈し，かつて当調査区の北方に狭幅の後背湿地が存在した様相を窺わせる。更に，その北方には能茶山の小丘裾が迫るため，この北傾斜の延長下に，埋没谷の潜伏も考えられる。

また，調査区南側には，旧河道が埋没しており，そこより12m程北寄りの部分以北の地層から，弥生遺構と見られる断面の露出が増加する。少なくとも，東トレンチや北トレンチの既掘範囲に関する限り，調査区北側の隣接地において，弥生遺構の減少する兆候を認め得ない。



Ⅰ：シルト・灰黄褐色10YR5/2
Ⅱ：シルト・にぶい黄褐色10YR5/4（小礫少含）
Ⅲ−1：シルト・暗褐色10YR3/4（小礫少含）
Ⅲ−2：シルト・暗褐色10YR3/4（小礫微含）
Ⅲ−3：シルト・暗褐色10YR3/4（小礫少含；土器片・炭化物・シルト・褐灰色10YR6/1微含）
Ⅲ−4：シルト・暗褐色10YR3/4（小礫がⅢ−3より多含）
Ⅳ：シルト・にぶい黄褐色10YR4/3（径30㎜以下の礫少含）
Ⅴ：シルト・褐色10YR4/4（砂・シルト・褐灰色10YR5/1少含）
Ⅵ：シルト・にぶい黄褐色10YR4/3
Ⅶ：シルト・黄褐色10YR5/6（細礫混）
Ⅷ−1：礫・暗褐色10YR3/4（シルト混）
Ⅷ−2：礫・暗褐色10YR3/3（シルト混）
Ⅸ：シルト・暗褐色10YR3/4（砂混；小礫少含）

0　2.5m

Fig.10　B区南壁の地層断面図（縮尺1/50）

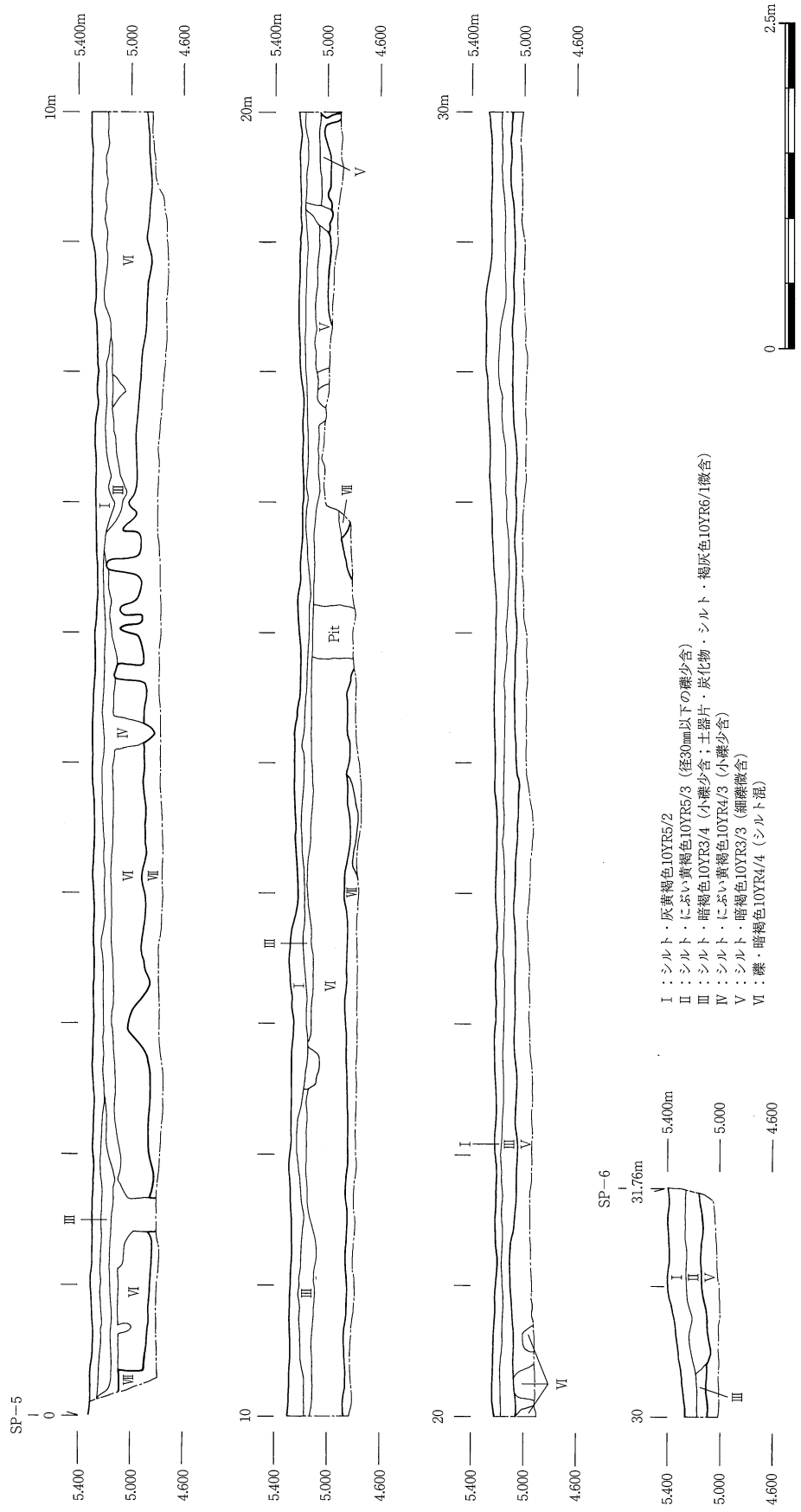
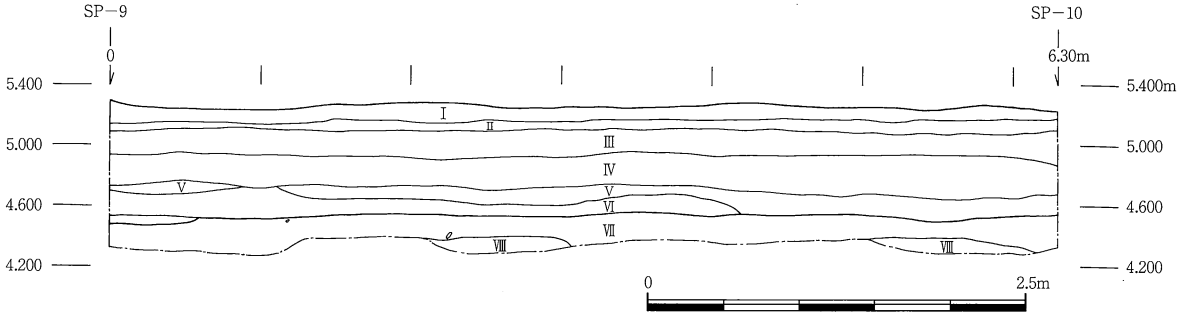


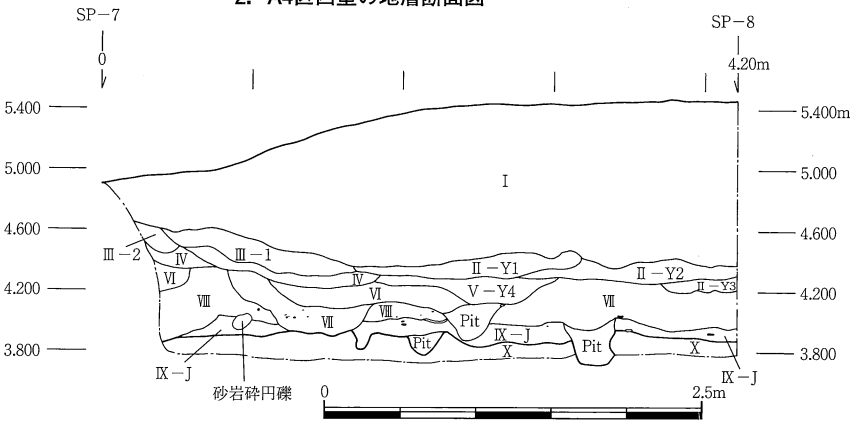
Fig.11　B区西壁の地層断面図（縮尺1/50）

注記事項1 ── A2区西壁における地層堆積の特徴：砂が優勢な表土（耕作土）付近を例外として，粘土成分が量的に勝り，滞水域の水積層に近い水平層理を成す。数次の掘削作業によって到達した最下の遺構検出面は，A区全体で現表土下1.0～1.5mに相当する標高3.8～4.2mの水準を上下するが，この掘削過程を通じて粘土成分が優勢な地点は，このA2区西端付近を唯一とする。土器の微片は既に標高4.8m前後の同壁Ⅳ層に出現するが，弥生土器と認められる土器片の多含は標高4.6m前後のⅥ層を皮切りに，標高4.3m付近を下限とするⅦ層に跨る。このⅦ層は，土性上の重埴土であり，A2区西端部の弥生土坑群やピット群は，この重埴土の下に検出されている。一方，それら遺構群の掘り込まれた地層自体は，シルト優勢を維持する点から，A2区西端部において滞水状の層理を重ねた時期は，弥生の遺構形成が停止した後と考えられる。

1. A2区西壁の地層断面図



2. A4区西壁の地層断面図



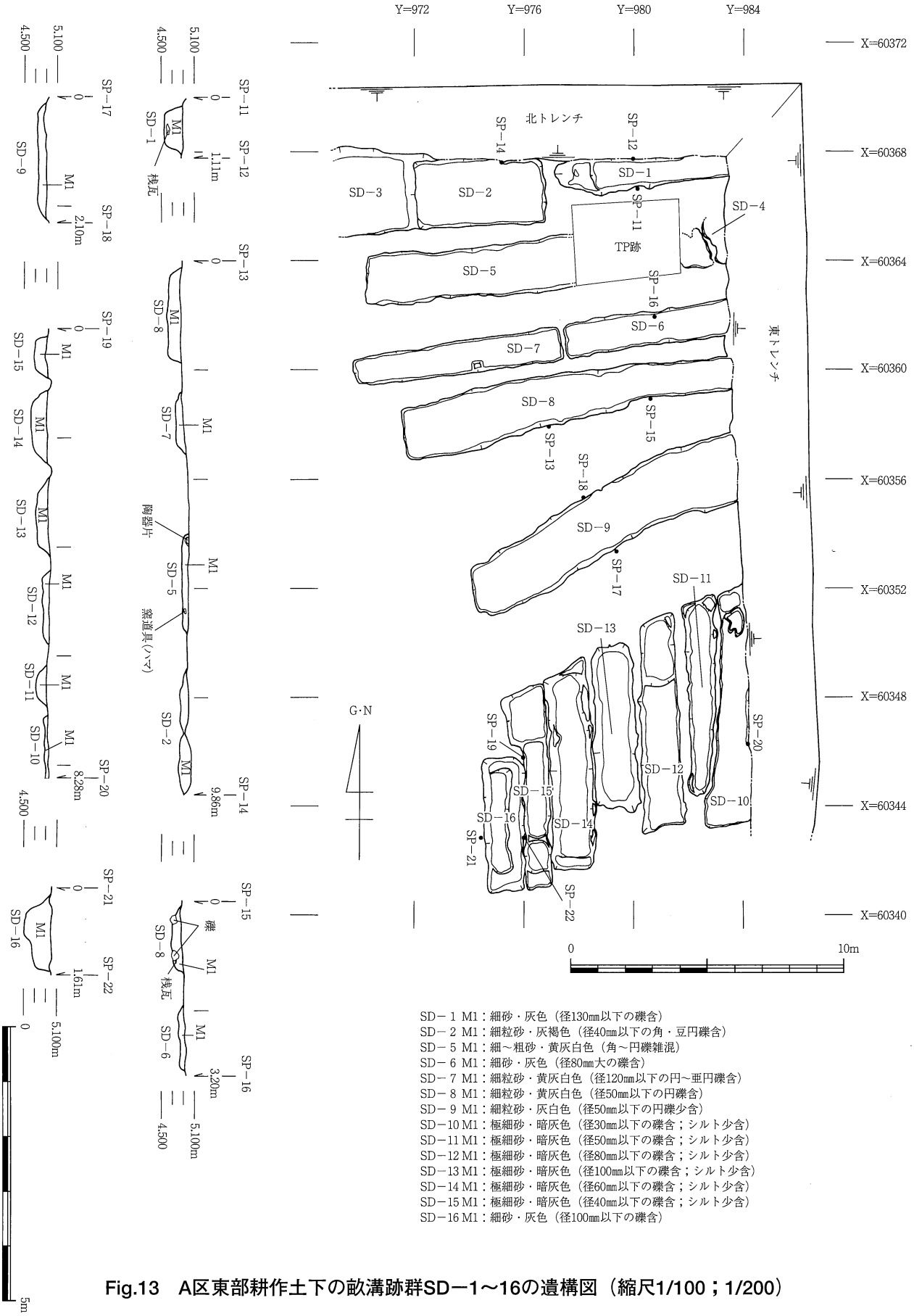
A4区西壁
- Ⅰ：シルト混じり粗粒砂と小円礫の互層・灰褐色（層理はやや北傾斜）
- Ⅱ－Y1：砂（灰～灰褐色のシルトがブロック状に混じる；弥生包含層）
- Ⅱ－Y2：シルト・褐灰色7.5YR4/1（径2㎜以下の酸化マンガン斑が顕著；径2㎜以下の炭化物少含；弥生包含層）
- Ⅱ－Y3：シルト・黄褐灰色10YR5/3（径3㎜以下の炭化物少含；弥生包含層）
- Ⅲ－1：シルト混じり砂・黒褐色（小礫を交える）
- Ⅲ－2：シルト混じり砂・暗灰黄色2.5Y5/2（小礫を交える）
- Ⅳ：シルト質砂土・黄灰色2.5Y6/1
- V－Y4：シルト質砂土・淡灰褐色10YR5/2（径3㎜以下の炭化物を少含；弥生包含層）
- Ⅵ：シルト質砂土・黄灰色2.5Y5/1（弥生包含層）
- Ⅶ：砂質シルト・灰オリーブ色7.5Y5/2（弥生包含層）
- Ⅷ：シルト質砂土・黄灰色2.5Y5/1（径10㎜以下の炭化物含）
- IX－J：シルト質砂土・灰黄色2.5Y6/2（特にチャートの亜円礫を交える；径30㎜以下の炭化物多；縄文晩期包含層）
- X：シルト質砂土・黄灰色5Y6/3（径3㎜以下の炭化物微含；土器片を見ず）

A2区西壁
- Ⅰ：シルト質砂土・灰黄褐色10YR5/2（水田耕作土・径3㎜以下の礫少含・根系への酸化鉄集積有り）
- Ⅱ：シルト質砂土・灰褐色7.5YR4/2（鋤床・径3㎜以下の礫少含・直上の耕作土より気相少・糸状の酸化鉄集積斑顕著化・酸化マンガン斑集積有り・耕作土との層間に能茶山窯の窯道具を挟む）
- Ⅲ：シルト・褐灰色10YR4/1（旧水田耕作土・径60㎜以下の礫混・炭化物混・近現代の陶片を含む；還元気味ながら，酸化鉄と酸化マンガンの集積状況はⅡ層と同じ）
- Ⅳ：砂質シルト・灰黄褐色10YR5/2（垂直糸状の酸化鉄集積が顕著・時期不明の土器細片微含・酸化マンガンの集積は見られず）
- Ⅴ：シルト質粘土・青灰5B6/1（礫・土器片の含有は極めて微少・直上層の糸状酸化鉄集積が続く）
- Ⅵ：シルト質粘土・褐灰色10YR5/1（炭化物混・酸化マンガン集積斑が再び多在・弥生土器片を多含・土壌は強還元の状態に在る）
- Ⅶ：粘土・褐灰色10YR3/3（土器片の分布はⅥ層より低密・酸化マンガン集積斑もⅥ層に比べ底密）
- Ⅷ：シルト・にぶい黄褐色10YR5/4（炭化物有り・土器片少含）

注記事項2 ── A4区西壁における地層堆積の特徴：厚さ1mに及ぶ砂・小円礫の互層が地表を覆い，その直下である標高4.4m～4.2mの水準に，流れ込みの層理を示す弥生包含層（Ⅱ－Y1～V－Y4）が切合う。その下のⅥ層・Ⅶ層も弥生包含層であり，成因的には南側のⅧ層を側刻して累重した河成層に近い性格を帯びるが，より安定的な層理を示す。上位で切合う弥生包含層は，これらⅥ層・Ⅶ層を侵食して斜交層理を成している。
IX－J層は，自然堤防型の地形環境下に堆積したと見られるX層成分を基質として，縄文晩期中葉の土器片や炭化物等を含む縄文包含層であり，その直下で2～3基のピットが検出されている。

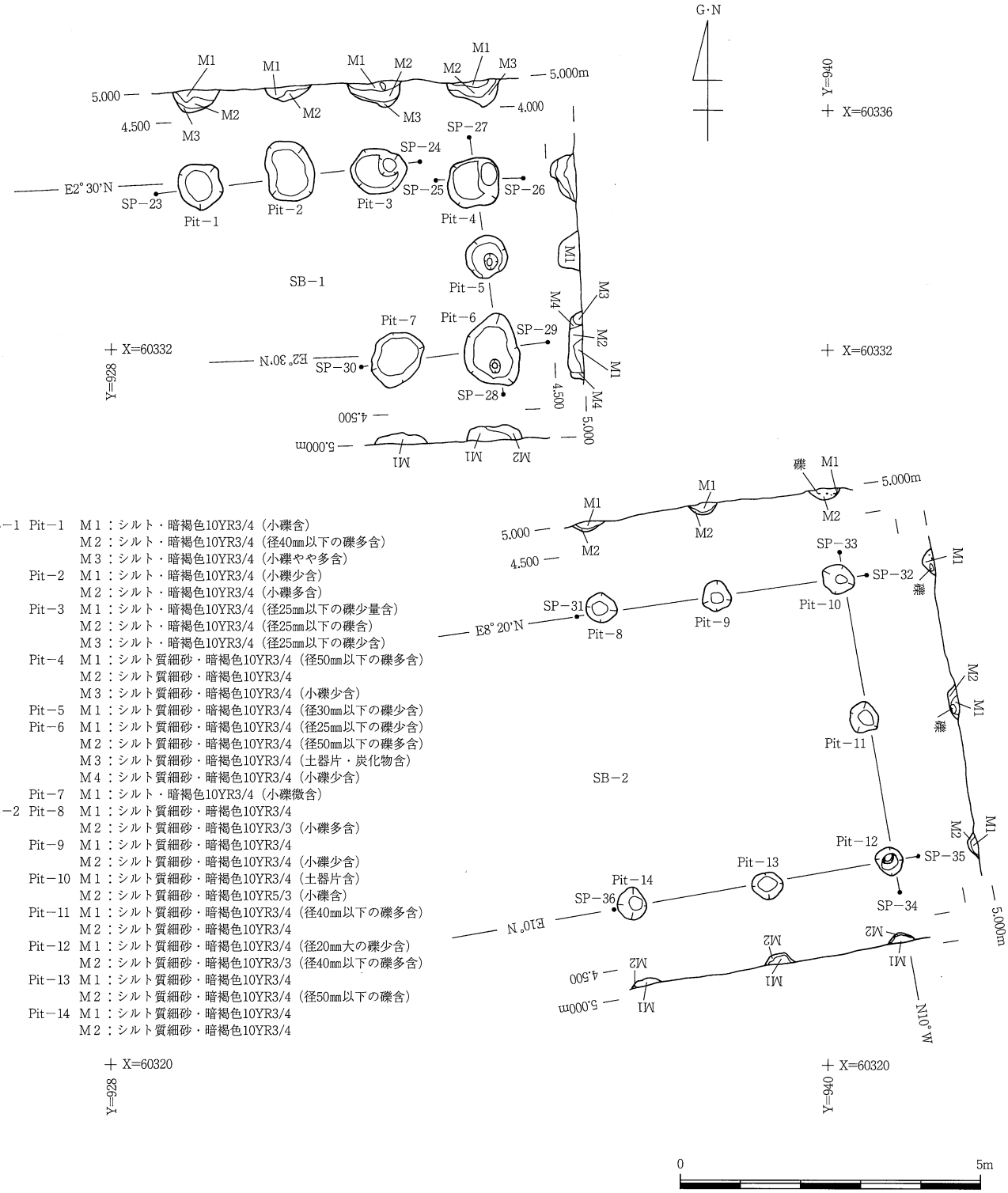
注記事項3 ── A4区西壁からA2区西壁に至る堆積環境：縄文晩期の包含層（IX・J層）は，A4区～A2区の西端部に連続すると見られるが，土器片の分布自体は，南側のA4区に偏る。縄文晩期中葉以降弥生前期前半頃迄に，南側からA4区側に向けて砂礫堆が延伸しはじめ，この趨勢の中で弥生前期から中期初頭～中葉にかけて，或いは断続的に遺構の形成が行われたものと考えられる。その後，流れ込みによる弥生包含層が上乗せされ，最終的には砂礫堆（Ⅰ層）に覆われる。A2区西壁に見られる滞水状の推積層理も，南側における砂礫堆形成がもたらした後背湿地側への環境変化を示すものと見られる。

Fig.12 A区西壁の地層断面図（縮尺1/50）



SD−1 M1：細砂・灰色（径130㎜以下の礫含）
SD−2 M1：細粒砂・灰褐色（径40㎜以下の角・亜円礫含）
SD−5 M1：細～粗砂・黄灰白色（角～円礫雑混）
SD−6 M1：細砂・灰色（径80㎜大の礫含）
SD−7 M1：細粒砂・黄灰白色（径120㎜以下の円～亜円礫含）
SD−8 M1：細粒砂・黄灰白色（径50㎜以下の円礫含）
SD−9 M1：細粒砂・灰白色（径50㎜以下の円礫少含）
SD−10 M1：極細砂・暗灰色（径30㎜以下の礫含；シルト少含）
SD−11 M1：極細砂・暗灰色（径50㎜以下の礫含；シルト少含）
SD−12 M1：極細砂・暗灰色（径80㎜以下の礫含；シルト少含）
SD−13 M1：極細砂・暗灰色（径100㎜以下の礫含；シルト少含）
SD−14 M1：極細砂・暗灰色（径60㎜以下の礫含；シルト少含）
SD−15 M1：極細砂・暗灰色（径40㎜以下の礫含；シルト少含）
SD−16 M1：細砂・灰色（径100㎜以下の礫含）

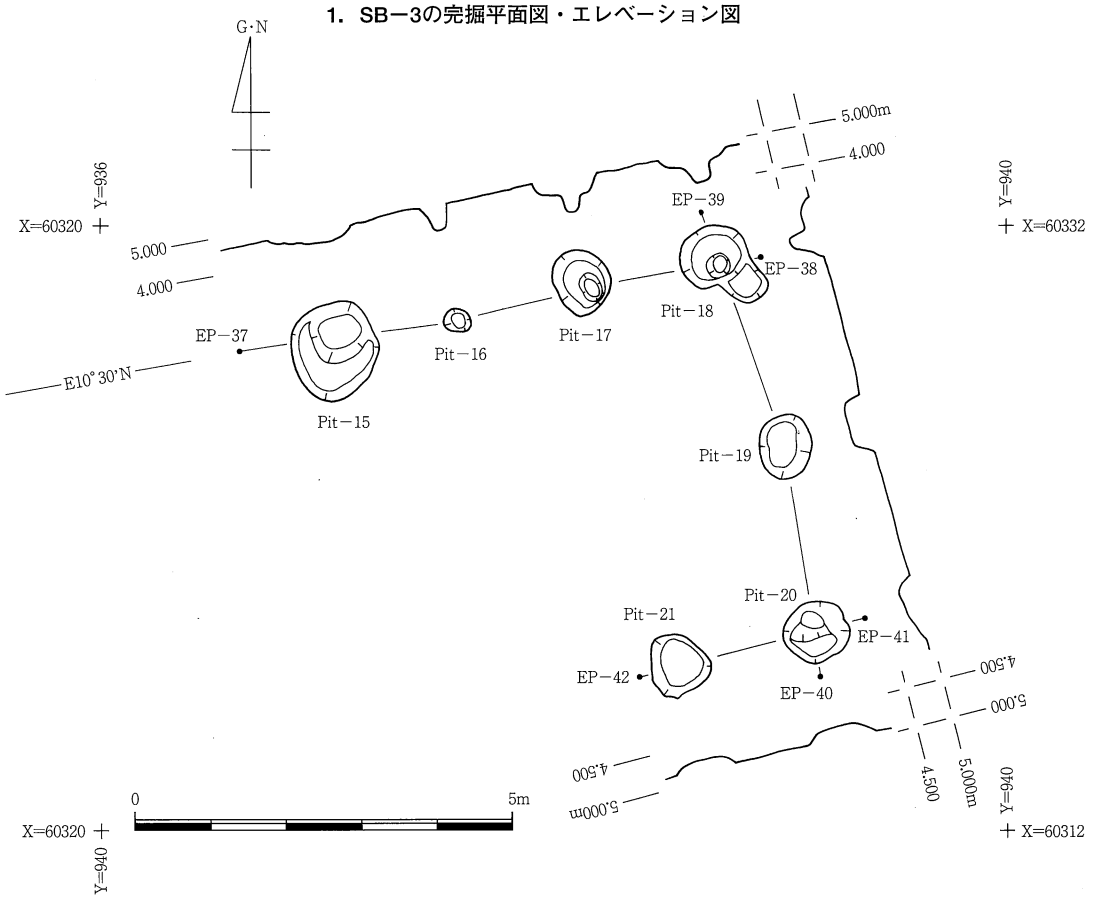
Fig.13　A区東部耕作土下の畝溝跡群SD−1～16の遺構図（縮尺1/100；1/200）



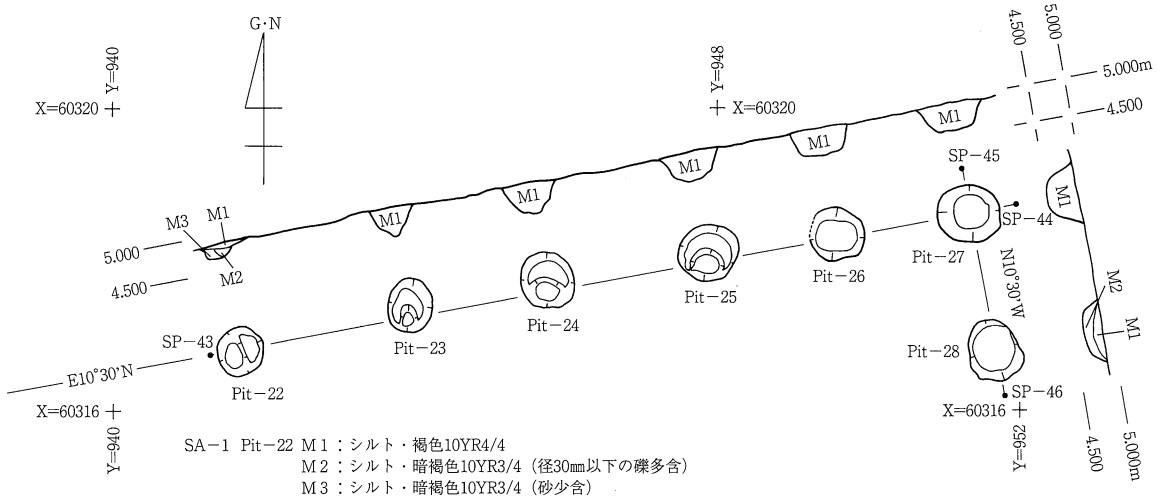
SB−1 Pit−1 M1：シルト・暗褐色10YR3/4（小礫含）
M2：シルト・暗褐色10YR3/4（径40㎜以下の礫多含）
M3：シルト・暗褐色10YR3/4（小礫やや多含）
Pit−2 M1：シルト・暗褐色10YR3/4（小礫少含）
M2：シルト・暗褐色10YR3/4（小礫多含）
Pit−3 M1：シルト・暗褐色10YR3/4（径25㎜以下の礫少量含）
M2：シルト・暗褐色10YR3/4（径25㎜以下の礫含）
M3：シルト・暗褐色10YR3/4（径25㎜以下の礫少含）
Pit−4 M1：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4（径50㎜以下の礫多含）
M2：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4
M3：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4（小礫少含）
Pit−5 M1：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4（径30㎜以下の礫少含）
Pit−6 M1：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4（径25㎜以下の礫少含）
M2：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4（径50㎜以下の礫多含）
M3：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4（土器片・炭化物含）
M4：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4（小礫少含）
Pit−7 M1：シルト・暗褐色10YR3/4（小礫微含）
SB−2 Pit−8 M1：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4
M2：シルト質細砂・暗褐色10YR3/3（小礫多含）
Pit−9 M1：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4
M2：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4（小礫少含）
Pit−10 M1：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4（土器片含）
M2：シルト質細砂・暗褐色10YR5/3（小礫含）
Pit−11 M1：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4（径40㎜以下の礫多含）
M2：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4
Pit−12 M1：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4（径20㎜大の礫少含）
M2：シルト質細砂・暗褐色10YR3/3（径40㎜以下の礫多含）
Pit−13 M1：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4
M2：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4（径50㎜以下の礫含）
Pit−14 M1：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4
M2：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4

Fig.14　B区堀立柱建物跡SB−1・2の遺構図（縮尺1/100）

1. SB−3の完掘平面図・エレベーション図



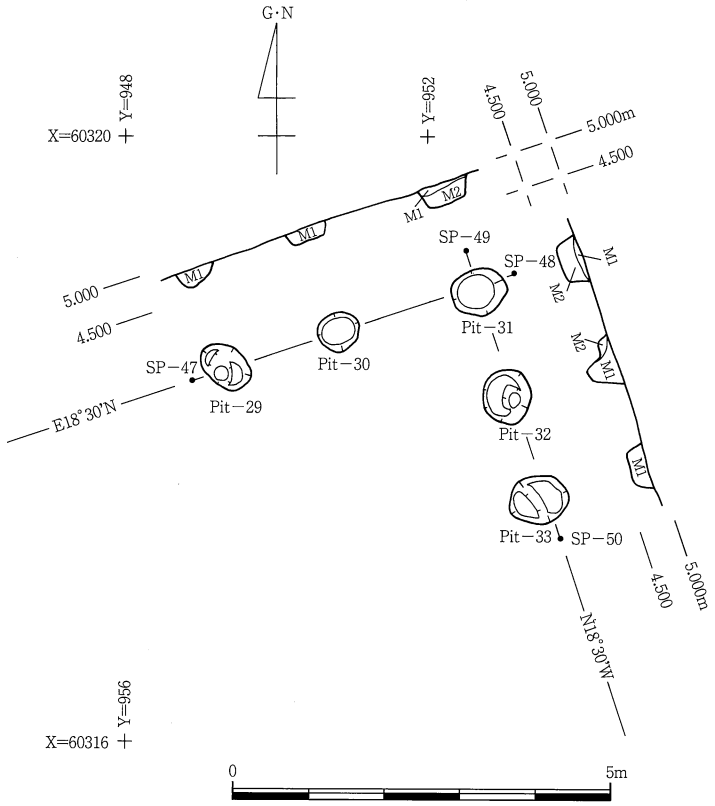
2. SA−1の完掘平面図・断面図



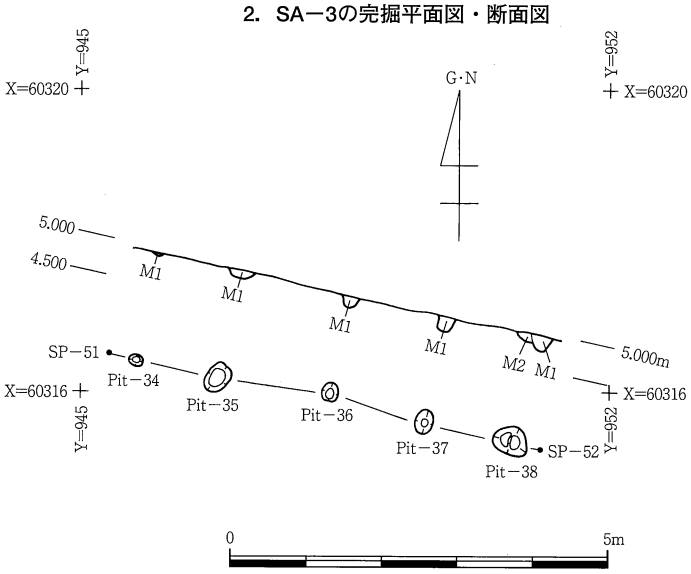
SA−1 Pit−22 M1：シルト・褐色10YR4/4
M2：シルト・暗褐色10YR3/4（径30㎜以下の礫多含）
M3：シルト・暗褐色10YR3/4（砂少含）
Pit−23 M1：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4
Pit−24 M1：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4
Pit−25 M1：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4
Pit−26 M1：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4
Pit−27 M1：シルト質細砂・暗褐色10YR3/4
Pit−28 M1：シルト・暗褐色10YR3/4（砂少含）
M2：シルト・暗褐色10YR3/4（砂多含）

Fig.15　B区堀立柱建物跡SB−3；柵列跡SA−1の遺構図（縮尺1/100）

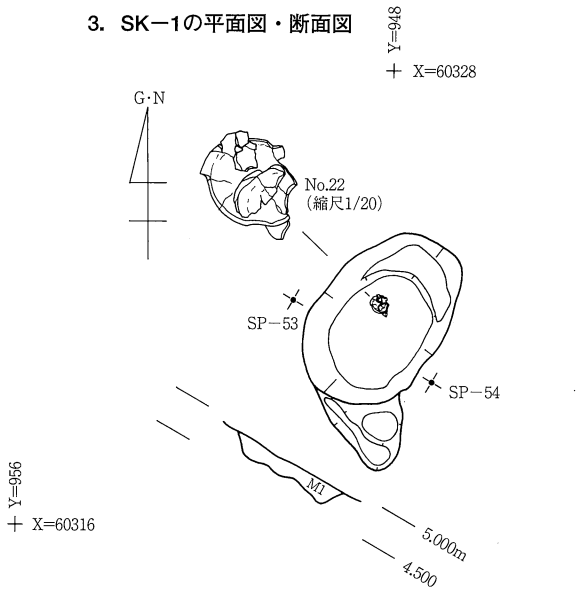
1. SA−2の完掘平面図・断面図



2. SA−3の完掘平面図・断面図



3. SK−1の平面図・断面図

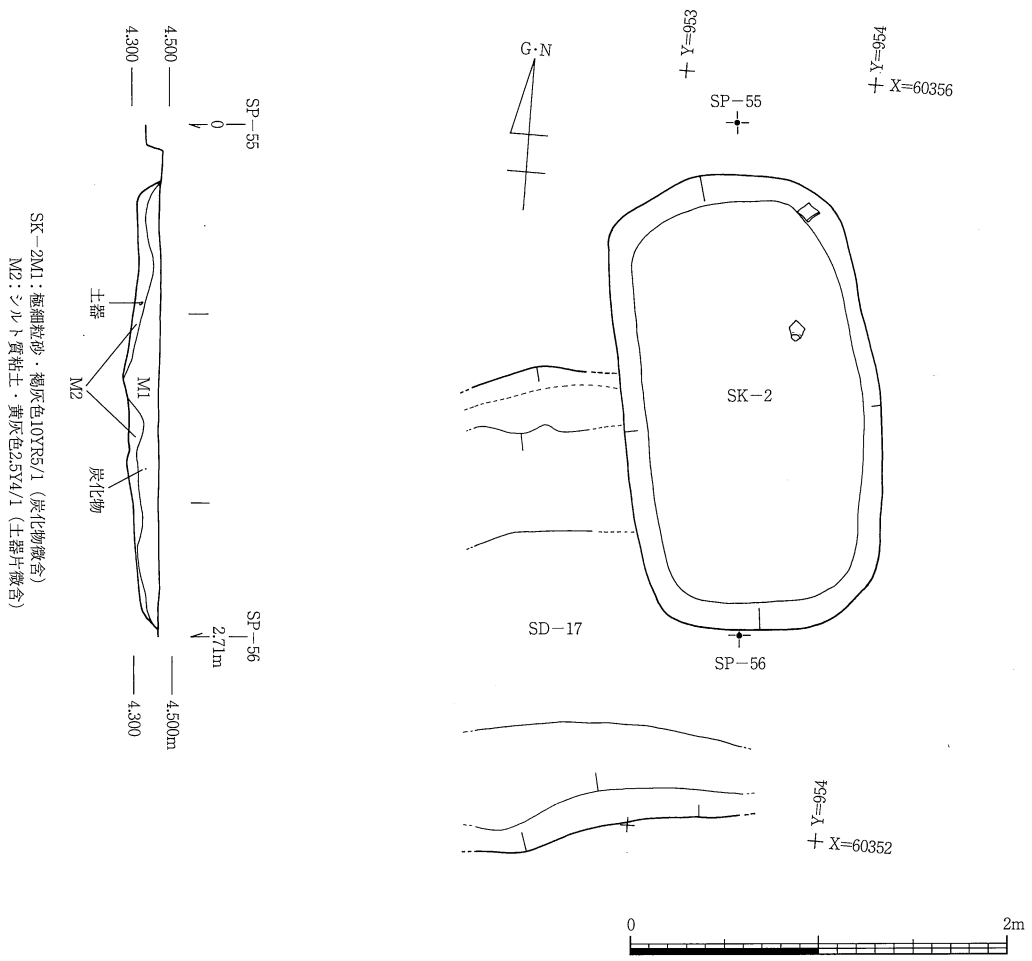


SK−1 M1：砂質シルト・暗褐色10YR3/4（径70㎜以下の礫少含）

SA−2
Pit−29 M1：礫混り砂質シルト・暗褐色10YR3/4（小礫多含）
Pit−30 M1：礫混り砂質シルト・暗褐色10YR3/4（径30㎜以下の礫含）
Pit−31 M1：礫混り砂質シルト・暗褐色10YR3/4（小礫含）
M2：礫混り砂質シルト・暗褐色10YR3/4（径35㎜以下の礫多含）
Pit−32 M1：砂質シルト・暗褐色10YR3/4（径50㎜以下の礫少含）
M2：礫混り砂質シルト・暗褐色10YR3/4（小礫多含）
Pit−33 M1：砂質シルト・暗褐色10YR3/4（径30㎜以下の礫少含）

SA−3
Pit−34 M1：シルト・暗褐色10YR3/4（砂少含）
Pit−35 M1：シルト・暗褐色10YR3/4（砂微含）
Pit−36 M1：.砂質シルト・暗褐色10YR3/4（小礫少含）
Pit−37 M1：砂質シルト・暗褐色10YR3/4（小礫小含）
Pit−38 M1：砂質シルト・暗褐色10YR3/4（小礫少含）
M2：礫混り砂質シルト・暗褐色10YR3/4（径30㎜以下の礫多含）

Fig.16　B区柵列跡SA−2；SA−3；土坑SK−1の遺構図（縮尺1/100）



注記事項１ ── SK－2は，平安後期に埋没したと見られる溝跡SD－17を切る。遺存深度が0.2m未満の浅い土坑であり，その平面形は，長径2.40m・短径1.36mの隅丸方形状を呈す。埋積土は上下二層に分かれ，上層M1が水積性の極細粒砂，下層M2は有機質や粗粒子に乏しい粘土成分を基質とする。この土坑内部からは，少量の弥生土器片と須恵器甕の破片が出土しており，遺物構成の点では，埋積の先行するSD－17との間に基本的な差異を見ない。

A区の東西を直線的に貫くSD－17は，数多くの弥生土坑やピットを切る一方，その上位からの切り込みとしては，SK－2の検出を唯一例に数えるのみであり，全調査区を通じて中世から江戸後期に至る物的資料の途絶える状況と矛盾しない。この状況から，SK－2の時期としては，SD－17埋積後の比較的短期間に想定することが可能と考えられる。

また，SD－17の埋積に前後して形成したと見られる平安後期頃の遺物包含層も，このSK－2を例外として明確な遺構の検出を欠く。直接或いは間接的な生活痕として，A区の縄文晩期から弥生に至る包含層と遺構内外に多見し得た濃厚な炭灰や焼土の分布も，A区東部においてのみ散発的に検出された古代末の包含層には無縁の要素と言える。この点，SK－2の埋積砂層M1に，水積の結果を示す細かい葉理が伴う現象は，再び易水没性の地形環境に帰した兆候とも解される。A区南縁帯では，遅くとも弥生中～後期頃に鏡川の主な分流の一つによって既往の表部堆積層に急角の側方侵食を来たしている。その後，この旧河道に砂礫の堆積が急進した点は，A区南縁の側方侵食崖以南の弥生遺構検出水準が標高4.20～4.00mを前後するのに対し，同側方侵食崖の南西を覆うB区西半の河成砂礫堆表面では，標高5.00m前後の水準に弥生終末および古代の遺構を見る状況が端的に示す。弥生終末～古墳初頭に属すB区SK－1を基準とする場合，弥生前期～中期中葉にかけて生活痕のピークを持つA区の遺構面は，既に砂礫堆より1m前後下方の水準にあり，その最短距離は20mにも満たない。遺跡の真北には能茶山丘陵が指呼の間に迫る不動の条件に加え，南を砂礫堆に塞がれたA区の地形環境は，既に生活面としての条件を喪失したものと考えざるを得ない。この地形凹部では，洪水時の水文条件によって浸食・堆積の双方が作用しつつ，重力の必然によって長期的には埋積が進行する。遺存深度の浅い土坑SK－2は，上記の不安定な水文環境を反映する遺構の一つと思われる。

Fig.17　A区土坑SK－2の遺構図（縮尺1/40）

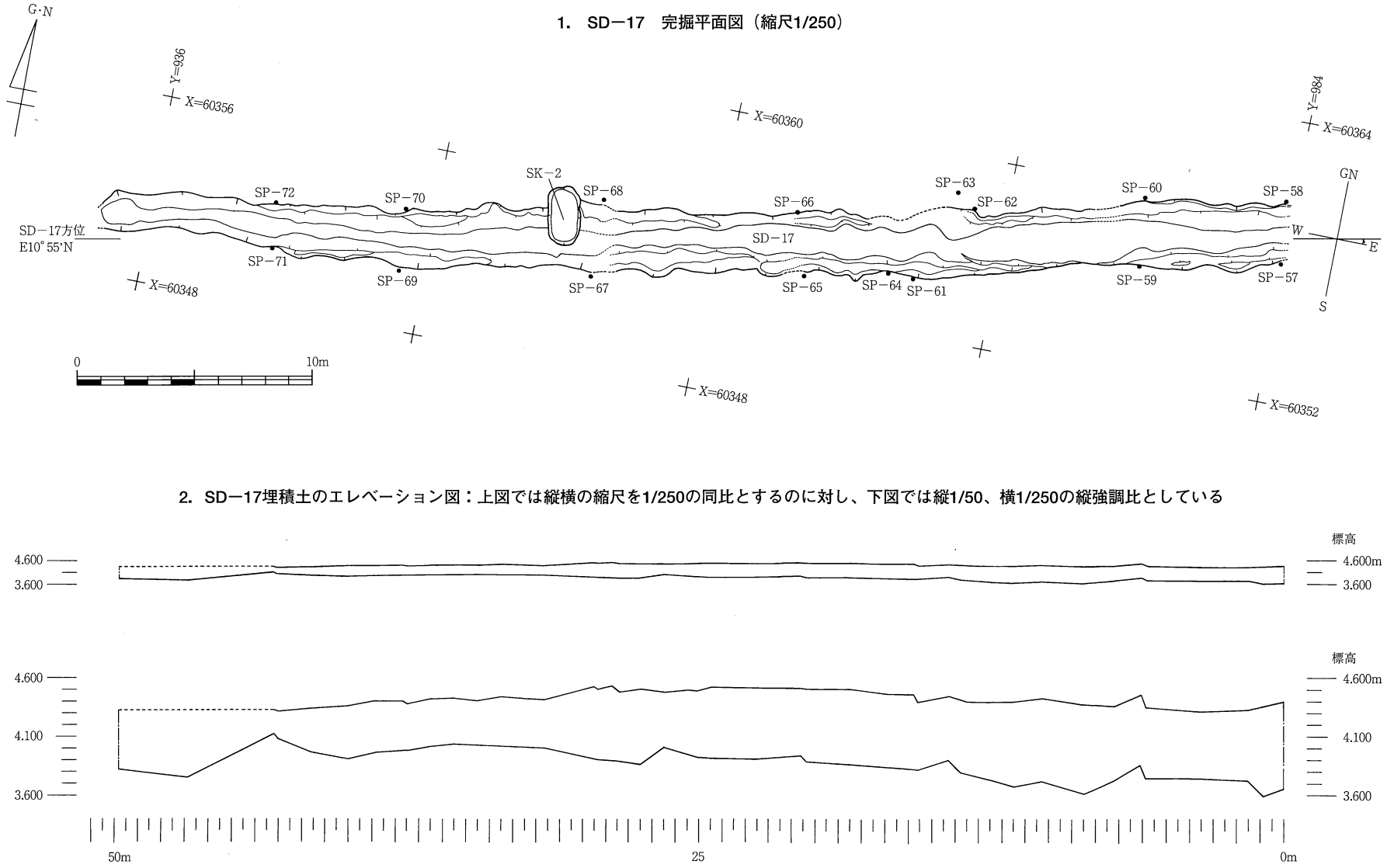
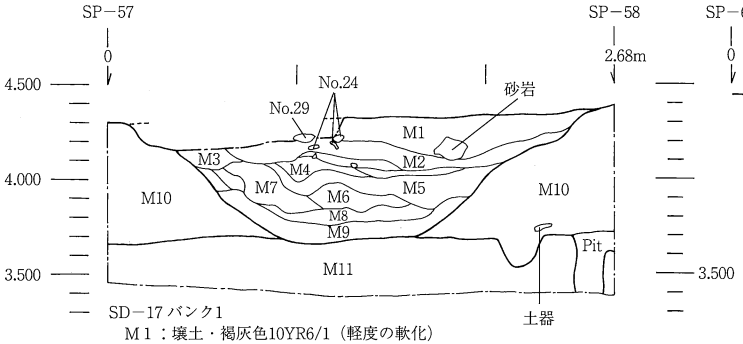


Fig.18　A区古代溝跡SD−17の遺構図

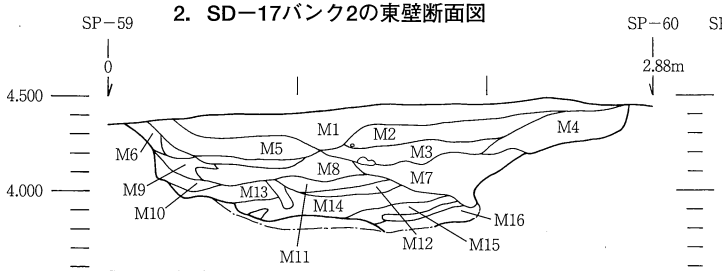
Fig.19　A区古代溝跡SD－17の断面図（縮尺1/40）

1. SD－17バンク1の東壁断面図



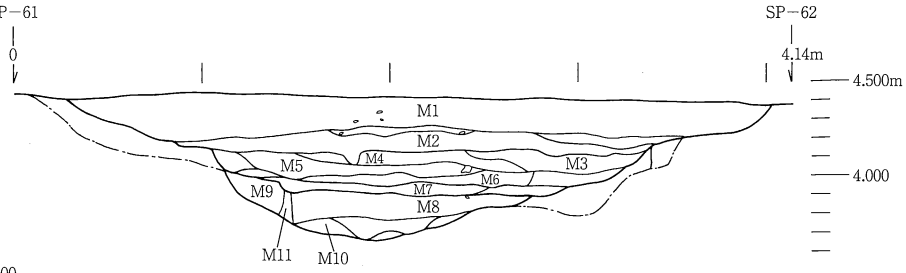
SD－17 バンク1
- M１：壌土・褐灰色10YR6/1（軽度の軟化）
- M２：砂壌土・青灰色10YR6/1（細粒砂；還元）
- M３：壌土（シルト混；極細粒砂）
- M４：細～粗粒砂（半還元）
- M５：粗粒砂（一部酸化）
- M６：粗粒砂（一部酸化）
- M７：壌質砂土（還元）
- M８：細～中粒砂・青灰色5B6/1（小円礫が約40%混）
- M９：重埴土・灰黄色2.5Y6/2（シルト混）
- M10：シルト質壌土・灰黄褐色10YR4/2（弥生包含層；土器片が均等に分布）
- M11：重埴土・灰黄色2.5Y6/2（シルト混）

2. SD－17バンク2の東壁断面図



SD－17 バンク2
- M１：シルト質壌土・灰黄褐色10YR6/2（細砂；マンガン斑多）
- M２・４：シルト混細粒砂・灰黄褐色10YR6/2（マンガン斑多；土器微片含）
- M３・５・６：シルト混壌土
- M７：重埴土～軽埴土・青灰色5B6/1（還元）
- M８：細砂～小礫（還元）
- M９：重埴土（細砂混；還元）
- M10：重埴土（細砂少混）
- M11・13：細砂（粘土少量混；還元）
- M12：中粒砂（酸化；還元）
- M14：中粒砂・青灰色5B6/1（円～亜円礫混）
- M15：重埴土（細円礫・炭化物含；還元）
- M16：重埴土・暗灰～黄灰色

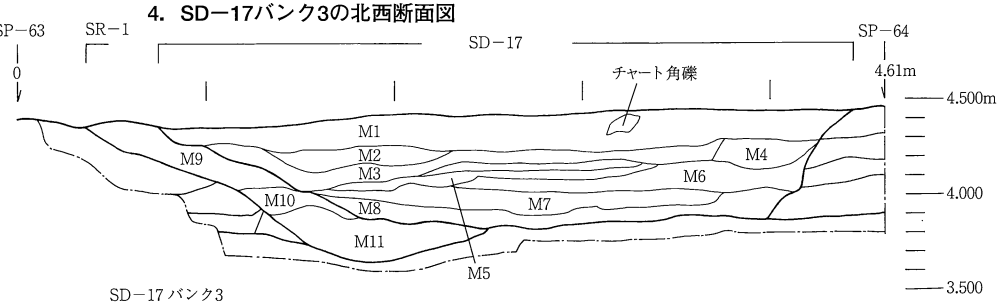
3. SD－17バンク3の南東断面図



SD－17 バンク3
- M１：シルト質壌土（炭化物・マンガン斑あり；土器微片少含）
- M２：重埴土（極細粒砂混；還元）
- M３：シルト混細粒砂・青灰色5B5/1
- M４：細砂～細円礫（還元）
- M５：細礫混粗砂・青灰色5B5/1（還元）
- M６：小礫
- M７：砂混小円礫（径30㎜以下；還元）

SR－1
- M８：シルト質埴壌土～シルト質埴土・暗青灰色5PB4/1（炭化物・細粒子多含；還元）
- M９：重埴土・オリーブ灰色5GY5/1（炭化物の細粒子混）
- M10：重埴土・暗青灰色5PB4/1（細砂・シルト少混；細炭化物多含）
- M11：重埴土・暗青灰色5PB4/1（炭化物少含）

4. SD－17バンク3の北西断面図

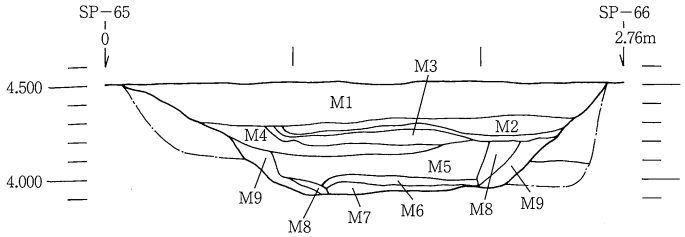


SD－17 バンク3
- M１：壌質砂土・にぶい黄橙色10YR7/2（マンガン斑少；所々に大礫含）
- M２：砂質シルト
- M３：シルト・青灰色5B6/1（細礫混；還元）
- M４：シルト（細砂少含）
- M５：細礫・砂・シルト混合・青灰色　5B6/1（酸化鉄集積あり；還元）
- M６：粗粒砂（シルト・粘土を含む部分では還元；その他は酸化）
- M７：粗砂・円礫の互層（シルト・粘土を含む部分（少量）では還元；その他は酸化）
- M８：軽埴土～埴土・青灰色5B5/1（細炭化物微含）

SR－1
- M９：シルト質砂土・灰褐色7.5YR4/2（マンガン斑あり）
- M10：軽埴土・灰黄褐色10YR4/2
- M11：軽埴土・灰色W4/（炭化物細粒子・シルト混；還元）

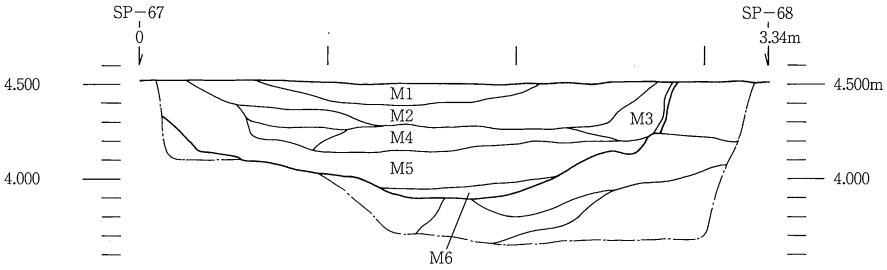
0　2m

SD−17バンク4の東壁断面図



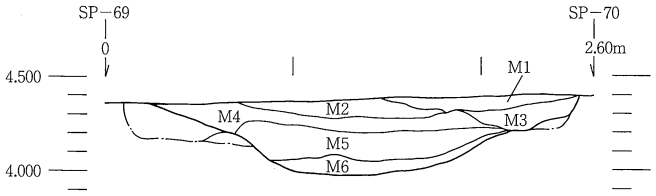
M１：シルト・にぶい黄褐色10YR5/3（砂・小礫少含）
M２：シルト・灰黄褐色10YR4/2（砂・細礫少含）
M３：粘土質シルト・黄灰色2.5Y5/1（細礫少含）
M４：粗砂・黄灰色2.5Y4/1（小礫多含）
M５：粗砂・黄灰色2.5Y4/1（小礫多含；酸化鉄集積あり）
M６：粘土質砂混・灰色N5/（細礫・シルト少含）
M７：細砂・青灰色5B5/1（小礫含）
M８：シルト・黄灰色2.5Y4/1（砂・青灰色5B5/1多含）
M９：シルト・黄灰色2.5Y4/1（砂・青灰色5B5/1含；粘性あり）

SD−17バンク5の東壁断面図



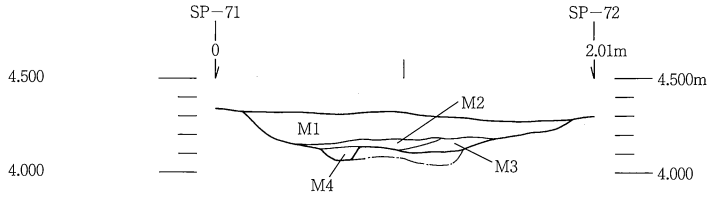
M１：シルト・にぶい黄褐色10YR5/3（砂・小礫少含）
M２：シルト・灰黄褐色10YR4/2（砂・細礫少含）
M３：シルト・にぶい黄褐色10YR5/4（砂・細礫少含；少し粘性あり）
M４：粘土質砂混・灰色N5/（細礫少含）
M５：粗砂・黄灰色2.5Y4/1（少礫多含）
M６：粘土質・灰色N4/（砂少混）

SD−17バンク6の東壁断面図



M１：シルト・にぶい黄褐色10YR5/3（砂・小礫少含）
M２：シルト・灰黄褐色10YR4/2（砂・細礫少含）
M３：粘土質砂混・灰色N5/（細礫少含）
M４：粗砂・黄灰色2.5Y4/1（小礫多含）
M５：粗砂・暗オリーブ褐色2.5Y3/3
M６：粘土質・灰色N4/（砂少混）

SD−17バンク7の東壁断面図



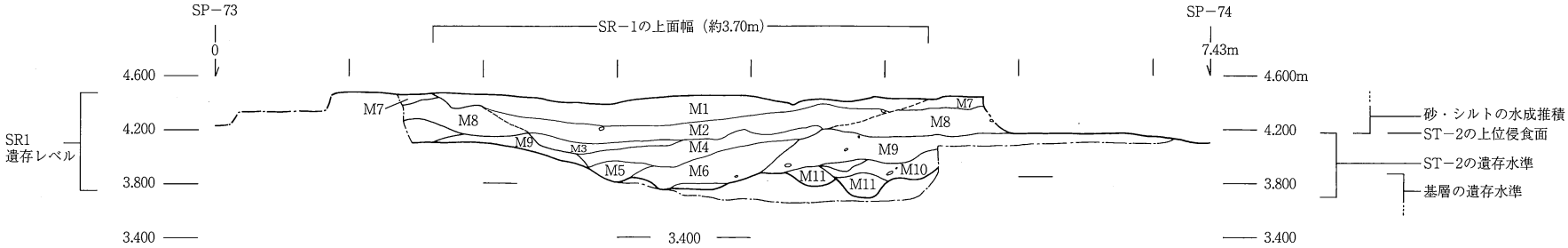
M１：礫・暗褐色10YR3/3（径60㎜以下の礫多含）
M２：砂判・暗褐色10YR3/3（径30㎜以下の礫微含）
M３：粗砂・黄灰色2.5Y4/1（炭化物・シルト少含）
M４：粗砂・青灰色5B5/1（M3より粗い）

0　2m

Fig.20　A区古代溝跡SD−17の断面図（縮尺1/40）

Fig.21　A区自然流路跡SR－1・SR－2の断面図（縮尺1/50）

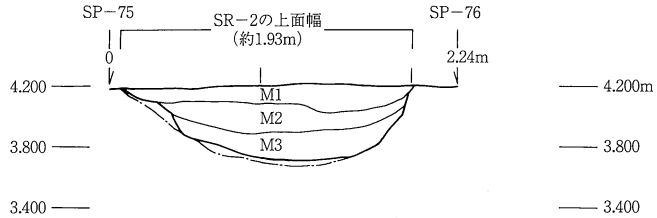
1. SR－1バンク8の南壁断面図



SR－1
M１：砂質シルト～壌質砂土・灰黄褐色10YR5/2（マンガン斑あり）
M２：シルト質壌土・灰黄褐色10YR5/2
M３：シルト質埴土・灰黄褐色10YR4/2（縦位の酸化鉄集積あり）
M４：軽埴土・灰黄褐色10YR4/2（上位より青みを帯びる）
M５：砂質シルト・青灰色5BG5/1
M６：極細粒砂・青灰色5BG6/1（還元）

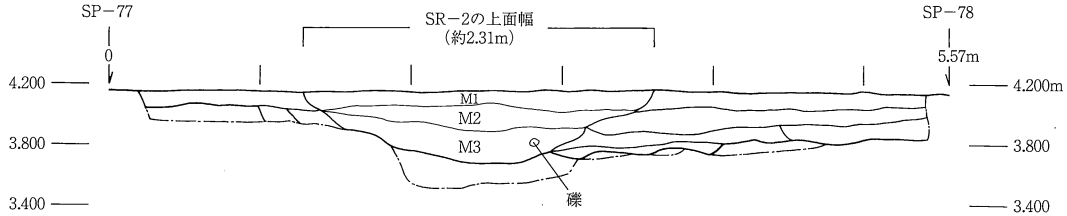
ST－2
M７：壌質砂土・黒褐色10YR3/1（マンガン斑多；土器・角砕細礫混；多量の炭水化物分布）
M８：壌質砂土・灰黄褐色10YR4/2（マンガン斑・炭化物あり）
M９：軽埴土・灰黄褐色10YR4/2
M10：シルト・灰5Y4/1（土器・炭化物含）
M11：粘土・黄灰色（灰色の還元混；細礫・炭化物少含）

2. SR－2バンク11の南壁断面図



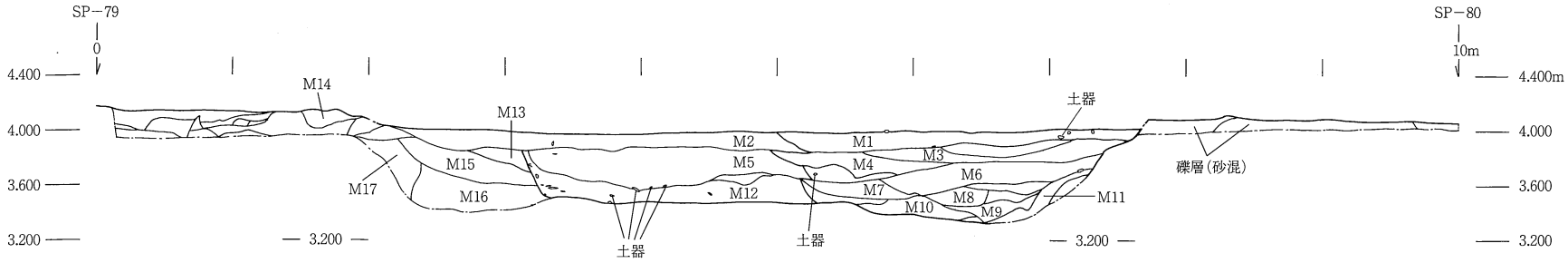
M1：シルト・にぶい黄褐色10YR5/4（砂・マンガン斑少）
M2：シルト質粘土・灰黄褐色10YR5/2（土器片・炭化物少含）
M3：粘土質・黄灰色2.5Y5/1（炭化物少含；酸化鉄集積斑あり）

3. SR－2バンク12の南壁断面図



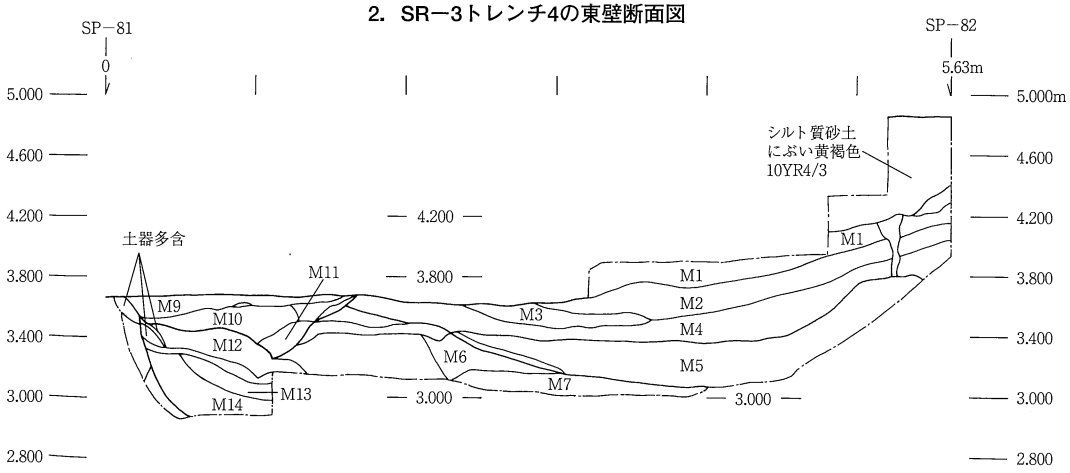
M1：シルト・にぶい黄褐色10YR4/3（砂・マンガン斑あり）
M2：シルト・灰黄褐色10YR4/2（砂少含）
M3：粘土質・黄灰色2.5Y5/1（炭化物・土器片少含；酸化鉄集積斑あり）

1. SR−3バンク13の南壁断面図



M１：やや暗い灰褐色（径20㎜以下の炭化物・土器片少含）
M２：砂質シルト・灰褐色
M３：礫
M４：埴壌土・灰褐色（土器微片含）
M５：砂質シルト・明灰褐色（粘土混）
M６：黒褐色10YR3/2
M７：埴壌土・灰褐色（粗砂・細礫多含）
M８：粘土シルト・細礫・砂の混合
M９：シルト質粘土・灰褐色（粗砂偏在）
M10：粗砂（細礫混）
M11：粗砂・細礫（粘土・明灰褐色混）
M12：埴土（細～中粒砂・シルト混；径10㎜以下の炭化物少含）
M13：シルト質砂・明灰褐色（粘土混）
M14：埴壌土・細礫混在
M15：シルト質粘土・明灰褐色
M16：細～中粒砂
M17：シルト質埴壌土・灰褐色

2. SR−3トレンチ4の東壁断面図



M１：砂質シルト・灰黄色2.5Y6/2
M２：細砂・灰黄色2.5Y6/2
M３：粗砂・灰色色10BG5/1（シルト2.5Y6/2混）
M４：シルト質粘土・灰黄色2.5Y6/2
M５：礫（径100㎜以下）
M６：極細砂
M７：砂礫（径40㎜以下の礫）
M８：細礫
M９：シルト・緑灰色5G5/1
M10：砂質シルト・灰黄色2.5Y6/2
M11：砂
M12：細砂（シルト混）
M13：細粒砂（径10㎜以下の炭化物極少）
M14：砂質シルト・青灰色10BG5/1（細礫混；径5㎜以下の炭化物極少）

Fig.22　A区自然流路跡SR−3の断面図（縮尺1/50）

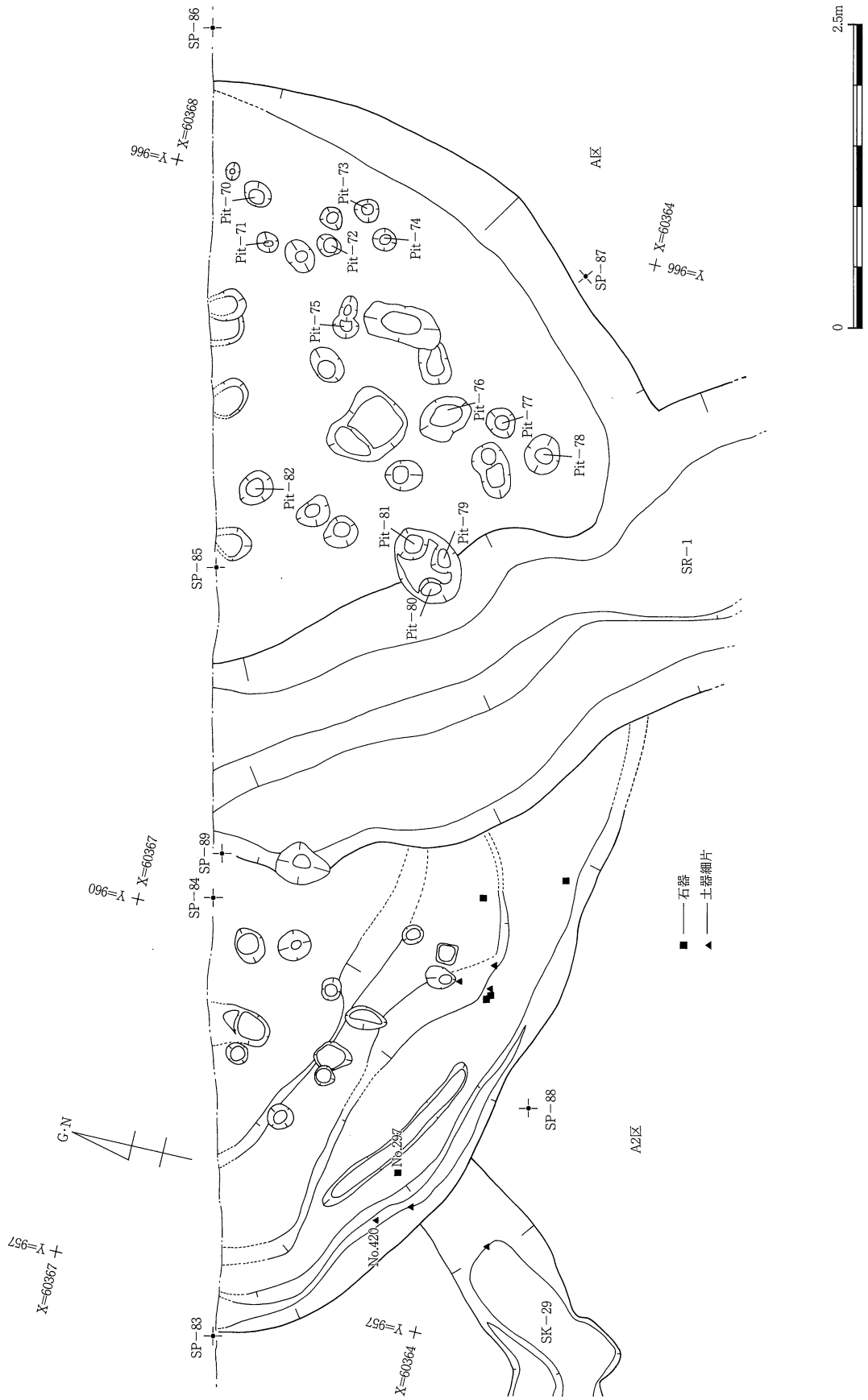
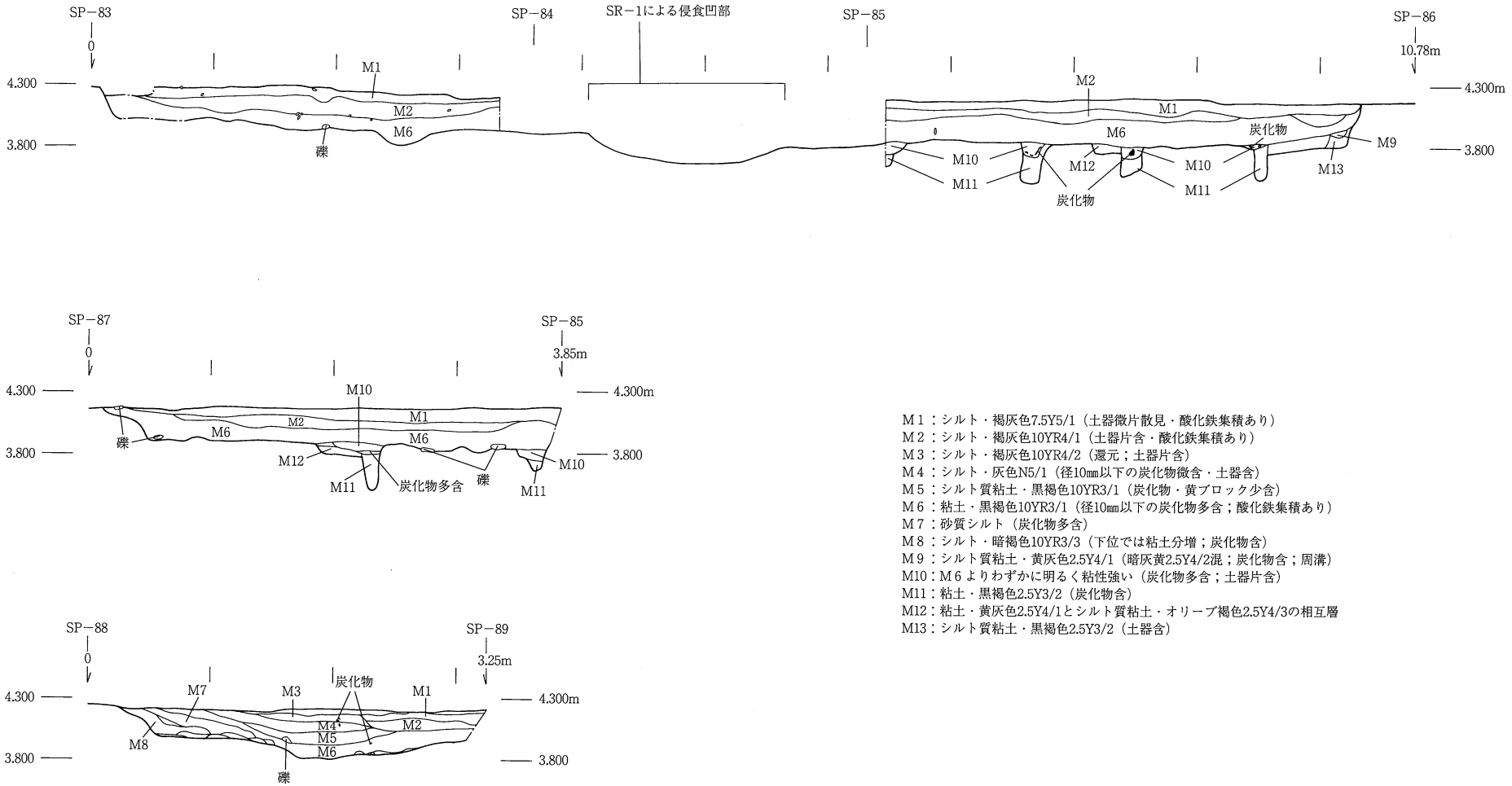


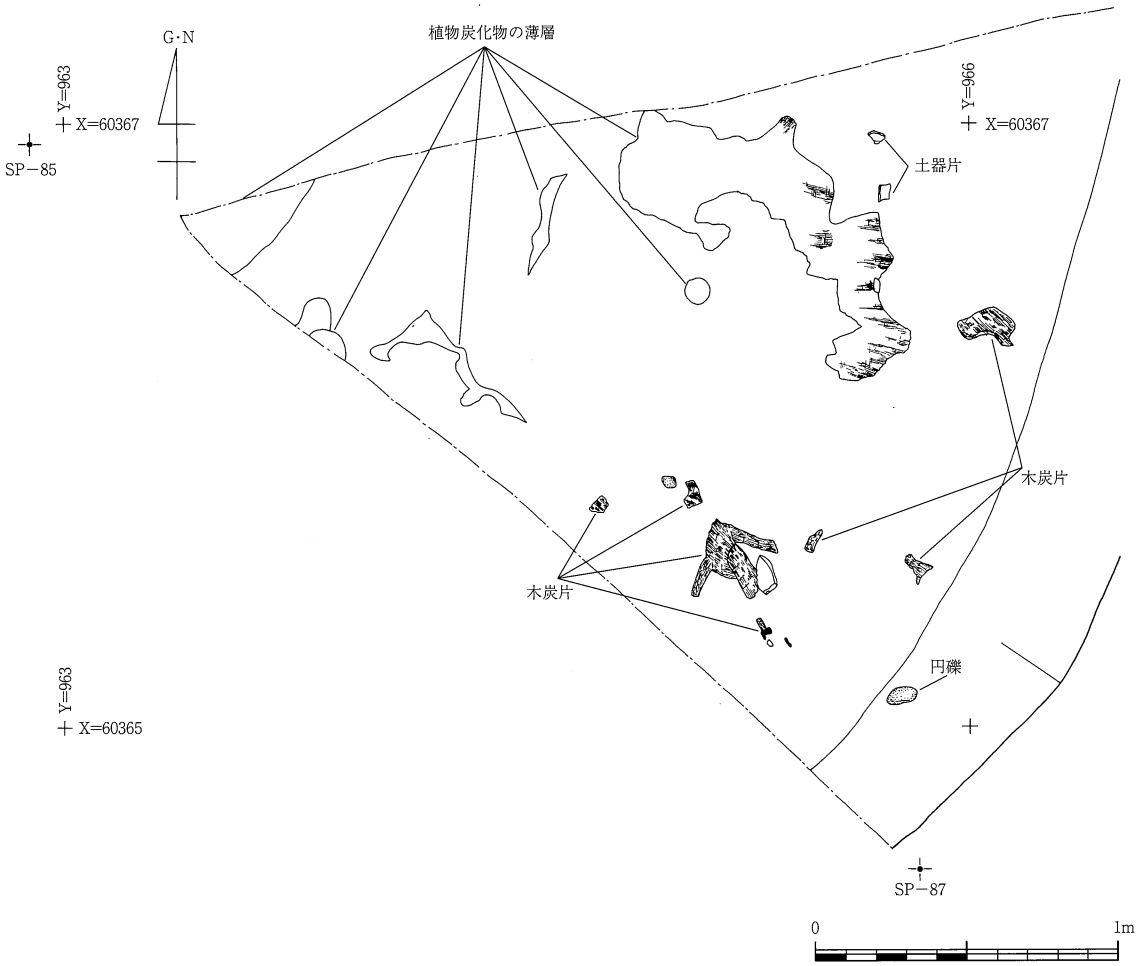
Fig.23　A1・2区弥生竪穴住居跡ST−1完掘平面図（縮尺1/50）



M１：シルト・褐灰色7.5Y5/1（土器微片散見・酸化鉄集積あり）
M２：シルト・褐灰色10YR4/1（土器片含・酸化鉄集積あり）
M３：シルト・褐灰色10YR4/2（還元；土器片含）
M４：シルト・灰色N5/1（径10㎜以下の炭化物微含・土器含）
M５：シルト質粘土・黒褐色10YR3/1（炭化物・黄ブロック少含）
M６：粘土・黒褐色10YR3/1（径10㎜以下の炭化物多含；酸化鉄集積あり）
M７：砂質シルト（炭化物多含）
M８：シルト・暗褐色10YR3/3（下位では粘土分増；炭化物含）
M９：シルト質粘土・黄灰色2.5Y4/1（暗灰黄2.5Y4/2混；炭化物含；周溝）
M10：M６よりわずかに明るく粘性強い（炭化物多含；土器片含）
M11：粘土・黒褐色2.5Y3/2（炭化物含）
M12：粘土・黄灰色2.5Y4/1とシルト質粘土・オリーブ褐色2.5Y4/3の相互層
M13：シルト質粘土・黒褐色2.5Y3/2（土器含）

0　2.5m

Fig.24　A1・2区弥生竪穴住居跡ST−1の断面図（縮尺1/50）



注記事項1 ── 上図は，弥生中期の竪穴住居跡ST－1東部の一角で検出した植物炭化物の分布であり，周壁面とその外縁には木炭片，床面上には主として東西向きの組織列を留める藁状炭化物の薄層が認められた。当遺構の断面層理は，明らかに上部を削失するが，周壁内外に分布する木炭片は，竪穴住居の埋積過程で外部から流入した可能性を示唆している。一方，藁状炭化物の薄層では，組織の乱れが殆ど見られず，当竪穴住居跡に存在したものと考えられる。この種の炭化物薄層は，厚い個所でもおよそ2㎜を越えず，層厚1㎜未満の箇所が多い。また，明橙色の焼土に重なる部分が多く，炭化の原因として火熱が関与したものと見られる。このような炭化物の分布は，ST－1埋積土の掘削過程で床面付近の随所に認められ，ピットの全面検出には，これら薄層の除去を要している。

上記の状況は，自然流路SR－1を隔てたA2区側のST－1遺存にも共通するが，いずれも柱梁構造の崩落等，焼失住居と判定し得る状況を欠く。また，A2区側のST－1では，遺存の良好な周溝部に炭灰混じり焼土成分の充填が顕著であるうえ，その周壁が同様の成分に富む溝状土坑SK－29を切る状況も見られる。更に，床面に分布する焼土斑のサンプリング断片は，しばしば火焼の形跡の伴わない薄層を挟む。

これらの点から，ST－1の床面に分布する焼土斑の成因としては，その位置における火焼・酸化と，外部からの流入・堆積の二種が存在すると考えられる。調査を先行したB区の基層は河成砂礫堆であり，A区の遺構面や包含層では，砂質シルトやシルト質砂土が優勢な自然堤防型の堆積に所属する。ここでは土壌の気相率が高めで，保水性が低く，自然埋没の環境下では，植物遺体の多くは炭化を待たずに速やかに酸化分解する。この点，調査区内に遺存する植物遺体の大部分は完全な炭化状態にあり，白～灰白色の灰層と共に検出される例が多い。従って，この竪穴住居跡ST－1で検出された植物炭化物に関しても，同遺構内外での火焼に起因する可能性が高いと言える。

Fig.25　A1区ST－1床面に分布する植物炭化物（縮尺1/25）

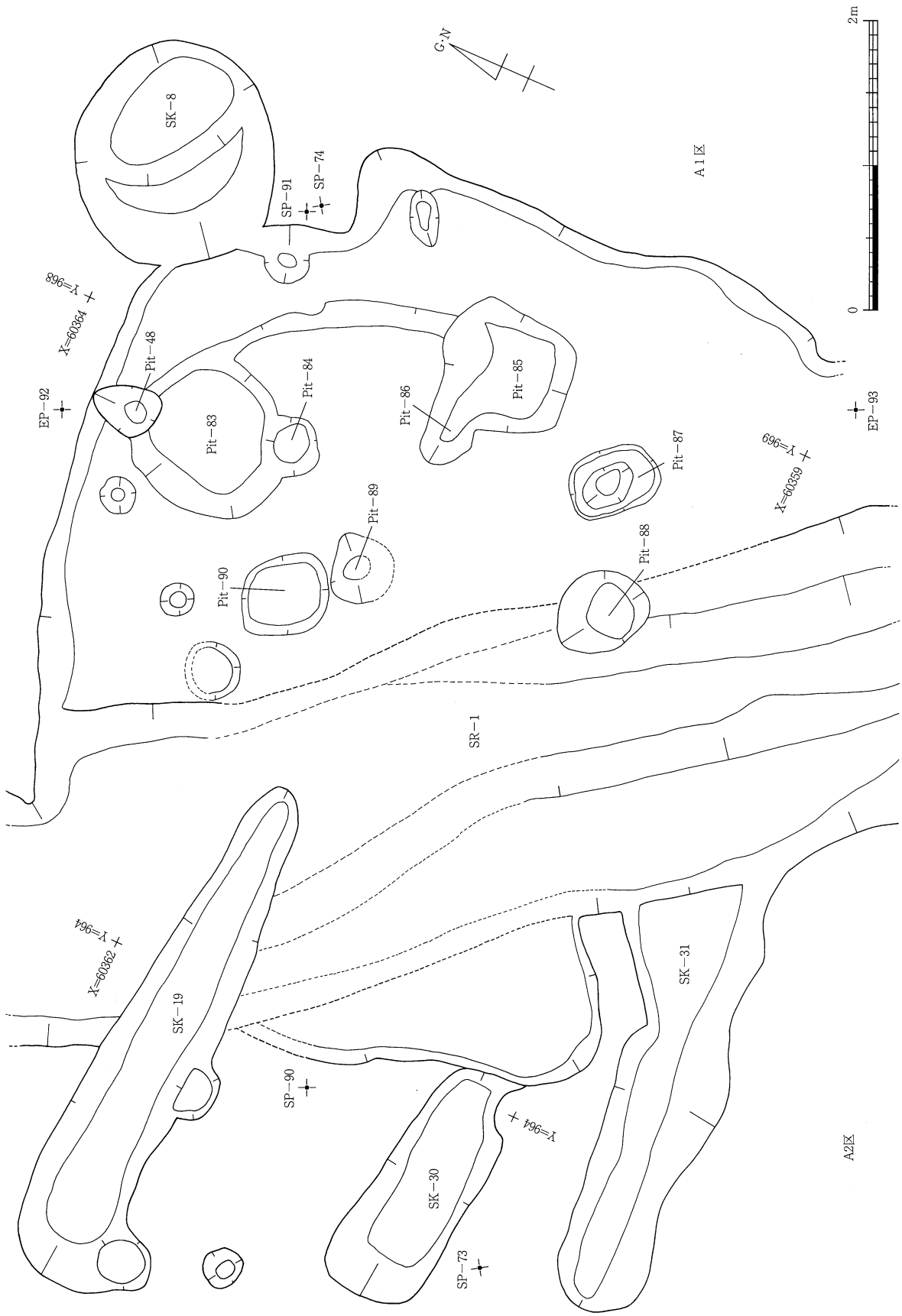
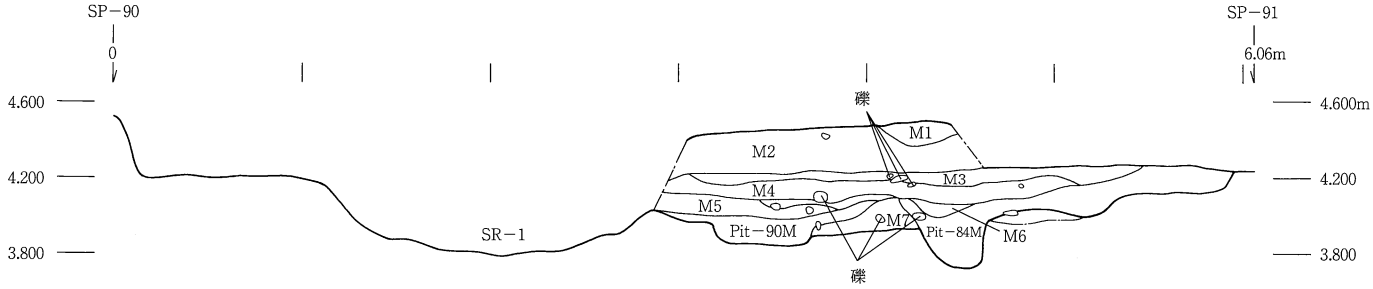


Fig.26　A1・2区弥生竪穴住居跡ST−2を中心とする遺構完掘平面図（縮尺1/40）

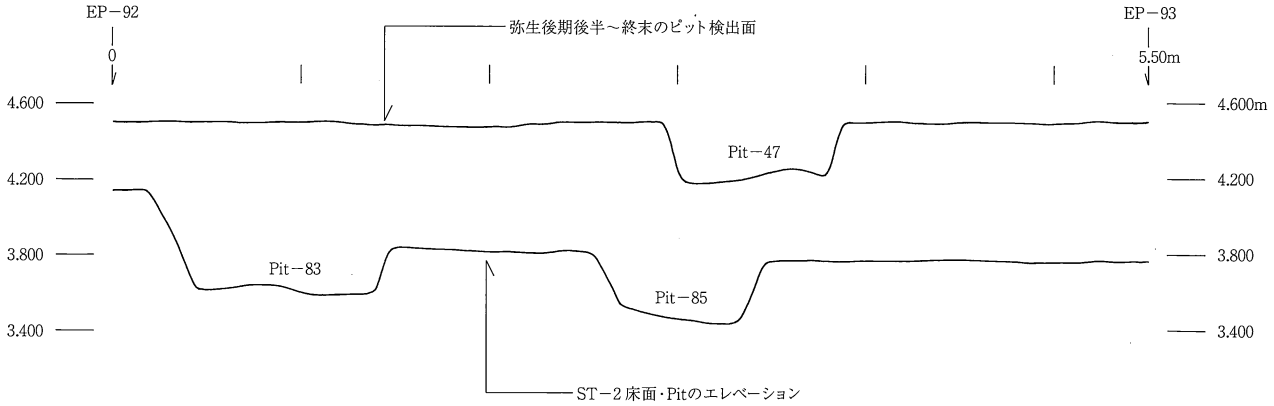
Fig.27　A1・2区弥生竪穴住居跡ST－2の断面図・エレベーション図（縮尺1/40）

1. SR－3バンク13の南壁断面図



M１：シルト・暗褐色10YR3/3（土器細片・細礫少含）
M２：シルト・暗褐色10YR3/3（土器片・炭化物含）
M３：シルト・黒褐色10YR3/2（礫少含；土器細片・炭化物微含）
M４：シルト・黒褐色10YR3/1（礫・炭化物含）
M５：シルト・黒褐色2.5Y3/1（粘性あり；礫・土器片・炭化物含）
M６：シルト・暗褐色2.5Y4/2
M７：黒褐色2.5Y3/1
Pit－84M：黒褐色2.5Y3/2
Pit－90M：黒褐色2.5Y3/2

2. ST－2とそれを覆う後世遺構図の両エレベーション図



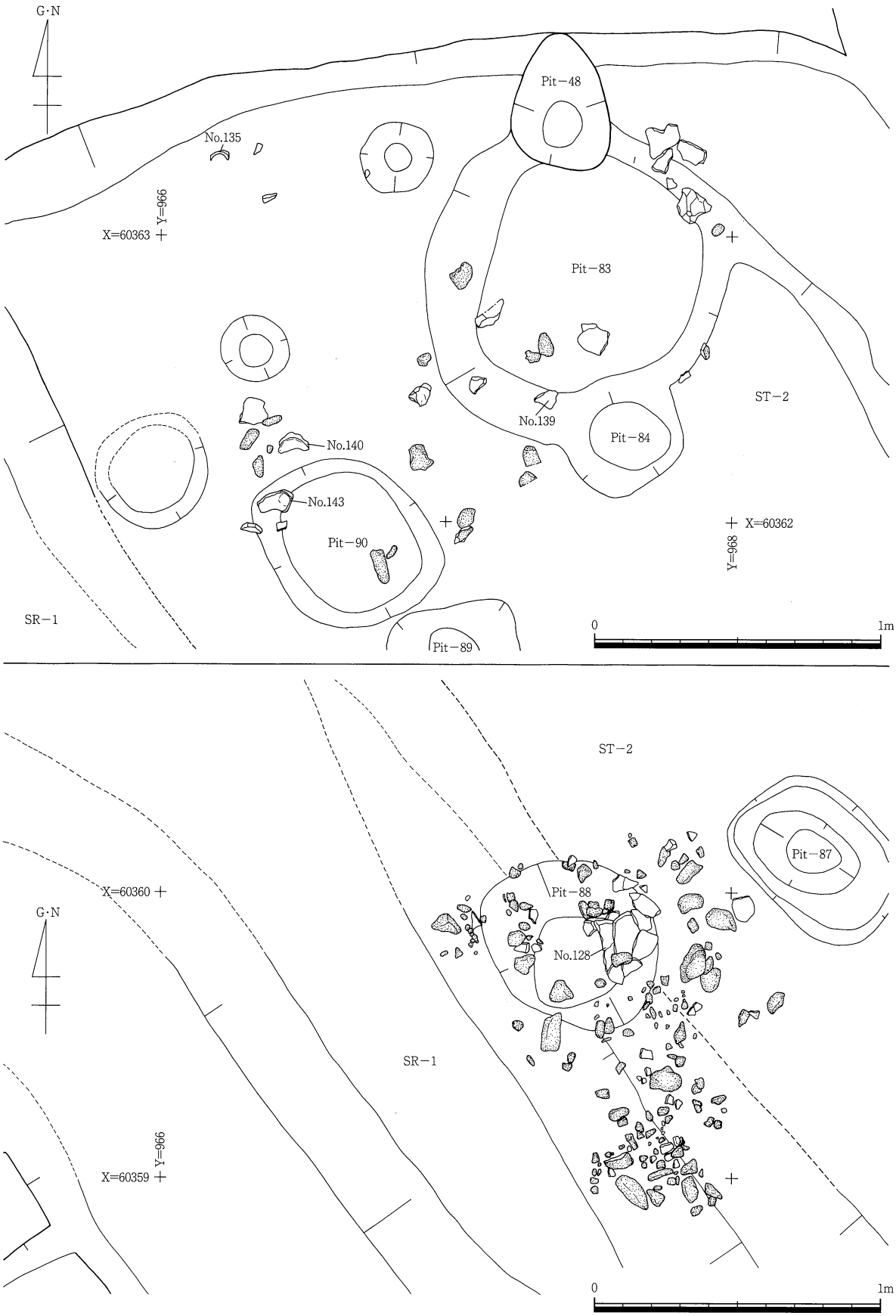
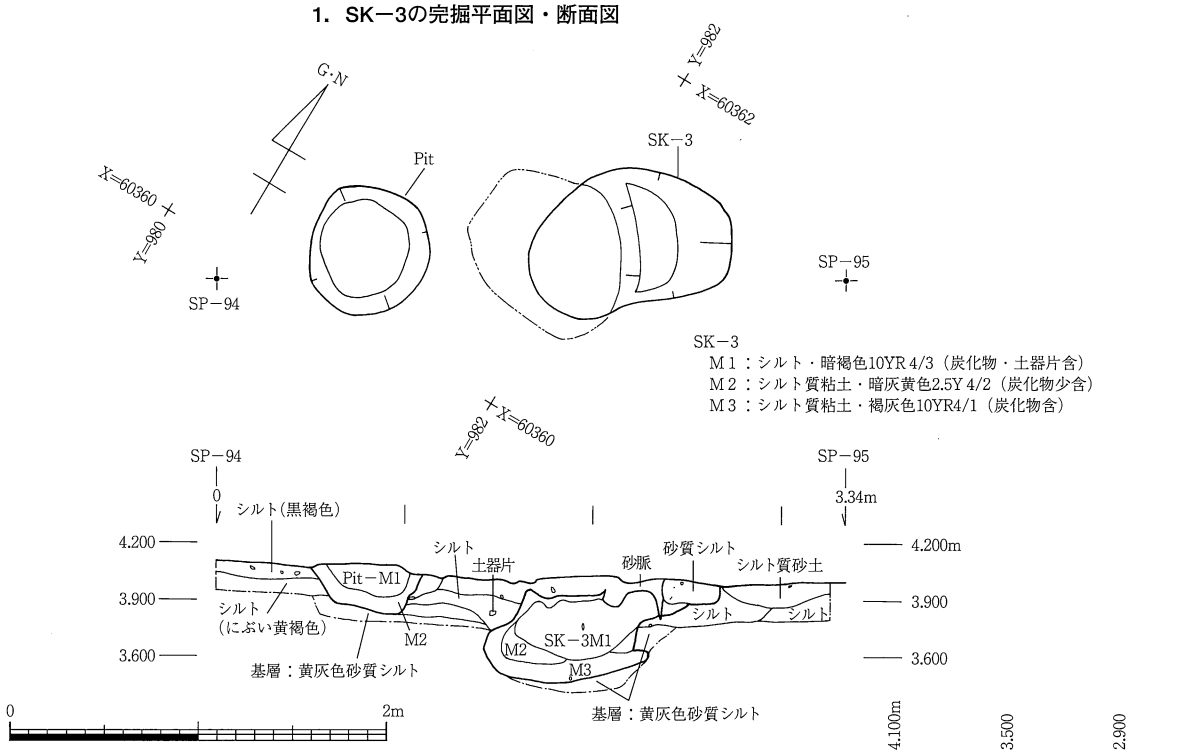


Fig.28　A1区弥生竪穴住居跡ST－2床面の遺物出土平面図（縮尺1/20）

1. SK−3の完掘平面図・断面図



2. SK−4；SX−2の完掘平面図・エレベーション図

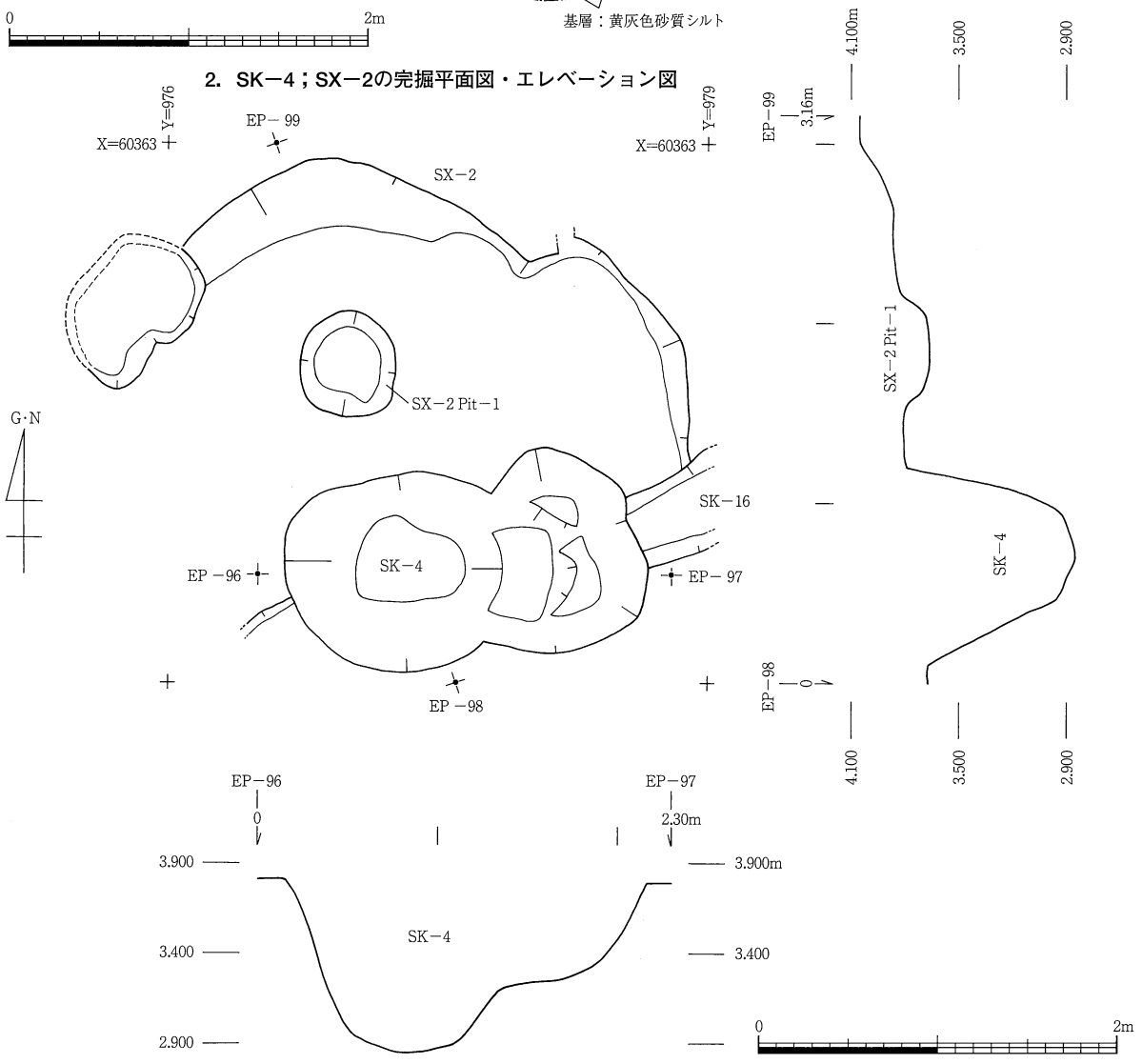
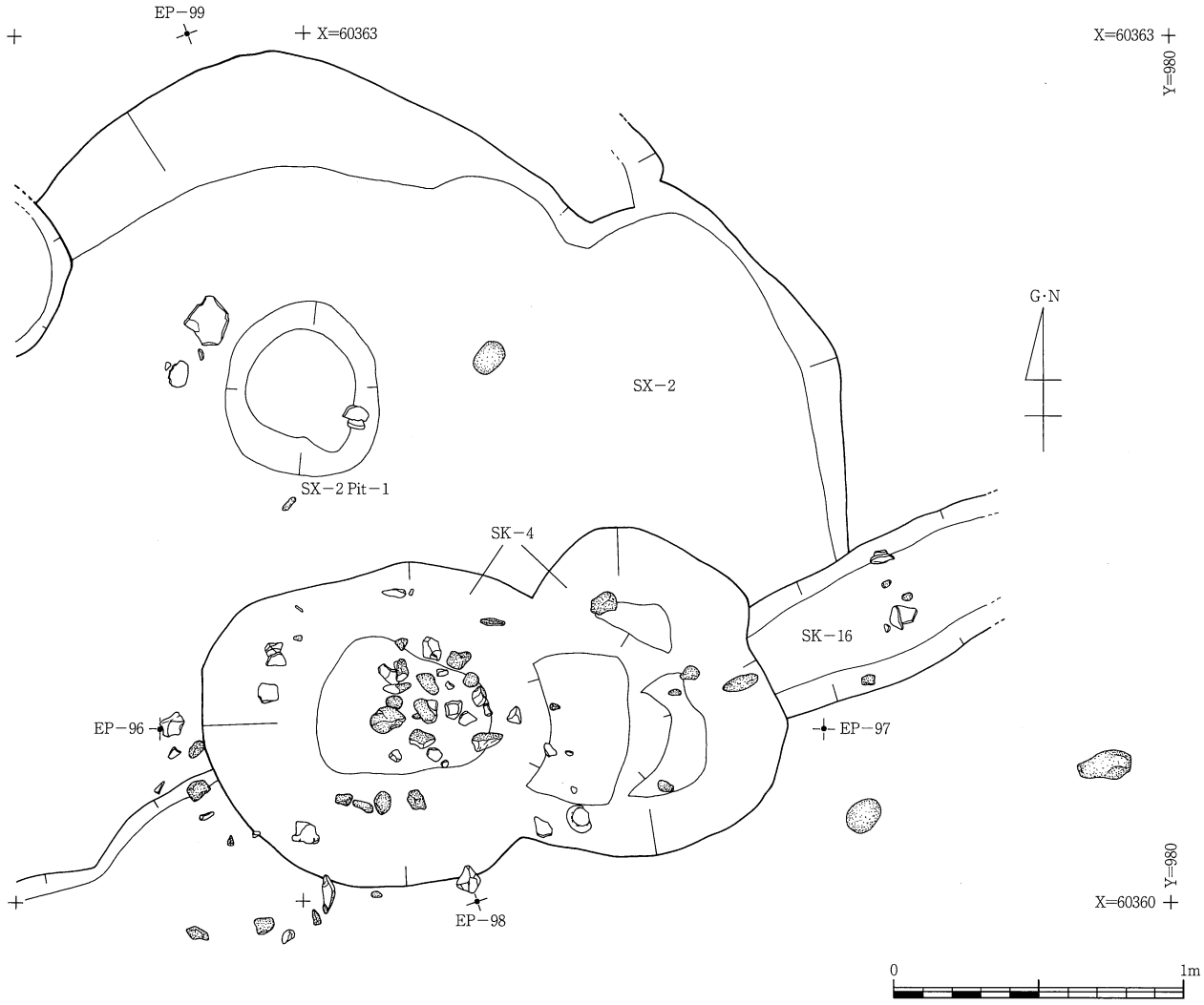


Fig.29　A1区SK−3・4；SX−2の遺構図（縮尺1/40）

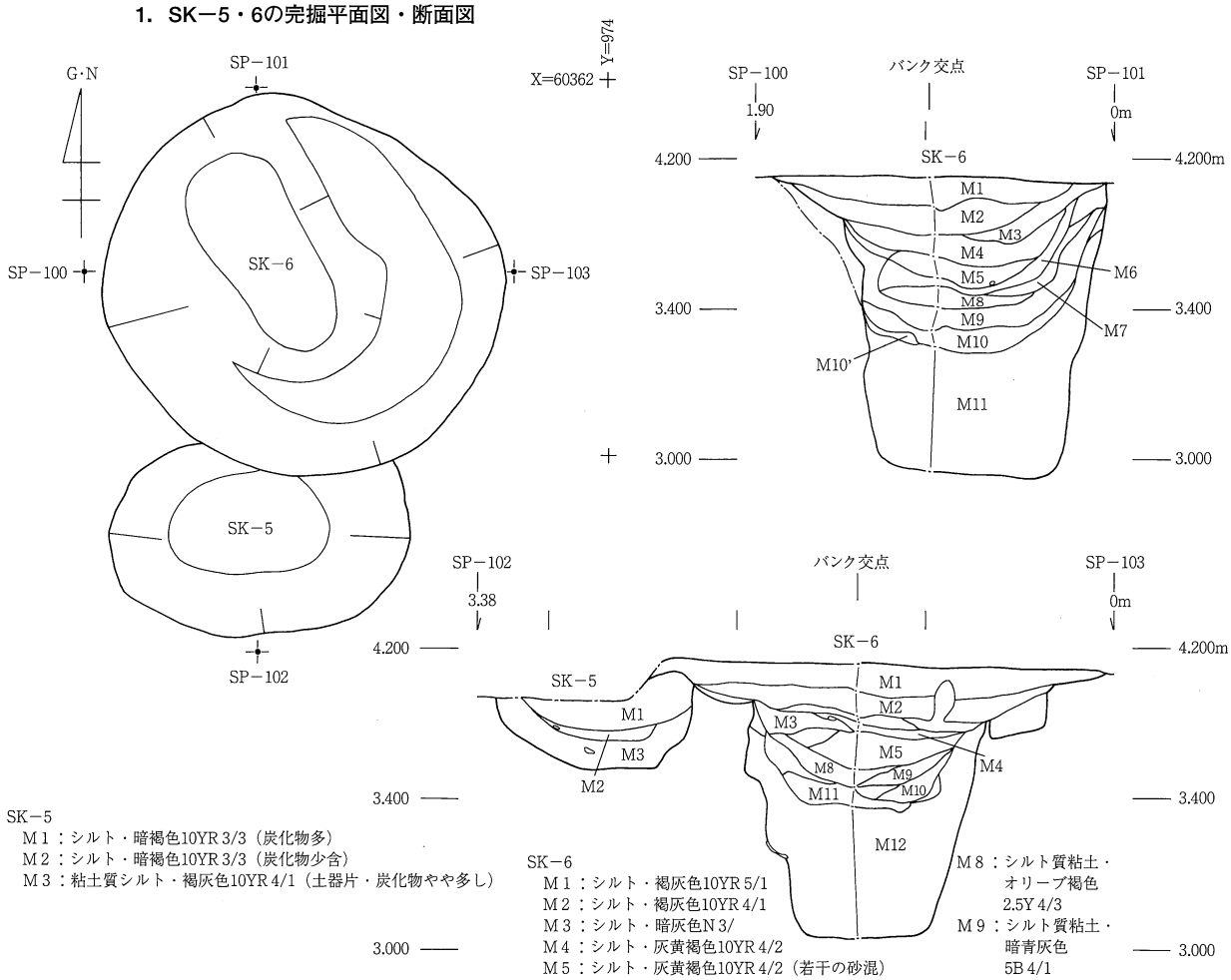


注記事項1 ── SK−4は，皿状の掘り込みSX−2の床面で検出した大型の深い土坑であり，その検出面には，径12cm以下の転礫集中が見られる。これら転礫がSX−2の床面からSK−4の口部に向けて集中密度を高める状況から，両遺構埋没の時間的関係は，SK−4がSX−2に先行する。転礫の集中には，比較的少量の弥生土器細片が混じり，様式分期としては前期末から中期初頭に跨る。一方，両遺構内部の出土土器片全体も，この時期幅の範囲内に捉え得る。従って，SK−4・SX−2ともに，その埋没は弥生中期初頭以後となる。また，幅約0.5mの溝状土坑SK−16が両遺構を切るが，その埋積時期を推定する土器片の出土に乏しい。

SK−4のように，一方の側に平坦な段部を有する弥生の大型土坑として検出された例はA1区に多く，SK−3・SK−9・SK−11等がその典型例と言える。但し，A2区のSK−21・22；SK−66・68等のように，深度の異なる複数遺構の切合と判定し得るケースが多在するうえ，完掘平面形が複数土坑の切合状を呈するものが多数を占める。このため，SK−4を始めとする有段状の土坑群には，調査上の課題が多い。

Fig.30　A1区土坑SK−4遺物出土平面図（縮尺1/25）

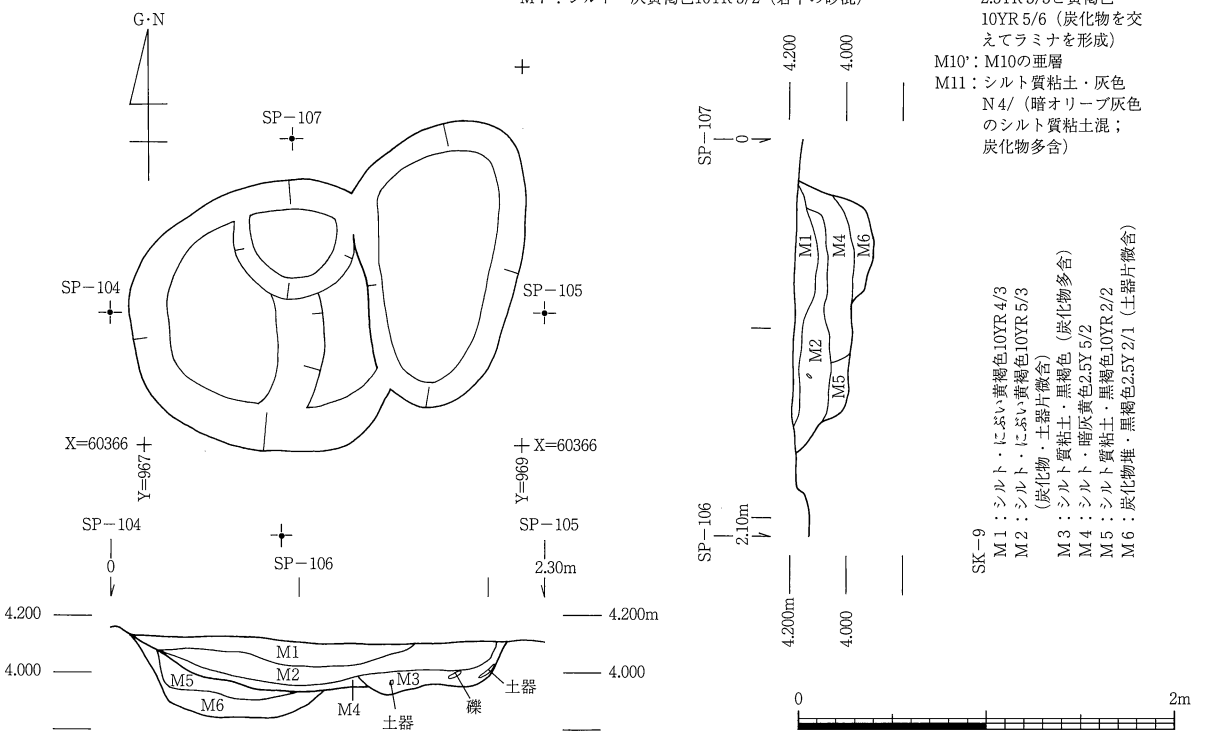
1. SK−5・6の完掘平面図・断面図



SK−5
M１：シルト・暗褐色10YR 3/3（炭化物多）
M２：シルト・暗褐色10YR 3/3（炭化物少含）
M３：粘土質シルト・褐灰色10YR 4/1（土器片・炭化物やや多し）

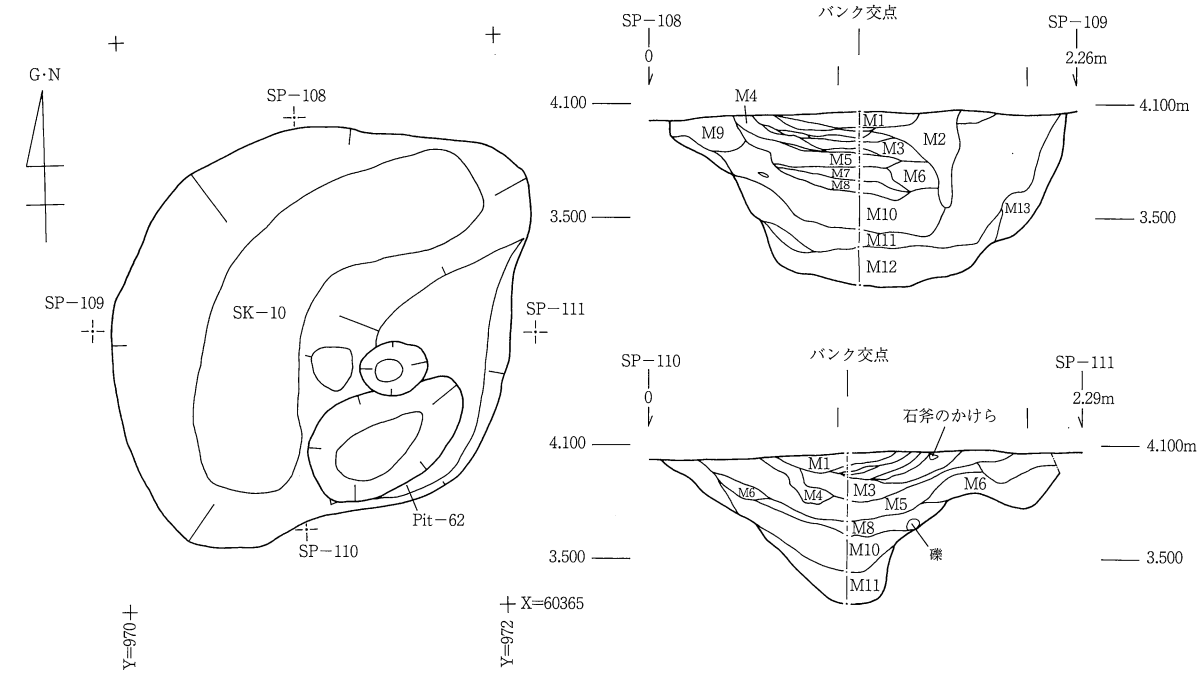
SK−6
M１：シルト・褐灰色10YR 5/1
M２：シルト・褐灰色10YR 4/1
M３：シルト・暗灰色N 3/
M４：シルト・灰黄褐色10YR 4/2
M５：シルト・灰黄褐色10YR 4/2（若干の砂混）
M６：シルト・にぶい黄褐色10YR 5/4（若干の砂混）
M７：シルト・灰黄褐色10YR 5/2（若干の砂混）
M８：シルト質粘土・オリーブ褐色 2.5Y 4/3
M９：シルト質粘土・暗青灰色 5B 4/1
M10：粗粒砂・暗赤褐色 2.5YR 3/3と黄褐色 10YR 5/6（炭化物を交えてラミナを形成）
M10'：M10の亜層
M11：シルト質粘土・灰色 N 4/（暗オリーブ灰色のシルト質粘土混；炭化物多含）

2. SK−9の完掘平面図・断面図



SK−9
M１：シルト・にぶい黄褐色10YR 4/3
M２：シルト・にぶい黄褐色10YR 5/3（炭化物・土器片微含）
M３：シルト質粘土・黒褐色（炭化物多含）
M４：シルト・暗灰黄色2.5Y 5/2
M５：シルト質粘土・黒褐色10YR 2/2
M６：炭化物堆・黒褐色2.5Y 2/1（土器片微含）

Fig.31　A1区土坑 SK−5・6・9の遺構図（縮尺1/40）

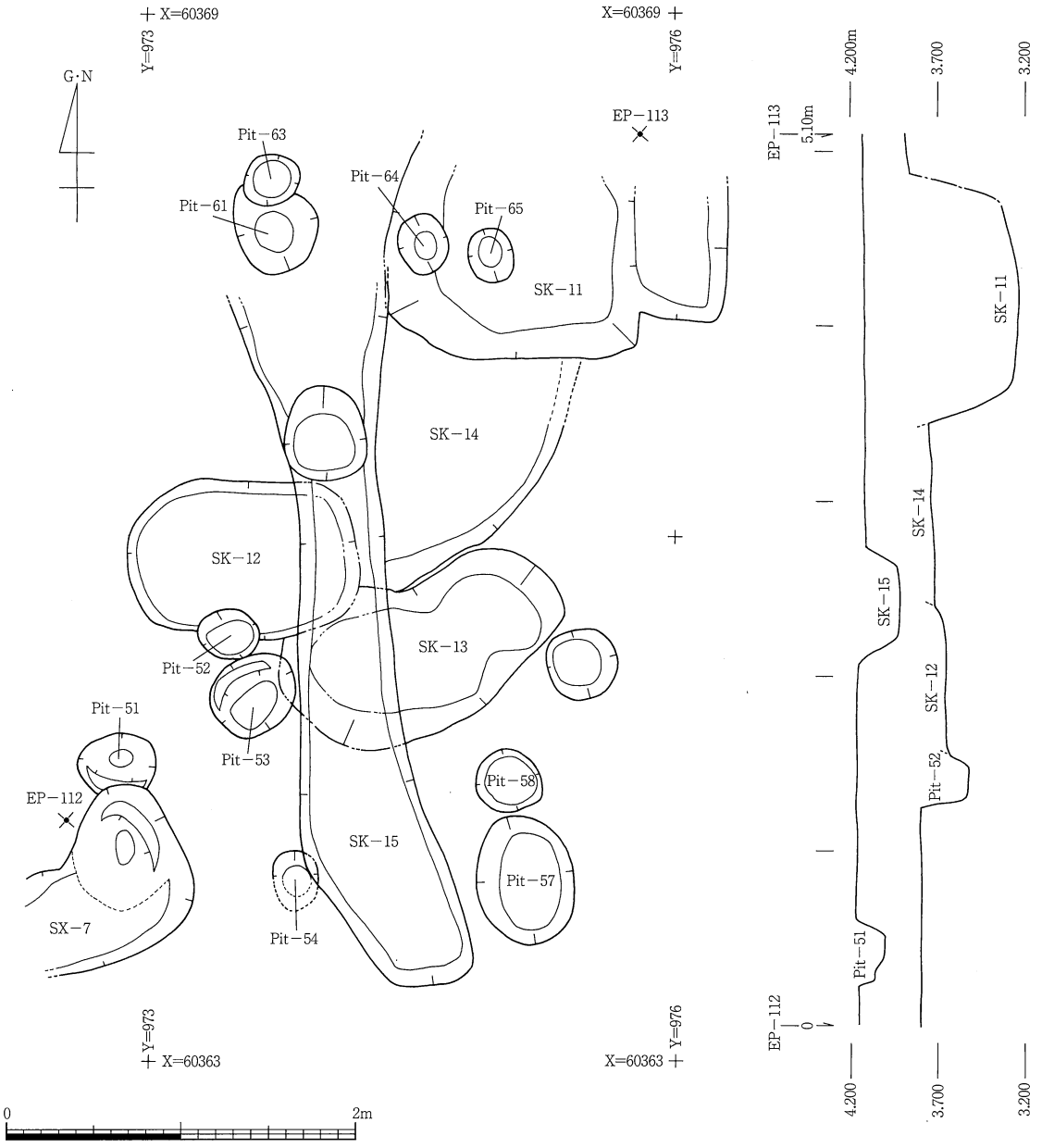


SK−10
M1：シルト・にぶい黄褐色10YR5/4（灰色部あり；焼土微含）
M2：シルト・暗灰黄色2.5Y4/2（土器片・炭化物・焼土少含）
M3：シルト・にぶい黄橙色10YR6/4（土器片・炭化物微含）
M4：シルト・暗灰黄色2.5Y4/2（炭化物・焼土少含）
M5：シルト質粘土・灰黄褐色10YR4/2（砂混）
M6：シルト質粘土・灰黄褐色10YR4/2（土器片・炭化物含）
M7：シルト質粘土・灰黄褐色10YR4/2（M5に比べ粘性強）
M8：シルト質粘土・灰褐色7.5YR4/2（粗砂・焼土含）
M9：細砂・明黄褐色2.5Y6/6
M10：シルト質粘土・黄灰色2.5Y4/1（炭化物少含）
M11：粘土質・暗灰黄色2.5Y4/2（炭化物含）
M12：粘土質・黒褐色2.5Y3/1（炭化物含）
M13：シルト・オリーブ褐色2.5Y4/3

注記事項１－長径約2.60m，遺存深度約0.9mの大型弥生土坑であり，同包含層を5cm程度剥除した標高4.07mの水準で検出している。その埋積層理上面は，上部を大きく削失した典型的斜交型を呈するため，本来の生活面は相当上方に存在したと考えざるを得ず，原地形および当調査区内で検出された全遺構の評価についても，影響を及ぼす出土資料と言える。

埋積土には，シルト優勢の部分と粘土優勢の部分が存在する。また，埋積土全体を通じて厚薄の炭化物多含層が成層し，特に上部の埋積層では明橙色の焼土成分を伴う。出土遺物には，中期前半頃と見られる南四国型甕が含まれ，同時期には土坑の機能を終えている。

Fig.32　A1区土坑SK−10の遺構図（縮尺1/40）



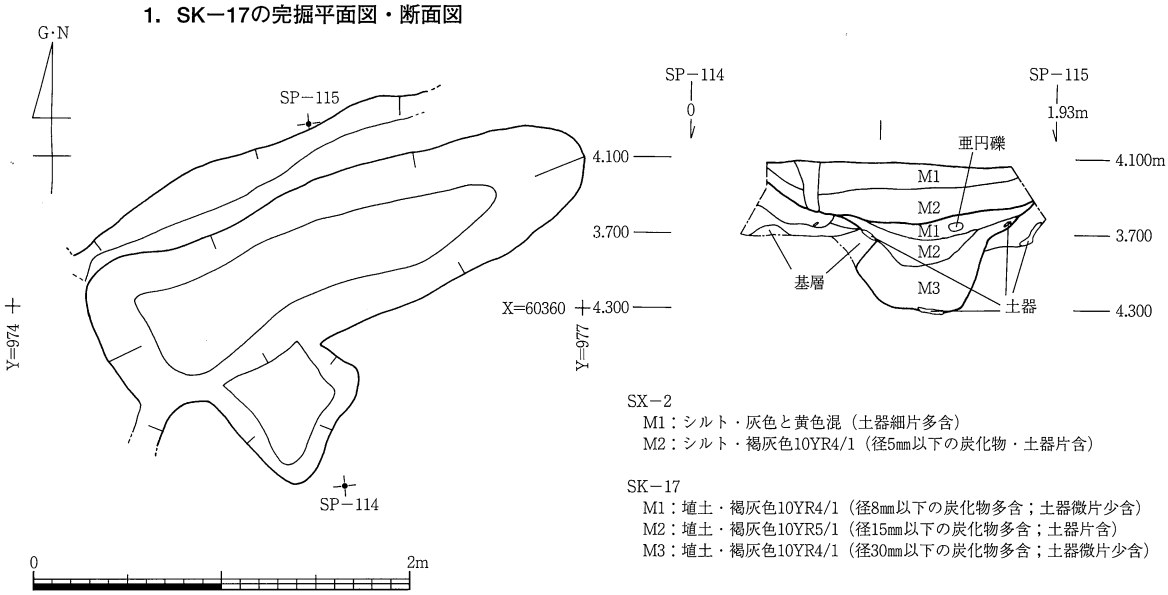
1. 完掘重合平面図

2. 完掘重合エレベーション図

注記事項１ ── A1区中北部では，ほぼ二枚の弥生遺構面が重合すると見られ，両者間に介在する包含層の遺存は，0.35mを前後する。包含層及び上下層準の遺構内出土遺物は，弥生前期後葉～末頃のものが混在する一方，上位に前期末，下位に遠賀川式の特徴を留める前期後葉頃の土器片が偏る傾向が明瞭である。更に，このエリアに隣接する北トレンチ底からは，前期中葉に遡る土器壷と甕が共伴出土しており，同期の包含層もこの付近に存在したものと考えられる。

Fig.33　A1区土坑SK−11・12・13・14・15及び周辺ピットの重合状況（縮尺1/40）

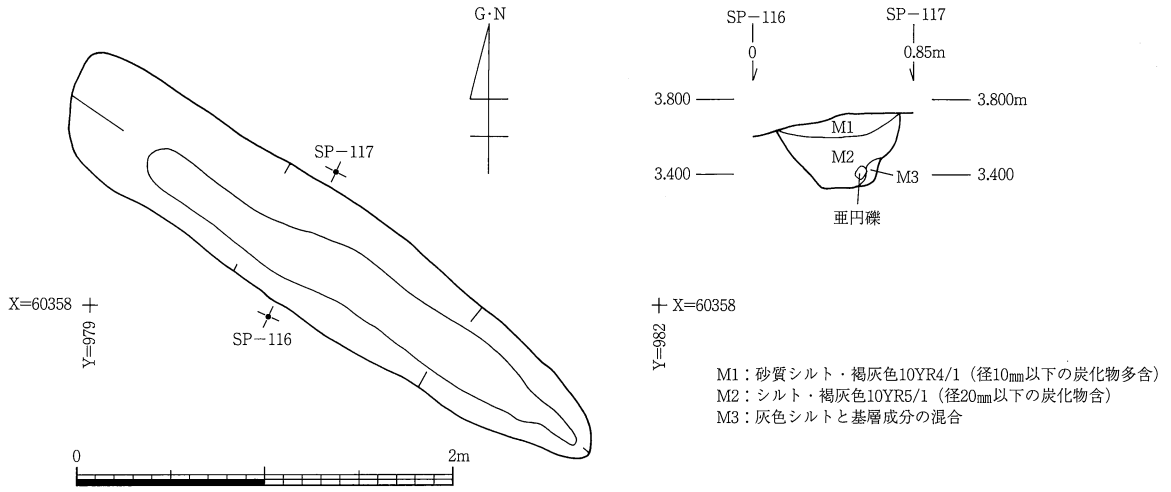
1. SK－17の完掘平面図・断面図



SX－2
M1：シルト・灰色と黄色混（土器細片多含）
M2：シルト・褐灰色10YR4/1（径5㎜以下の炭化物・土器片含）

SK－17
M1：埴土・褐灰色10YR4/1（径8㎜以下の炭化物多含；土器微片少含）
M2：埴土・褐灰色10YR5/1（径15㎜以下の炭化物多含；土器片含）
M3：埴土・褐灰色10YR4/1（径30㎜以下の炭化物多含；土器微片少含）

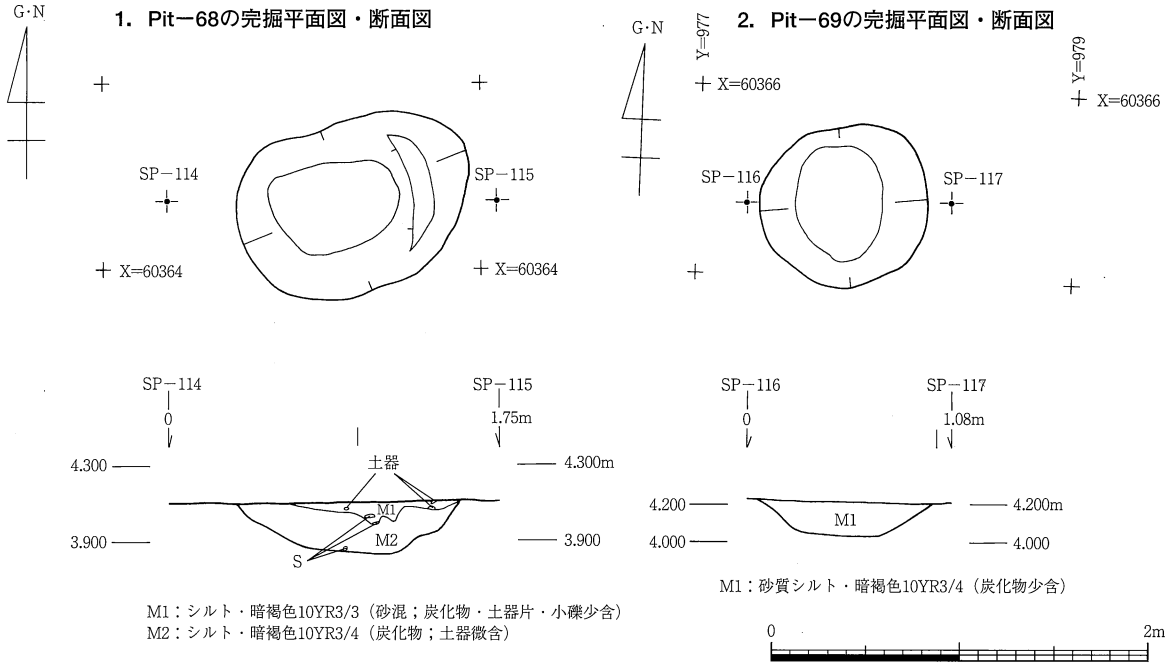
2. SK－18の完掘平面図・断面図



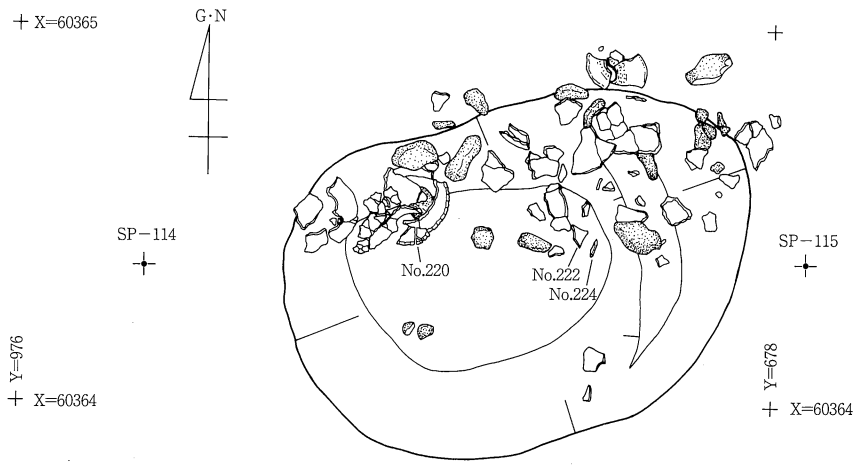
M1：砂質シルト・褐灰色10YR4/1（径10㎜以下の炭化物多含）
M2：シルト・褐灰色10YR5/1（径20㎜以下の炭化物含）
M3：灰色シルトと基層成分の混合

注記事項1 ── SK－17・SK－18は，弥生前期末～中期初頭の溝状土坑であり，SK－17は古代の溝跡SD－17の掘り込みをかろうじて免れるのに対し，SK－18は，SD－17の底面に土坑下部の平面形を露呈する状況で検出された。SD－17の埋積層や底面・側面から出土した多量の弥生遺物が，主としてこのような遺構や周辺包含層から供給された状況証拠は，A区内に極めて豊富である。

Fig.34　A1区溝状土坑SK－17・18の遺構図（縮尺1/40）



3. Pit−68中上位における土器片と円礫の検出状況



4. Pit−68床面における石庖丁と円礫の分布状況

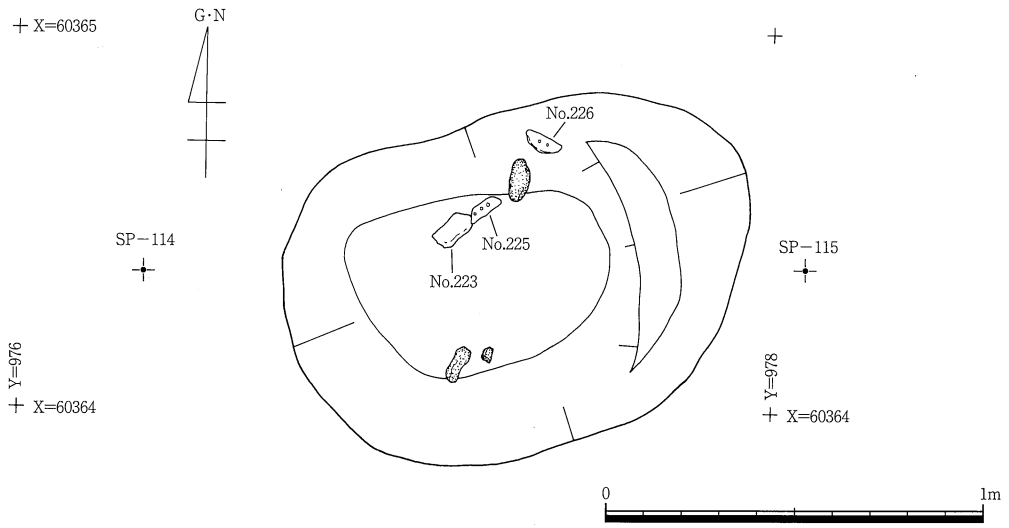


Fig.35　A1区Pit−68・69の遺構図・遺物出土平面図（縮尺1/40；1/20）

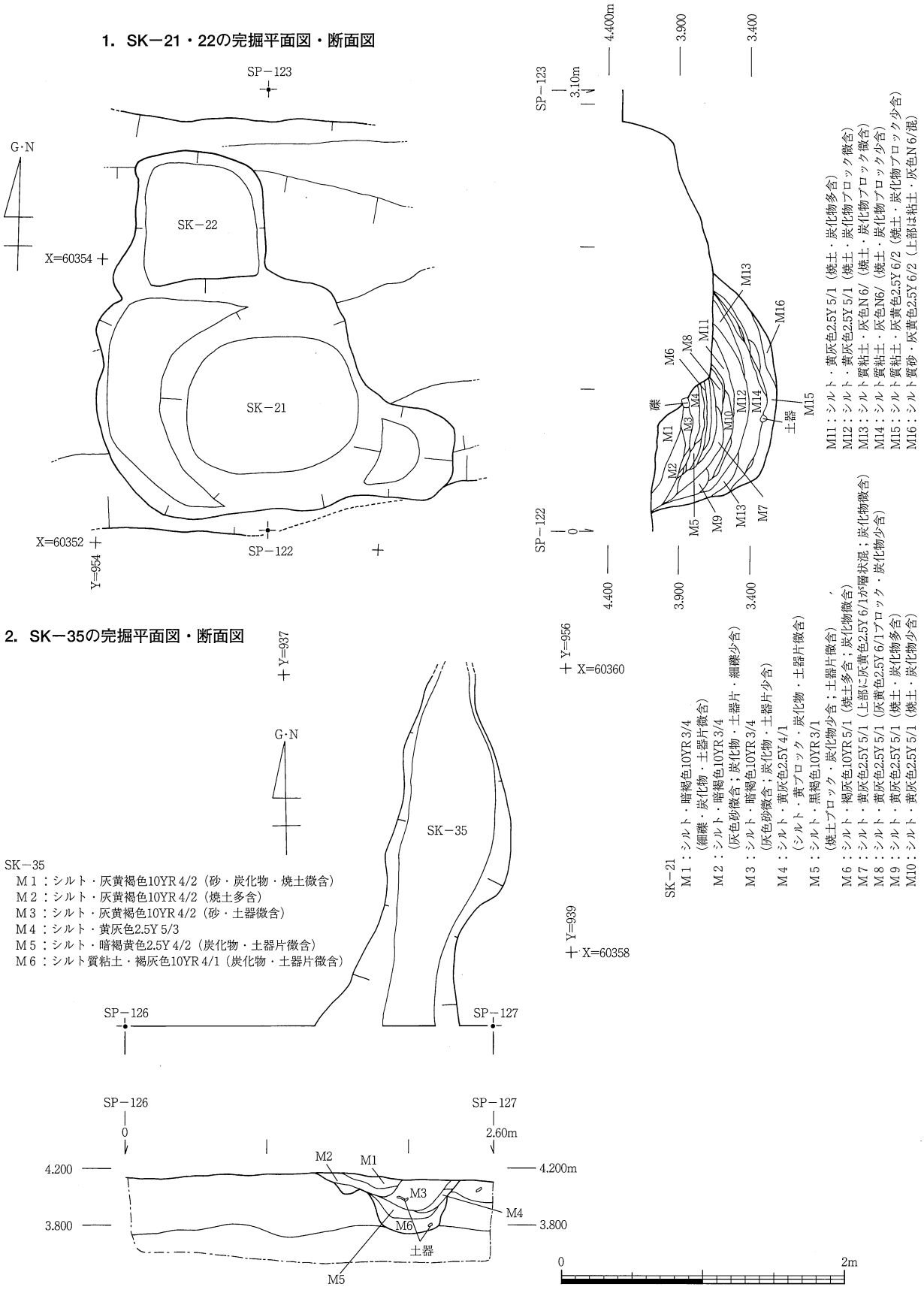
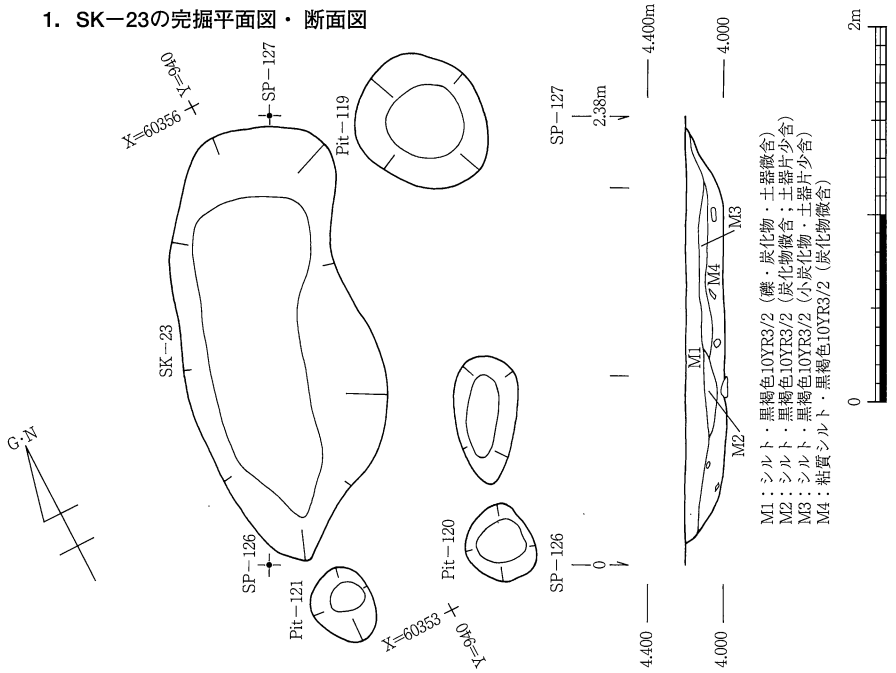
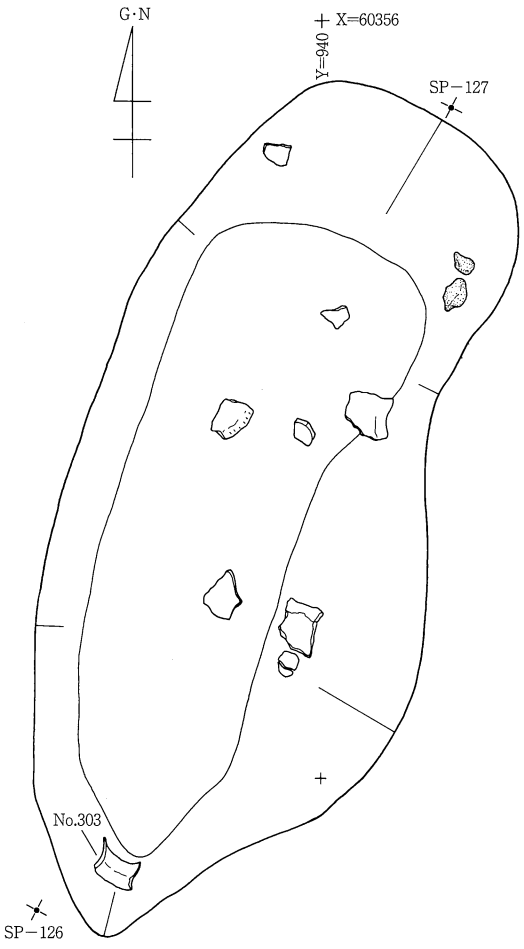


Fig.36　A2区土坑SK−21・22・35の遺構図（縮尺1/40）

1. SK－23の完掘平面図・断面図



2. 溝状土坑SK－23底面の遺物出土平面図



3. Pit－133の遺物出土平面図

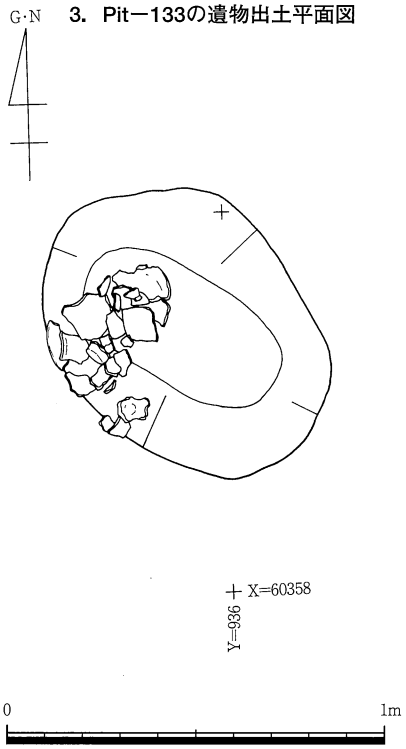
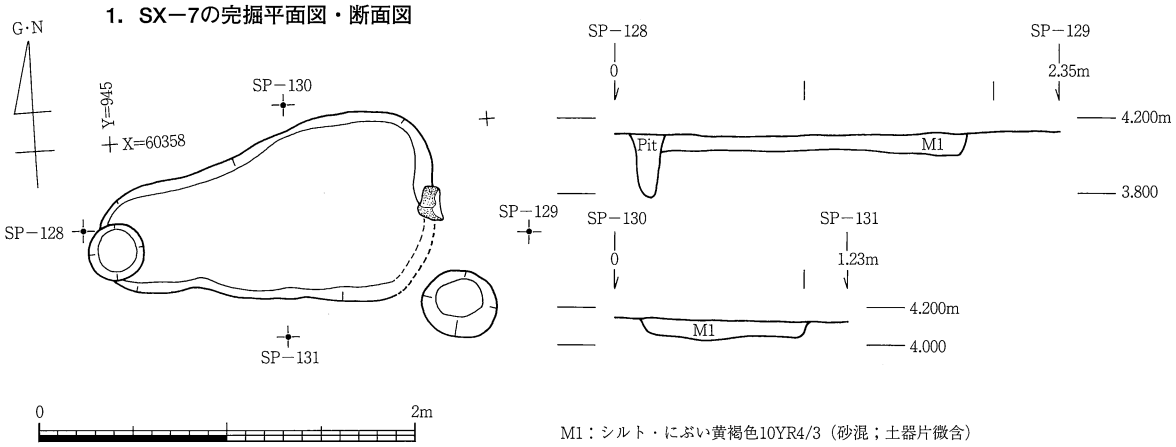
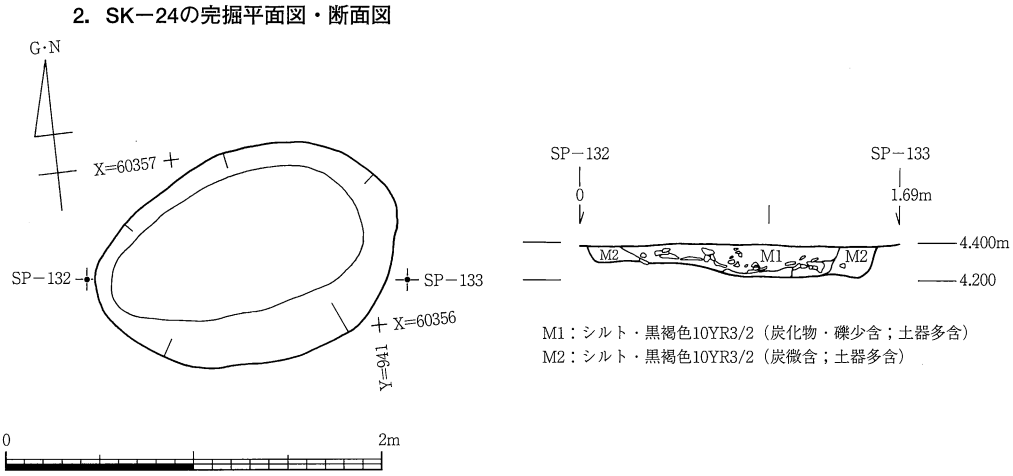


Fig.37　A2区溝状土坑SK－23・Pit－133の遺構図（縮尺1/40；1/20）





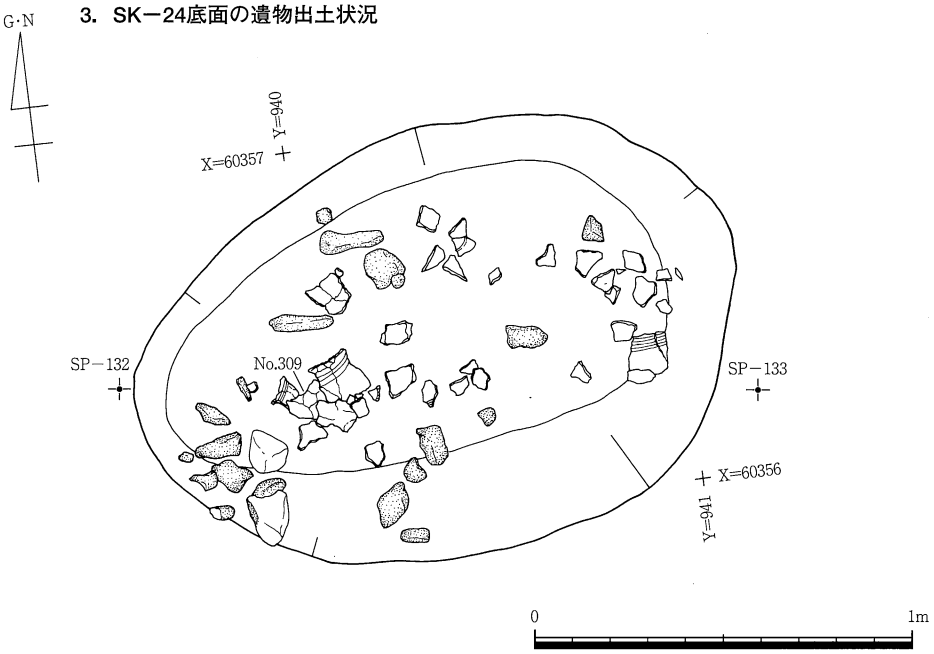
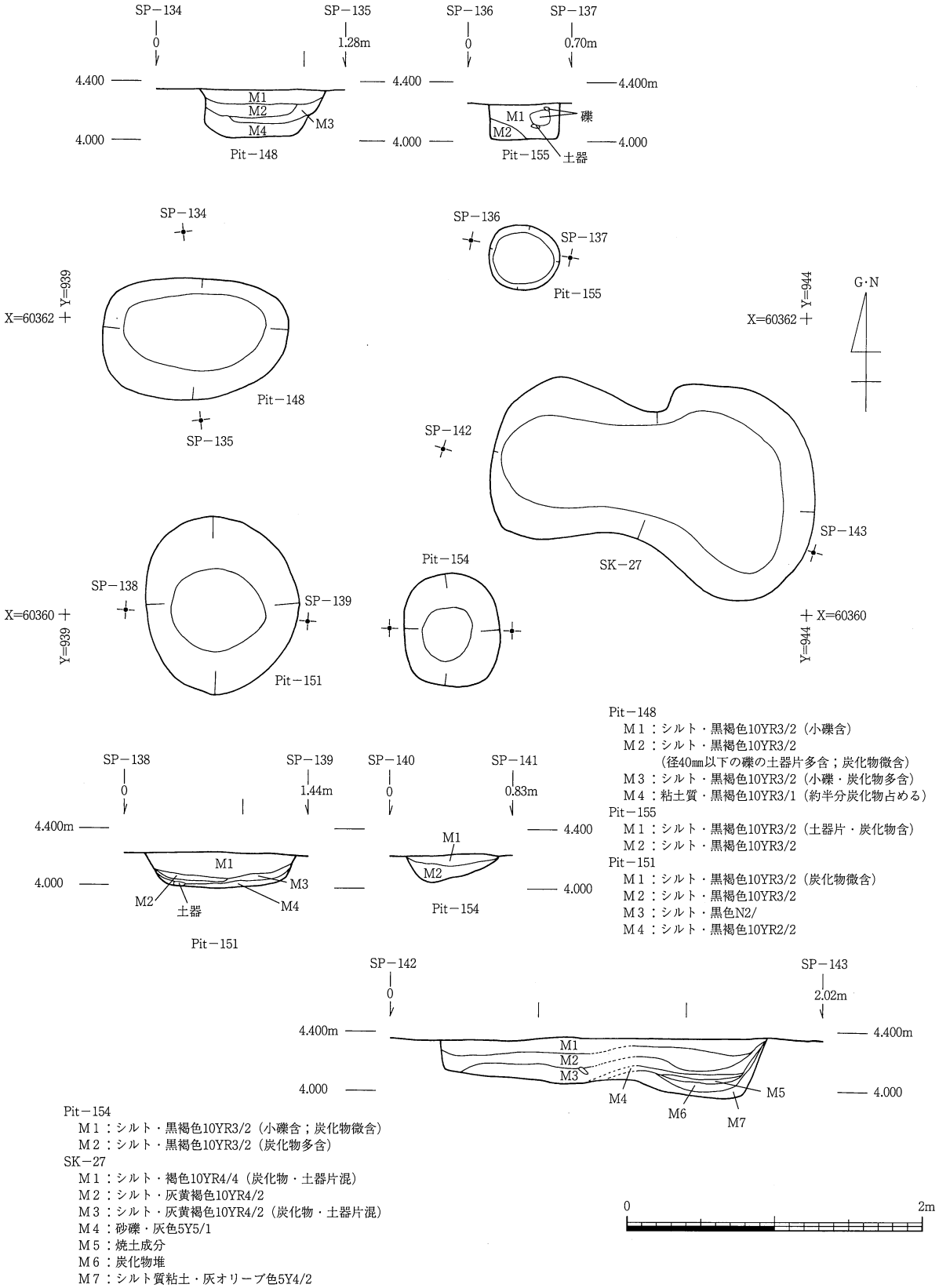


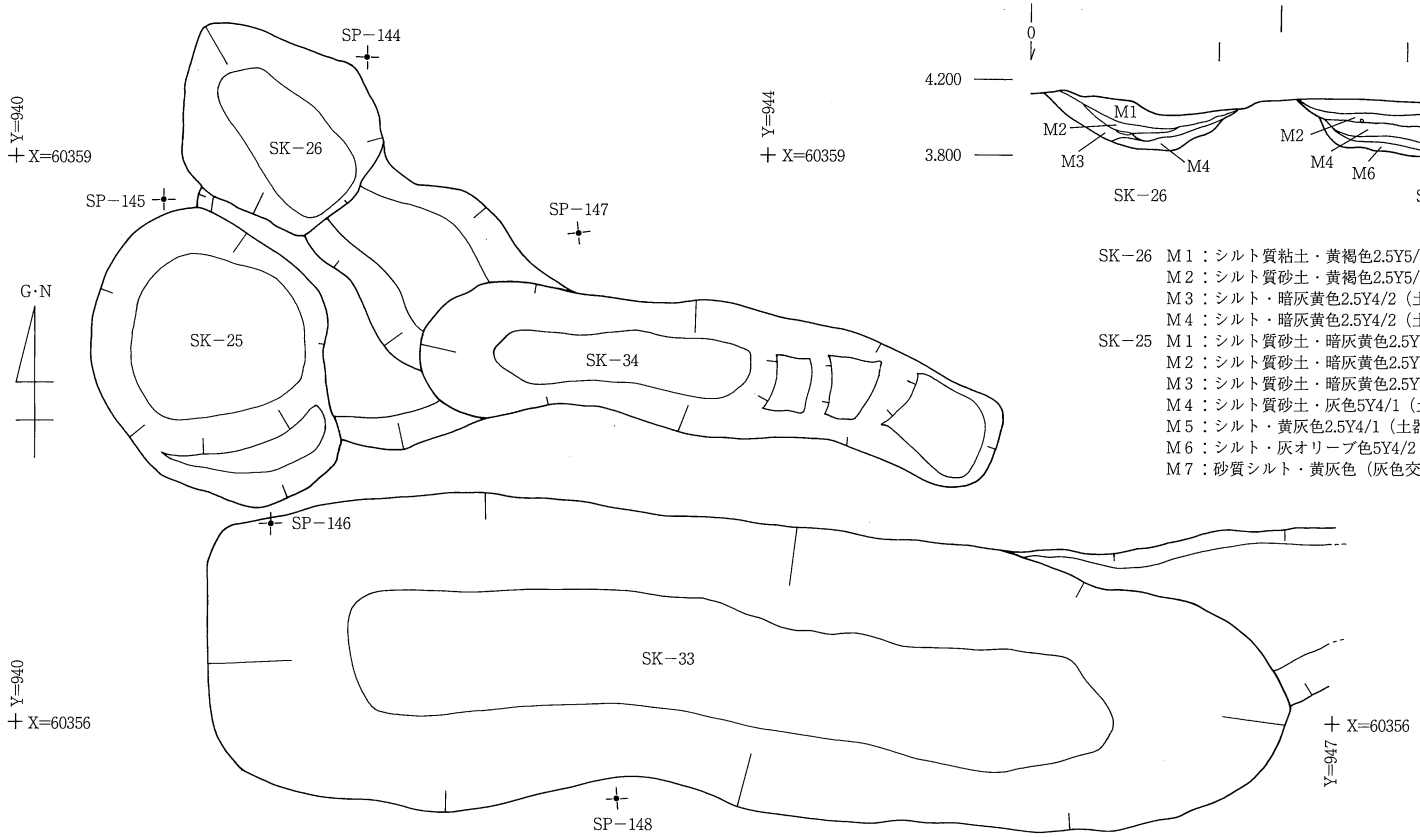
Fig.38　A2区性格不明の窪みSX−7・土坑SK−24の遺構図（縮尺1/40；1/20）

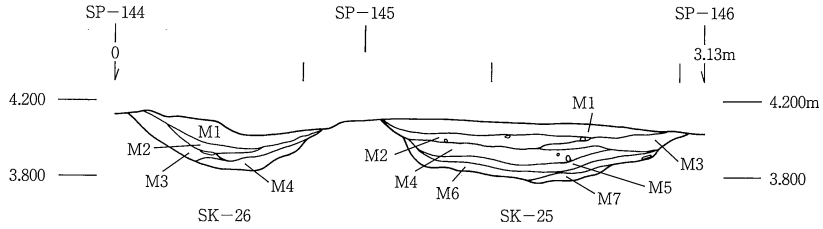


Pit－148
M１：シルト・黒褐色10YR3/2（小礫含）
M２：シルト・黒褐色10YR3/2
（径40㎜以下の礫の土器片多含；炭化物微含）
M３：シルト・黒褐色10YR3/2（小礫・炭化物多含）
M４：粘土質・黒褐色10YR3/1（約半分炭化物占める）
Pit－155
M１：シルト・黒褐色10YR3/2（土器片・炭化物含）
M２：シルト・黒褐色10YR3/2
Pit－151
M１：シルト・黒褐色10YR3/2（炭化物微含）
M２：シルト・黒褐色10YR3/2
M３：シルト・黒色N2/
M４：シルト・黒褐色10YR2/2

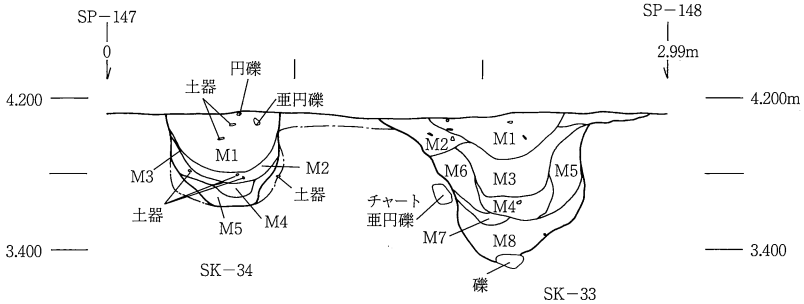
Pit－154
M１：シルト・黒褐色10YR3/2（小礫含；炭化物微含）
M２：シルト・黒褐色10YR3/2（炭化物多含）
SK－27
M１：シルト・褐色10YR4/4（炭化物・土器片混）
M２：シルト・灰黄褐色10YR4/2
M３：シルト・灰黄褐色10YR4/2（炭化物・土器片混）
M４：砂礫・灰色5Y5/1
M５：焼土成分
M６：炭化物堆
M７：シルト質粘土・灰オリーブ色5Y4/2

Fig.39　A2区土坑SK－27及び周辺Pit－148・151・154・155の遺構図（縮尺1/40）





SK−26　M１：シルト質粘土・黄褐色2.5Y5/3（土器片・径10㎜以下の炭化物微含）
M２：シルト質砂土・黄褐色2.5Y5/3（土器片・径20㎜以下の炭化物微含）
M３：シルト・暗灰黄色2.5Y4/2（土器片・径5㎜以下の炭化物含）
M４：シルト・暗灰黄色2.5Y4/2（土器片・径15㎜以下の炭化物・焼土含）
SK−25　M１：シルト質砂土・暗灰黄色2.5Y4/2（土器片・径10㎜以下の炭化物多含）
M２：シルト質砂土・暗灰黄色2.5Y4/2（土器片・径20㎜以下の炭化物多含）
M３：シルト質砂土・暗灰黄色2.5Y4/2（土器片・径10㎜以下の炭化物多含）
M４：シルト質砂土・灰色5Y4/1（土器片・径20㎜以下の炭化物多含）
M５：シルト・黄灰色2.5Y4/1（土器細片・径5㎜以下の炭化物多含）
M６：シルト・灰オリーブ色5Y4/2（土器片・径20㎜以下の炭化物含）
M７：砂質シルト・黄灰色（灰色交り・径10㎜以下の炭化物少含）



SK−34　M１：シルト質砂土・にぶい黄褐色10YR4/3（小礫少含；土器片多含）
M２：シルト・黒褐色10YR3/1（径20㎜以下の炭化物極多含）
M３：シルト・暗灰黄色2.5Y4/2（径5㎜以下の炭化物少含）
M４：砂質シルト・灰色5Y4/1（土器微片・径5㎜以下の炭化物少含
SK−33　M１：シルト質粘土・褐灰色10YR6/1（土器片・径20㎜以下の炭化物多含）
M２：砂質シルト・褐灰色10YR5/1（土器片・径10㎜以下の炭化物多含）
M３：シルト・灰黄褐色10YR5/2（土器片・径20㎜以下の炭化物多含）
M４：シルト・青灰色5B5/1（土器片・径5㎜以下の炭化物少含）
M５：シルト・灰黄褐色10YR6/2（径3㎜以下の炭化物少含）
M６：シルト・青灰色5B6/1（径3㎜以下の炭化物少含）
M７：粘土質シルト・オリーブ灰色N5/（土器集中）
M８：シルト質粘土・青灰色5B5/1

Fig.40　A2区土坑SK−25・26・33・34の遺構図（縮尺1/40）

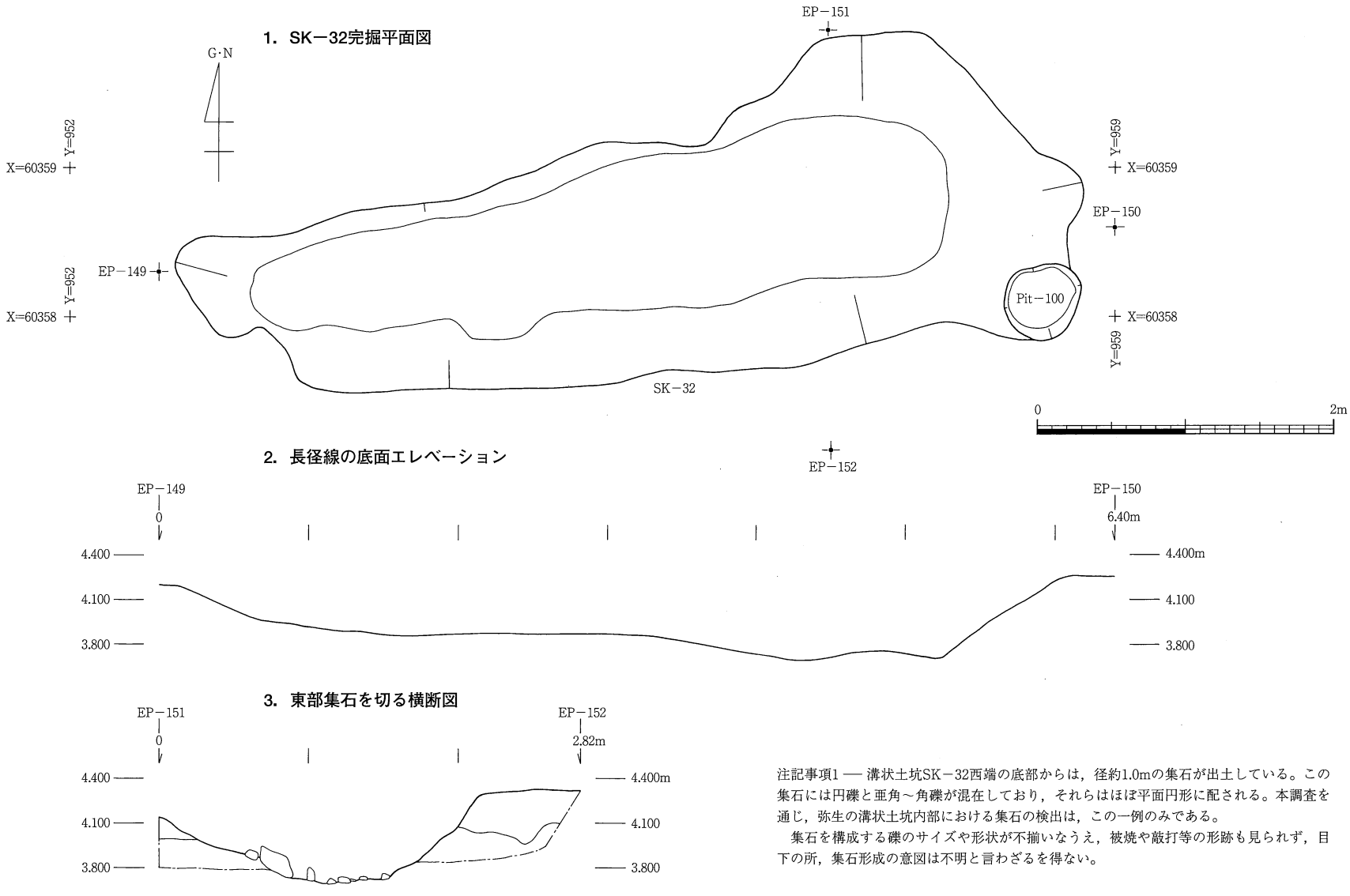


Fig.41 A2区土坑SK−32の遺構図（縮尺1/40）

注記事項1 ── 溝状土坑SK−32西端の底部からは，径約1.0mの集石が出土している。この集石には円礫と亜角～角礫が混在しており，それらはほぼ平面円形に配される。本調査を通じ，弥生の溝状土坑内部における集石の検出は，この一例のみである。

集石を構成する礫のサイズや形状が不揃いなうえ，被焼や敲打等の形跡も見られず，目下の所，集石形成の意図は不明と言わざるを得ない。

Fig.42　A2区溝状土坑SK−32の遺物出土平面図（縮尺1/20）

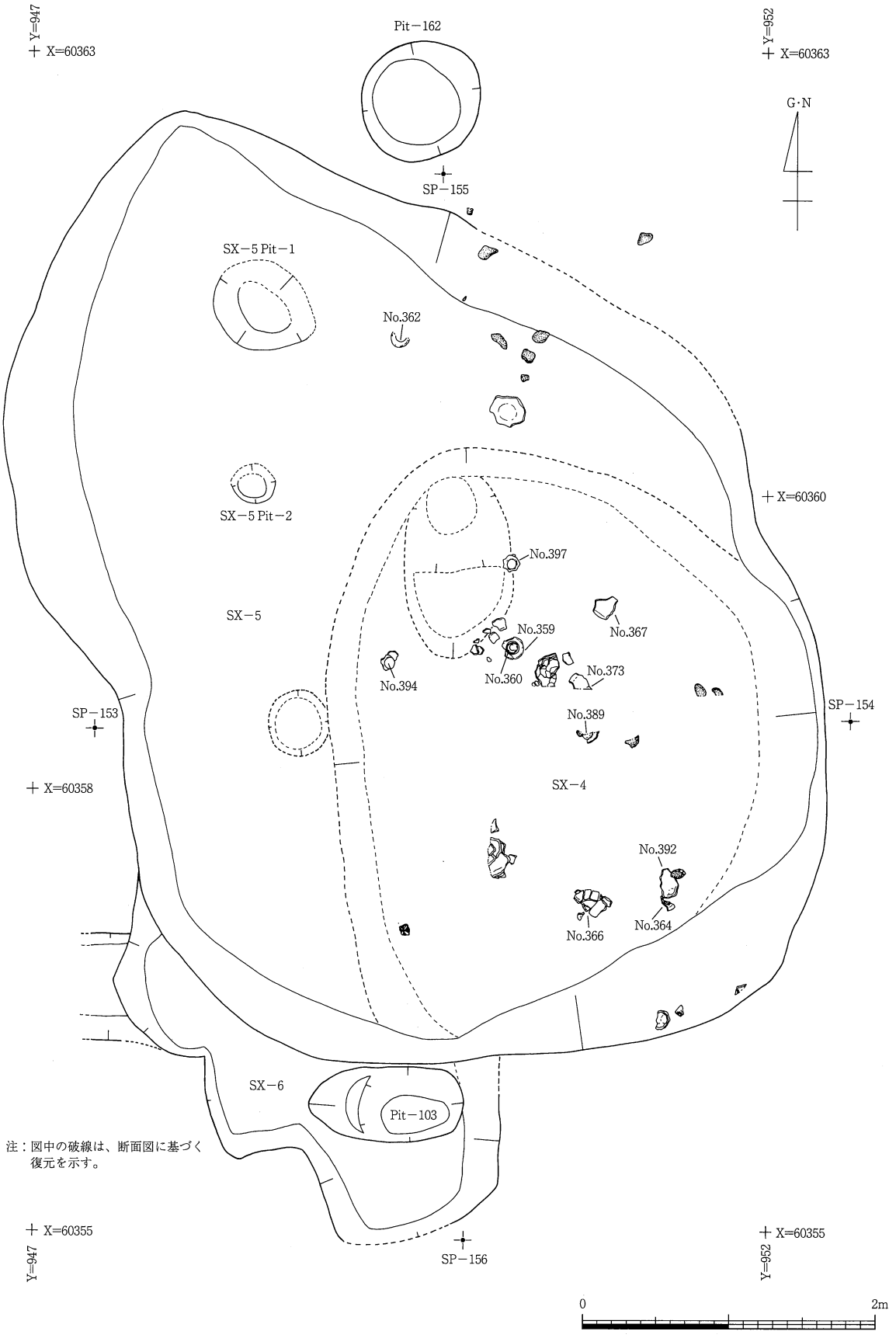
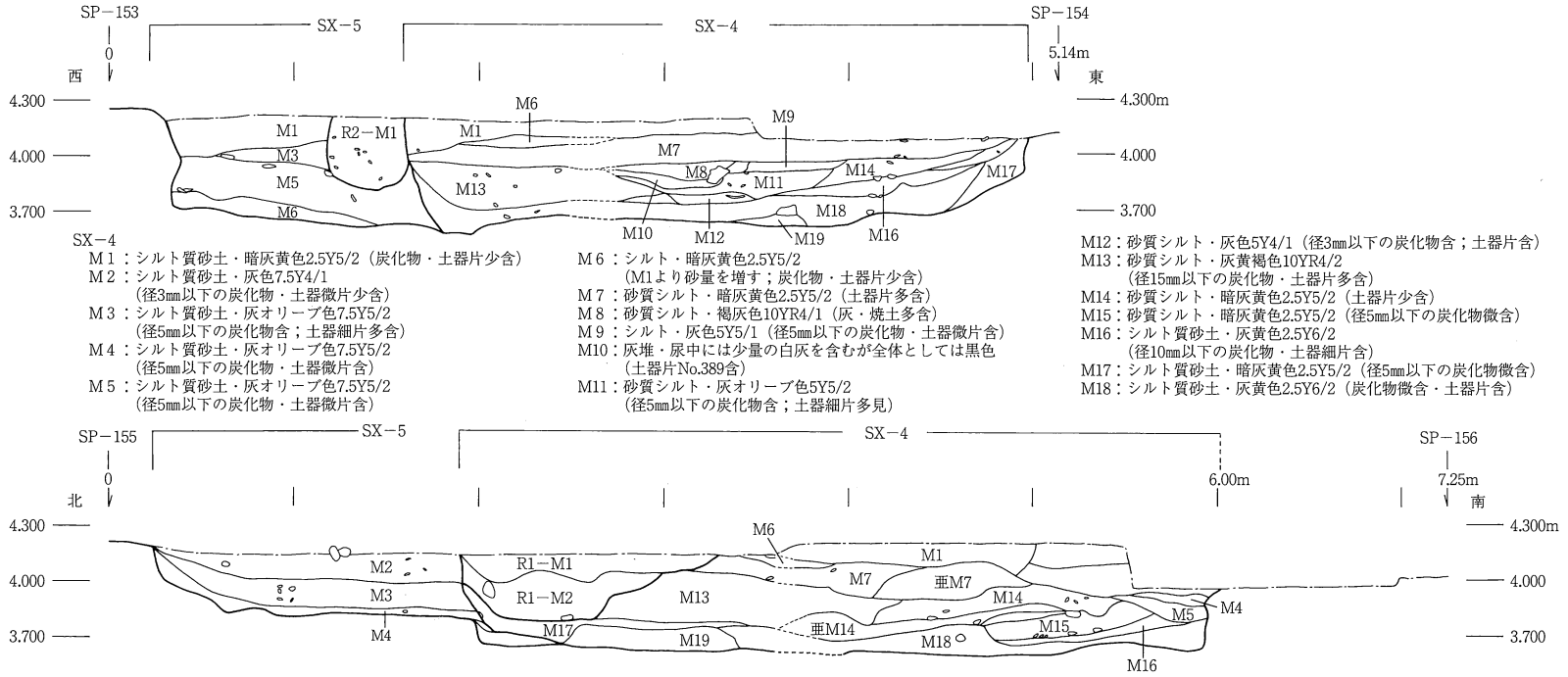


Fig.43　A2区性格不明の大型掘込遺構SX－4・5の平面図（縮尺1/40）

Fig.44　A2区性格不明の大型掘込遺構SX－4・5の断面図（縮尺1/40）



SX－4
M１：シルト質砂土・暗灰黄色2.5Y5/2（炭化物・土器片少含）
M２：シルト質砂土・灰色7.5Y4/1
（径3㎜以下の炭化物・土器微片少含）
M３：シルト質砂土・灰オリーブ色7.5Y5/2
（径5㎜以下の炭化物含；土器細片多含）
M４：シルト質砂土・灰オリーブ色7.5Y5/2
（径5㎜以下の炭化物・土器微片含）
M５：シルト質砂土・灰オリーブ色7.5Y5/2
（径5㎜以下の炭化物・土器微片含）
M６：シルト・暗灰黄色2.5Y5/2
（M1より砂量を増す；炭化物・土器片少含）
M７：砂質シルト・暗灰黄色2.5Y5/2（土器片多含）
M８：砂質シルト・褐灰色10YR4/1（灰・焼土多含）
M９：シルト・灰色5Y5/1（径5㎜以下の炭化物・土器微片含）
M10：灰堆・尿中には少量の白灰を含むが全体としては黒色
（土器片No.389含）
M11：砂質シルト・灰オリーブ色5Y5/2
（径5㎜以下の炭化物含；土器細片多見）
M12：砂質シルト・灰色5Y4/1（径3㎜以下の炭化物含；土器片含）
M13：砂質シルト・灰黄褐色10YR4/2
（径15㎜以下の炭化物・土器片多含）
M14：砂質シルト・暗灰黄色2.5Y5/2（土器片少含）
M15：砂質シルト・暗灰黄色2.5Y5/2（径5㎜以下の炭化物微含）
M16：シルト質砂土・灰黄色2.5Y6/2
（径10㎜以下の炭化物・土器細片含）
M17：シルト質砂土・暗灰黄色2.5Y5/2（径5㎜以下の炭化物微含）
M18：シルト質砂土・灰黄色2.5Y6/2（炭化物微含・土器片含）

M19：砂質シルト・灰色7.5Y5/1
SX－5
M１：粘土混じりシルト・灰オリーブ色5Y4/2
（径10㎜以下の炭化物含）
M２：シルト質砂土・暗灰黄色2.5Y6/2
（土器細片多；石斧・石器含）
M３：砂質シルト・灰オリーブ色5Y4/2
（炭化物微含；土器片・ノミ状石斧No.404含）
M４：シルト・黒褐色10YR3/2
（多量の炭灰混；径15㎜以下の炭化物含）
M５：シルト・灰黄褐色10YR5/2（径2.0㎜以下の炭化物少含）
M６：粘土混じりシルト・灰オリーブ色5Y4/2
（径10㎜以下の炭化物少含；土器細片微含）

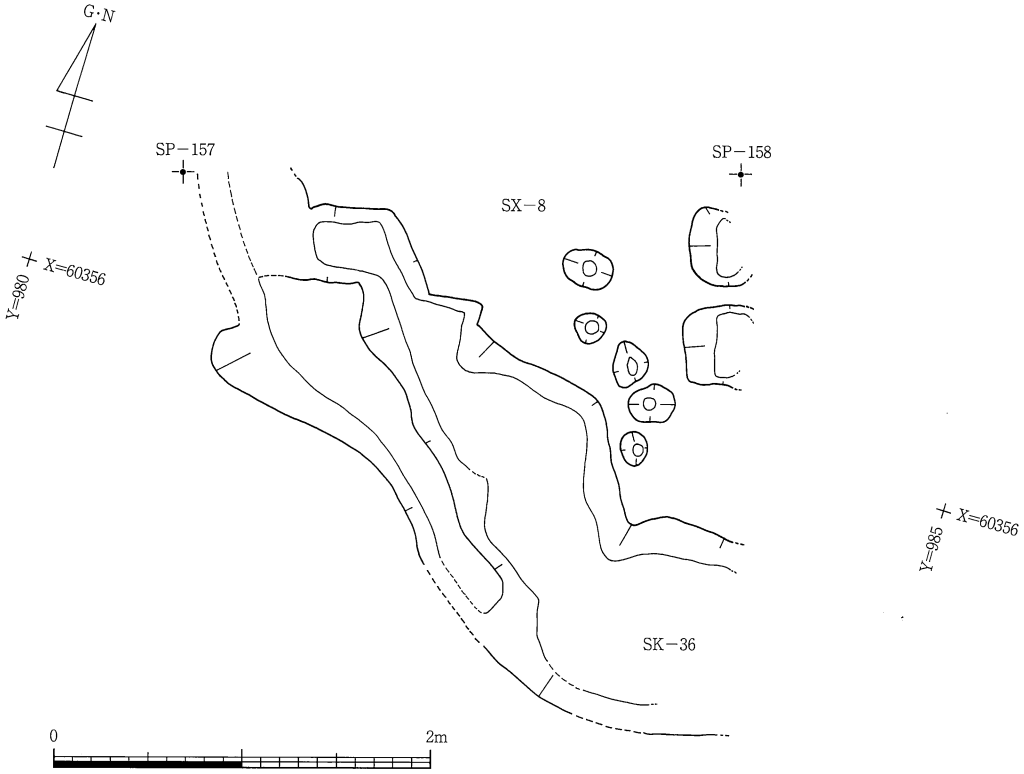
R1－R2
R1－M1：砂質シルト・7.5Y5/1（径10㎜以下の炭化物・土器細片少含）
R1－M2：円礫混じり砂質シルト7.5Y5/1
（径10㎜以下の炭化物・土器細片少含）
R2－M1：シルト・暗灰黄色2.5Y5/2
（径10㎜以下の炭化物少含；土器細片多含）

注記事項１ ── SX－4の内部には，M8・9の上面付近から掘り込まれた土坑状の断面が存在しており，その埋積土と見られる部分にM8～12の記号を当てている。

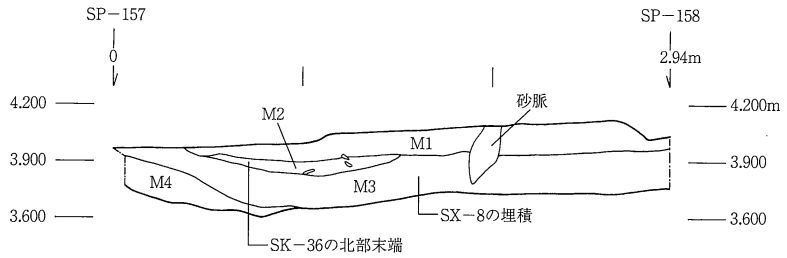
注記事項２ ── R1・R2は，それぞれSX－4・SX－5が埋積した後，それらの上方から切り込む別基のピットあるいは土坑状の断面であり，R1には2層，R2には単層の埋積土が遺存する。

注記事項３ ── SX－4南部では，シルト質砂土の埋積層同士が前傾斜で斜交しており，人的な掘削行為あるいは流水による侵食の痕跡と解釈される。

注記事項４ ── 性格不明の大型掘込み遺構として分類したA2区のSX－4・SX－5では，前者が後者の内部を切り込むほか，その他中小の遺構とも切合関係を持つ点が，ここに掲載する十字バンクの断面に示される。土器や石器の分布と中小サイズのピット・プランが次々と露呈するA1・A2両区の弥生遺構検出工程において，より大型の遺構である竪穴住居跡ST－1やST－2のほか，遺存底の深い大型土坑類の埋蔵位置では，A2区SK－32を例外として，本来の遺構面付近が周辺に比して遺物希薄か無遺物に近い状況に遭遇している。これらエリアに対しては，土性・土色・炭化物密度の変化する境界線を求めて人力による地面の薄剥を繰り返したが，このSX－4・SX－5では，切合関係のみならず，正確な平面範囲すら捕捉困難であり，保留バンクの地層断面を頼りとするトレンチ掘削を展開した。このため，結果として記録に留め得ない中小の遺構内付随遺構や別基遺構の存在を否めない。所掲発掘平面図の破線は，埋積土の断面・完掘面のエレベーション及び土器類を主とする遺物集中分布等に基づく推定復元線を表している。また，SX－4・SX－5及びこれら平面範囲に存在したであろう推定遺構を含めた出土土器類全体の様式年代は，弥生前期中葉頃をピークとして，弥生前期前半から後期後半に跨るため，断続的長期の使用若しくは後方年代の整地等に伴う廃棄の結果，更には洪水による部分洗掘と二次・三次の堆積等が遺物年代幅の長さの理由として想定される。



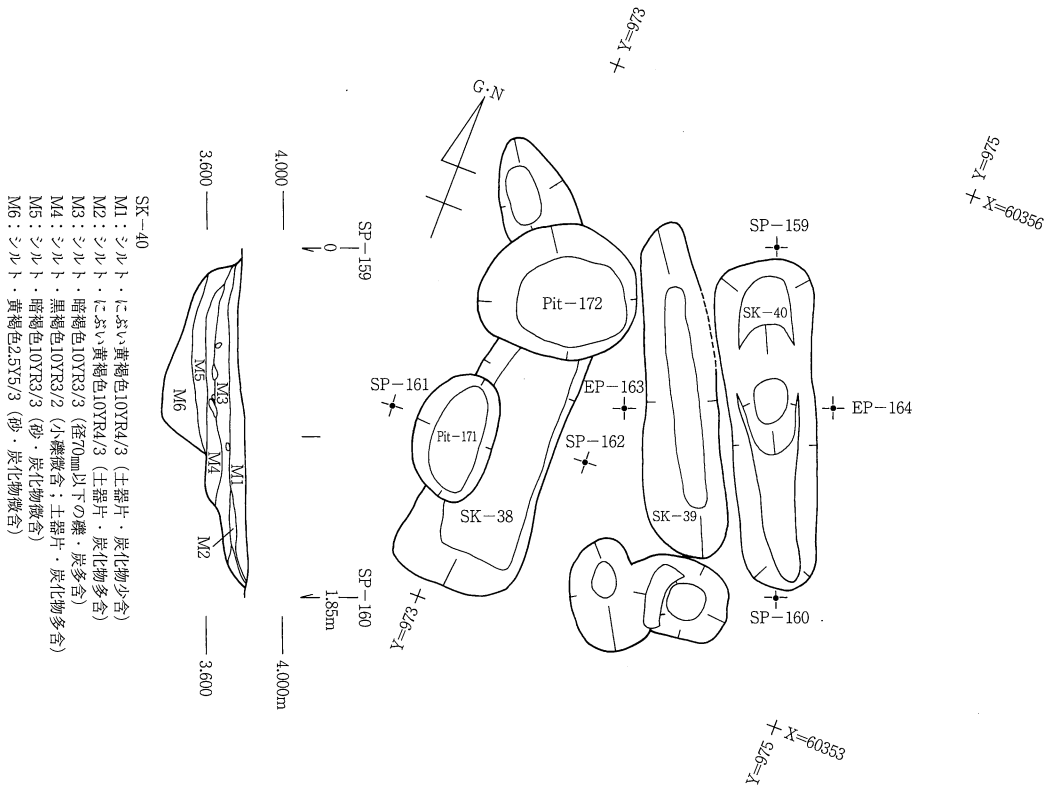
注：平坦な床面にピットの密集する掘込遺構SX－8は、その南西縁を溝状土坑SK－36に切られている



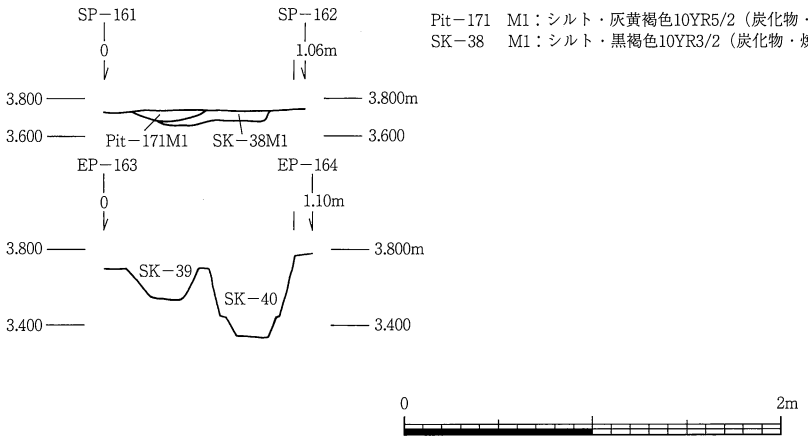
SX－8
M１：シルト質粘土・にぶい黄褐色10YR 5/3（土器細片多含；径8㎜以下の炭化物少含）
M２：シルト質粘土・にぶい黄褐色10YR 5/3（径50㎜以下の角礫点在）
M３：シルト質粘土（細粒）・にぶい黄褐色10YR 5/3（土器片・径10㎜以下の炭化物含（特に直土層との境界に多い））
M４：砂質シルト（土器・細片・径10㎜以下の炭化物少含）

注：SX－8の北部は、古代の溝SD－17によって東西方向に切られている

Fig.45　A3区性格不明の掘込遺構SX－8及び溝状土坑SK－36の遺構図（縮尺1/40）



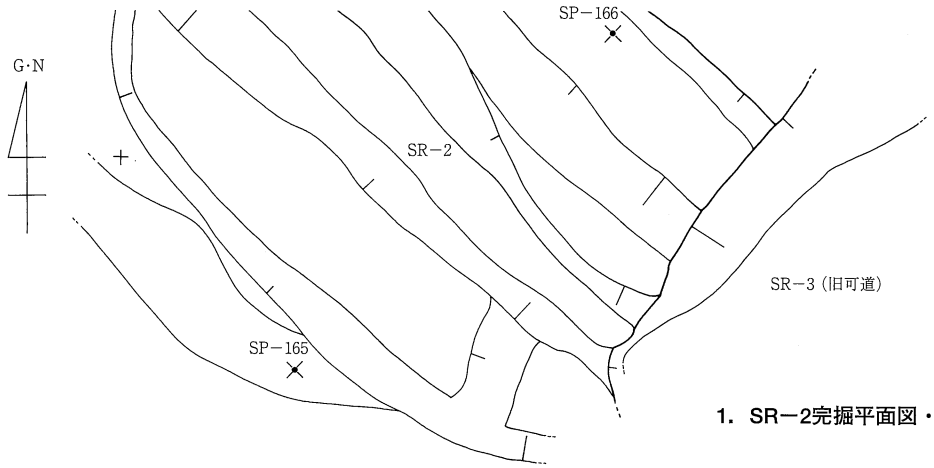
SK−40
M1：シルト・にぶい黄褐色10YR4/3（土器片・炭化物少含）
M2：シルト・にぶい黄褐色10YR4/3（土器片・炭化物多含）
M3：シルト・暗褐色10YR3/3（径70mm以下の礫・炭多含）
M4：シルト・黒褐色10YR3/2（小礫微含；土器片・炭化物多含）
M5：シルト・暗褐色10YR3/3（砂・炭化物微含）
M6：シルト・黄褐色2.5Y5/3（砂・炭化物微含）



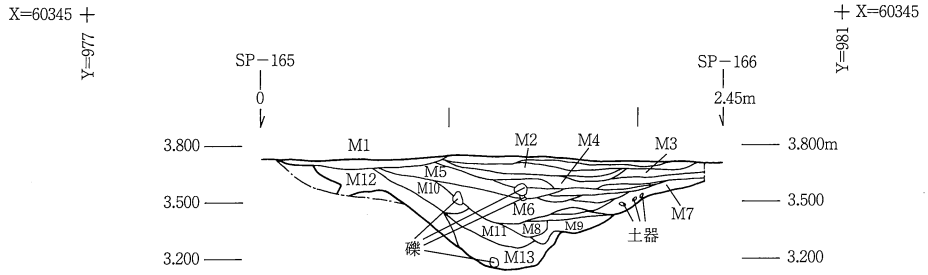
Pit−171　M1：シルト・灰黄褐色10YR5/2（炭化物・焼土ブロック微含）
SK−38　M1：シルト・黒褐色10YR3/2（炭化物・焼土ブロック少含）

注記事項1 ── SD−17とSR−2が交差するA3区西端角部で出土した3条並列の溝状弥生土坑であり，西に位置するSK−38の南半は，SR−2下で検出している。また，東に位置するSK−40では，埋積土全体に炭化物が含まれ，その量は，特に中位に多い。

Fig.46　A3区溝状土坑SK−38・39・40と内外ピットの遺構図（縮尺1/40）

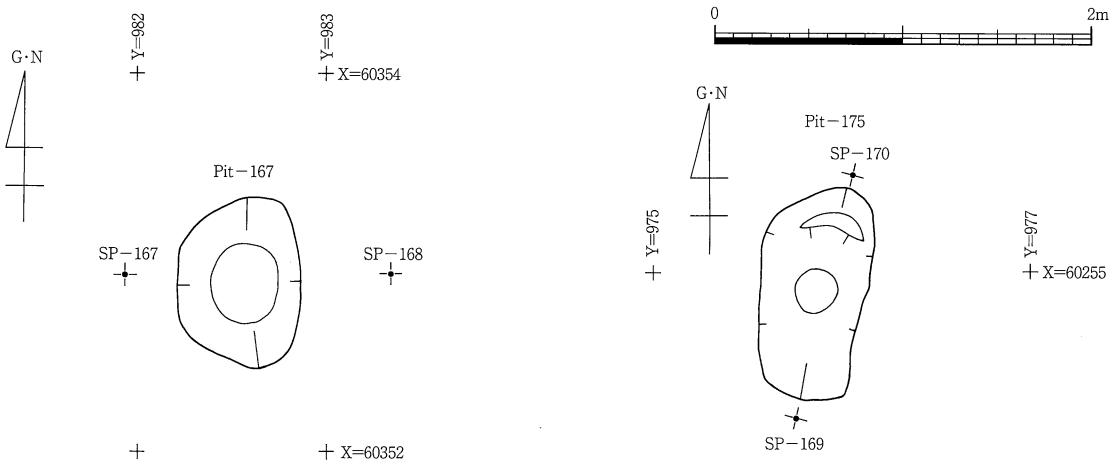


1. SR－2完掘平面図・断面図（一部）



M1：シルト・にぶい黄褐色10YR5/4（砂微含）
M2：砂質土・褐色10YR4/4（灰色砂・炭化物微含）
M3：砂質土・暗灰黄色2.5Y5/2（径30㎜以下の礫少含）
M4：砂質土・褐色10YR4/4（炭化物・土器片少含）
M5：シルト質砂・にぶい黄褐色10YR4/3（小礫・焼土微含）
M6：シルト質砂・にぶい黄褐色10YR4/3（炭化物・土器片・焼土少含）
M7：シルト質砂・黒褐色10YR3/2（土器片少含；炭化物・黄シルトブロック微含）
M8：細砂・灰黄褐色10YR4/2（炭化物・焼土微含）
M9：粗砂・暗灰黄色2.5Y4/2（径30㎜以下の礫多含）
M10：シルト質砂・にぶい黄褐色10YR4/3（炭化物・土器片微含）
M11：シルト・暗褐色10YR3/4（シルト質粘土・灰色5Y4/1斑含；炭化物・焼土微含）
M12：シルト・にぶい黄褐色10YR5/4（灰色粘土微含；土器片・炭化物・焼土少含）
M13：シルト・暗褐色10YR3/4（黄シルトブロック・灰色砂斑含）

2. Pit－167・175の完掘平面図・断面図



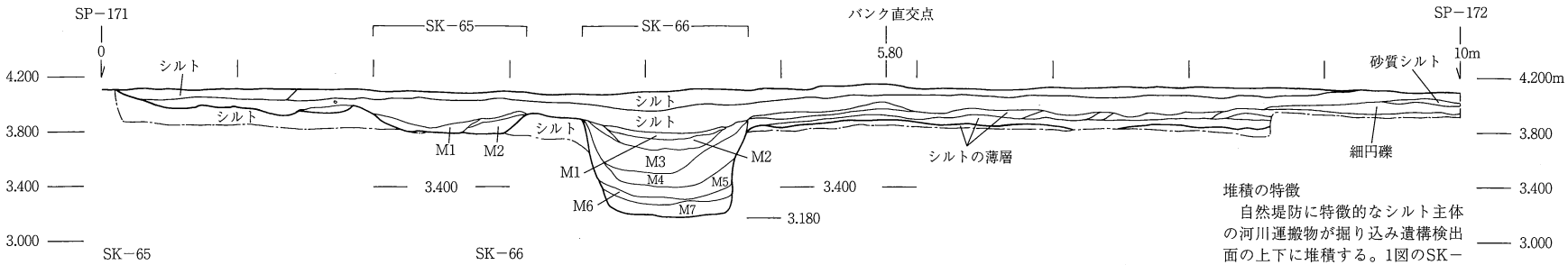
M1：シルト・にぶい黄褐色10YR5/3（炭化物微含）
M2：シルト・暗褐色10YR3/4（灰色砂混）
M3：シルト・暗褐色10YR3/3

M1：シルト・暗褐色10YR3/3（炭化物・細礫・土器片含）
M2：シルト・暗褐色10YR3/3（炭化物多含）
M3：シルト質砂土・黒褐色10YR3/2（炭化物微含）
M4：シルト質砂土・黒褐色10YR3/2
M5：シルト・暗褐色10YR3/4（炭化物微含）
M6：シルト・黒褐色10YR3/2（炭化物含）

Fig.47　A3区自然流路跡SR－2・3の合流部及び周辺Pit－167・175の遺構図（縮尺1/40）

Fig48 旧河道氾濫の影響が顕著なA4区の弥生遺構面堆積の断面図（縮尺1/50）

1. A4区北寄りの東西バンク南壁

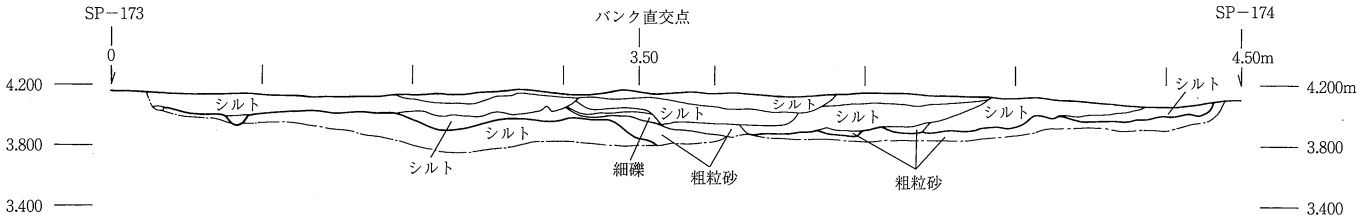


SK－65
M１：シルト・灰黄褐色10YR4/2（炭化物含）
M２：シルト・オリーブ褐色2.5Y4/4

SK－66
M１：シルト質粘土・黄灰色7.5Y4/1（炭化物少含）
M２：シルト質粘土・暗オリーブ褐色2.5Y3/3（土器片含）
M３：砂混じりシルト・灰オリーブ色5Y4/2（炭化物少含）
M４：シルト・オリーブ褐色2.5Y4/3（砂混）
M５：シルト質粘土・オリーブ褐色2.5Y4/3（砂混）
M６：シルト・灰オリーブ色5Y5/2
M７：シルト質粘土：黒褐色2.5Y3/1（砂混）

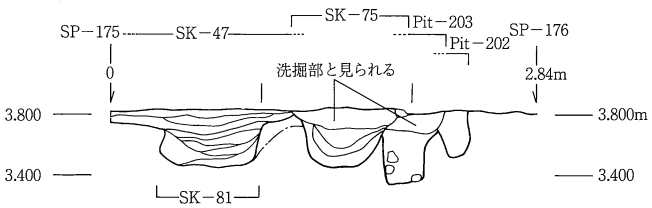
堆積の特徴
自然堤防に特徴的なシルト主体の河川運搬物が掘り込み遺構検出面の上下に堆積する。1図のSK－66検出面下では，粒子の分級・沈降の小刻みな繰り返しによる5cm以下の薄層が累重するのに対し，検出面上覆層では10～15cm前後に層厚を増して堆積量の増大を示す。

2. A4区中東部の南北バンク西壁



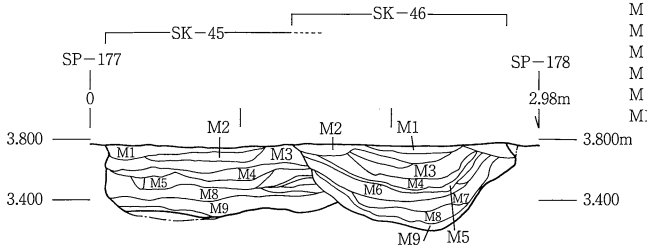
堆積の特徴
自然堤防型の粒度構成を具える。標高3.90m前後を境として，上位にシルト，下位に細粒砂が堆積する。シルト層は北傾斜の層理を示し，北向きに堆積面を拡張している。細粒砂層からシルト層への移行は，やや漸移的であり，シルトの層理間に細粒砂の薄層が散見される。

3. A4区中央部SK－81・75；Pit－203・202の切合断面



遺構の切合多在と洗堀部分の存在
A区全体を通じて弥生遺構同士の切合は数多いが，A4区中央の遺構密集部では，切合遺構の数も突出する。上図の遺構4基の切合例では，各遺構がPit－202→Pit－203→SK－75→SK－81の時間的順序で形成された点を示すほか，遺構埋積後の洪水による洗掘充填層と見られる部分も存在する。

4. A4区南東部SK－45・46の切合断面

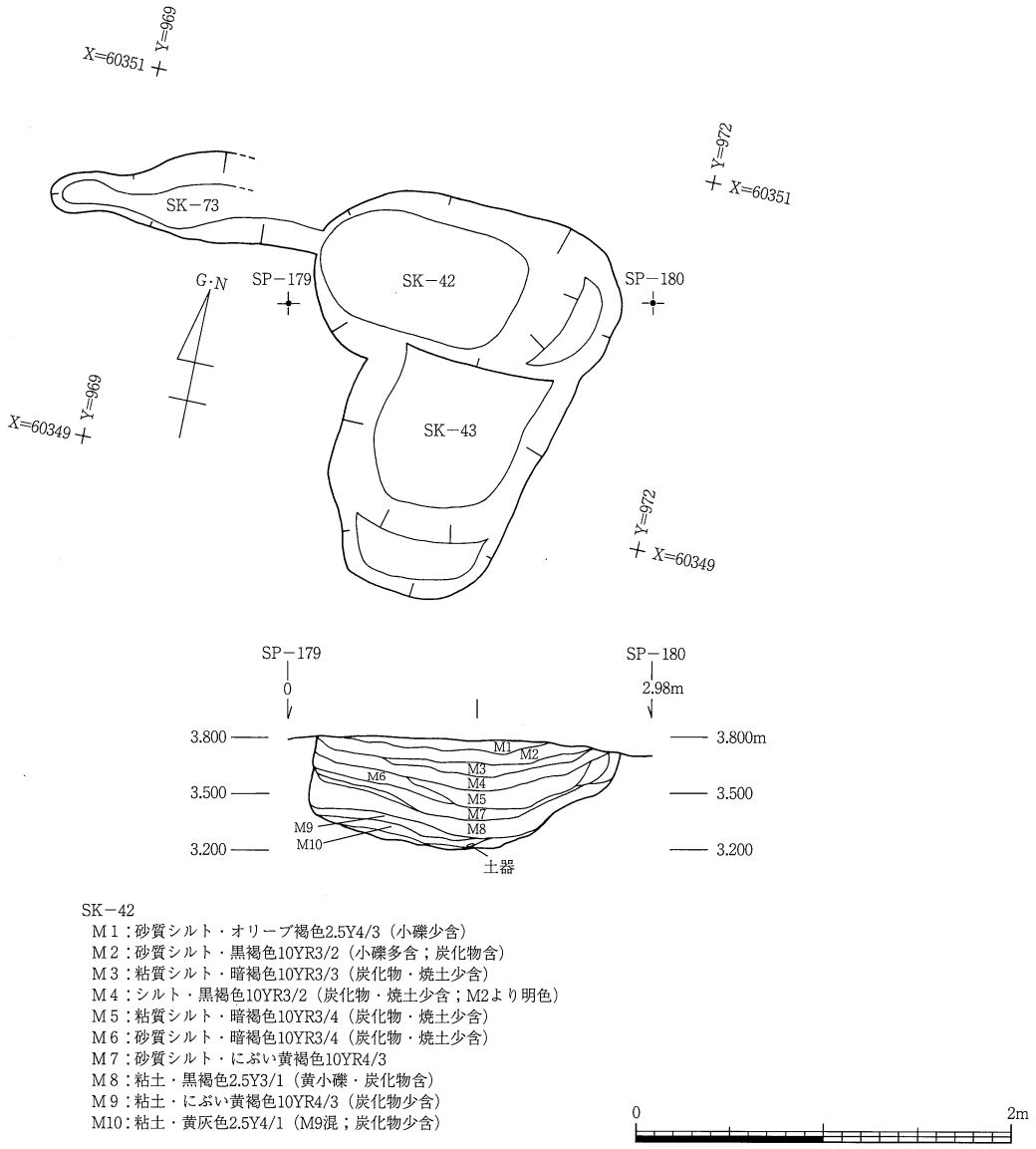


SK－45
M１：砂混じりシルト
M２：砂混じり礫
M３：小礫混じり細粒砂
M４：細粒砂
M５：粗粒砂
M６：粘土混じり粗粒砂
M７：細粒砂
M８：細粒砂
M９：極細粒砂
M10：粘土混じり極細粒砂

SK－46
M１：細粒
M２：細礫混じり細粒砂
M３：シルト質砂土
M４：シルト質砂土
M５：極細粒砂
M６：細礫混じり粗粒砂
M７：粗粒砂
M８：細礫混り粗粒砂
M９：炭化物堆

砂礫が埋積する土坑の例
旧河道至近の土坑SK－45・46等の例では，層理の発達した砂礫が埋積物の主体を占め，切合関係も鮮明に認められる。

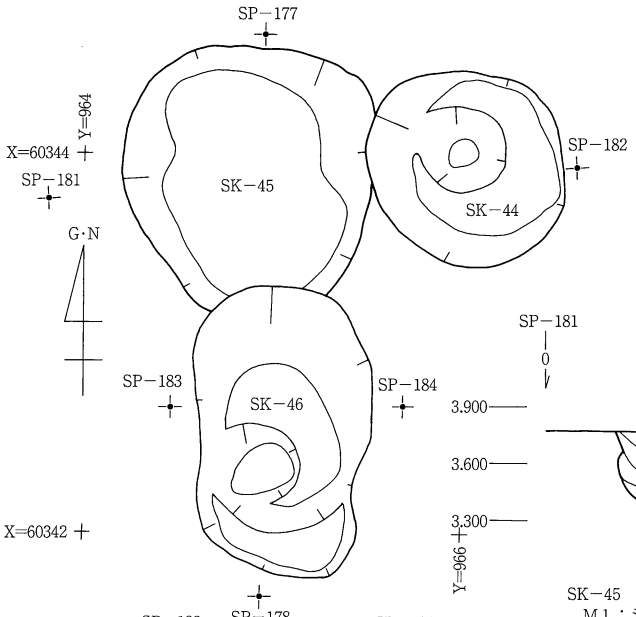
0　2.5m



SK−42
M1：砂質シルト・オリーブ褐色2.5Y4/3（小礫少含）
M2：砂質シルト・黒褐色10YR3/2（小礫多含；炭化物含）
M3：粘質シルト・暗褐色10YR3/3（炭化物・焼土少含）
M4：シルト・黒褐色10YR3/2（炭化物・焼土少含；M2より明色）
M5：粘質シルト・暗褐色10YR3/4（炭化物・焼土少含）
M6：砂質シルト・暗褐色10YR3/4（炭化物・焼土少含）
M7：砂質シルト・にぶい黄褐色10YR4/3
M8：粘土・黒褐色2.5Y3/1（黄小礫・炭化物含）
M9：粘土・にぶい黄褐色10YR4/3（炭化物少含）
M10：粘土・黄灰色2.5Y4/1（M9混；炭化物少含）

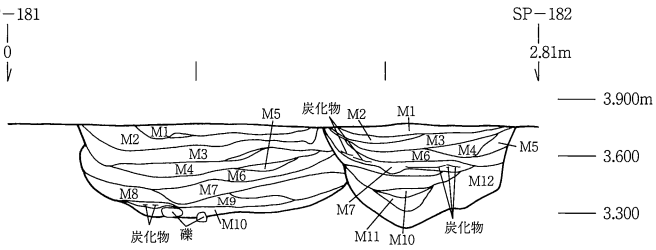
注記事項1 ── 上図は，自然流路跡SR−3の西サイドで検出した弥生土坑3基の切合いであり，上部を削失する。埋積土には，少量の炭化物や焼土成分が含まれるほか，土器片も混じり，主として弥生包含層成分の流入が窺える。埋積層理は水積性を示すとともに，その内部において斜交層理が観察されるため，埋積後更に洗掘を受けた可能性が考えられる。A区の弥生遺構面付近が，かつて比較的強い掃流作用を経た状況を窺わせる資料の一つと言える。

Fig.49　A4区東端部土坑SK−42・43の遺構図（縮尺1/40）

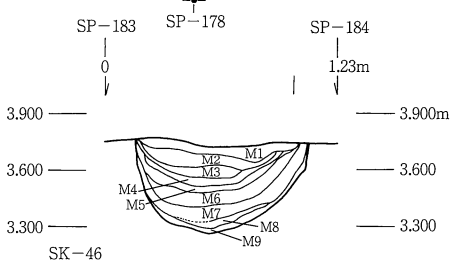


1. SK−44・45・46の完掘平面図・断面図

SK−44
M1：シルト・黄褐色7.5Y5/4（小礫多含）
M2：シルト・黄褐色10YR5/3（砂少含）
M3：シルト・黄褐色2.5Y5/3（砂少含）
M4：砂礫・にぶい黄褐色10YR4/3（シルト混）
M5：シルト・黄褐色2.5Y5/4（砂が下部に少含；炭化物微含）
M6：シルト・オリーブ褐色2.5Y5/4（砂・炭化物微含）
M7：シルト・黄灰色2.5Y4/2（砂・焼土少含；炭化物層状に混）
M8：シルト・黄褐色2.5Y5/4（砂含）
M9：シルト・黄褐色2.5Y5/4（灰色砂少含）
M10：砂礫・灰黄褐色10YR3/4（小礫含）
M11：粗砂・暗褐色10YR3/4（シルトブロック含）
M12：粗砂・暗褐色10YR3/4（土器片・炭化物・シルトブロック含）

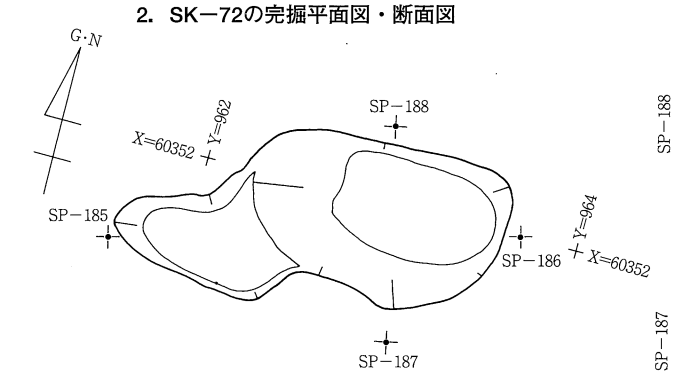


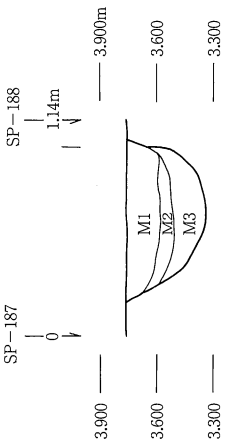
SK−45
M1：シルト・にぶい黄褐色10YR5/4（砂・径20㎜以下の炭化物少含）
M2：砂層・にぶい黄褐色10YR5/4
M3：細砂・にぶい黄褐色10YR4/3（砂・灰黄褐色10YR4/2が交互に混；小礫微含）
M4：細砂・灰黄褐色10YR4/2（炭化物微含）
M5：粗砂・黒褐色10YR4/3
M6：細砂・黒褐色10YR3/2（灰色粘土・炭化物微含）
M7：細砂・暗灰黄色2.5Y4/2（黄ブロック微含）
M8：細砂・暗灰黄色2.5Y4/2
M9：極細砂・黒褐色10YR3/2
M10：極細砂・黒褐色10YR3/2（やや粘性あり）

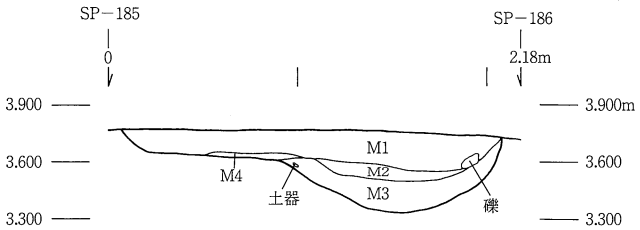


SK−46
M1：細砂・黄褐色5.5Y6/3（砂少含；炭化物微含）
M2：シルト質砂土・にぶい黄褐色10YR4/3
（砂少含；上部に黄色シルトが層状混）
M3：シルト質砂土・オリーブ褐色2.5Y4/4
（径30㎜以下の礫多含；下部に灰色砂混）
M4：シルト質砂土・暗灰黄色2.5Y4/2（砂少含；粘性り）
M5：極細砂・黄褐色2.5Y5/3
M6：砂礫・暗黄灰色2.5Y4/2（小礫多含）
M7：粗砂・灰オリーブ褐色5Y4/2（径30㎜以下の礫多含）
M8：粗砂・暗オリーブ褐色5Y4/4（径30㎜以下の礫多含）
M9：炭化物層（下部に粘土・灰色N5/混）

2. SK−72の完掘平面図・断面図







SK−72
M1：シルト・暗褐色10YR3/3（小礫・土器片・炭化物多含）
M2：シルト・暗灰黄色2.5Y4/2（土器片・炭化物少含）
M3：シルト・黄灰色2.5Y4/1（炭化物微含）
M4：シルト・黄灰色2.5Y5/3（炭化物多含）

Fig.50　A4区切合土坑SK−44・45・46及びSK−72の遺構図（縮尺1/40）

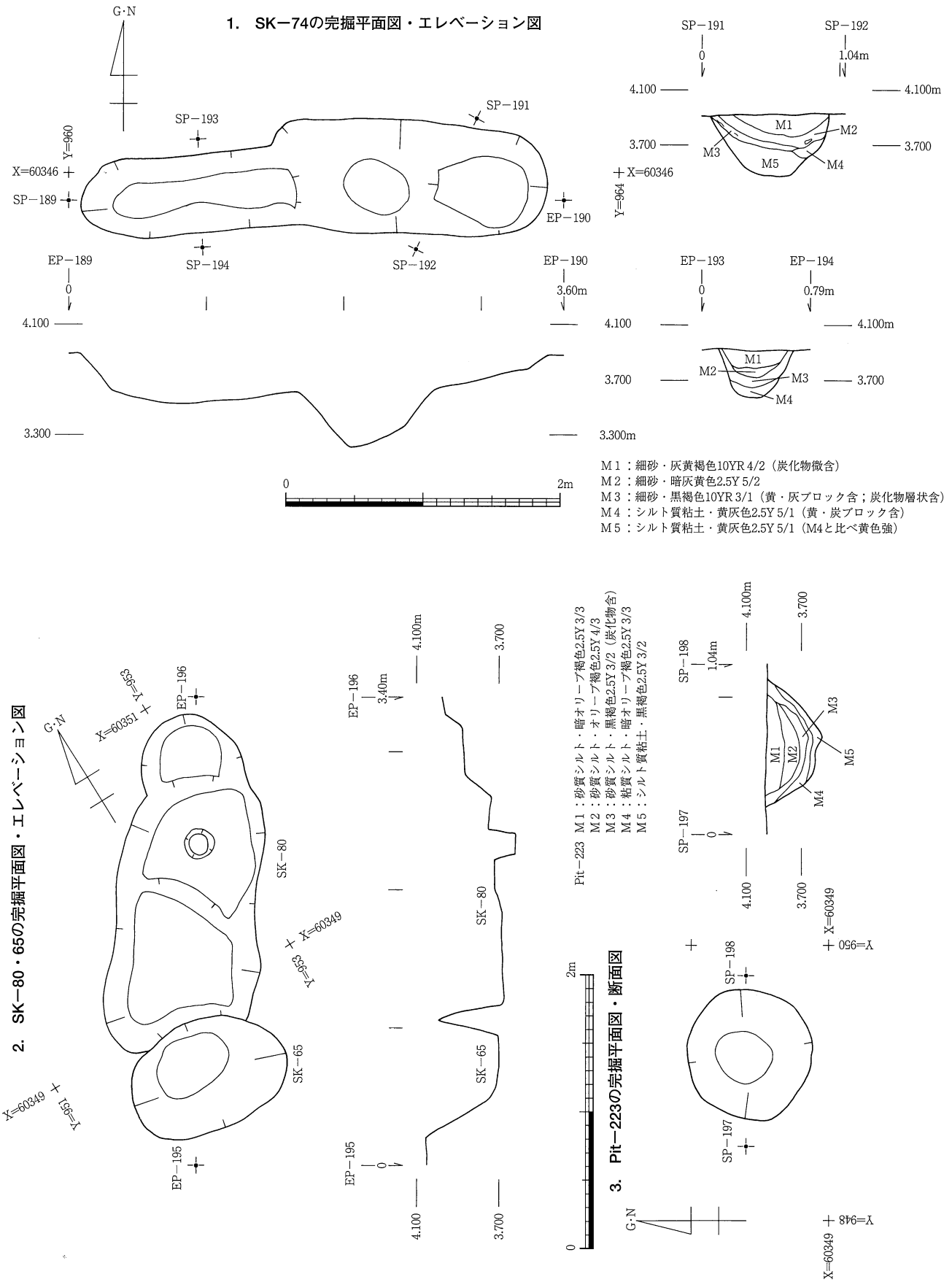


Fig.51　A4区溝状土坑 SK−74・80及びSK−65；Pit−223の遺構図（縮尺1/40）

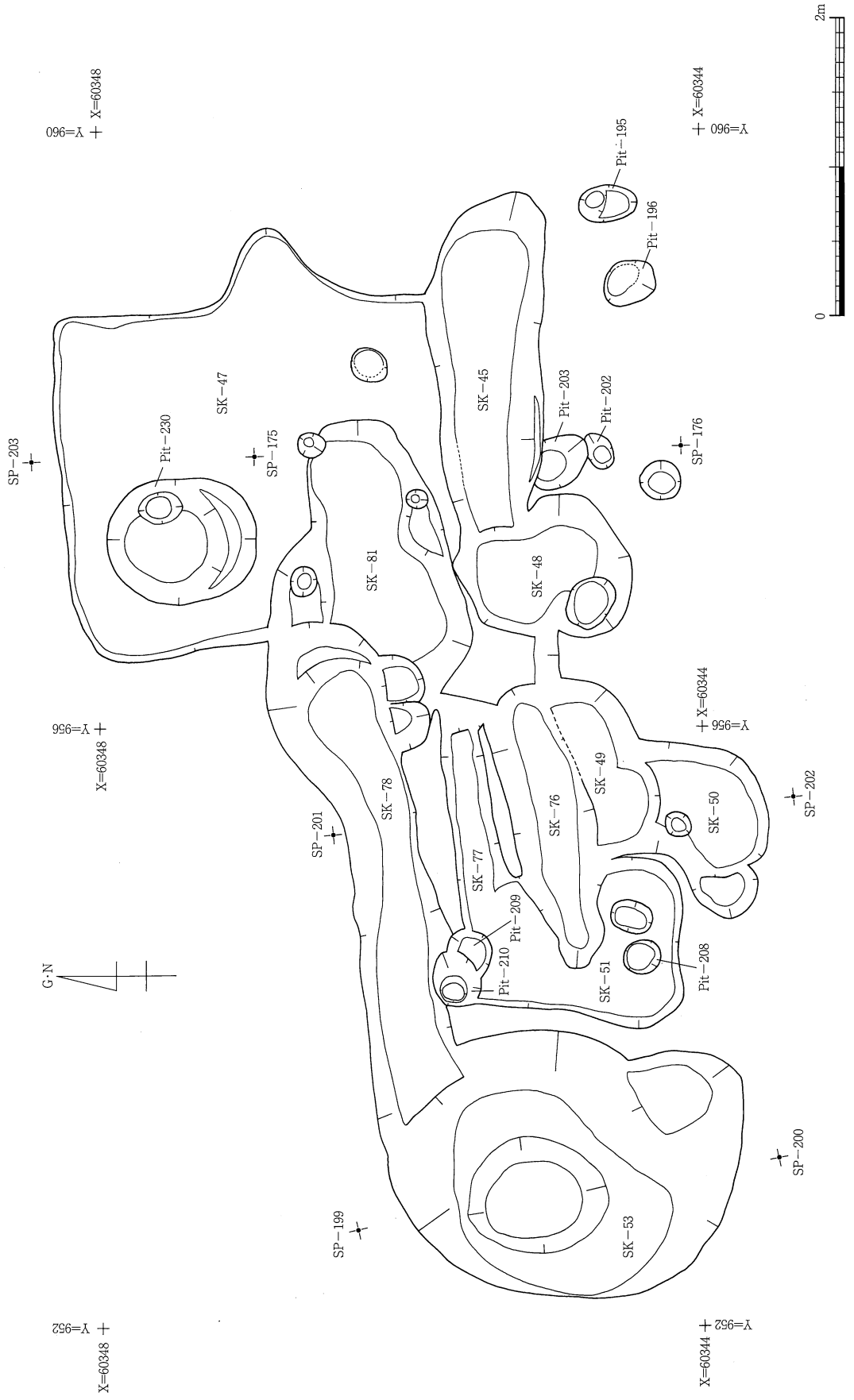
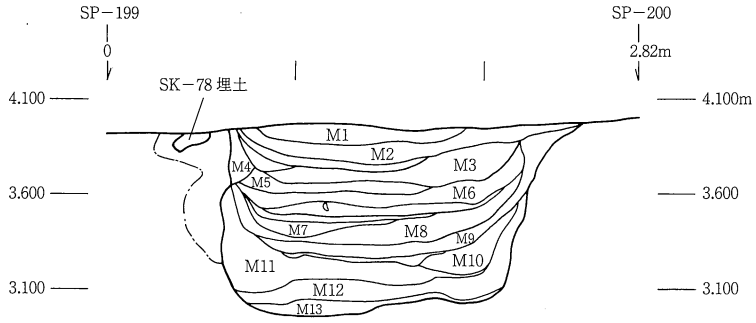


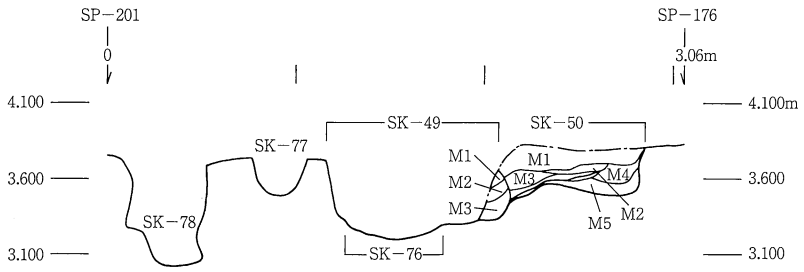
Fig.52　A4区中央弥生土坑群最密集部の完掘平面図（縮尺1/40）

1. 大型円形土坑SK－53



SK－53　Ｍ１：シルト・にぶい黄褐色10YR5/3
Ｍ２：砂質シルト・にぶい黄褐色10YR7/3
Ｍ３：砂質シルト・灰黄褐色10YR5/2
Ｍ４：砂礫・灰黄褐色10YR6/3（粒度が不揃い；径50㎜以下の礫）
Ｍ５：粘土・にぶい黄橙色10YR6/3（砂混）
Ｍ６：粘土・褐色10YR4/4（砂礫混）
Ｍ７：粗砂・褐灰色10YR5/1
Ｍ８：粗砂・褐灰色10YR4/1（細礫混）
Ｍ９：砂礫・黄灰色2.5Y5/1（径15㎜以下の礫）
Ｍ10：細砂・暗灰黄色2.5Y4/2（小礫混）
Ｍ11：砂礫・オリーブ褐色2.5Y4/7（径20㎜以下の礫；シルト混）
Ｍ12：砂礫・青灰色10BG5/1（粒度が不揃い；シルト混）
Ｍ13：腐植層・青灰色10YR4/1（水平ラミナあり；砂を挟む）

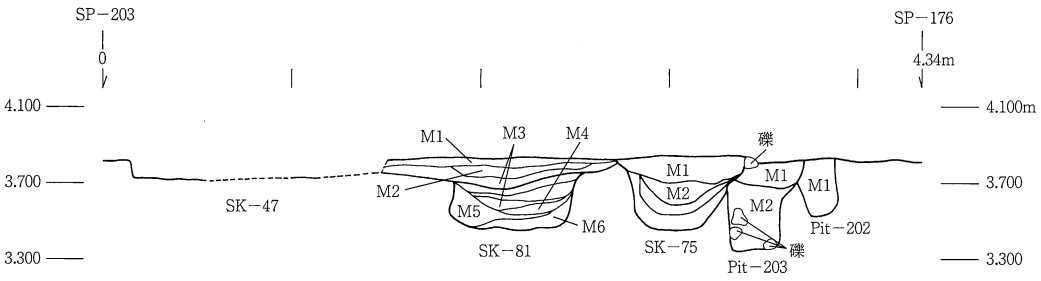
2. 溝状土坑列SK－78・77・76・49・50



SK－49　Ｍ１：シルト・オリーブ褐色2.5Y4/3（粘性あり）
Ｍ２：シルト・暗オリーブ褐色2.5Y3/3（粘性あり）
Ｍ３：シルト・暗オリーブ褐色2.5Y3/3（M2より粘性強）

SK－50　Ｍ１：シルト・にぶい黄褐色10YR4/3（炭化物少含）
Ｍ２：シルト・暗褐色10YR3/3
Ｍ３：シルト・黒褐色10YR3/2
Ｍ４：シルト・暗褐色10YR3/4
Ｍ５：シルト・暗オリーブ褐色2.5Y3/3（粘性あり）

3. 切合遺構SK－47・81・75；Pit・203・202



SK－47
Ｍ１：シルト・にぶい黄褐色10YR5/3（砂少含；炭化物微含）
Ｍ２：シルト・にぶい黄褐色10YR5/3（灰色砂・炭化物微含；小礫少含）
Ｍ３：シルト質砂・にぶい黄褐色10YR4/3（灰色砂・炭化物含）
SK－81
Ｍ１：シルト質砂・にぶい黄褐色10YR4/3（灰色砂・炭化物・小礫少含）
Ｍ２：Ｍ１に黄ブロック混
Ｍ３：シルト質砂・褐灰色10YR4/1（灰色砂・炭化物微含）
Ｍ４：シルト質砂・黒褐色10YR3/2（炭化物微含）
Ｍ５：シルト質砂・褐灰色10YR4/1（炭化物・焼土ブロック・黄ブロック微含）
Ｍ６：シルト・灰黄褐色10YR4/2（黄ブロック斑混；炭化物微含）
SK－75
Ｍ１：砂質シルト・灰黄褐色10YR5/2（灰色砂・炭化物微含）
Ｍ２：砂質シルト・灰黄褐色10YR4/2（小礫微含）
Ｍ３：シルト質砂・褐灰色10YR4/1（黄ブロック・小礫微含）
Ｍ４：シルト質粘土・黒褐色2.5Y3/1（炭化物・焼土微含）
Pit－203
Ｍ１：シルト・灰黄褐色10YR4/2（炭化物・土器片微含）
Ｍ２：シルト・黒褐色10YR3/1（やや粘性あり；炭化物・黄ブロック微含）
Pit－202
Ｍ１：シルト・灰黄褐色10YR4/2（炭化物・黄ブロック微含）

Fig.53　A4区土坑SK－47・49・50・53・75・76・77・78・81及びPit－202・203の断面図・エレベーション図（縮尺1/40）

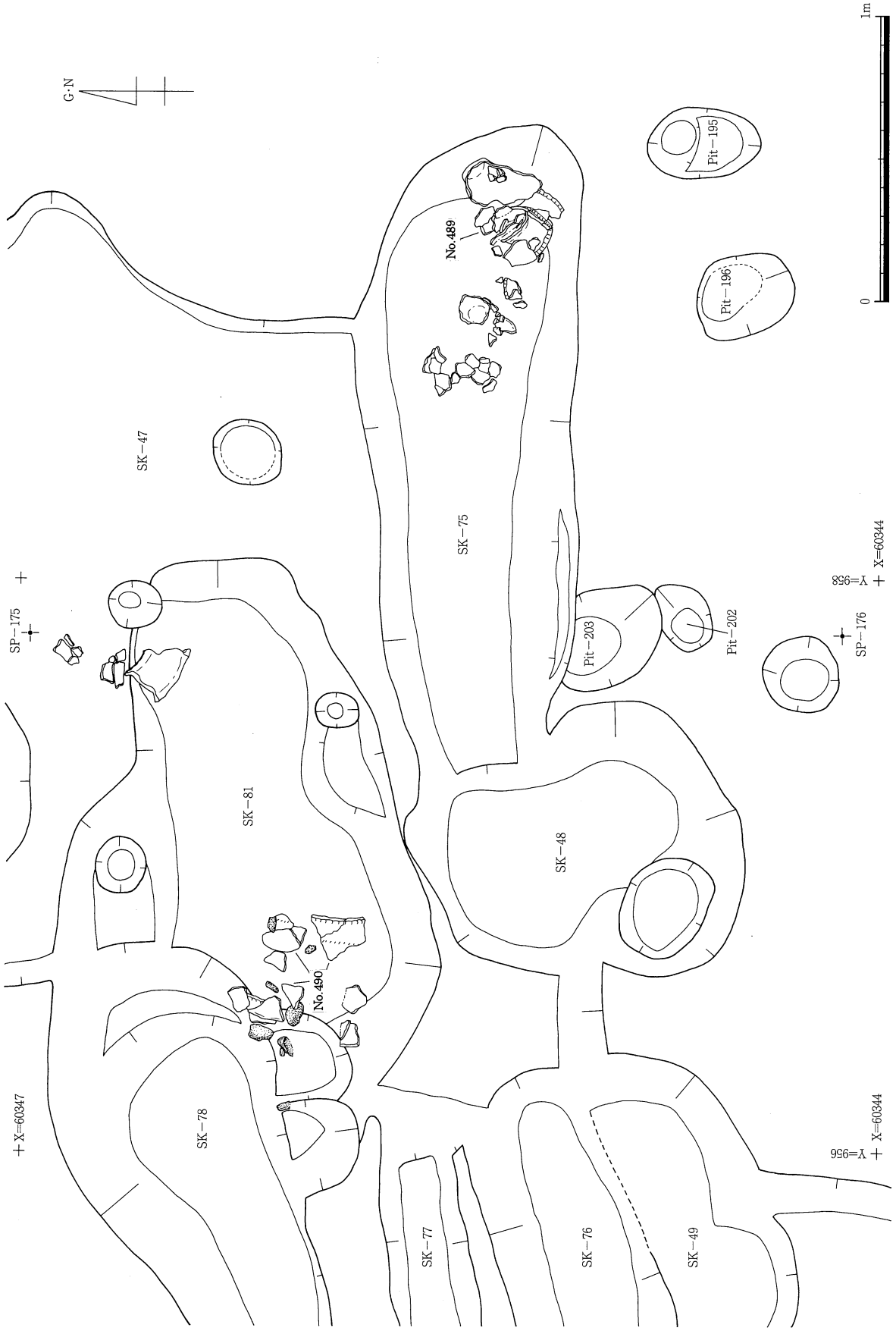


Fig.54　A4区中央の遺構最密集群における弥生土器出土平面図（縮尺1/20）

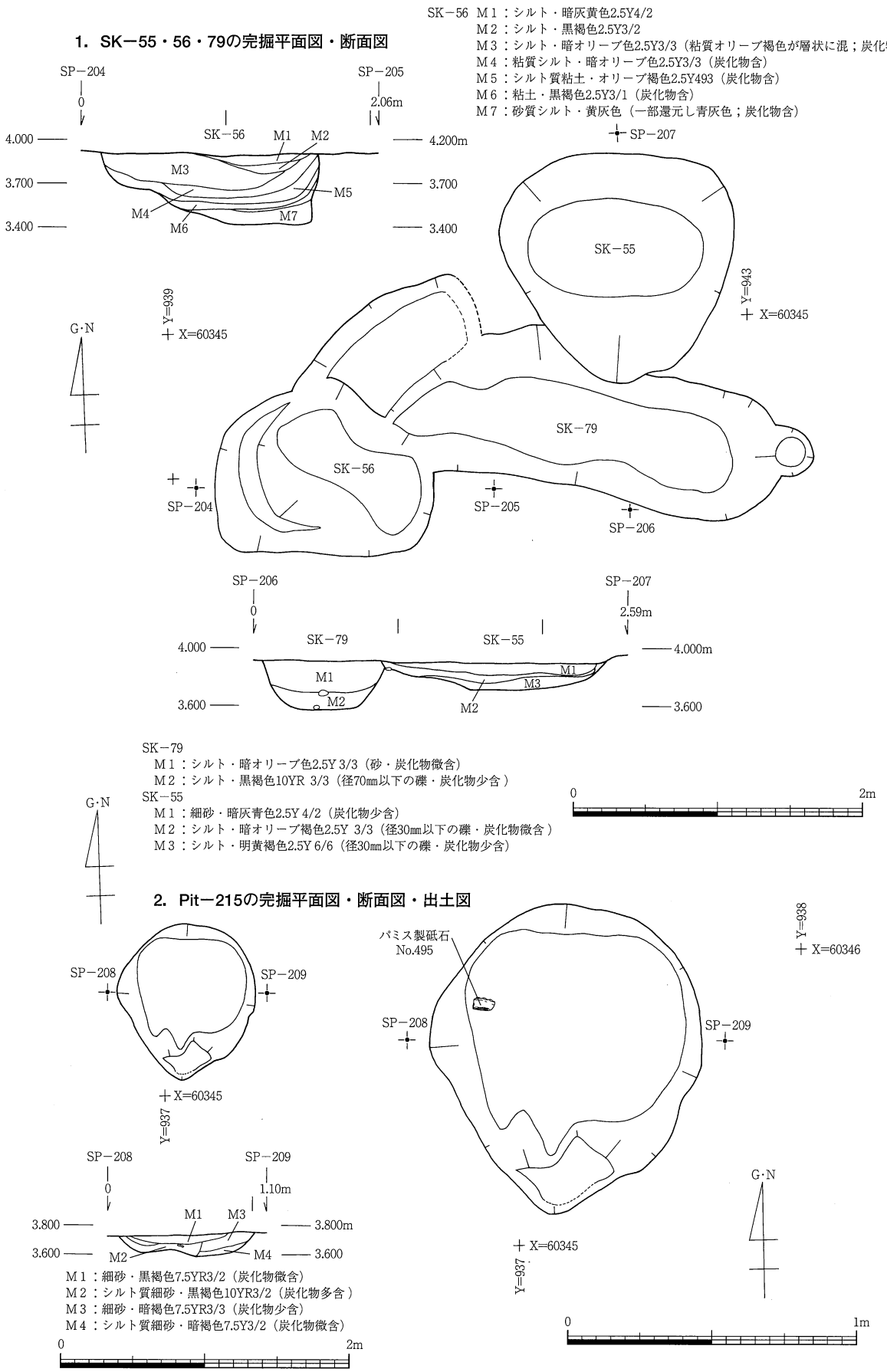


Fig.55　A4区弥生の切合土坑SK−56・57・79及び縄文晩期のPit−215の遺構図（縮尺1/40；1/20）

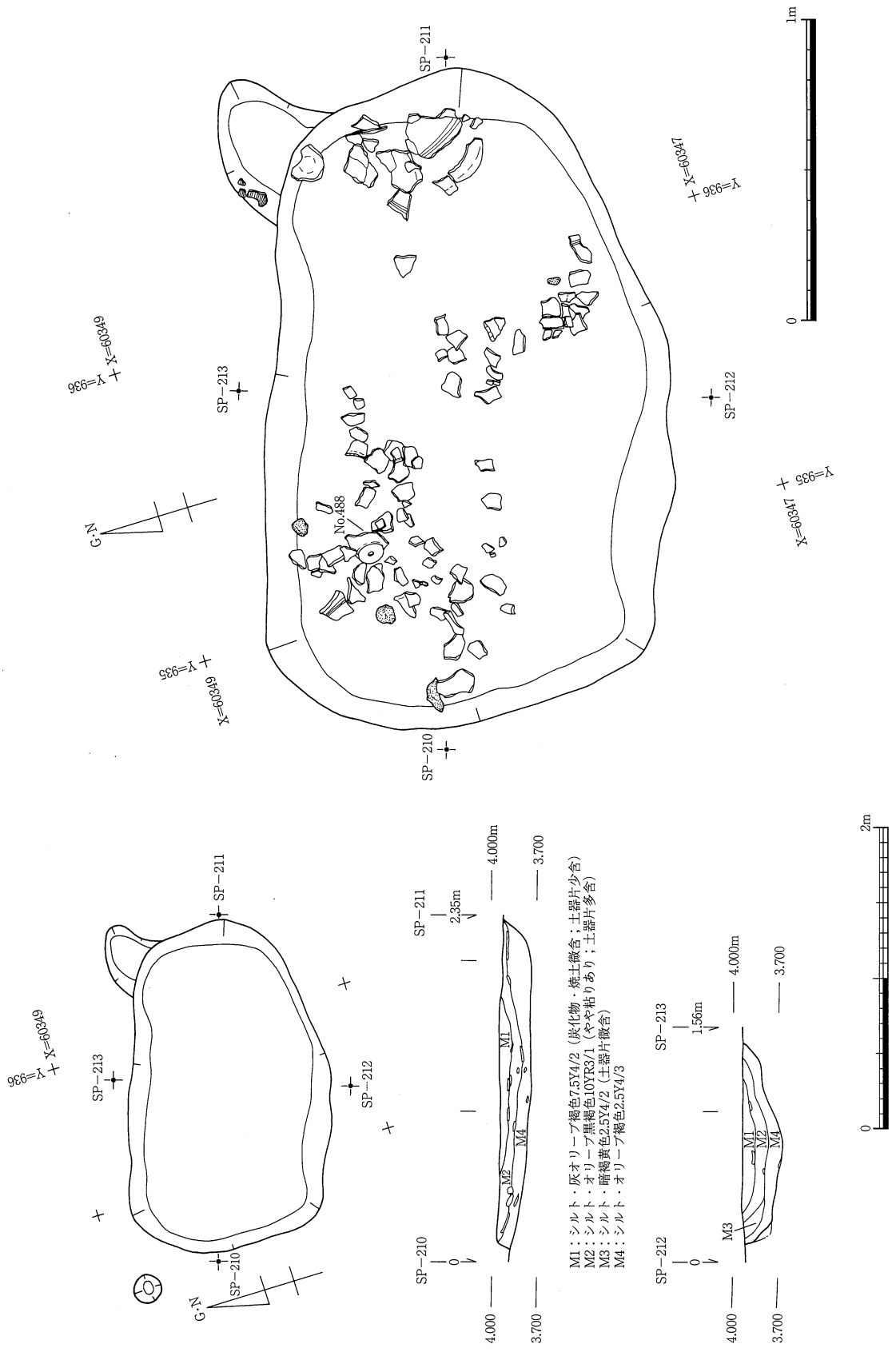
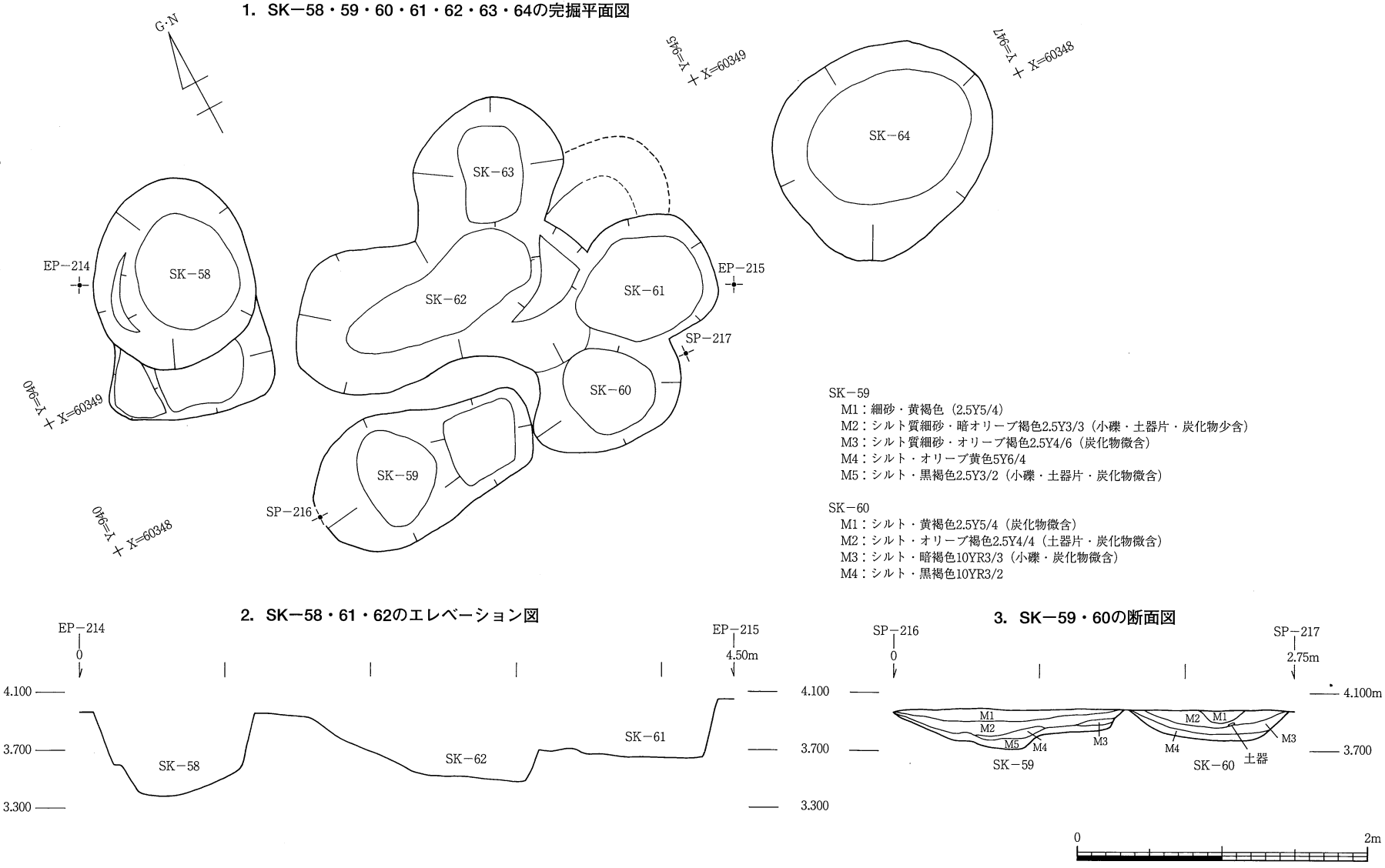


Fig.56　A4区弥生土坑SK−57の遺構図・遺物出土平面図（縮尺1/40；1/20）

Fig.57　A4区西北部における弥生土坑SK−58・59・60・61・62・63・64の遺構図（縮尺1/40）



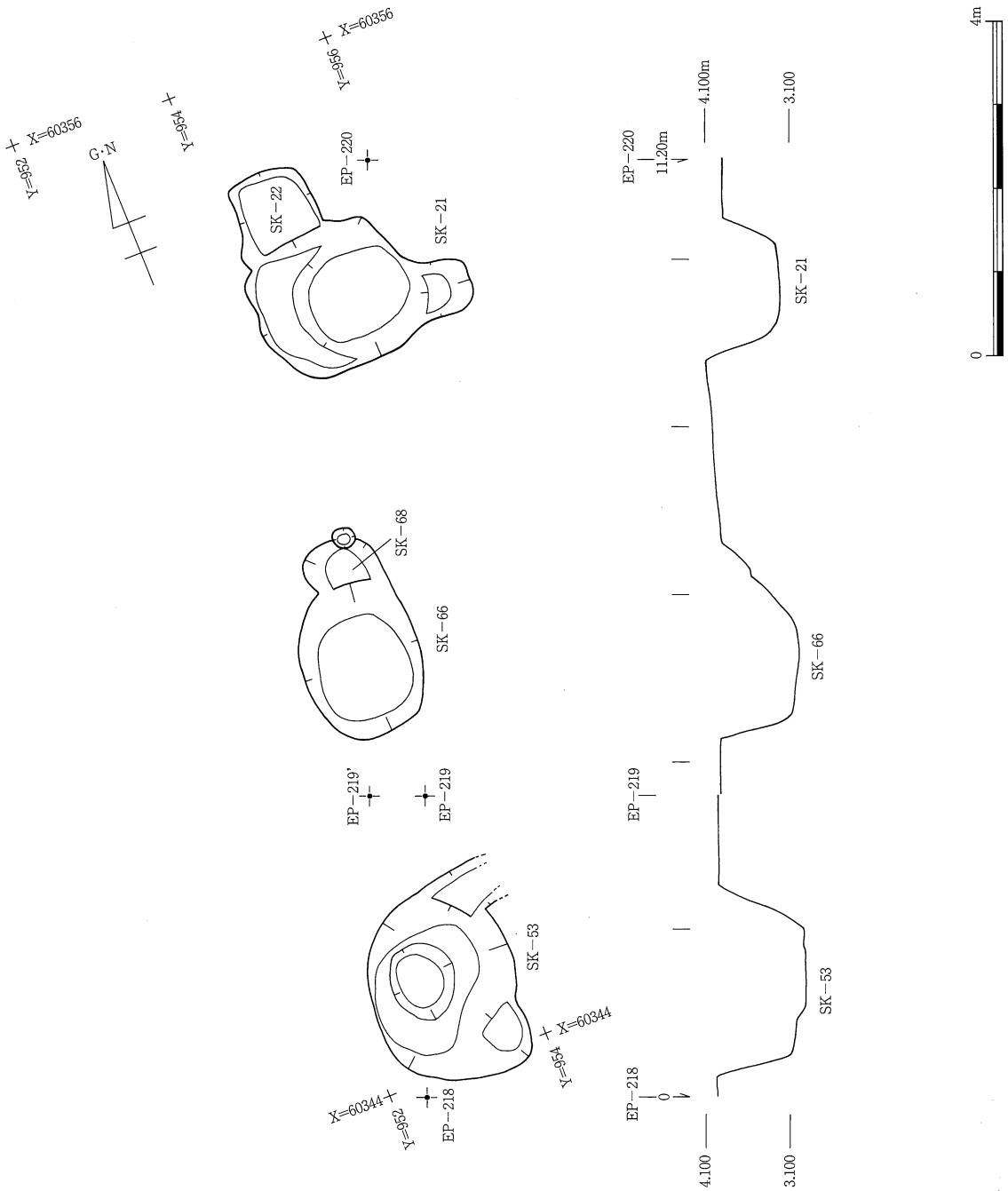


Fig.58　A4区中北部の深底型土坑列の遺構図（縮尺1/80）

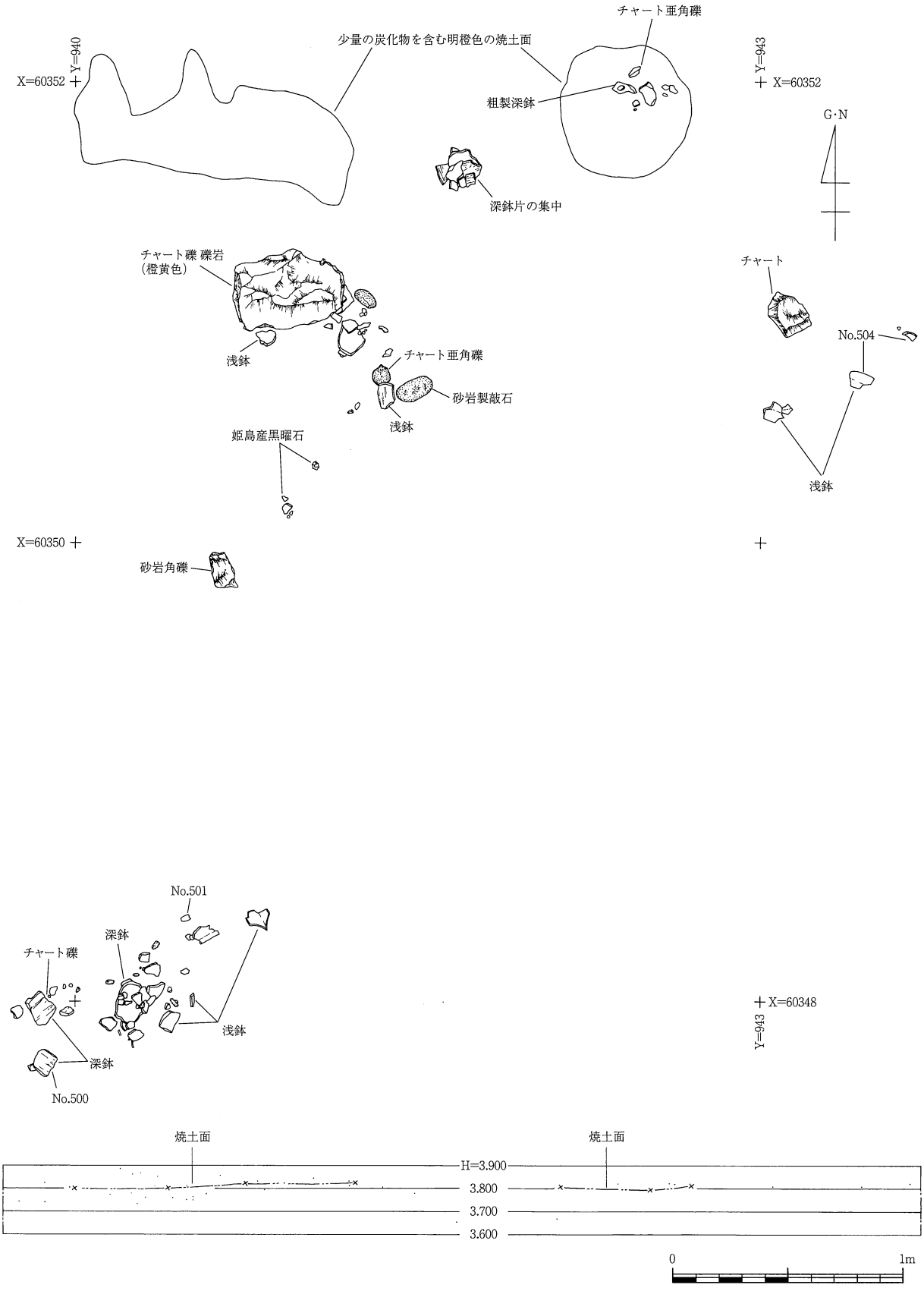


Fig.59　A4区西北部縄文晩期包含層における遺物及び焼土面の平面検出状況とそれらの垂直分布（縮尺1/25）

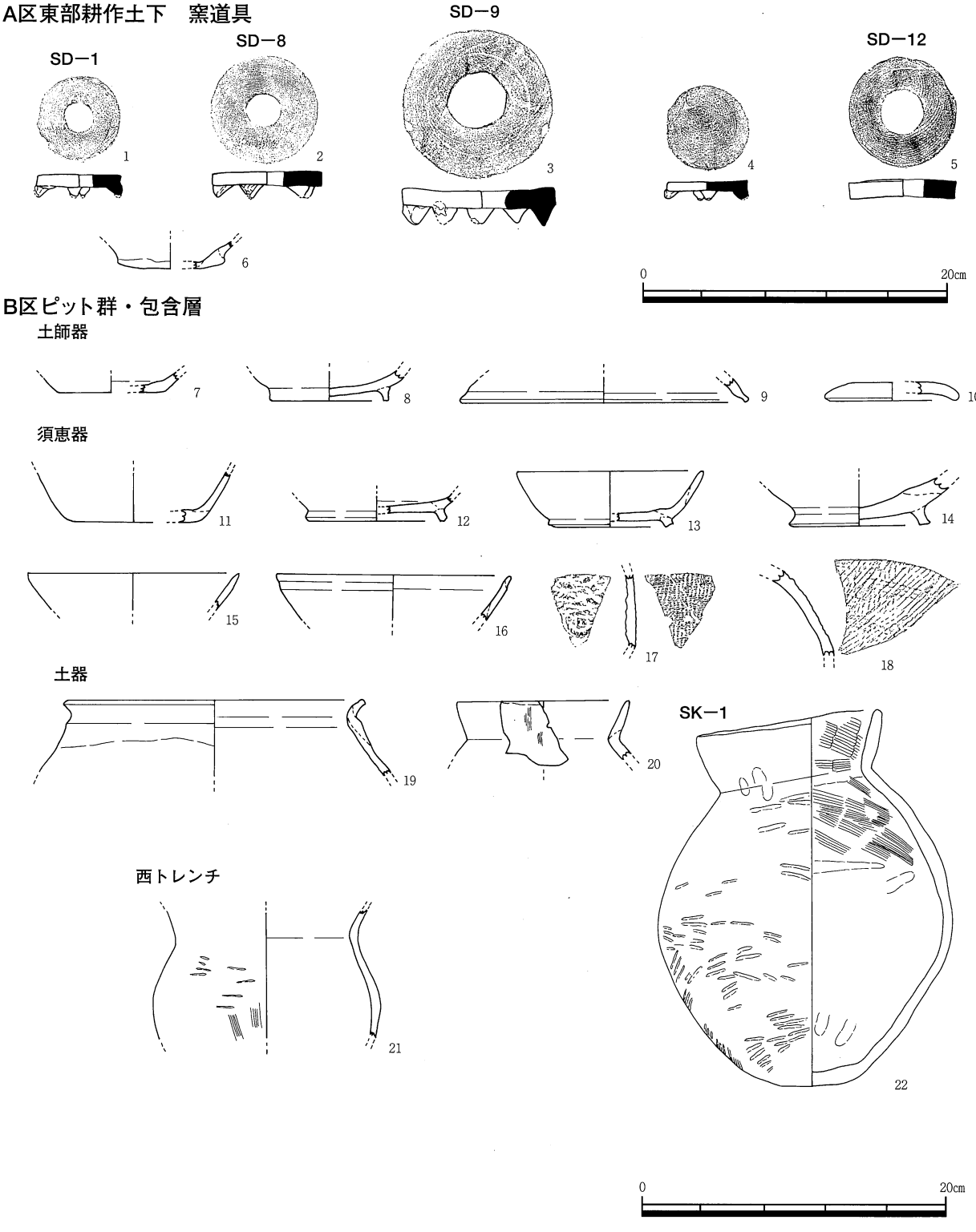


Fig.60　A区耕作土下；B区出土遺物実測図：A区畝溝SD−1・8・9・12；B区ピット群・SK−1

SD－17　土師器

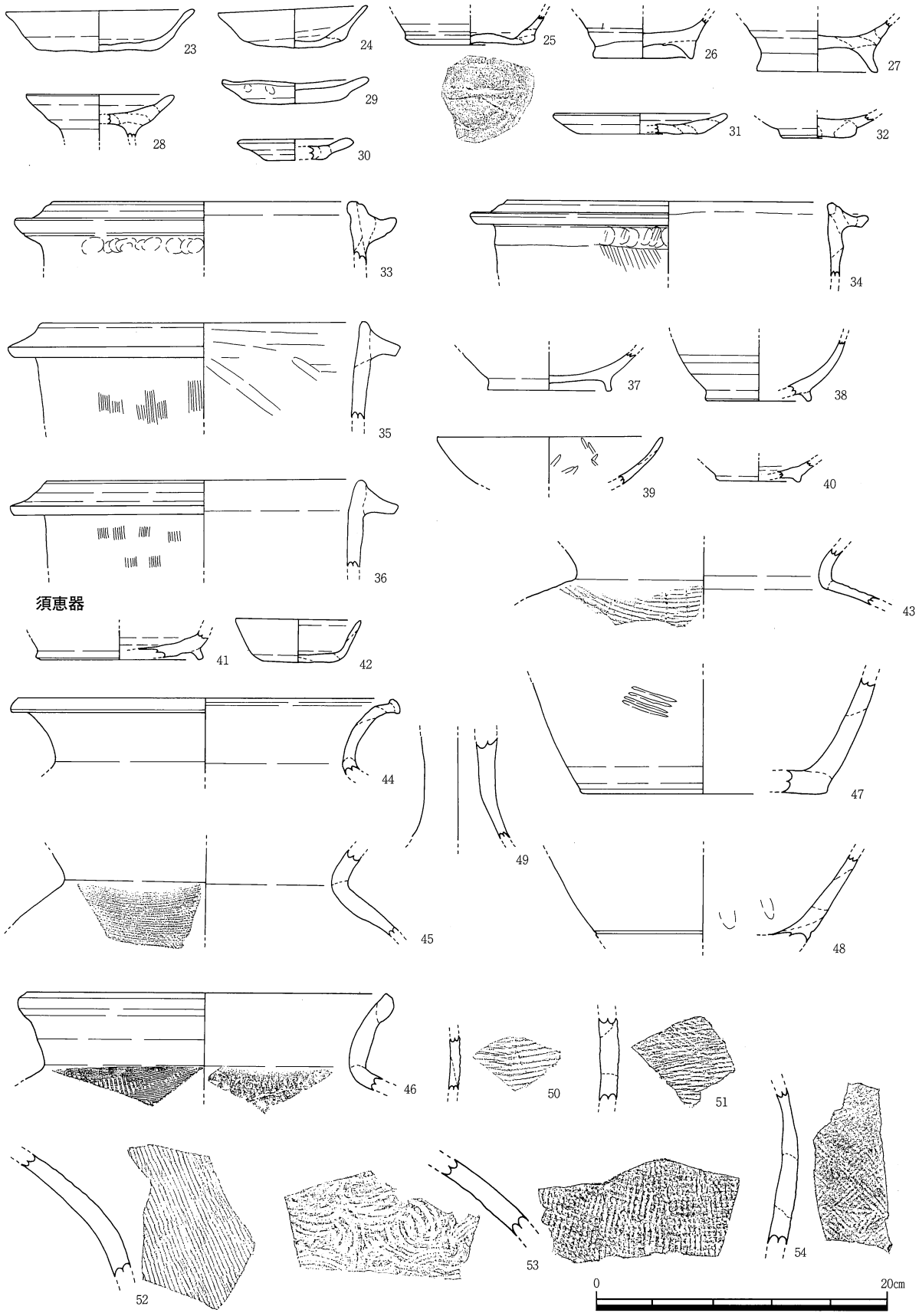


Fig.61　A区出土遺物実測図：SD－17

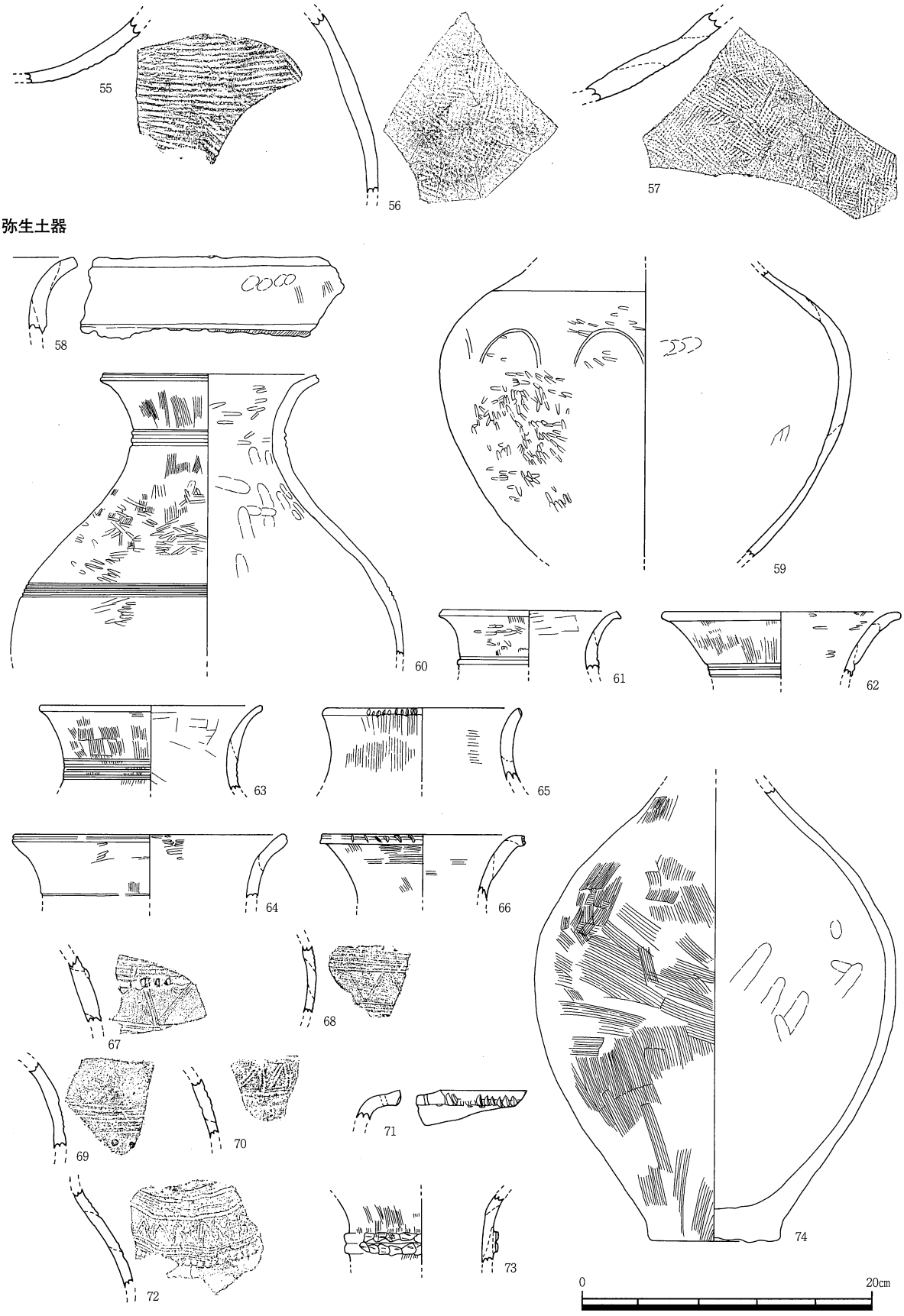


Fig.62　A区出土遺物実測図：SD−17

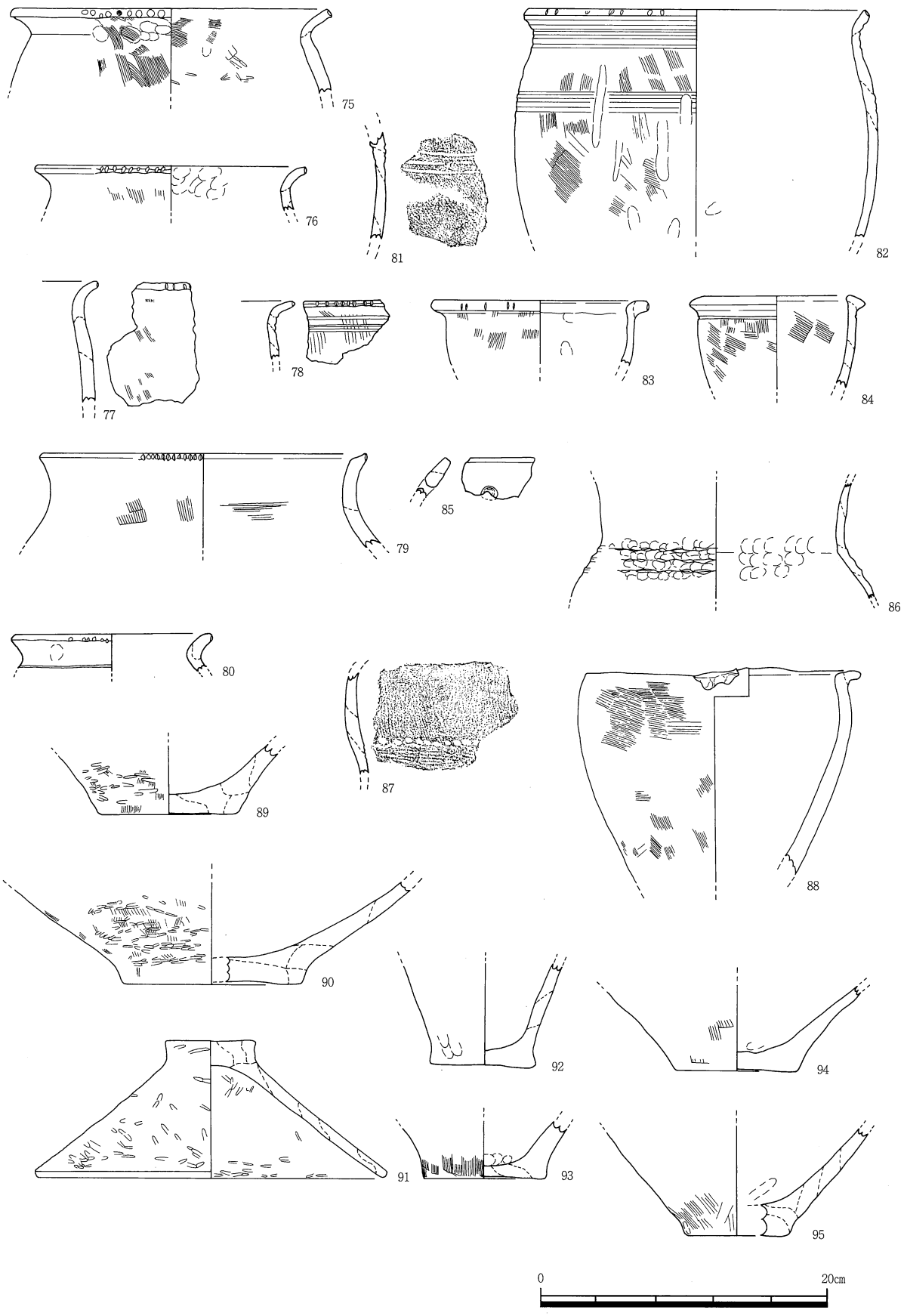


Fig.63　A区出土遺物実測図：SD−17

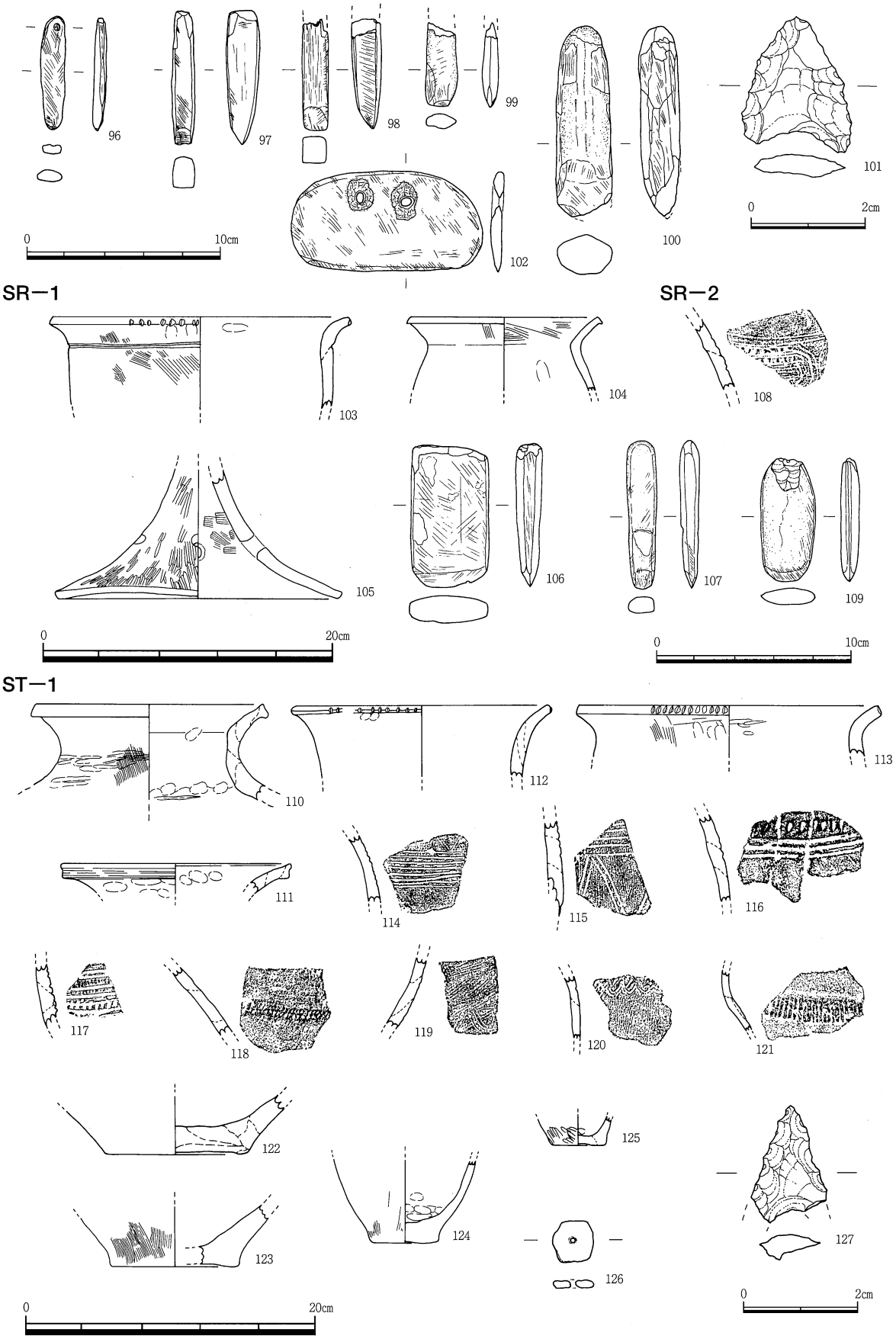
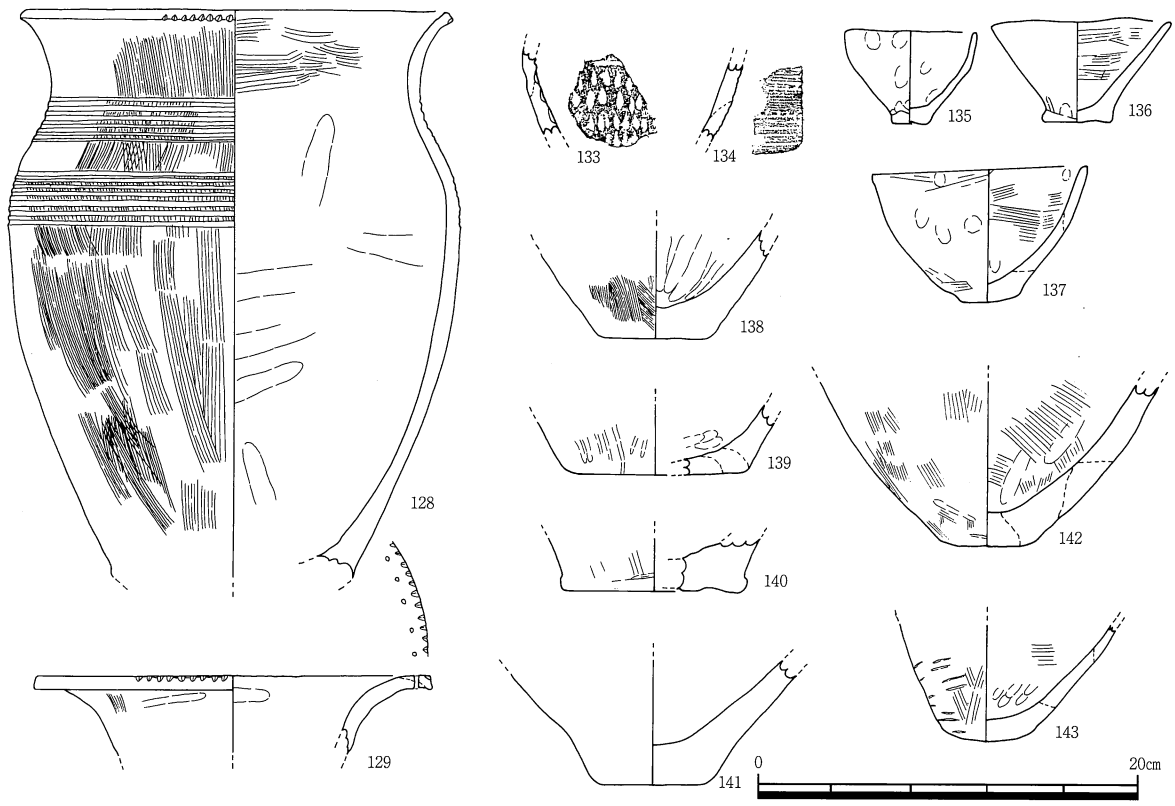


Fig.64　A区出土遺物実測図：SD−17；SR−1･2；ST−1

ST−2



SK−3

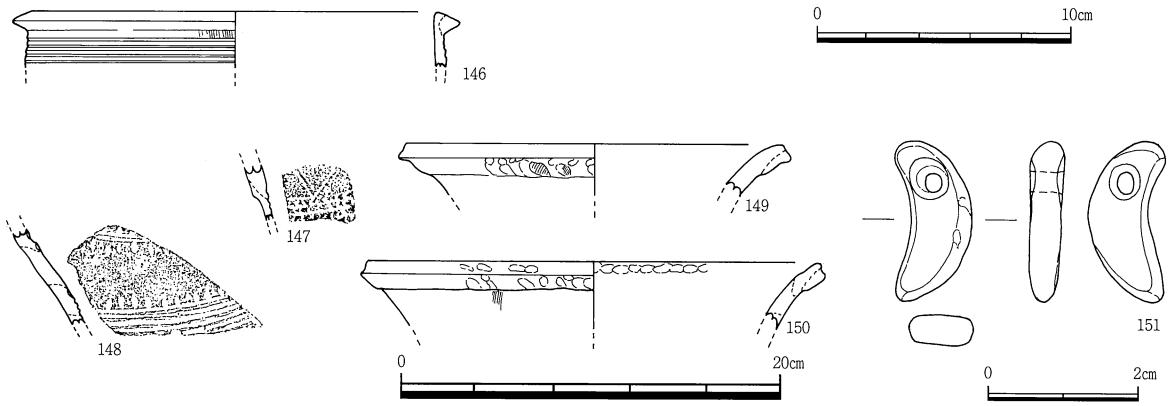


Fig.65　A1区出土遺物実測図：ST−2；SK−3

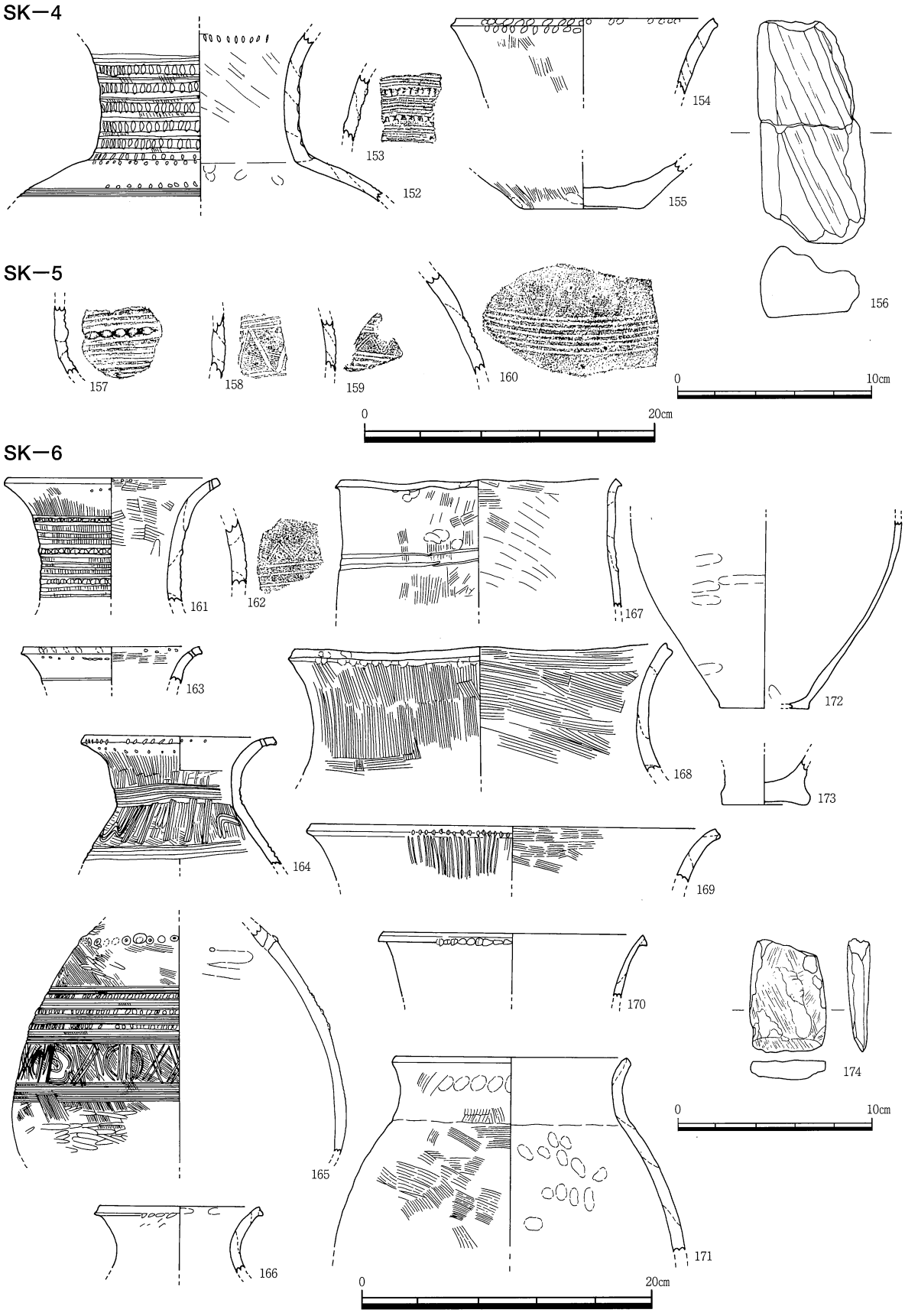


Fig.66　A1区出土遺物実測図：SK−4・5・6

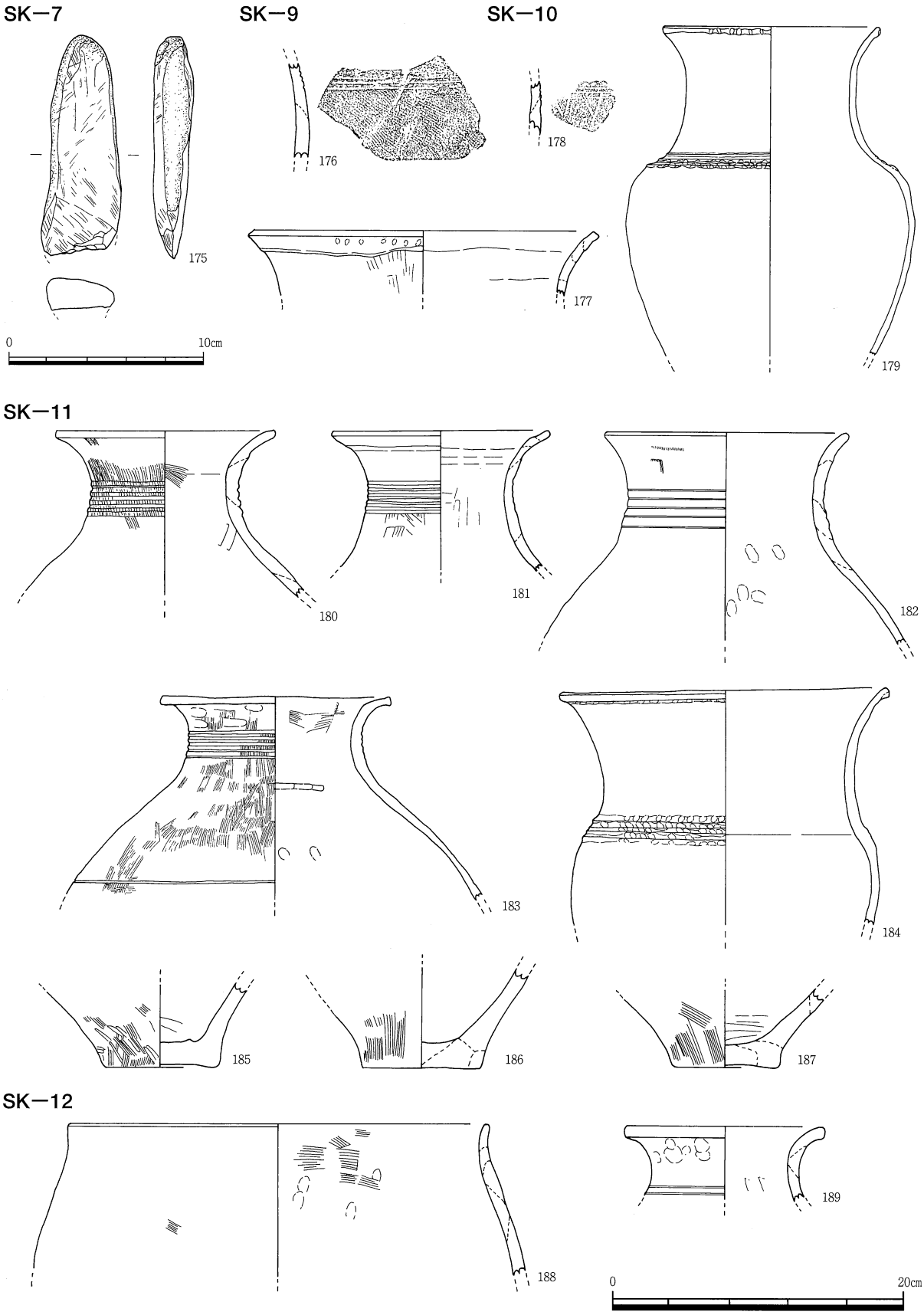


Fig.67　A1区出土遺物実測図：SK−7・9・10・11・12

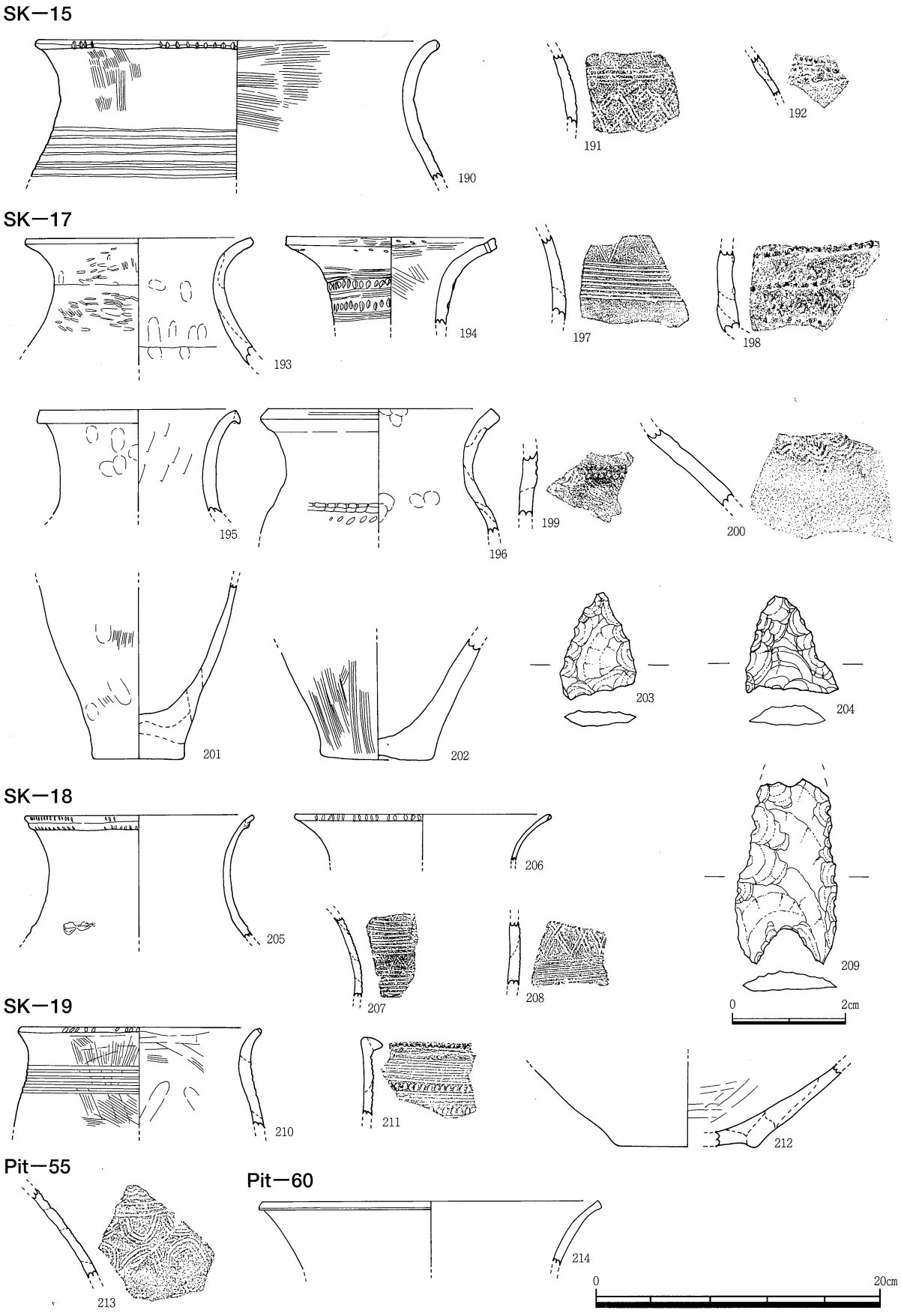


Fig.68　A1区出土遺物実測図：SK−15・17・18・19；Pit−55・60

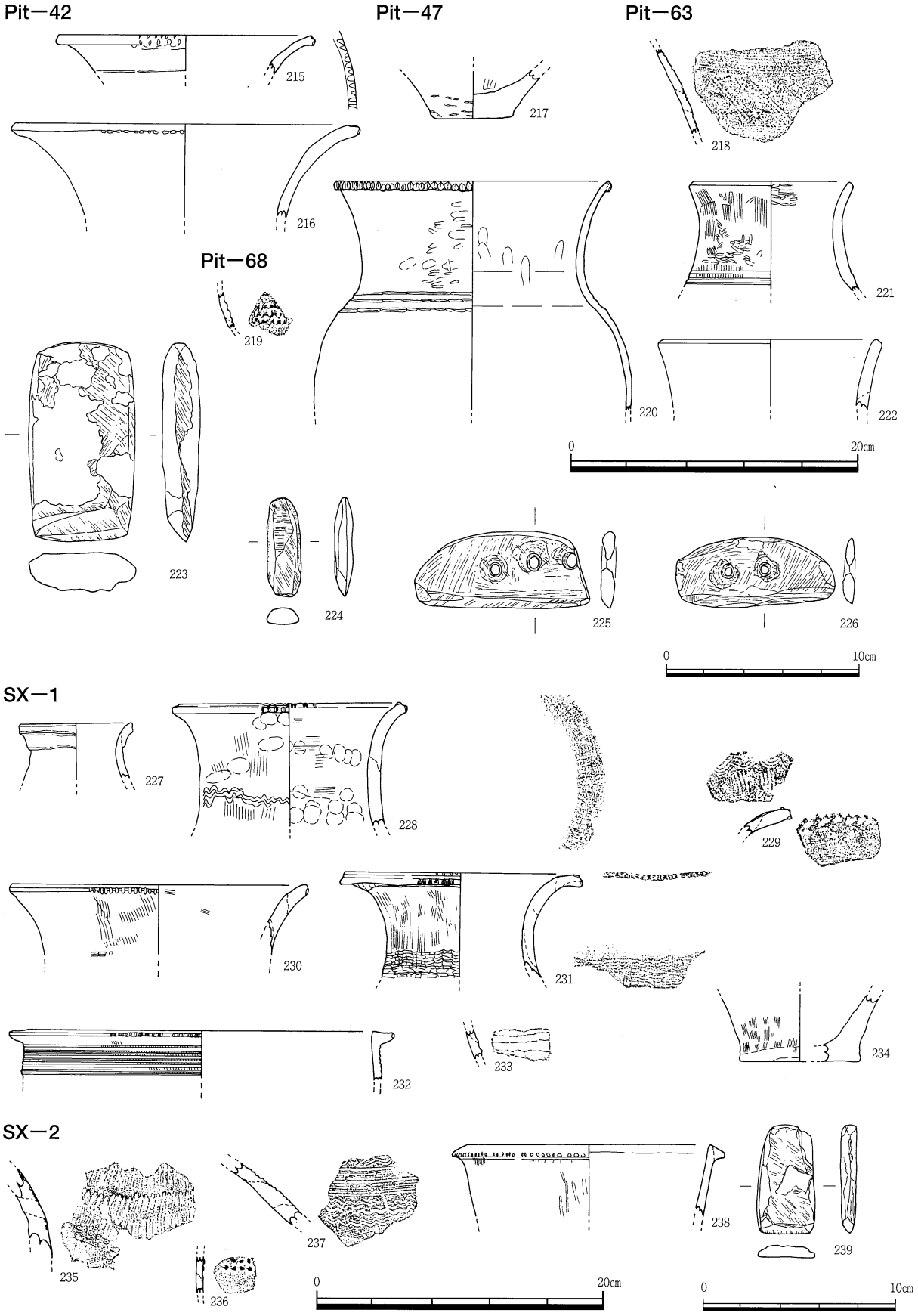


Fig.69　A1区出土遺物実測図：Pit−42・47・63・68；SX−1・2

検出面

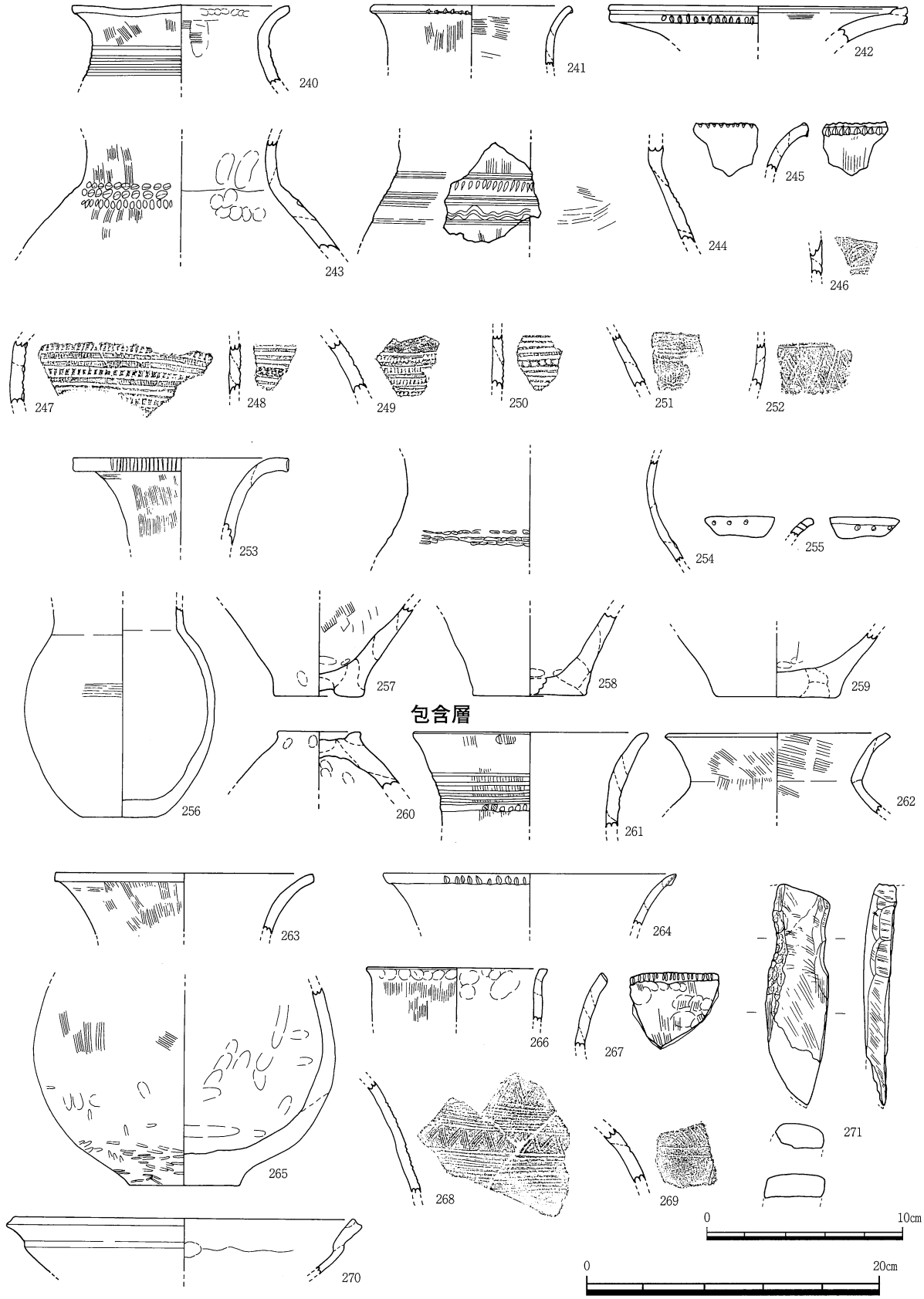
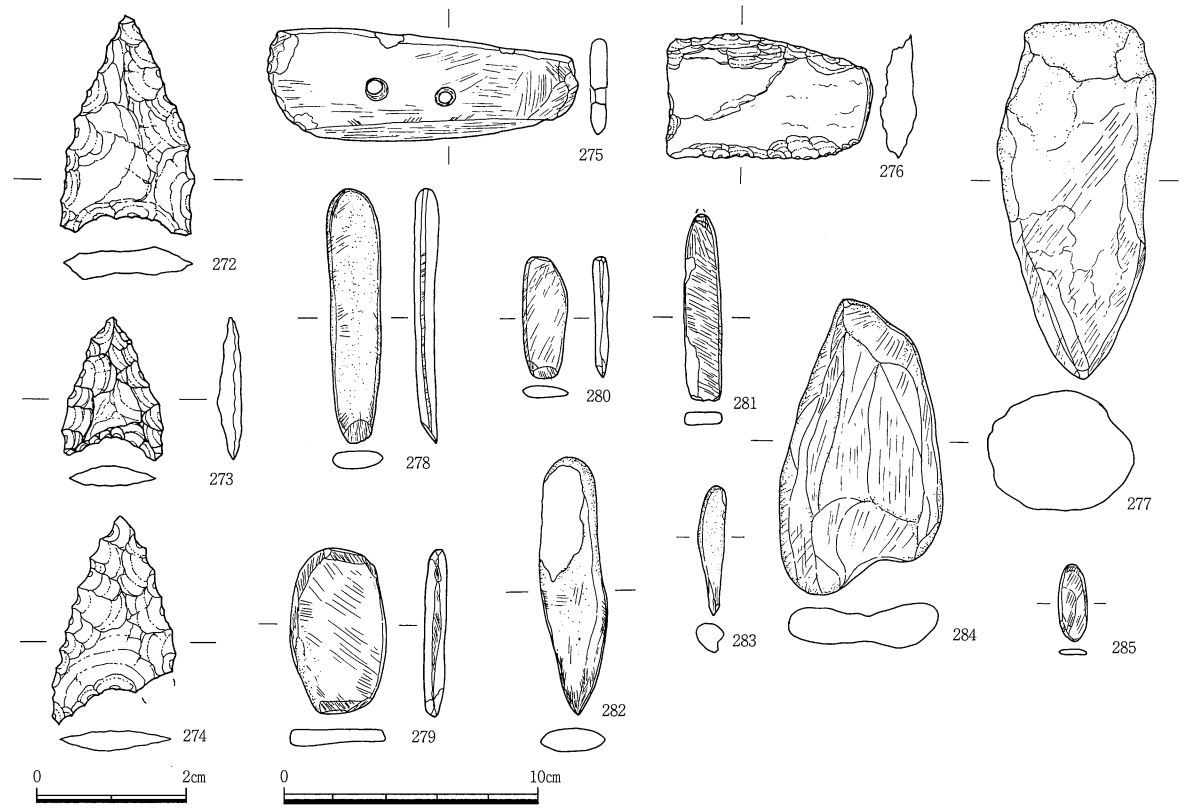


Fig.70　A1区出土遺物実測図：弥生遺構検出面；遺物包含層（弥生）



北トレンチ

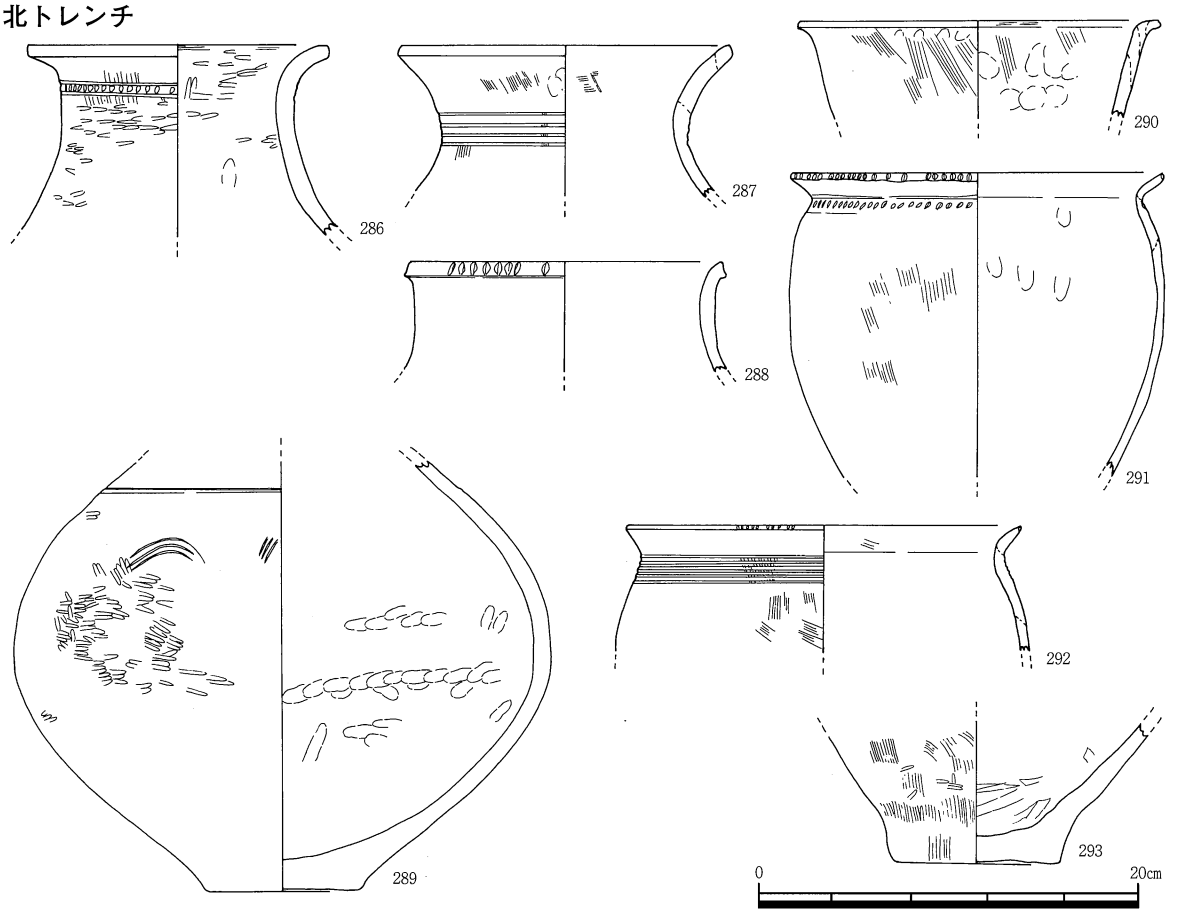


Fig.71　A1区出土遺物実測図：遺物包含層（弥生）；北トレンチ

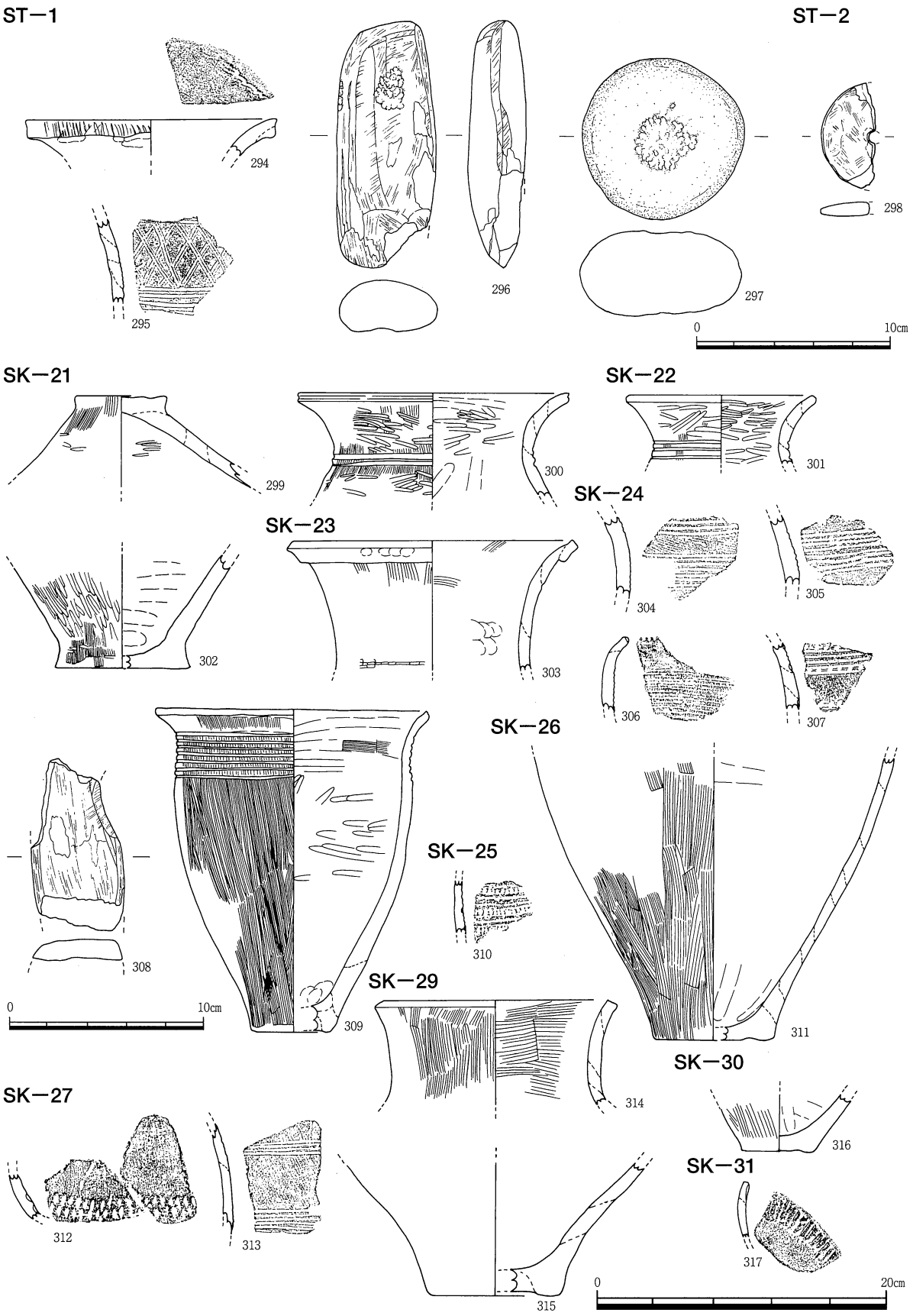


Fig.72　A2区出土遺物実測図：ST−1・2；SK−21・22・23・24・25・26・27・29・30・31

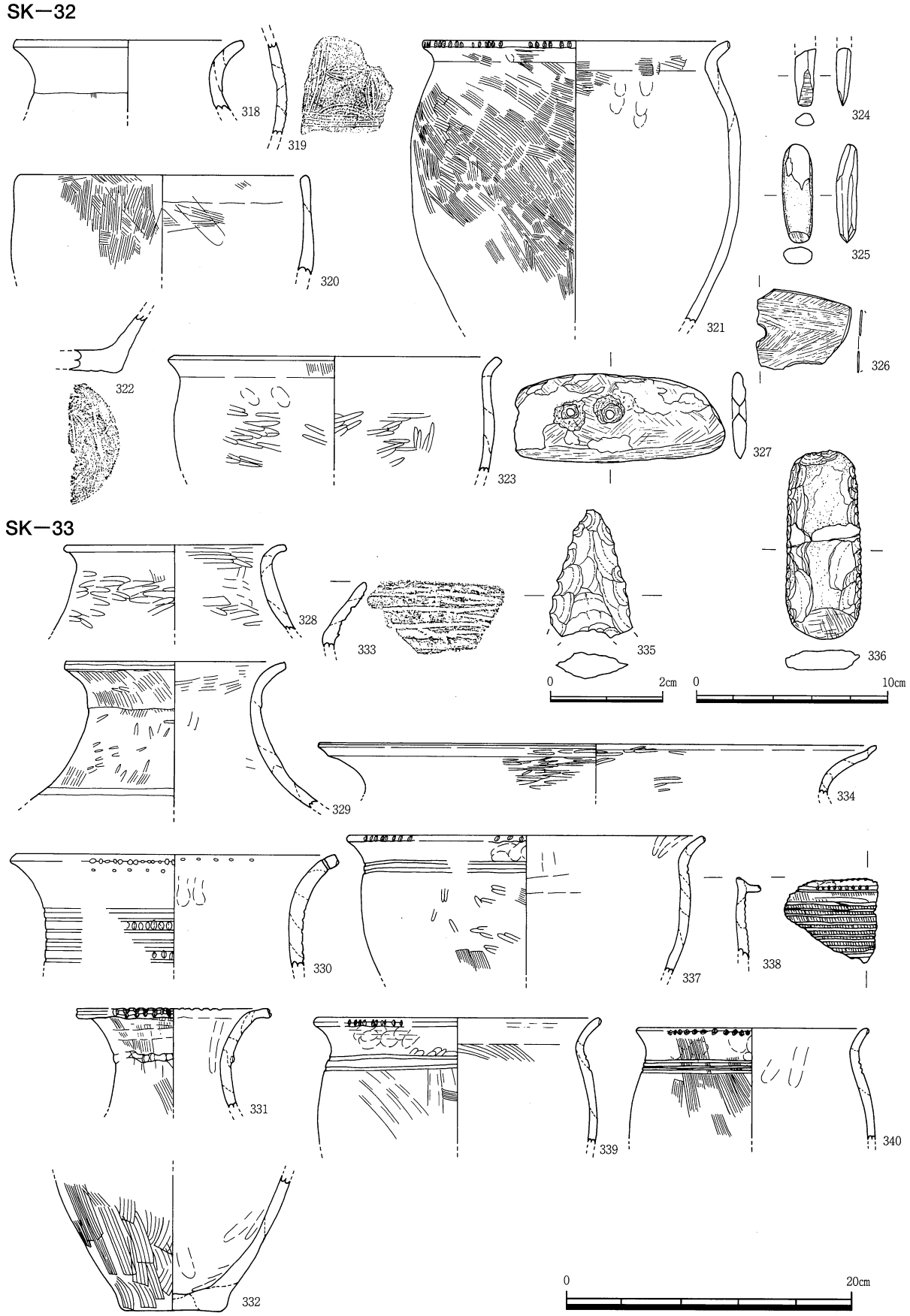


Fig.73　A2区出土遺物実測図：SK−32・33

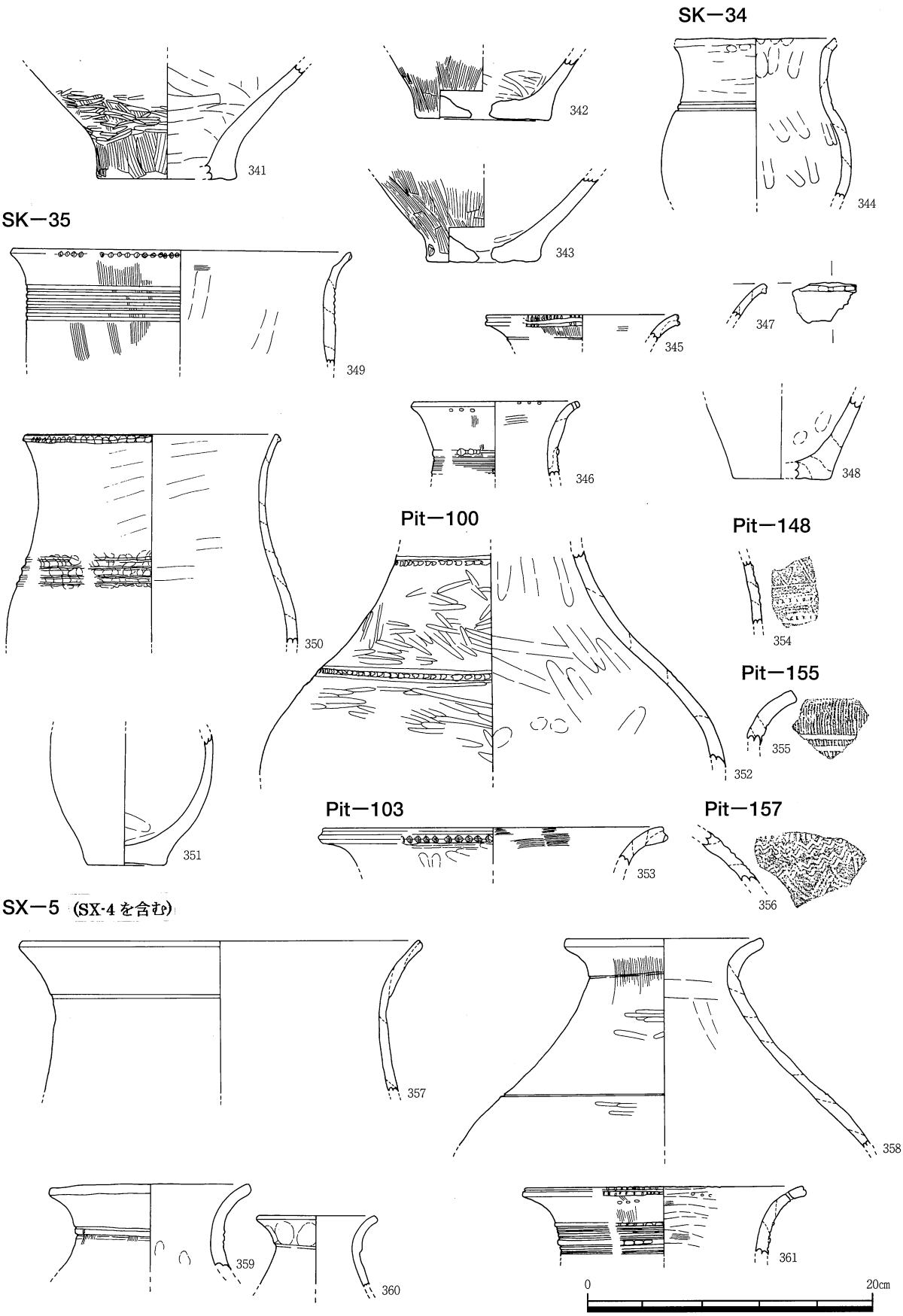


Fig.74　A2区出土遺物実測図：SK−33・34・35；Pit−100・103・148・155・157；SX−5

Fig.75　A2区出土遺物実測図：SX−5

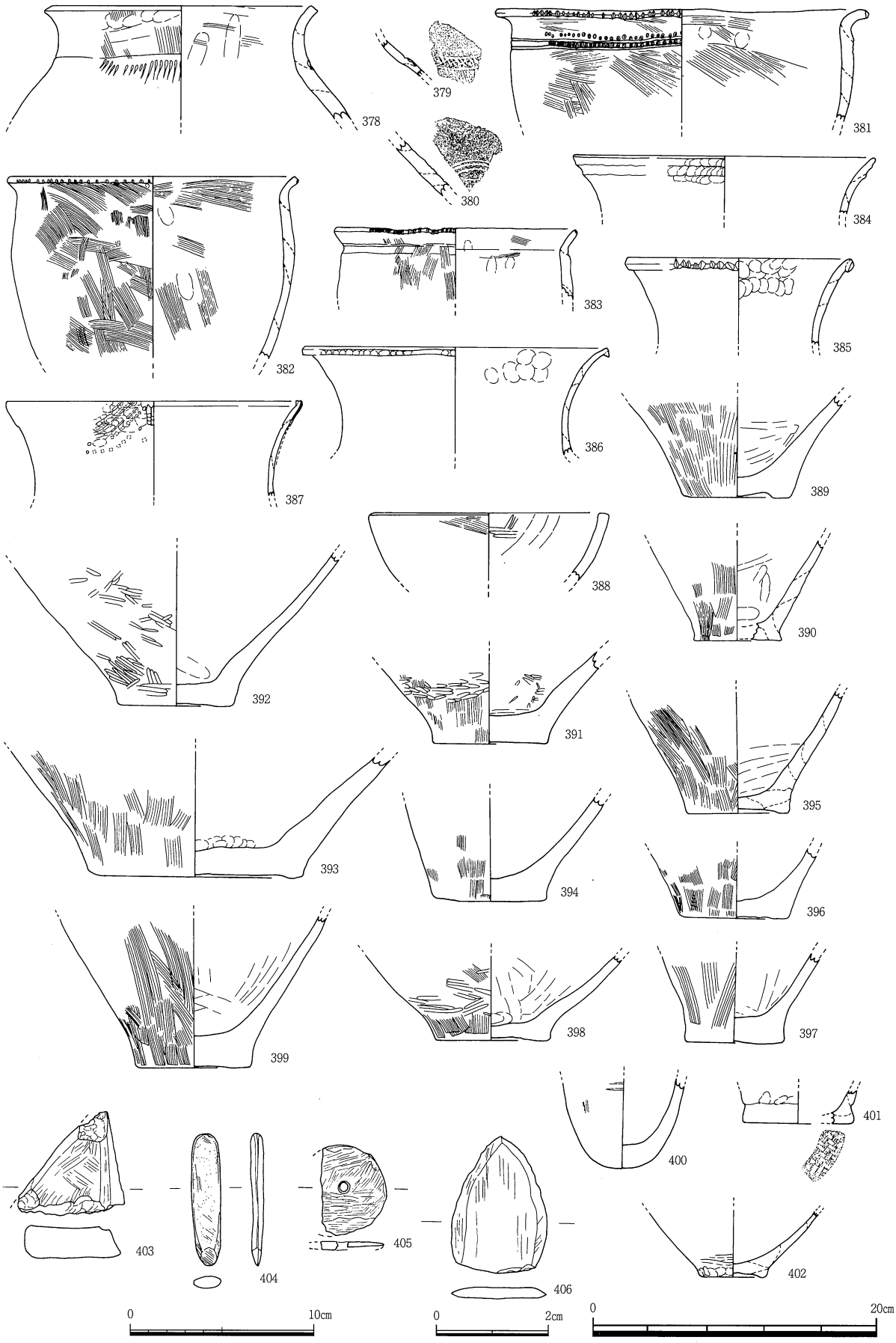


Fig.76　A2区出土遺物実測図：SX－5

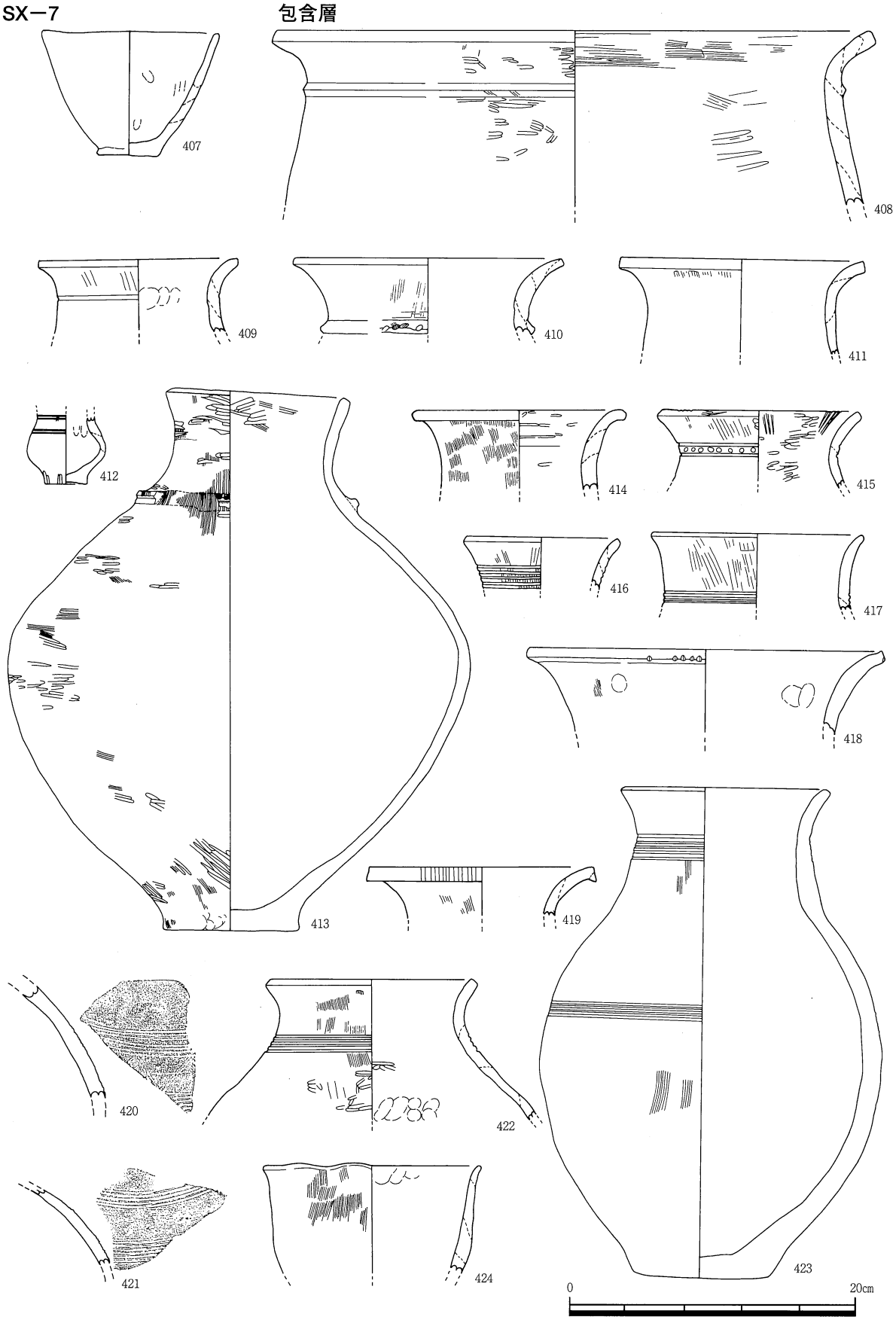


Fig.77　A2区出土遺物実測図：SX−7；遺物包含層（弥生）

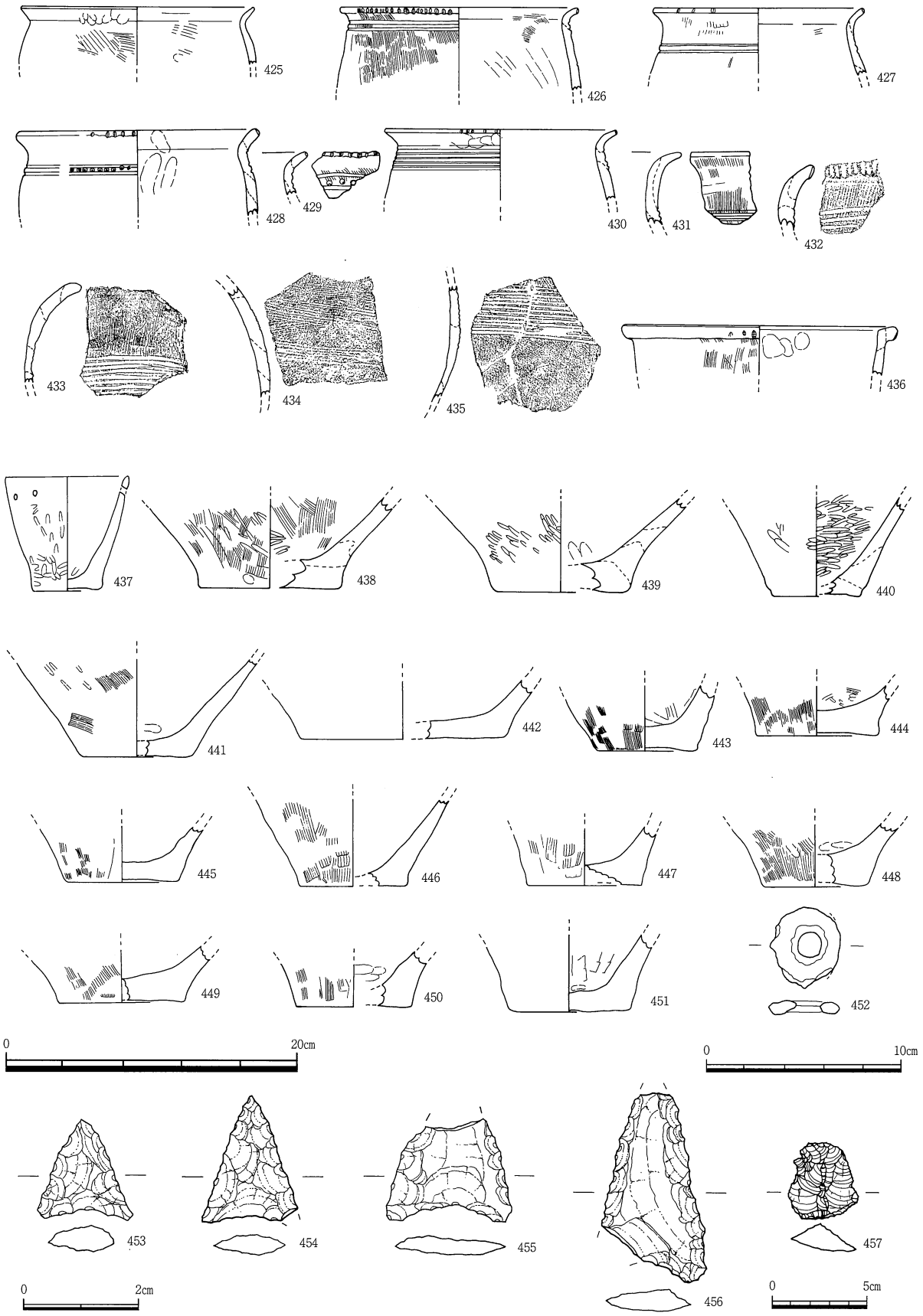


Fig.78　A2区出土遺物実測図：遺物包含層（弥生）

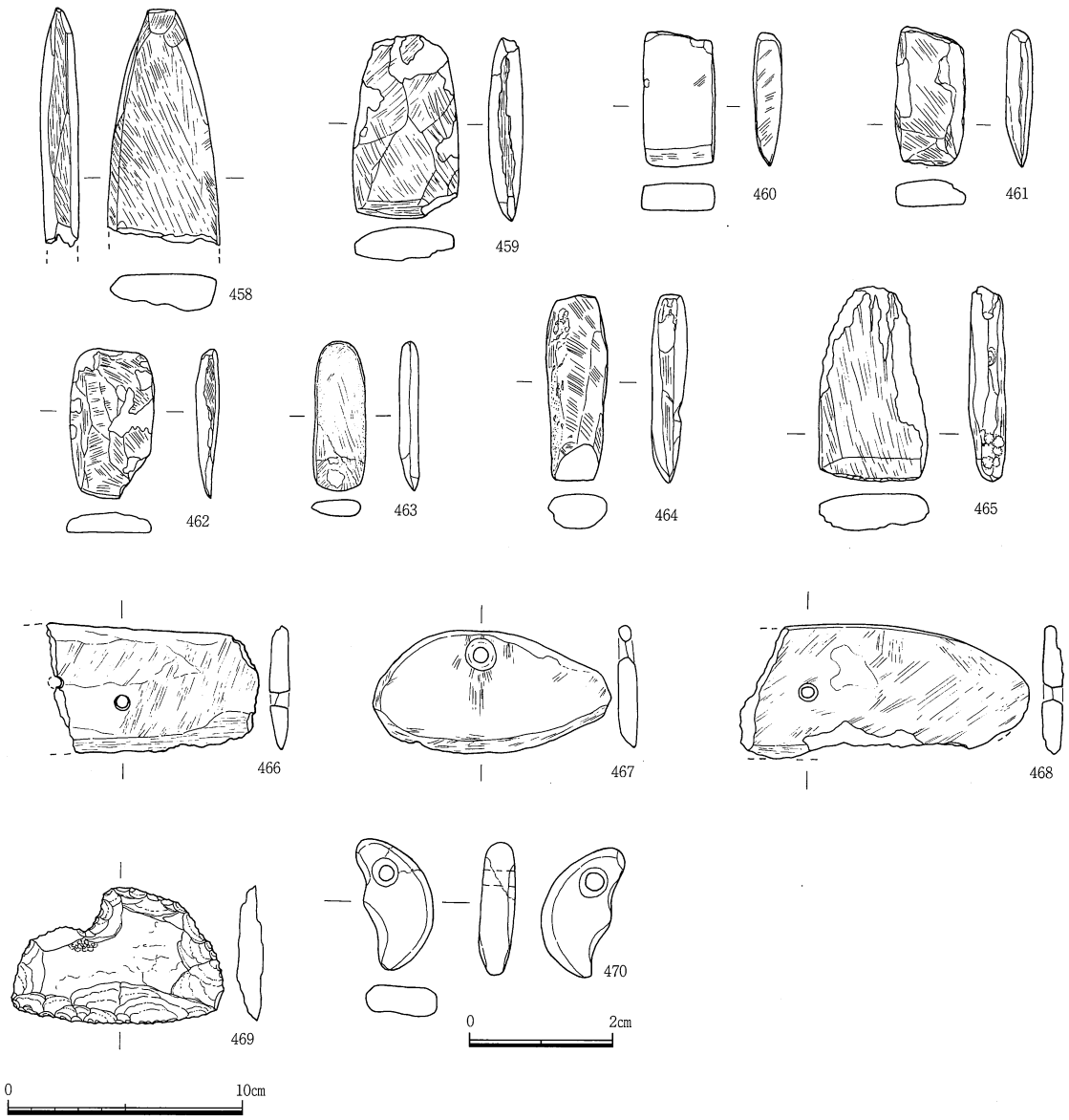


Fig.79　A2区出土遺物実測図：遺物包含層（弥生）

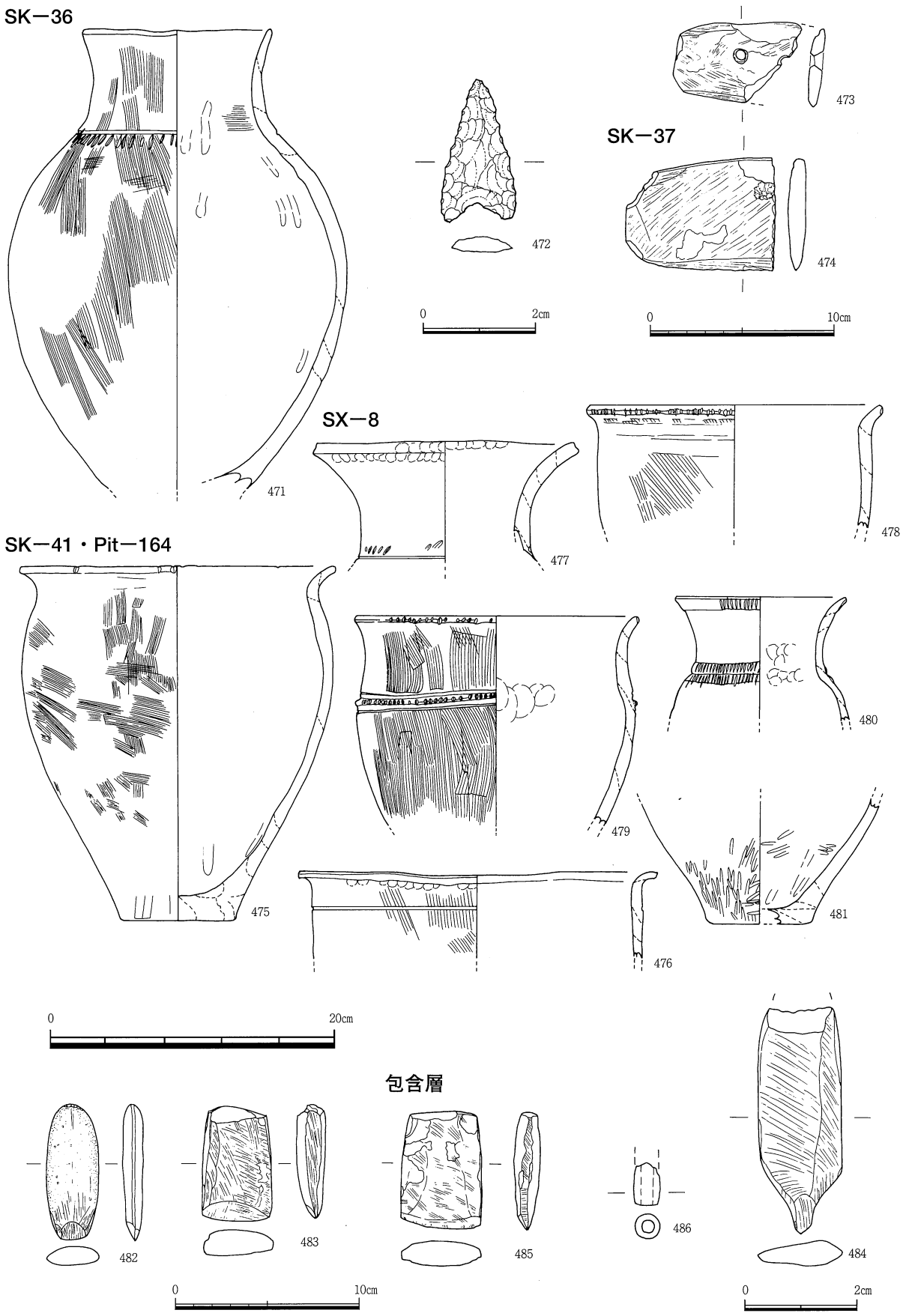


Fig.80　A3区出土遺物実測図：SK−36・37・41・Pit.164・SX−8・遺物包含層

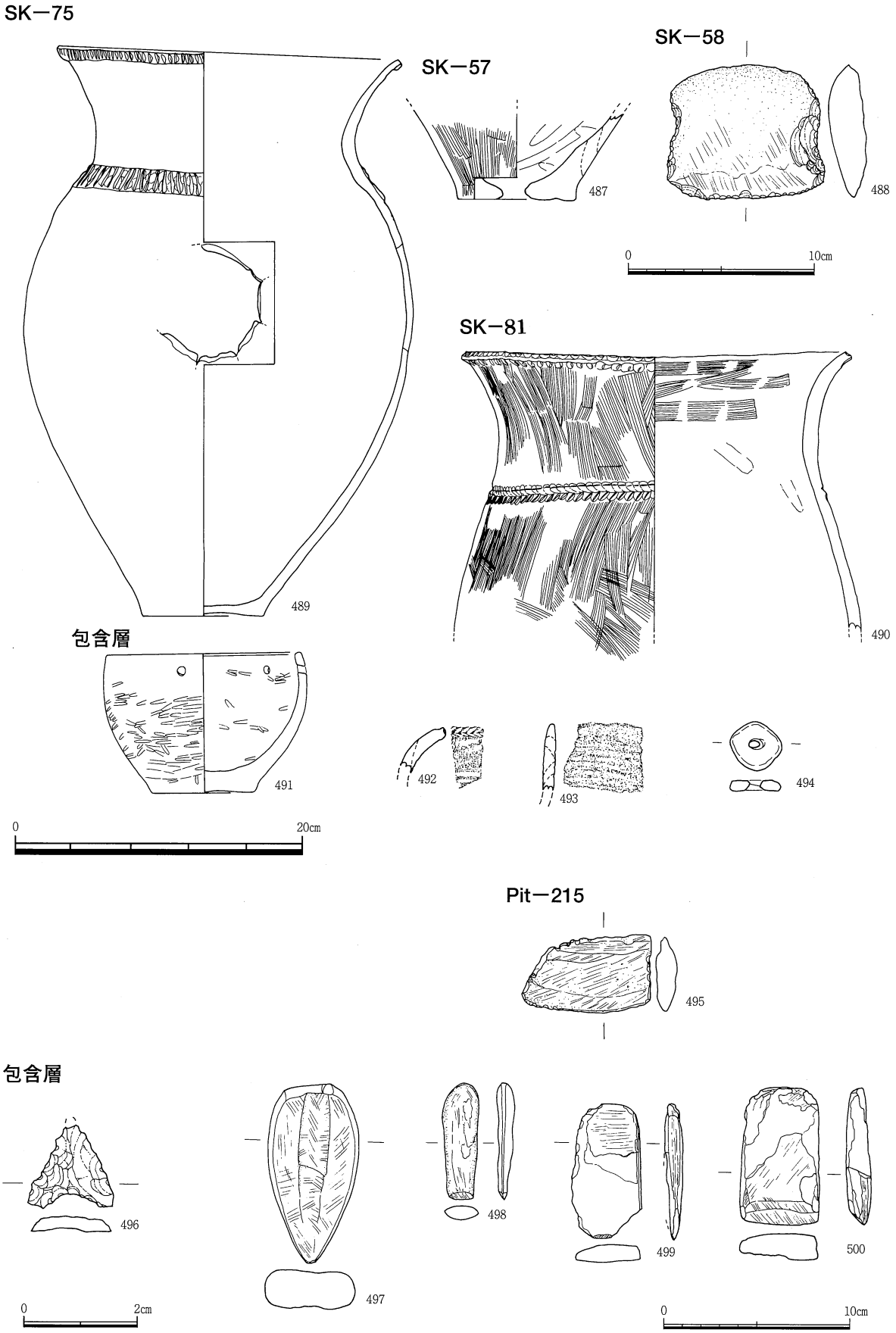
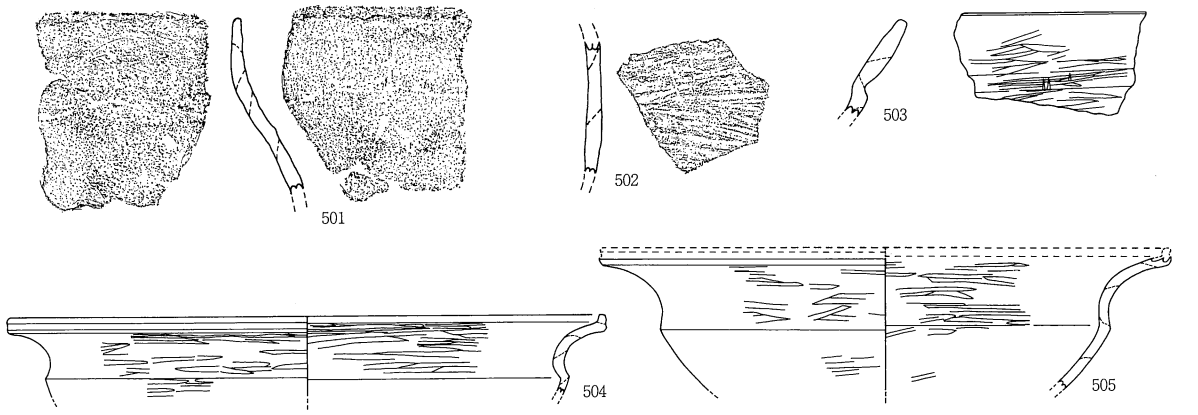


Fig.81　A4区出土遺物実測図：SK−57・58・75・81；Pit.215；遺物包含層（弥生・縄文晩期）

縄文包含層



表採

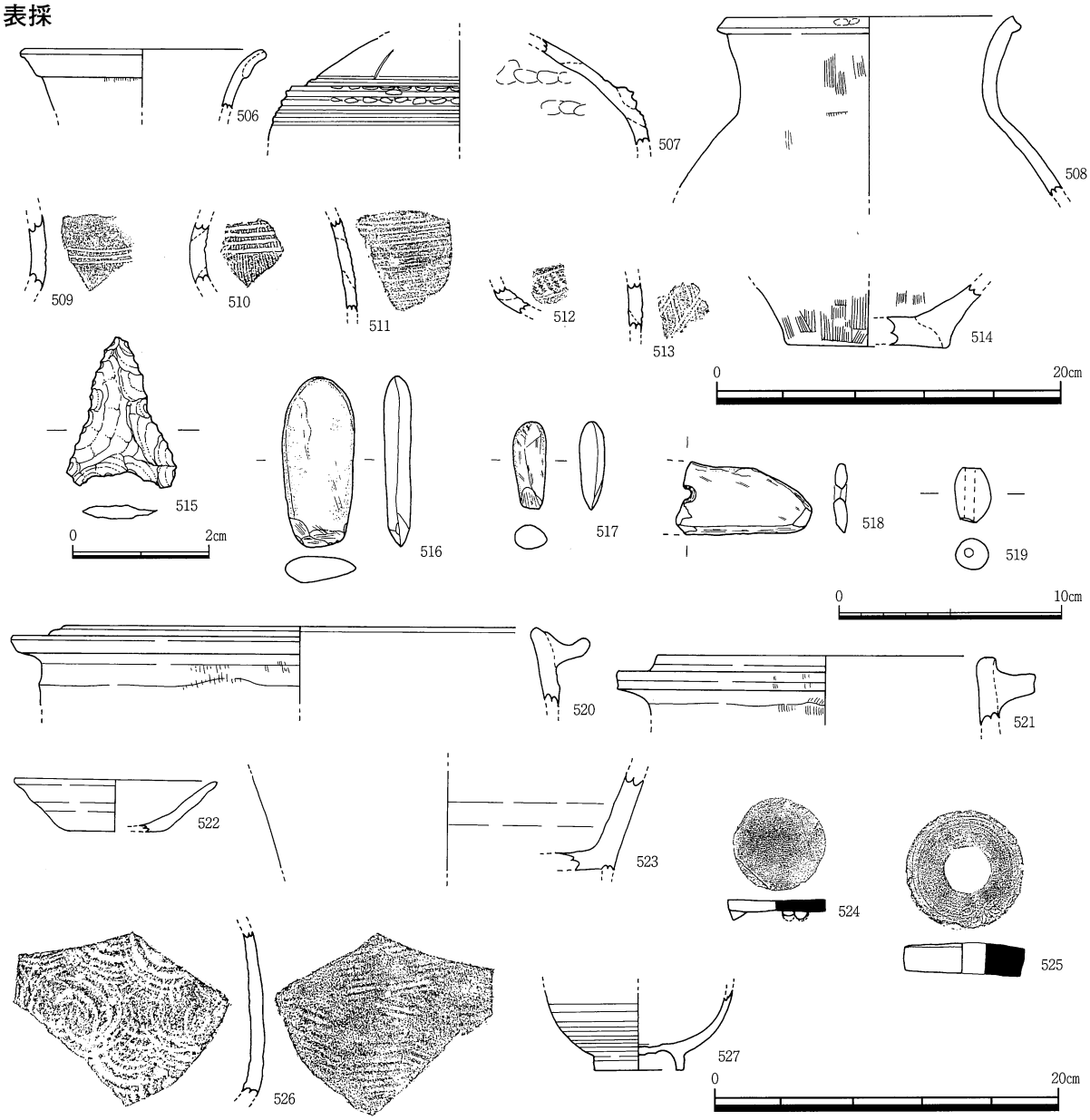


Fig.82　A4区出土遺物；全調査区表採遺物実測図遺物包含層（縄文晩期）全調査区採取遺物の実測図を付載

凡例：鏡川水系の旧河道跡と見られる
蛇行帯を"FRC→"で示す。

所掲の空中写真は，極東米軍昭和22年10月11日撮影の
R518-4-25を複製したもの

Fig.83　昭和終戦直後の空中写真に見る鏡川沖積扇の旧河道跡

図版No.	出土地点	器類	器種	法量（cm）				特徴（手法等）	色調	含有岩片（鉱物）	0.1㎜以上のアカホヤ（有・無）	備考
				口径	器高	胴径	底径					
1	SD－1	窯道具	ハマ	－	1.5	－	－	円筒形の素地から合わせ引きの糸きりによって切り取る。中央付近に径19㎜の円孔を切り抜き、環形の蛇ノ目形とする。身部下面に4個のハリを貼付。	暗灰褐	－	－	外径5.5cm 孔径1.9cm 能茶産 近現代
2	SD－8	窯道具	ハマ	－	1.3	－	－	円筒形の素地から合わせ引きの糸きりによって切り取る。中央付近に径29㎜の円孔を切り抜き、環形の蛇ノ目形とする。	灰褐	－	－	外径7.0cm 孔径2.9cm 能茶産 近現代
3	SD－9	窯道具	ハマ	－	2.4	－	－	円筒形の素地から合わせ引きの糸きりによって切りとる。中央付近に径約37㎜の円孔を設け環形の蛇ノ目形とする。身部下面に5個のハリを貼付。	赤褐	－	－	外径10.0cm 孔径3.8cm 能茶産 近現代
4	SD－9	窯道具	ハマ	－	(1.7)	－	－	円筒形の素地から合わせ引きの糸きりによって切り取る。中央付近に径22㎜の円孔を切り抜き、環形の蛇ノ目形とする。身部下面に5個のハリを貼付。	橙	－	－	外径7.2cm 孔径2.2cm 能茶産 近現代
5	SD－12	窯道具	ハマ	－	1.2	－	－	円筒形の素地から合わせ引きの糸きりによって切り取る。身部下面に4個のハリを貼付。	灰褐	－	－	外径5.3cm 能茶産 近現代
6	SD－12	土師器	杯	－	(7.1)	－	7.1	底部擬似円盤状を呈す。	黄灰	チャート	無	古代平安後期
7	Pit－40	土師器	皿	－	(1.3)	－	(7.0)	内面：回転ナデ痕が残る。	浅黄	無色粒子	無	古代
8	Pit－11	土師器	杯	－	(1.9)	－	高台径(7.8)	外面：輪高台上位に横ナデ。	黄橙	石英砂岩・砂質泥岩 チャート	無	輪高台付 古代
9	Pit－17	土師器	蓋	(18.8)	(1.6)	－	－	内外面に回転ナデ痕が残る。	黄橙	砂岩・チャート	無	古代
10	Pit－16	土師器	蓋	(8.4)	1.2	－	－	内面の大部分と外面の縁部付近に塗朱した赤鉄鉱が点々と遺存する。	黄白	灰色チャート 赤色チャート ＢＷ型火山ガラス	有	ベンガラ付着 古代
11	Pit－41	須恵器	杯	－	(3.3)	－	(8.0)	内外面に水挽回転ナデ痕が残る。	灰白	珪質岩	無	8ｃ末～9ｃ 前半頃
12	Pit－16	須恵器	杯	－	(1.8)	－	高台径(9.8)	外面：外底にヘラ切り痕。内面：ナデ。内外面に回転台右旋回の水挽調整痕。	灰白	泥岩 チャート	無	輪高台付 8ｃ末～9ｃ 前半頃
13	Pit－16	須恵器	杯	(12.4)	3.7	－	高台径(8.2)	外面：輪高台内部に爪痕。内面：横ナデ内外面に回転台右旋回の水挽調整痕。	灰白	砂質泥岩 石英	無	輪高台付 8ｃ末～9ｃ 前半頃
14	Pit－39	須恵器	壺	(3.1)	－	－	高台径(9.4)	内面：ナデ。内外面回転台右旋回の水挽調整痕。	黄灰	石英集合体チャート	無	古代
15	Pit－16	須恵器	杯	(14.0)	(2.5)	－	－	内外面横ナデ。	黄白	石英砂岩 砂質泥岩チャート ＢＷ型山ガラス	－	軟質 古代
16	Pit－17	須恵器	杯	(15.4)	(3.0)	－	－	内外面水挽調整痕。	黄灰	砂質泥岩	無	9ｃ後半頃
17	包含層(B区)	須恵器	胴部細片	－	(4.9)	－	－	外面：平行叩目。内面：同心円文。	灰白	石英・泥岩 石英砂岩 チャート	無	外面緑灰色の自然釉
18	Pit－8	須恵器	甕	－	(5.4)	－	－	外面：刻目入り平行叩目。 内面：同心円文。	黄橙	石英混り泥岩 石英砂岩	無	古代
19	Pit－11	土器	甕	(19.4)	(5.0)	－	－	外面：口胴界に強い横ナデ。 内面：横ナデ。	橙灰	石英砂岩・砂岩 結晶片岩・石英 ＢＷ型火山ガラス	－	薄胎器
20	Pit－28	土器	甕	－	(4.0)	－	－	外面：ハケ調整。内面：横ナデ。	橙	石英砂岩・砂岩 泥岩チャート 石英	無	弥生終末～ 古墳初頭
21	西トレンチ(B区)	土器	甕	－	(8.3)	－	－	外面：胴部に平行叩目、縦ハケ。	黄褐色	石英砂岩 珪質砂岩 泥質砂岩 石英交じり泥岩	無	弥生終末～ 古墳初頭
22	SK－1	土器	甕	(11.4)	24.3	－	－	外面：頚部指頭圧痕。頚部以下叩目。内面：口縁から上胴部に横ハケ。中胴以下にナデ。	白桃	砂岩・泥岩 砂質泥岩 チャート 石英シルト岩	無	弥生終末～ 古墳初頭
23	SD－17	土師器	杯	(13.0)	2.8	(7.2)	－	外底ヘラ切り。内底には回転台右旋回の整形痕遺る。	浅橙	泥岩 石英	無	古代・平安
24	SD－17	土師器	小杯	(10.0)	2.7	(7.3)	－	外底：回転台右旋回のヘラ切り。 内面：回転ナデ痕。	黄橙	砂質泥岩 チャート・石英	無	古代・平安末
25	SD－17	回転台土師器	碗	－	(2.1)	－	9.0	外底ヘラ切り。内面：水挽整形痕。いずれも、右旋回の回転台使用。	黄桃	石英泥岩 砂質泥岩チャート ＢＷ型火山ガラス	有	平底型 10ｃ後半～ 11ｃ頃
26	SD－17	回転台土師器	杯	－	(2.8)	(6.8)	－	外面：回転ナデ整形痕。外底ヘラ切り。	淡黄	チャート・石英 石英混り泥岩 ＢＷ型火山ガラス	有	輪高台付 古代・平安末
27	SD－17	回転台土師器	杯	－	(3.6)	－	高台径(8.4)	外面：回転ナデ整形痕。外底ヘラ切り。	淡黄橙	石英混泥岩チャート 石英・アカホヤ	有	足高高台付 11ｃ後半～ 12ｃ代
28	SD－17	回転台土師器	皿	(10.0)	(2.9)	－	(4.0)	回転ナデ整形痕。	にぶい桃白	石英・泥岩 石英混泥岩チャート	無	輪高台付 11ｃ後半～ 12ｃ頃
29	SD－17	土師器	皿	(9.9)	1.4	－	(4.0)	外底回転ヘラ切り痕。内面：回転台右旋回のナデ。	黄橙	粗粒砂岩チャート 石英	無	古代・平安末
30	SD－17	回転台土師器	小皿	7.6	1.5	－	4.0	外底回転ヘラ切り。	淡黄	胎基珪酸粒子 ＢＷ型火山ガラス	－	平底型 10ｃ後半～ 11c頃
31	SD－17	土師器	皿	(11.8)	1.5	－	(9.0)	外底回転ヘラ切り。回転ナデ整形痕。	浅黄	石英砂岩 泥質砂岩 石英混泥岩チャート 石英 アカホヤ	有	古代・平安末 11後半～ 12ｃ頃
32	SD－17	回転台土師器	碗	－	(1.5)	－	5.3	外底ヘラ切り。内底水挽整形。いずれも、右旋回の回転台使用。	橙	石英砂岩・砂質泥岩 チャート質砂岩 チャート ＢＷ型火山ガラス	有	円盤状高台型 10ｃ後半～ 11ｃ頃

Tab.1　遺物観察表１

図版No.	出土地点	器類	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴（手法等）	色調	含有岩片（鉱物）	0.1㎜以上のアカホヤ（有・無）	備考
33	SD－17	土師器	羽釜	(20.4)	(4.4)	－	－	外面：口唇中央の素地接合部に沿って1条の沈線。鍔基部に指頭圧痕。	暗橙	結晶質の石英砂岩 チャート 泥岩石英単粒 結晶化した 灰色チャート	無	摂津型 （四国産？） 10ｃ中頃
34	SD－17	土師器	羽釜	(22.4)	(5.1)	－	－	外面：鍔直下より縦ハケ。上胴端は横ナデ。内面：横ナデ。	灰褐	黒雲母 珪酸質透先粒子 ＢＷ型火山ガラス	有	摂津型古代後期
35	SD－17	土師器	羽釜	(22.0)	(6.8)	－	－	外面：鍔下に縦ハケ。内面：ナデ調整。	桃白	チャート・石英 ヘキ開を持つ 灰白色鉱物 桃色粒子	無	摂津型古代
36	SD－17	土師器	羽釜	(21.6)	(6.1)	－	－	外面：上胴部にハケ、後ナデ。	灰黄	赤色優勢の 角粒子砂極多 同質の角粒 黒色粒子	無	摂津型古代
37	SD－17	黒色土器	碗	－	(2.8)	－	高台径(8.6)	外面：底際に横ナデ。内面：ミガキ。	黄白	チャート ＢＷ型火山ガラス	－	古代
38	SD－17	黒色土器	碗	－	(4.3)	－	高台径(7.2)	外面：横ナデ。	黄橙	珪質頁岩・泥岩 チャート・アカホヤ	有	古代
39	SD－17	黒色土器	碗	(15.4)	3.2	－	－	外面：横ナデ。 内面：横ナデ後、暗文。	緑灰	チャート	無	古代
40	SD－17	緑釉陶器	皿	－	(1.4)	－	(5.8)	釉層に1㎜画以下の貫入が密発。	灰白	無・黒色粒子 珪質頁岩	無	搬入品 古代
41	SD－17	須恵器	杯	－	(2.1)	－	高台径(11.8)	外面：外底に爪痕。内面：回転ナデに縦横ナデを重ねる。	灰白	泥質砂岩 石英	無	輪高台付 古代・奈良後半 ～平安前期
42	SD－17	須恵器	小杯	8.6	3.0	－	6.0	外底ヘラ切り。内面に右旋回の水挽整形痕が残る。	黒灰	、石英 BW型火山ガラス	有	8ｃ末
43	SD－17	須恵器	甕	－	(4.0)	－	－	外面：平行叩目。内面：回転ナデ。	青灰	石英砂岩 胎基石英 赤色チャート	無	古代
44	SD－17	須恵器	甕	26	(5.3)	－	－	水挽回転ナデ。	灰白	石英混り泥岩 ＢＷ型火山ガラス混り白色泥粒 チャート 砂質泥岩	有	8ｃ前半～中頃
45	SD－17	須恵器	甕	－	(5.9)	－	－	外面：上胴部カキメ調整。 内面：同心円文。	青灰	泥岩・石英 胎其石英	無	古墳後期
46	SD－17	須恵器	甕	(24.8)	(6.7)	－	－	外面：平行叩目、カキメ調整。 内面：上胴部同心円文。	灰白	砂岩・泥岩 方解石 石英黒雲母	無	古墳末～古代
47	SD－17	須恵器	甕	－	(8.1)	－	(17.1)	外面：胴部平行叩目。底部付近は回転台右旋回のヘラ削り。内面：ナデ、下胴部に同心円文が残る。	灰白	チャート質砂岩 石英砂岩 チャート BW型火山ガラス	有	古代
48	SD－17	須恵器	甕	－	(6.0)	－	－	外面：底部際に断面V字の1条沈線を巡らす。内面：ナデ調整。	黄橙	優白泥粒・泥岩 チャート ＢＷ型火山ガラス	有	古代
49	SD－17	須恵器	高杯脚柱	－	(7.0)	－	－	水挽回転痕。	－	石英混り泥岩 石英単粒 ＢＷ型火山ガラス	有	古墳末～古代
50	SD－17	須恵器	甕	－	(3.7)	－	－	胎土は硬で未焼結。焼成は還元。	－	－	－	古代
51	SD－17	須恵器	甕	－	(5.6)	－	－	胎土は堅。焼成は還元。	－	－	－	古代
52	SD－17	須恵器	甕	－	(7.8)	－	－	胎土は堅。焼成は還元。酸化冷却。	－	－	－	古代
53	SD－17	須恵器	甕	－	(4.2)	－	－	胎土は堅。焼成は酸化。還元冷却。	－	－	－	大型 古代
54	SD－17	須恵器	甕	－	(10.7)	－	－	胎土は堅。焼成は中性。還元冷却。	－	－	－	古代
55	SD－17	須恵器	甕	－	(4.5)	－	－	胎土は堅。焼成は還元。	－	－	－	古代
56	SD－17	須恵器	甕	－	(12.3)	－	－	胎土は堅緻。焼成は中性。炭化冷却。	－	－	－	古代
57	SD－17	須恵器	壺／甕	－	(6.0)	－	－	胎土は堅。焼成は還元。	－	－	－	古代
58	SD－17	土器	壺	－	(5.3)	－	－	外面：口縁に指頭圧痕、ハケメ。 内面：横ハケ。	暗橙	石英砂岩・泥岩 砂質泥岩 チャート	無	弥生前期～前葉
59	SD－17	土器	壺	－	(19.8)	28.6	－	外面：頚基部に1条の沈線。胴部ミガキ。上胴部に浅細の下弦の双線重弧文を沈線描する。 内面：指頭圧痕、ナデ調整。	黒灰	泥岩 砂質泥岩 チャート 石英	無	弥生前期中葉
60	SD－17	土器	壺	(14.7)	(19.4)	－	－	外面：口唇端部に１条の沈線。口縁～上胴部に縦ハケ。上胴部にはミガキが重なる。口縁基部に断面V字のヘラ描1条沈線。中胴部に4条の沈線。内面：口縁部ミガキ。上胴部ナデ。	にぶい橙	砂岩 泥岩 チャート	無	弥生前期後葉
61	SD－17	土器	壺	(12.0)	(4.0)	－	－	外面：口縁部ハケ後、ミガキ調整。頚部にヘラ描沈線文帯。内面：粗いミガキ。	橙	砂岩 泥岩 チャート	無	弥生前期後葉
62	SD－17	土器	壺	(16.2)	(4.5)	－	－	外面：口縁部ハケ調整。口頚界に3条以上の直線文帯。 内面：横ミガキ。	黄橙	石英砂岩・砂質泥岩 凝灰岩砂岩 BW型火山ガラス	有	弥生
63	SD－17	土器	壺	(15.2)	(6.0)	－	－	外面：ハケメ。頚部に4条の直線文帯をヘラ描。	橙	石英砂岩・泥岩 砂質泥岩	無	弥生
64	SD－17	土器	壺	(18.8)	(4.4)	－	－	外面：口唇部に1条の沈線。口縁部にミガキ後、横ナデ。口頚界に1条の細沈線。内面：ミガキ。	浅黄橙	多色砂岩・砂岩 石英砂岩・石英 砂質泥岩・泥岩	無	弥生前期後葉
65	SD－17	土器	壺	(13.4)	(5.2)	－	－	外面：口唇部に縦核目。口唇端以下には縦ハケメ。内面：横ハケメ。	黄橙	石英 BW型火山ガラス	有	弥生前期後葉 ～末頃

Tab.2　遺物観察表 2

図版No.	出土地点	器類	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴(手法等)	色調	含有岩片(鉱物)	0.1㎜以上のアカホヤ(有・無)	備考
66	SD－17	土器	壺	(14.0)	(4.0)	－	－	外面：口唇部に1条の沈線後、刻目。口縁部に縦横のハケメ。内面：ハケ調整。	黄白	石英砂岩・砂岩 砂質泥岩・泥岩 石英・チャート BW型火山ガラス	有	細頸型弥生
67	SD－17	土器	壺	－	(4.5)	－	－	外面：多条のヘラ描沈線文帯後、横に双線山形文を連ねる。上位の沈線線文帯と山形文との間に埋込摘出式の貼付列点文を一列する。	黒灰～黄灰白	泥質砂岩 砂質泥岩 チャート 石英砂岩 BW型火山ガラス	有	弥生前期末
68	SD－17	土器	壺	－	(4.6)	－	－	外面：下地にハケメ調整し、多条沈線文帯間に双線山形文を施す。	黄白	チャート 石英	－	弥生前期末
69	SD－17	土器	壺	－	(5.6)	－	－	外面：6～7条のヘラ描沈線文帯下に円形浮文を貼付(2種遺存)。	黄橙	砂岩・砂質泥岩 石英砂岩 石英混り泥岩 泥岩・石英 砂質シルト岩 チャート	無	弥生前期末
70	SD－17	土器	壺	－	(3.7)	－	－	外面：ヘラ描沈線線文帯後、鋸歯状の双線山形文を施す。	橙	シルト質砂岩 石英砂岩 石英混り泥岩 チャート BW型火山ガラス	有	弥生前期末
71	SD－17	土器	壺	－	(2.1)	－	－	外面：口唇部に断面V字の縦刻目。口縁部には、径2.5㎜の円孔をほぼ等間隔で穿通。内面：横ハケ調整。	黄橙	砂岩・石英砂岩 チャート・泥岩 石英混り泥岩 BW型火山ガラス	有	細頸型弥生
72	SD－17	土器	壺	－	(6.4)	－	－	外面：蛇行横走する櫛描沈線線文帯後、櫛描波状文帯、櫛描沈線文帯、三角形を呈する突起列点文の順に施す。ミガキ痕あり。内面：縦ナデ痕あり。波文、波状文ともに曳跡は左向。	褐～橙	石英砂岩 砂質泥岩・石英 雲母を多生した結晶片岩 チャート	無	弥生中期初頭
73	SD－17	土器	壺	－	(4.8)	－	－	外面：頚部にハケ調整後、横ミガキ。その後突帯貼付し、断面V字の1条沈線を施す。分断された突帯に、「＝」形の刻目が施された、押圧列点を一列する。内面：ナデ調整。	黄灰	泥岩砂岩・砂岩 石英砂岩・石英 BW型火山ガラス	有	細頸型弥生
74	SD－17	土器	壺	－	(31.4)	25	8.8	外面：ハケ調整。内面：ヘラナデ調整。	黄灰	泥岩・砂岩 石英・シルト岩 チャート 石英集粒	無	弥生中期後半
75	SD－17	土器	甕	(22.0)	(5.9)	－	－	外面：口唇部に円形の刺突列点文を施す。口縁～口胴界に指頭圧痕。口唇端下には縦ハケメ調整。内面：口胴界以上には、横ハケメ。胴部に横ナデにミガキを重ねる。右巻成形。	黄白	砂岩・石英砂岩 泥質砂岩・泥岩 頁岩・石英 砂質シルト岩 アカホヤ	有	弥生前期中葉
76	SD－17	土器	甕	(19.0)	(3.0)	－	－	外面：口唇部に断面V字の刻目。口胴界下に縦ハケメ。最終調整は横ナデ。内面：指頭圧痕。	橙	砂岩・泥岩 チャート BW型火山ガラス 石英砂岩	有	弥生前期中葉
77	SD－17	土器	甕	(16.0)	(8.4)	－	－	外面：口唇部に断面V字の縦刻目。口胴界以下には、縦ハケメ。最終調整は横ナデ。内面：口胴界にミガキ調整。	黄灰	泥質砂岩 石英砂岩 泥岩	無	弥生前期中葉
78	SD－17	土器	甕	(23.0)	(4.2)	－	－	外面：口唇部に断面V字の縦刻目。口唇端以下に縦ハケメ後、口胴部には横ナデ調整。口胴界に3条直線文を左曳く。内面：口縁及び口胴部に横ナデ。	黄橙	泥質砂岩 砂質泥岩頁岩 石英	無	弥生前期中葉
79	SD－17	土器	甕	(22.6)	(6.5)	－	－	外面：口唇部に断面V字の縦刻目。頚部に縦ハケメ。内面：緩凹形の内口唇。頚部に横ハケメ。	褐	石英混り泥岩 石英砂岩 砂質泥岩・砂岩 チャート BW型火山ガラス	有	弥生前期中葉
80	SD－17	土器	甕	(13.6)	(2.7)	－	－	外面：口唇部に断面V字の刻目。口縁部に指頭圧痕。曳跡右方向のヘラ描沈線遺存。内外面には横ナデ。	浅黄橙	砂岩・泥岩 砂質泥岩 チャート	無	弥生前期中葉～後葉
81	SD－17	土器	甕	－	(7.4)	－	－	外面：ハケメ調整後、3条ヘラ描描沈線。内面：横ナデ調整。	暗灰褐	石英砂岩 砂岩 チャート	無	弥生前期後葉
82	SD－17	土器	甕	(23.8)	(15.8)	－	－	外面：口唇部に断面V字の刻目。口胴界には横ナデ、胴部にはハケメ調整後、4条、3条のヘラ描直線文帯を曳く。(胴部の直線文帯は、3箇所で縦ナデにより潰されている。) 内面：ナデ調整。	黒褐	チャート質砂岩 砂質泥岩 泥岩 アカホヤ	有	弥生前期後葉～末期
83	SD－17	土器	甕	(14.8)	(4.5)	－	－	外面：口唇部に断面V字の刻目。口縁端下にハケメ調整。へ上胴端に横ナデ。内面：口縁端部に横ナデ。胴部には指頭圧痕。	橙	泥質砂岩 砂質泥岩 泥岩 チャート 石英	無	逆L字型弥生前期末？
84	SD－17	土器	甕	(10.2)	(6.4)	－	－	外面：上胴端に1条沈線。胴部には縦ハケメ後、右傾ハケメを重ねる。内面：口縁部は横ナデ。胴部は右傾ハケメ。	暗灰褐	石英砂岩 泥質砂岩 チャート BW型火山ガラス	有	弥生
85	SD－17	土器	甕	－	(2.8)	－	－	外面：回転錐による両面穿孔。	黄灰	チャート・泥岩 石英混り泥岩 石英砂岩	無	南四国型弥生前期末～中期

Tab.3　遺物観察表 3

図版No.	出土地点	器類	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴（手法等）	色調	含有岩片（鉱物）	0.1㎜以上のアカホヤ（有・無）	備考
86	SD－17	土器	甕	－	(8.2)	－	－	外面：上胴端に3条の微隆起線文帯。稜線の上下に指頭圧痕密集。内面：指頭圧痕集中。	黒	石英と白色泥質物の混合粒子 石英砂岩 泥質結晶片岩 チャート	無	南四国型
87	SD－17	土器	甕	－	(7.0)	－	－	外面：頸部～頸胴界に縦ハケメ後、上胴端に浅い沈線帯を横走させ、頸胴界に楕円の刺突列点文を施す。	橙	チャート・石英 石英混り泥岩 石英砂岩・泥岩 角閃石 泥質砂岩	無	弥生前期末～中期初頭
88	SD－17	土器	有把鉢型土器或いは甑	(19.0)	(13.9)	－	－	外面：ハケメ調整。1箇所にのみ把遺存。	黄灰	泥岩・砂質泥岩 シルト岩・チャート	無	弥生
89	SD－17	土器	甕	－	(4.8)	－	(9.6)	外面：縦ハケメ後、横ミガキ調整。内面は、指頭圧痕後、ナデ調整。	黄橙	チャート・泥岩 石英混り泥岩 泥質砂岩	無	弥生
90	SD－17	土器	壺	－	(7.2)	－	(12.4)	外面：縦ハケメ後、横ミガキ。内面：ナデ調整。	黄灰	砂岩・石英砂岩 砂質泥岩・泥岩 アカホヤ	有	球胴型 弥生前期末～中期初頭
91	SD－17	土器	蓋	(24.4)	9.6	－	－	外面：全面ミガキ調整。内面：ミガキ調整。	黄橙	石英砂岩 泥質砂岩 砂質泥岩・泥岩 チャート 火山ガラス	－	弥生前期前葉～中葉
92	SD－17	土器	壺／甕	－	(7.3)	－	(7.0)	外面：下胴部に縦ハケメ。底部側壁には指頭圧痕。内部：底に指頭圧痕。	黄橙	泥質砂岩 硬質砂岩 砂質泥岩・泥岩 チャート・石英	無	弥生
93	SD－17	土器	壺／甕	－	(4.0)	－	(8.6)	外面：接地面間際まで縦ハケメ。外底に一粒の籾圧痕。内面：底に指頭圧痕。	黄橙	泥岩 砂質泥岩 チャート	無	炭化状態 弥生
94	SD－17	土器	壺	－	(6.0)	－	8.5	外面：接地面間際まで縦ハケメ。内面：底に指頭圧痕集中。	黄橙	WS泥岩 チャート 泥岩・石英 BW型火山ガラス	有	弥生前期後半～中期初頭
95	SD－17	土器	壺／甕	－	(7.5)	－	7.4	外面：接地面間際まで縦ハケメ。一部に横ハケメ。内面：ナデ調整。	黄灰	泥岩・チャート チャート混り泥岩 石英砂岩 BW型火山ガラス	有	弥生
103	SR－1	土器	甕	(20.6)	(6.4)	－	－	外面：口唇部に断面U字の刻目。口縁部～口胴界にハケメ後、横ナデ調整。1条ヘラ描沈線施す。内面：全面横ナデ調整。口縁内外面に指頭圧痕。	浅橙	多色チャートの円～亜円粒子	無	弥生前期前葉
104	SR－1	土器	甕	(13.0)	(5.2)	－	－	外面：口縁端下に縦ハケメ。内面：口縁部にハケメ調整。上胴部に指頭圧痕。	橙	石英砂岩	無	弥生後期
105	SR－1	土器	高杯脚部	－	(9.0)	－	(19.6)	外面：縦ミガキ調整。径12㎜の穿孔。2孔遺存。内面：ヘラ押さえ、ナデ調整。	橙	石英砂岩 砂質泥岩 チャート	無	弥生
108	SR－2	土器	壺	－	(4.5)	－	－	外面：多条沈線帯の上位2条には、貼付列点文を埋め込む。その先端は「櫛描直線末端肩形文」状に弧を描き反転。内面：指頭圧痕。	黄白	石英砂岩 チャート質砂岩 泥質砂岩 砂岩・泥岩 BW型火山ガラス	有	球胴型 弥生中期中葉
110	ST－1(A1)	土器	壺	(15.8)	(6.6)	－	－	外面：口唇部に強圧の横ナデ。口縁端下～頸部に横ナデ。頸基部の平行叩目に、頸部より縦ハケメを重ねる。内面：指頭圧痕。状胴端にハケメ調整。	橙	砂岩 石英砂岩 チャート	無	弥生後期後葉
111	ST－1(A1)	土器	壺	(15.8)	(2.0)	－	－	外面：口唇部は強圧の横ナデにより。1条の凹線文か、凹線状に窪む。口縁端下には指頭圧痕と横ナデ調整。内面：指頭圧痕と横ナデ調整。	橙	石英砂岩 泥質砂岩 砂質泥岩 頁岩・チャート	無	弥生中期後半
112	ST－1(A1)	土器	壺	(17.6)	(5.0)	－	－	外面：口唇部に断面V字の縦刻目。口縁端下に指頭圧痕。口頸部に横ナデ。（非回転台）内面：横ナデ調整。	灰橙	砂岩・石英砂岩 チャート・石英 BW火山ガラス	－	弥生前期末～中期初頭頃
113	ST－1(A1)	土器	甕	(21.0)	(3.6)	－	－	外面：口唇部に断面V字の縦刻目。口縁端下に横ナデ後、縦ハケメ。横列指頭圧痕。内面：横ナデ調整。口基部に横ミガキ。	黒褐	砂岩 泥岩 石英砂岩 石英	無	弥生前期 前半～中葉
114	ST－1(A1)	土器	壺	－	(4.6)	－	－	－	－	－	－	弥生前期末
115	ST－1(A1)	土器	甕	－	(6.6)	－	－	－	－	－	－	弥生前期末
116	ST－1(A1)	土器	甕	－	(5.9)	－	－	－	－	－	－	弥生前期末
117	ST－1(A1)	土器	壺	－	(4.4)	－	－	－	－	－	－	弥生前期末
118	ST－1(A1)	土器	壺	－	(4.4)	－	－	外面：網代状の1条圧痕帯が横走。	－	－	－	弥生中期前半？
119	ST－1(A1)	土器	壺	－	(4.7)	－	－	－	－	－	－	弥生中期
120	ST－1(A1)	土器	壺	－	(4.4)	－	－	－	－	－	－	弥生中期
121	ST－1(A1)	土器	甕	－	(4.1)	－	－	－	－	－	－	南四国型 多砂薄胎器 弥生中期前葉～中
122	ST－1(A1)	土器	壺／甕	－	(4.1)	－	(9.6)	外面：横ナデ。外底揚底。	暗灰褐	チャート 砂質泥岩 石英砂岩 泥質砂岩・頁岩 赤色チャート	無	弥生

Tab.4　遺物観察表 4

図版No.	出土地点	器類	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴(手法等)	色調	含有岩片(鉱物)	0.1mm以上のアカホヤ(有・無)	備考
123	ST−1 (A1)	土器	壺／甕	−	(4.3)	−	(8.8)	外面：縦ハケ調整。	黒灰	チャート	無	弥生
124	ST−1 (A1)	土器	小型壺／甕	−	(5.7)	−	(4.2)	外面：下胴に縦ハケ。内面：指頭圧痕。素地の紐巻は左旋回と推定。	灰褐	砂岩 泥岩	無	弥生中期？
125	ST−1 (A1)	土器	ミニチュア壺	−	(2.0)	−	(3.6)	外面：胴部にミガキ。内面：底部に指頭圧痕。素地の紐巻は左旋回と推定。	暗灰褐	シルト岩・石英 砂質泥岩・泥岩 泥質砂岩・砂岩	無	弥生
126	ST−1 (A1)	土器	紡錘車	−	−	−	0.6	土器の破片を転用。8〜6角形を呈し、中央に回転錐で両面穿孔を施す。	黄灰	泥岩・チャート 石英砂岩 砂岩	無	縦2.85cm 横2.80cm 軸孔径0.40cm 弥生
128	ST−2 (A1)	土器	甕	(22.2)	(30.0)	−	−	外面：口唇部に刻目。口縁以下縦ハケ。頚胴界に6条のヘラ描沈線。上胴部に7条のヘラ描沈線帯。内面：口縁部横ハケ。胴部ナデ調整。中胴部にミガキ痕が残る。	暗灰褐	灰色泥岩 橙色泥岩 白色石英	無	弥生前期末
129	ST−2 (A1)	土器	広口壺	(21.0)	(4.1)	−	−	外面：口唇部に断面V字の刻目、径2mmの垂直穿孔。口縁部には指頭圧痕、縦ハケ。内面：横ナデ調整。	黒灰	泥岩 砂質泥岩 石英砂岩 チャート 白雲母	無	広口型 弥生前期末 〜中期初頭
130	ST−2 (A1)	土器	壺	(20.4)	(7.3)	−	−	外面：口唇部に横ナデ。口縁以下からヘラ調整。頚部には、指頭による横ナデ。内面：口縁端部に横ナデ調整。	浅橙	石英・石英砂岩 チャート・砂岩 砂質泥岩 泥岩・雲母	無	弥生中期〜後期
131	ST−2 (A1)	土器	甕	(21.4)	(5.0)	−	−	外面：口唇部に断面台形の粘土帯を貼付。その側面にV字の縦刻目。	黄灰	石英砂岩・石英 チャート・砂泥岩	無	南四国型 多砂薄胎器 弥生中期
132	ST−2 (A1)	土器	甕	(18.0)	(3.0)	−	−	外面：口唇から口基部にかけて横ナデ。口基部直下には、叩目。	灰橙	泥質石英砂岩	無	弥生後期
133	ST−2 (A1)	土器	壺	−	(4.0)	−	−	外面：刺突列点文（断面が縦V字形）を4列施す。その直下は、1条の沈線で画される。内面：ナデ調整。	黄灰	石英・砂質泥岩 チャート 黒灰色の珪質岩	無	弥生前期末 〜中期初頭頃
134	ST−2 (A1)	土器	壺	−	(4.1)	−	−	外面：櫛描直線文帯間に2帯の櫛描簾状文が横走。内面：破片下端に指紋が明瞭に遺る。横ナデ調整。	黄灰	砂岩 石英砂岩 BW型火山ガラス 石英単粒	有	弥生中期前葉 〜中葉
135	ST−2 (A1)	土器	小型 手捏 小底鉢	(6.8)	4.9	−	1.8	内外面：指頭圧痕。	黄橙	砂質泥岩・砂岩 石英砂岩 チャート	無	弥生後期後半
136	ST−2 (A1)	土器	小鉢	(9.7)	5.3	−	3.7	外面：底部際に指頭圧痕内面：横ハケメ。	浅桃	砂質泥岩・砂岩 石英砂岩 チャート・石英	無	弥生後期後半
137	ST−2 (A1)	土器	鉢	(11.4)	7	−	3.2	外面：口唇部に指頭圧痕、横ハケメ。胴部には指頭圧痕。 内面：指頭圧痕、横ハケメ。	黄橙	泥岩 砂岩	無	弥生終末〜 古墳初頭
138	ST−2 (A1)	土器	壺／甕	−	(5.8)	−	(5.6)	外面：ハケメ。内面：ナデ。	黒灰	砂質泥岩・砂岩 泥質結晶片岩・石英	無	弥生
139	ST−2 (A1)	土器	壺	−	(3.7)	−	(9.0)	外面：縦ミガキ。内面：指頭ナデ。	黄灰	泥質砂岩 砂質泥岩 石英砂岩 石英結晶片岩 石英・雲母	無	弥生
140	ST−2 (A1)	土器	壺／甕	−	(2.8)	−	(9.0)	外面：ヘラ調整後、ハケ調整。 内面：指頭圧痕。	橙	赤褐色砂質泥岩 黒色泥岩〜砂岩 石英・頁岩 砂岩・石英砂岩	無	弥生
141	ST−2 (A1)	土器	壺／甕	−	(6.6)	−	(5.2)	外面：ミガキの可能性あり。	黒褐	金雲母・ガラス 石英結晶片岩 粘土質岩片 BW型火山ガラス	有	多砂厚胎器 弥生
142	ST−2 (A1)	土器	壺／甕	−	(8.6)	−	(3.6)	外面：下胴から底部に縦ハケ。底部には、平行叩目。内面：右傾渦巻状ハケメ、左傾渦巻状指頭ナデ。	橙	砂岩 石英砂岩 泥質砂岩 石英	無	弥生後期末
143	ST−2 (A1)	土器	甕	−	(6.3)	−	(3.7)	外面：平行叩目後、縦ハケメ。内面：底付近に指頭圧痕。上方に、横ハケメ。	黒	泥質結晶片岩 砂岩・石英砂岩 チャート 帯灰色の 透光鉱物晶体	無	弥生終末〜 古墳初頭
146	SK−3	土器	甕	(21.2)	(2.9)	−	−	外面：口縁直下に縦ハケメ後、横ナデ。上胴端には、多条の櫛描沈線文帯。	黄灰	石英砂岩・泥岩 シルト岩・チャート 細粒砂岩 BW型火山ガラス	−	東瀬戸内型 逆L字 在地産 弥生中期初頭
147	SK−3	土器	壺	−	(2.9)	−	−	−	−	−	−	弥生中期初頭
148	SK−3	土器	壺	−	(4.9)	−	−	−	−	−	−	弥生前期末
149	SK−3	土器	壺	(20.0)	(2.7)	−	−	外面：口唇部は緩凹し、横ナデ。外肥口縁帯の上部には、小指頭圧痕。下位には、内部に左傾ハケメを留める指頭圧痕。	橙灰	アルコース砂岩 泥岩 砂質泥岩 チャート	無	広口型 弥生中期中葉 〜後半
150	SK−3	土器	壺	(24.0)	(3.5)	−	−	外面：外肥口縁帯に指頭圧痕。直下には、縦ハケメ。	橙灰	チャート・石英 砂質泥岩 アルコース砂岩	無	広口型 弥生中期後半
152	SK−4	土器	壺	−	(11.6)	−	−	外面：胴部上端から頚部にかけてハケ調整後、ヘラ描双線帯を7帯重ね、各々の双線帯直下に縦長の列点文を配す。上胴部に7条、若しくはそれ以上のヘラ描沈線を施した後、その上端に縦長の列点文を配す。内面：口縁部にヘラ描沈線、縦長列点文。頚部に右傾のハケ、ナデ調整。胴部ナデ調整。	黄褐	チャート 石英砂岩 砂岩 黒雲母 泥岩 BW型火山ガラス	有	弥生前期末

Tab.5　遺物観察表 5

図版No.	出土地点	器類	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴（手法等）	色調	含有岩片（鉱物）	0.1㎜以上のアカホヤ（有・無）	備考
153	SK−4	土器	壺	−	(4.6)	−	−	外面：縦ハケメ後、2条の擬似刻目型列点文の上下に、櫛描直線文帯を施す。内面：上位は横ナデ、下位はナデ調整。	橙	砂質泥岩 石英砂岩 砂質泥岩 泥質砂岩 チャート・砂岩 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生中期初頭
154	SK−4	土器	甕	(17.9)	(5.3)	−	−	外面：口唇部に左傾楕円形の押圧小列点。軽度に内凹。直下にも、一列する押圧小列点。口縁以下には、縦ハケメ。内面：口縁内端面にも、左傾楕円形の押圧小列点。	橙	石英砂岩 チャート 泥岩 シルト岩	無	南四国型 弥生中期中葉 〜後半
155	SK−4	土器	壺／甕	−	(3.3)	−	(8.3)	外面：接地面際までに縦ハケメ、指頭圧痕。	黄灰	チャート・頁岩 赤色透光鉱物 砂岩・石英砂岩 泥質砂岩・石英	無	弥生
157	SK−5	土器	壺	−	(4.7)	−	−	−	−	−	−	細頸型 弥生前期末
158	SK−5	土器	壺／甕	−	(4.5)	−	−	−	−	−	−	弥生前期末
159	SK−5	土器	壺	−	(3.6)	−	−	−	−	−	−	球胴型 弥生前期末
160	SK−5	土器	壺	−	(6.6)	−	−	−	−	−	−	球胴型 弥生前期末
161	SK−6	土器	壺	(14.4)	(8.5)	−	−	外面：口縁部約5cmの間に径1.8mmの円孔を３つ施す。口頸部は縦ハケ後、多条のヘラ描沈線帯を施す。沈線帯に重なるように貼付刻列点文を配す。内面：横ハケ。	灰褐	砂質泥岩・砂岩 灰色チャート ＢＷ型火山ガラス 石英砂岩・石英 赤色泥質砂岩 チャート質砂岩	有	長頸型 弥生前期末
162	SK−6	土器	壺／甕	−	(4.4)	−	−	−	−	−	−	弥生前期末
163	SK−6	土器	壺	(12.2)	(2.6)	−	−	外面：口唇部は弯凹し、指頭圧痕。口縁端下には横ナデ後、径3mmの円孔列、上弦瓜痕状の列点。頸部にはヘラ描沈線文帯。内面：口縁端部に横ナデ。口縁部には横ハケメ。	黄灰	チャート 砂泥岩 砂質泥岩 ＢＷ型火山ガラス	−	長頸型 弥生前期末
164	SK−6	土器	壺	(12.9)	(8.9)	−	−	外面：口唇端に断面V字の刻目。口縁部に9孔一組の孔を三ヶ所に配す。孔は径2mm程度。口縁から頸部にかけて縦ハケ後４条のヘラ描沈線。上胴部はハケ調整後、3条若しくは3条以上のヘラ描沈線。頸部と上胴部のヘラ描沈線文の間に櫛描による文様が施される。	灰褐	砂岩 泥岩 チャート 石英砂岩 白雲母	無	有孔口縁 弥生前期末 〜中期初頭
165	SK−6	土器	壺	−	−	23.0	−	外面：上胴部に櫛描波状文帯、円形浮文、径4〜5.5mmの孔を焼成前に穿つ。胴部ハケ調整後ミガキ。上胴部は16条の櫛描沈線帯、3条の貼付刻目突帯。中胴部は沈線幾何文帯、４条単位の櫛描沈線帯。内面：ナデ調整。	黄灰	黒、灰、赤色系の砂泥岩 赤色チャート 石英 ＢＷ型火山ガラス	−	弥生中期初頭
166	SK−6	土器	小型壺	(11.0)	(4.5)	−	−	外面：口唇部は凹凸に富む。口縁端下には左傾押え痕。その直下には爪跡？並ぶ。内面：口縁端に指頭圧痕。	暗黄灰	泥岩 砂岩 チャート	無	弥生
167	SK−6	土器	甕	(19.0)	(9.0)	−	−	外面：口唇部に指頭圧痕。小さく外突する口縁端以下には、指頭圧痕、縦及び左傾ハケメ。口胴界に、対器面左方向の2条ヘラ描沈線。内面：口縁端から上胴に指頭圧痕後、ハケメ。	橙	泥質砂岩 チャート 泥岩 シルト岩	無	弥生前期中葉
168	SK−6	土器	甕	(25.7)	(9.0)	−	−	外面：口唇部は小指頭圧痕が残り、若干内弯する平坦形である。口縁外端部に指頭圧痕。口縁部に縦ハケメ。口基部には横ハケメ。内面：横ハケメ。	灰褐	泥岩 チャート 砂質泥岩 石英 非団結泥岩	無	南四国型 弥生前期末頃
169	SK−6	土器	甕	(28.0)	(3.8)	−	−	外面：口唇部に指頭押え痕。口縁端部にV字の刻目。口縁端部直下に縦ハケメ後、櫛目痕の不揃いな直線文を施す。内面：横ハケメ。	灰褐	石英 チャート 泥岩 石英砂岩 砂岩	無	南四国型 弥生中期初頭
170	SK−6	土器	甕	(18.0)	(4.4)	−	−	外面：口縁外端部に断面三角形の凸突帯を貼付し、断面右傾Ｖ字の深い刻目を一列する。	黄灰	石英 チャート	無	南四国型 超多砂薄胎器 弥生前期末〜中期
171	SK−6	土器	甕	(16.0)	13.3	−	−	外面：口縁部の一部に横ナデ。口縁端下に指頭圧痕後、左傾ハケメ。口胴界には縦ハケメ後、胴部のハケメ。内面：左巻の指頭圧痕。	黄灰	砂質泥岩〜泥岩 砂岩・泥岩 アルコース砂岩 赤色チャート アカホヤ 火山ガラス チャート	有	弥生
172	SK−6	土器	甕	−	(13.1)	−	(6.3)	内外面：ナデ。胴部外面には、約2cm間隔で素地紐巻の凹突あり。平底中央が、底端と同心円状に欠損しており、敲打穿孔された可能性がある。	暗黄灰	石英砂岩 結晶片岩	無	南四国型 多砂薄胎器 弥生中期
173	SK−6	土器	不明	−	(3.5)	−	(5.6)	内面：渦巻状のナデを施す。	黄橙	チャート 泥質砂岩 砂質泥岩 石英砂岩 石英混泥岩	無	弥生
176	SK−9	土器	甕	−	(6.5)	−	−	−	−	−	−	弥生前期末

Tab.6　遺物観察表 6

図版No.	出土地点	器類	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴（手法等）	色調	含有岩片（鉱物）	0.1mm以上のアカホヤ（有・無）	備考
177	SK－10	土器	甕	(23.4)	(4.5)	－	－	外面：小押圧痕を一列することによる、やや下垂れの外肥口縁帯。直下には、縦ハケメ。内面：素地帯接合の狭隙線。	黄橙	砂岩 チャート ＢＷ型火山ガラス アルコース砂岩	有	南四国型 多砂薄胎器 弥生中期～中葉？
178	SK－10	土器	壺／甕	－	(3.7)	－	－	－	－	－	－	弥生前期末
179	SK－10	土器	甕	14.8	(22.6)	－	－	外面：口縁端部に断面Ｖ字の刻目。頚胴界には横行３条貼付列点文帯。内面：暖折区間に横ナデ。	黒灰	石英 灰白色砂岩 白色砂質泥岩 灰白色チャート	無	土佐型 弥生前期末
180	SK－11	土器	壺	(15.0)	(11.5)	－	－	外面：口縁直下から頚部にかけて縦ハケメ後、５条ヘラ描沈線文帯。内面：口頚界に横ハケメ。頚基部にはヘラ調整（押え）。左旋回の回転台。	黄橙	チャート 褐色泥岩 褐色砂岩	無	弥生前期後葉
181	SK－11	土器	壺	(14.9)	(9.7)	－	－	外面：全面に初期調整として縦ハケメ。口唇部に横ナデ。上頚部には対器面左曳の６条ヘラ描沈線。内面：口縁部に横ナデ。頚部にはヘラ押え痕。	橙	石英 チャート 泥岩 砂岩 ＢＷ型火山ガラス	無	弥生前期後葉
182	SK－11	土器	壺	(16.6)	(14.5)	－	－	外面：口縁部に縦ハケメ。頚部に５条ヘラ描沈線文帯。内面：頚基部以下には指頭圧痕。	橙	チャート シルト岩 アルコース砂岩 砂岩・砂質泥岩 石英砂岩	無	弥生前期後葉
183	SK－11	土器	壺	(15.6)	(14.0)	－	－	外面：口唇部と、その直下には横ナデ。口縁以下の下地調整は全て縦ハケメ。口縁部には指頭圧痕（左旋回）。直頚部には５条ヘラ描沈線。上胴部には１条沈線。舞面：口縁部に横ハケメ。頚部～上胴部には一部横ナデ、他は縦ナデ。指頭圧痕横列明瞭。頚基部には、ヘラ先で押曳きしたような痕跡あり。	黄褐	泥岩 砂岩 チャート	無	弥生前期後葉
184	SK－11	土器	甕	(22.4)	(16.3)	－	－	外面：口縁端部は稜突帯が貼付。その直下には小圧痕。上胴部には連結貼付列点の摘み上げによる4条微隆起線文帯。	黄灰	石英砂岩 砂質泥岩	無	南四国型 弥生
185	SK－11	土器	壺	－	(5.8)	－	(8.0)	外面：接地面間際までハケ調整後、ミガキ。外底に植物繊維の痕跡あり。内面：渦巻上のナデ痕、ヘラ痕。	黄橙	シルト岩 泥岩～砂岩 チャート質砂岩 泥質砂岩 石英砂岩 非団結泥岩	無	弥生前期
186	SK－11	土器	壺／甕	－	(7.0)	－	(8.3)	外面：接地面間際までハケ調整。ハケ原体は、異なる2種を使用。外底は平坦だが揚底状に通じる。	灰橙	珪質砂岩 泥岩 頁岩 砂岩	無	弥生
187	SK－11	土器	壺／甕	－	(5.4)	－	(7.2)	外面：接地面間際までハケ調整。外底には植物痕が多密。内面：ナデ調整。	黄褐	砂岩 石英砂岩 チャート質砂岩 チャート ＢＷ型火山ガラス	有	弥生
188	SK－12	土器	甕	(28.6)	(10.5)	－	－	外面：素地紐接合の形成と見られるウネリが横走。内面：口縁～上胴部に横ハケメ。こう縁部下に指頭圧痕多留。	黄灰	砂質泥岩 チャート 黒雲母 白雲母	無	弥生前期
189	SK－12	土器	壺	(13.6)	(5.1)	－	－	外面：口唇部に横ナデ。口縁部に指頭圧痕、ハケメ。頚基部にヘラ描沈線。内面：頚基部に縦位のヘラ押え痕。	浅橙	チャート 石英・砂岩 泥岩・砂質泥岩 白雲母	無	弥生前期後葉
190	SK－15	土器	甕	(28.2)	(9.8)	－	－	外面：口縁端部は１条貼付帯とし、断面Ｖ字の刻目を一列する。口縁端部下に縦ハケメ。頚基部に沈線帯。内面：口縁～上胴部に横ハケメ。	浅橙灰	石英砂岩	無	弥生前期末
191	SK－15	土器	壺	－	(5.1)	－	－	－	－	－	－	球胴型 弥生中期初頭
192	SK－15	土器	壺／甕	－	(2.7)	－	－	胎土は南四国型の多砂薄胎器と共通。	－	－	－	弥生前期末
193	SK－17	土器	壺	(16.0)	(9.0)	－	－	外面：口頚部にミガキ後、口縁基部の直下をナデ付け、微段を作る。内面：口頚部～頚胴界に指頭圧痕。右旋回の回転台。	黄褐	砂質泥岩 石英砂岩 石英 砂岩 チャート	無	弥生前期中葉
194	SK－17	土器	壺	(15.0)	(6.2)	－	－	外面：弯凹型口唇部にハケメ。口唇部下に、径2mm円孔あり。口縁端部以下では縦ハケメ後、4歯を具える原体による、櫛描沈線帯を施条し（左旋回の回転台）、刺突列点文帯（平面がアーモンド形、断面がＶ字形）を区画。内面：口唇部に横ハケメ。頚部には右傾ハケメ。	橙	砂質泥岩 石英	無	長頚型 弥生前期末
195	SK－17	土器	壺	(14.1)	(7.3)	－	－	外面：横ナデ調整。内面：ヘラ調整。外面の指頭圧痕と、内面の微凹箇所により、左巻上げ技法と考えられる。	橙	砂岩 泥岩 石英砂岩 チャート	無	長頚型 弥生中期？
196	SK－17	土器	甕	(15.8)	(8.8)	－	－	外面：口唇部に１条沈線施す。頚胴界に断面Ｖ字の１条沈線後、列点文を連ねる。頚胴段下にアーモンド形の列点文。内面：指頭圧痕。	暗灰	石英 暗褐色の砂岩～泥岩	無	弥生
197	SK－17	土器	壺	－	(6.0)	－	－	－	－	－	－	球胴型 弥生前期末

Tab.7　遺物観察表７

図版No.	出土地点	器類	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴（手法等）	色調	含有岩片（鉱物）	0.1㎜以上のアカホヤ（有・無）	備考
198	SK－17	土器	壺	－	(5.4)	－	－	－	－	角閃石	無	弥生中期初頭
199	SK－17	土器	壺	－	(4.6)	－	－	－	－	－	－	弥生中期初頭頃
200	SK－17	土器	壺	－	(4.7)	－	－	－	－	－	－	球胴型弥生中期初頭
201	SK－17	土器	壺／甕	－	(12.5)	－	(6.2)	外面：下胴部に縦ハケメ、指頭圧痕。紐巻形成は左旋回と推定。	黄橙	石英砂岩 砂質泥岩 珪質頁岩・砂岩 非団結泥岩 石英・珪質砂岩 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生
202	SK－17	土器	壺／甕	－	(8.4)	－	(7.9)	外面：接地面間際まで縦ハケメ。外底に歪みあり。	暗褐	珪質砂岩 石英砂岩 チャート・砂岩 泥～シルト岩	無	多砂厚胎器 弥生
205	SK－18	土器	甕	(16.0)	(8.7)	－	－	外面：口唇部に横ナデ調整。口縁端部に断面Ｖ字の縦刻目。その下に、断面三角形の細突帯を貼付し、断面Ｖ字の叩目を施す。頚基部に粘土小粒を貼付連結し、微隆起線状の稜線を形成。	黒灰	石英砂岩 泥質砂岩	無	南四国型 多砂薄胎器 弥生中期前半
206	SK－18	土器	甕	(18.2)	(3.3)	－	－	外面：口唇部に断面Ｖ字の刻目。	黒	砂岩・泥岩 チャート	無	南四国型 弥生前期末～中期
207	SK－18	土器	壺	－	(5.6)	－	－	－	－	－	－	球胴型 弥生前期末 ～中期初頭
208	SK－18	土器	壺／甕	－	(4.5)	－	－	－	－	－	－	弥生中期初頭
210	SK－19	土器	甕	(16.4)	(7.1)	－	－	外面：口唇部に断面Ｖ字の刻目。口縁端以下にはハケメ。左曳の５条ヘラ描沈線線文帯を施す。内面：口縁部にハケメ後、横ナデ調整。胴部には指頭ナデ調整。	灰褐	チャート・砂岩	無	弥生前期後葉
211	SK－19	土器	甕	－	(5.5)	－	－	外面：縦ハケメ後、上位より、５条ヘラ描沈線線文帯、小刺突列点文、3条ヘラ描沈線線文帯、小刺突列点文、ヘラ描沈線線文を施す。内面から口唇部には横ナデ調整。	灰褐	泥岩 チャート 石英	無	東瀬戸内型 在地産 弥生前期末葉
212	SK－19	土器	壺	－	(5.9)	－	(10.0)	内面：ナデ調整。	黄橙	石英砂岩 泥岩 砂質泥岩 チャート 結晶片岩	無	弥生
213	Pit－55	土器	壺	－	(6.2)	－	－	－	－	－	－	球胴型 弥生前期初頭
214	Pit－60	土器	甕	(23.8)	(4.5)	－	－	外面：口唇部は平坦で外端が突起。	灰	石英砂岩 石英結晶片岩 砂質泥岩	無	南四国型 多砂薄胎器 弥生前期末～中期
215	Pit－42	土器	壺	(18.0)	(2.7)	－	－	外面：口唇部に断面Ｖ字の刻目。口縁端直下に指頭圧痕。1条沈線を施す。内面：器体とは異なる多鉄素地を用いて、刻目突帯文を３重に貼付。口縁端に細小な刻目調整。	黄灰	砂質泥岩 赤色泥質岩 灰色チャート	無	弥生前期末 ～中期初頭
216	Pit－42	土器	壺／甕	(23.2)	(6.5)	－	－	口縁の内外両端に、断面Ｕ字の浅い刻目調整。	にぶい橙	砂質泥岩 泥岩・チャート	無	弥生前期末 ～中期初頭
217	Pit－47	土器	甕	－	(3.4)	－	(5.0)	外面：接地面間際まで平行叩目。明瞭な植物繊維痕あり。外底には植物繊維痕が多密。内面：ハケメ調整。	橙	石英砂岩 砂岩	無	弥生終末
218	Pit－63	土器	壺	－	(5.7)	－	－	－	－	－	－	球胴型 弥生前期初頭
219	Pit－68	土器	壺	－	(2.4)	－	－	－	－	－	－	弥生中期前葉 ～中葉
220	Pit－68	土器	甕	(19.2)	(15.9)	－	－	外面：口唇部に断面Ｖ字の刻目。口縁部に指頭圧痕。胴部上端に横位3条連結列点文体を施す。内面：口縁基部にナデ調整。	暗灰	砂質泥岩 泥岩	無	南四国型 弥生前期末
221	Pit－68	土器	壺	(11.0)	(7.7)	－	－	外面：口唇部はハケメ後、横ナデ調整。口縁端以下は縦ハケメ後、頚部にミガキ調整。頚基部にヘラ描沈線文帯を施す。内面：ミガキ調整。	浅橙	泥質岩 砂岩 泥岩 石英砂岩 石英 多色チャート	無	弥生前期後葉
222	Pit－68	土器	壺	(14.8)	(5.0)	－	－	－	黄灰	多色チャート 砂岩・泥質岩	無	弥生
227	SX－1	土器	小型壺	(7.8)	3.9	－	－	外面：外貼口縁帯。口縁端下に１条の微隆起線文を施す。	黄灰	白色砂質泥岩 チャート	無	南四国型 多砂器 弥生中期
228	SX－1	土器	壺	(15.4)	(8.6)	－	－	口縁の内外両面には、断面Ｖ字の叩目を施す。外面：口唇部は沈線状に窪む。口縁端直下に指頭圧痕。頚部には縦ハケメ後、約5歯の櫛原体による、不規則な波状文を施す。内面：頚部に指頭圧痕。左巻上げ技法。	橙	砂質泥岩 泥質砂岩 石英砂岩 泥岩	無	弥生中期初頭
229	SX－1	土器	壺	－	(1.7)	－	－	－	－	－	－	弥生中期初頭頃
230	SX－1	土器	壺	(20.6)	(4.9)	－	－	外面：口唇部に横ナデ調整。口縁端に逆台形を呈する縦刻目を施す。以下に、縦ハケメ調整。簾状文と見られる一部が遺存。内面：ハケメ調整。	黄橙	泥質砂岩 石英砂岩	無	広口型 弥生中期前半

Tab.8　遺物観察表 8

図版No.	出土地点	器類	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴（手法等）	色調	含有岩片（鉱物）	0.1㎜以上のアカホヤ（有・無）	備考
231	SX－1	土器	壺	(16.0)	(7.4)	－	－	外面：口唇部の中央は窪み、一部に横ナデ痕あり。口縁端部に断面Ｖ字の縦刻目。口縁外肥帯をし、指頭圧痕が一列。以下に縦ハケメ後、頚部に押曳櫛描文を施す。（上位は波状文帯、下位は簾状文帯）内面：口縁部に櫛描簾状文を施す。	明橙	珪質頁岩 泥岩 石英 チャート ＢＷ型火山ガラス	－	弥生中期初頭
232	SX－1	土器	甕	(24.0)	(3.3)	－	－	外面：逆Ｌ字口縁。口縁外端部に断面Ｖ字の刻目。口縁端下は縦位ハケメ後、回転横ナデ。上胴部には多条直線文帯をヘラ描する。	浅橙	チャート 泥質砂岩 砂岩	無	東瀬戸内型 在地産 弥生前期末頃
233	SX－1	土器	甕	－	(1.9)	－	－	－	－	－	－	南四国型 多砂薄胎器 弥生前期末
234	SX－1	土器	壺／甕	－	－	－	－	－	－	－	－	弥生
235	SX－2	土器	壺	－	(6.1)	－	－	外面：2重に縦3段列刺突列点文を横列し、その延長下に各一点の小刺突を中継点として、ヘラ描縦線文に転じる。縦線文下では、２重の管状刺突列点文を反転、或いは交叉させる。内面：指頭圧痕。	灰褐	石英 泥岩 砂岩 泥質砂岩 チャート ＢＷ型火山ガラス	有	弥生中期 初頭頃
236	SX－2	土器	不明	－	(2.5)	－	－	外面：貼付瘤状浮文を2列施す。	灰橙	チャート 石英混り泥岩 石英砂岩	無	南四国型 多砂薄胎器 弥生前期末 ～中期前半代
237	SX－2	土器	壺	－	(3.7)	－	－	外面：ハケメ調整後、櫛描直線文を横走し、その上下に櫛描波状文を配す。 内面：縦ナデ調整。	黄橙	砂岩・泥質砂岩 頁岩・チャート 石英混り泥岩 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生中期初頭
238	SX－2	土器	甕	(17.0)	(5.0)	－	－	外面：逆Ｌ字口縁にヘラ磨きを施す。口縁端部には断面Ｖ字の縦刻目。直下には縦ハケメ。上胴部にはヘラナデ調整。内面：ミガキ調整。	黒灰	砂岩 泥岩 石英砂岩 チャート	無	東瀬戸内型 逆Ｌ字 在地産 弥生
240	検出面（A1）	土器	壺	(15.0)	(5.5)	－	－	外面：口唇部は横ナデ。口縁端以下には縦ハケメ後、頚部上端に5条ヘラ描直線文帯を施す。内面：口縁端部に対称に並ぶ指頭圧痕後、横ナデ仕上げ。口頚界に縦ナデ後、横ハケメ調整。	浅橙	泥質石英砂岩 泥岩 泥質砂岩 頁岩 チャート 石英 石英砂岩	無	弥生前期後葉
241	検出面（A1）	土器	甕	(13.4)	(4.2)	－	－	外面：口唇部は横ナデにより、およそ三つに面取られ、端部を挟んで断面Ｖ字の刻目を施す。以下には横ナデを加え、口胴部には縦ハケメ調整をする。内面：口縁部は横ナデ、横ハケメ調整。	浅褐灰	泥岩 泥質砂岩 チャート 石英砂岩 頁岩	無	小型 弥生前期前半 ～中葉
242	検出面（A1）	土器	壺	(20.4)	(2.5)	－	－	外面：内肥型口縁肥圧帯。口唇部に断面Ｖ字の1条沈線を施す。これにより区画された口唇部の下半に断面Ｖ字の縦刻目。内部：横ナデ、横ハケメ調整。	浅橙	石英砂岩 酸化鉄混り 石英砂岩 チャート 泥質砂岩・泥岩 多色砂岩 ＢＷ型火山ガラス	－	細頚型 弥生前期末
243	検出面（A1）	土器	壺	－	(7.5)	－	－	外面：頚胴界に微隆起帯を施し、これを挟む上下に圧痕列。下位に縦長の列点刺突文を一列。その後、縦ハケメ調整。内面：指頭圧痕。左巻あげ技法。	橙	石英砂岩 泥質片岩 泥岩 砂岩 頁岩	無	弥生前期末 ～中期初頭
244	検出面（A1）	土器	甕	－	(6.7)	－	－	外面：ハケメ調整後、櫛描双線文帯を上下に4帯重ね、区画間に列点文を刺突し、縦位列点間に小円形刺突を加える。下位の双線文帯の区画間に、双線波状文若くは、連続山形文を櫛描する。内面：横ナデ後、一部に横ミガキ調整。	黒灰	砂岩 チャート 頁岩 砂岩 石英	無	弥生中期初頭
245	検出面（A1）	土器	壺	－	(3.4)	－	－	外面：稜線を持つ口唇部は、口縁端部に断面Ｖ字の縦刻目を施す。以下に、縦ハケメ調整。口縁端部直下の最終調整は横ナデ。内面：横ナデ調整。	灰橙	石英砂岩 砂質泥岩 頁岩	無	広口型 弥生前期末 ～中期初頭
246	検出面（A1）	土器	壺	－	(2.6)	－	－	－	－	－	－	弥生前期末 ～中期初頭
247	検出面（A1）	土器	壺	－	(4.2)	－	－	－	－	－	－	細頚型 弥生前期末
248	検出面（A1）	土器	壺	－	(3.1)	－	－	外面：ヘラ描沈線帯に簾状文を押曳く	－	－	－	弥生中期初頭？
249	検出面（A1）	土器	壺	－	(3.2)	－	－	－	－	－	－	球胴型 弥生前期末
250	検出面（A1）	土器	甕	－	(3.7)	－	－	外面：列点刺突を施す。	－	－	－	弥生前期末
251	検出面（A1）	土器	壺	－	(3.5)	－	－	－	－	－	－	弥生中期
252	検出面（A1）	土器	壺	－	(3.2)	－	－	－	－	－	－	弥生中期初頭
253	検出面（A1）	土器	壺	(14.8)	(6.0)	－	－	外面：口唇部に浅い縦の刻目。口縁直下に横ハケ、以下に縦ハケ。	黄橙	砂岩 チャート	無	長頚型 弥生中期末
254	検出面（A1）	土器	甕	－	(7.2)	(21.2)	－	外面：頚胴界に粘土帯を貼付し、断面三角の稜線を３条摘み出す。	黄灰	非団結泥岩 チャート 石英砂岩	無	南四国型 弥生前期末

Tab.9　遺物観察表 9

図版No.	出土地点	器類	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴（手法等）	色調	含有岩片（鉱物）	0.1㎜以上のアカホヤ（有・無）	備考
255	検出面(A1)	土器	壺	－	(1.4)	－	－	口縁部に孔を穿つ。	橙	泥岩 石英	無	有孔口縁 弥生前期末 ～中期初頭
256	検出面(A1)	土器	小型壺	－	(14.4)	－	(4.8)	外面：径基部に極浅細な１条の沈線。	橙	泥岩・石英 砂質泥岩 シルト岩・砂岩 黒色砂岩 チャート	無	弥生後期？
257	検出面(A1)	土器	壺／甕	－	(6.4)	－	(6.0)	外面：指頭圧痕。外底は揚底状。内面：指頭圧痕、ハケメ。	黄褐	頁岩・石英砂岩 砂岩・砂質泥岩	無	弥生
258	検出面(A1)	土器	壺／甕	－	(5.7)	－	(7.4)	内面：底部際に指頭圧痕。	桃橙	頁岩・泥質砂岩 有色砂岩 石英砂岩 黒雲母 泥岩チャート	無	弥生
259	検出面(A1)	土器	壺／甕	－	(4.4)	－	(8.6)	内面：指頭圧痕。	黄灰	頁岩・石英砂岩 黒色砂岩 ＢＷ型火山ガラス チャート	有	弥生
260	検出面(A1)	土器	蓋	－	(4.0)	－	(5.4)	内外面ともに指頭圧痕。つまみ部は素地紐を不整形に貼付。	黄灰褐	灰色の硬質岩片 （斜長石多含） 泥質砂岩 珪質砂岩 泥岩・石英	無	弥生前期？
261	包含層(A1)	土器	壺	(15.2)	(6.5)	－	－	外面：ハケ調整。口縁部下半に5条構成の左曳ヘラ描直線文帯。口頸界に粘土帯を貼付し、ヘラ状原体で押圧列点を施す。	浅橙	石英砂岩・泥岩 石英・砂質泥岩 石英混泥岩 有色砂岩 泥質砂岩	無	細頸型 弥生前期末
262	包含層(A1)	土器	甕	(15.0)	(5.6)	－	－	外面：平行叩目後ハケメ調整。内面：右傾の横ハケ。	浅橙	泥質砂岩 石英砂岩・泥岩 ＢＷ型火山ガラス チャート・石英	－	弥生後期後葉
263	包含層(A1)	土器	壺	(17.8)	(4.1)	－	－	外面：縦位右傾のハケメ、口唇面～口縁端直下に横ナデ。	黄灰	泥岩・砂質泥岩 チャート 石英砂岩・砂岩 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生中期
264	包含層(A1)	土器	甕	(20.2)	(3.6)	－	－	外面：口唇部に断面三角の突帯を貼付し、断面Ｖ字の刻目を入れる。	黄灰	石英砂岩 チャート	無	南四国型 多砂薄胎器 弥生前期末～中期
265	包含層(A1)	土器	壺	－	(13.7)	－	(7.6)	外面：縦ハケ、指頭圧痕、接地面付近にミガキ。内面：ナデ調整。	黄灰	泥岩・砂岩 砂質泥岩 石英単粒 チャート	無	弥生前期中葉 ～後葉
266	包含層(A1)	土器	鉢	(11.2)	(3.6)	－	－	外面：口縁端部に指頭圧痕、横ナデ。以下に縦ハケ。内面：指頭圧痕、横ナデ。紐巻成形は右旋回と推定。	灰褐	砂質泥岩 石英砂岩 チャート 泥岩	無	弥生
267	包含層(A1)	土器	甕	－	(5.2)	－	－	外面：口唇部に断面Ｖ字の刻目、口縁端以下に指頭圧痕、縦ハケ。内面：指頭圧痕、横ナデ。	灰褐	石英 チャート 石英砂岩 泥岩	無	弥生前期末 ～中期前葉頃
268	包含層(A1)	土器	壺	－	(7.6)	－	－	－	－	－	－	球胴型 弥生前期末
269	包含層(A1)	土器	壺	－	(3.5)	－	－	－	－	－	－	弥生前期中葉
270	包含層(A1)	土器	高杯 杯身	(23.0)	(3.8)	－	－	外面：口唇部横ナデ。内面：指頭圧痕。	橙	泥岩・砂岩 石英砂岩・石英	無	弥生後期
286	北トレンチ	土器	壺	(15.8)	(10.2)	－	－	外面：頸部にハケ調整後、ヘラ描双線帯を巡らし、弧左傾の刺突列点を施す。頸部以下に横位のミガキ。内面：口縁部横ハケ、横優位のミガキ。頸部指頭圧痕。	浅橙	チャート 石英砂岩 砂質泥岩	無	弥生前期後葉
287	北トレンチ	土器	壺	(17.4)	(8.0)	－	－	外面：縦ハケ、指頭圧痕。頸部に４条のヘラ描沈線帯。内面：横ハケ。	浅橙	砂質泥岩 チャート	無	弥生前期後葉
288	北トレンチ	土器	甕／壺	(16.6)	(5.9)	－	－	外面：口唇部に断面Ｖ字の刻目。	橙	チャート 石英砂岩 チャート質砂岩 珪質砂岩 シルト岩	無	直口型 弥生中期以降
289	北トレンチ	土器	壺	－	(22.7)	(28.3)	8.2	外面：肩部に不安定な浅細の2条沈線。上胴部に浅細な3条の沈線による重弧文を配す。中胴部にミガキ。内面：指頭圧痕。		泥岩・砂質泥岩 砂岩・石英 石英集粒 チャート	無	弥生前期後葉
290	北トレンチ	土器	甕	(19.0)	(5.3)	－	－	外面：口縁部指頭圧痕、以下に右傾のハケメ。内面：口縁部横ハケ、胴部に粗いハケ、指頭圧痕。	灰褐	チャート・砂岩 砂質泥岩 珪質頁岩 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生前期前葉
291	北トレンチ	土器	甕	(19.8)	(16.0)	－	－	外面：口唇部に断面Ｖ字の刻目。胴部上端にアーモンド形の刺突列点を配す。胴部は縦ハケ。	灰橙	泥岩 シルト岩 チャート 石英砂岩	無	弥生前期中葉
292	北トレンチ	土器	甕	(21.0)	(6.7)	－	－	外面：口唇部に断面Ｖ字の細小な刻目。口縁以下にハケ調整。上胴部に6条のヘラ描沈線帯。	浅橙	チャート質砂岩 泥質砂岩・泥岩 砂質泥岩 チャート	無	弥生前期末
293	北トレンチ	土器	壺	－	(7.4)	－	(9.0)	外面：縦ハケ、ミガキ。内面：粗いナデ。	黄灰	チャート 石英砂岩・泥岩 泥質砂岩・砂岩 砂質泥岩 ＢＷ型火山ガラス	－	弥生
294	ST－1(A2)	土器	壺	(17.6)	(2.5)	－	－	外面：口唇部に斜格子文をヘラ先で施す。口唇下端下に指頭圧痕。内面：櫛描波状文。	黄白	泥質砂岩 頁岩 砂質泥岩 チャート	無	弥生中期

Tab.10　遺物観察表 10

図版No.	出土地点	器類	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴（手法等）	色調	含有岩片（鉱物）	0.1㎜以上のアカホヤ（有・無）	備考
295	ST−1 (A2)	土器	壺	−	(5.9)	−	−	−	−	−	−	球胴型 弥生前期末
299	SK−21	土器	蓋	−	(6.3)	−	6.4	外面：縦ハケ、ミガキ。内面：横ミガキ。	黄灰	砂岩・泥質砂岩 砂質泥岩 チャート・泥岩	無	弥生前期
300	SK−21	土器	壺	(18.8)	(7.2)	−	−	外面：口唇部に1条の沈線。口唇以下に縦ハケ後横ミガキ。口頸界に2条の沈線。内面：横ミガキ。横ナデ。	橙	砂質泥岩・泥岩 石英砂岩 チャート 砂質泥岩 ＢＷ型火山ガラス 暗赤色砂	有	口頸部 弥生前期中葉～後葉
301	SK−22	土器	壺	(12.8)	(4.7)	−	−	外面：ハケ後ミガキ。口頸界に3条のヘラ描沈線文帯。内面：ミガキ。	橙	泥質砂岩・泥岩 チャート・頁岩	無	弥生前期後葉
302	SK−22	土器	壺	−	−	−	−	−	−	−	−	弥生
303	SK−23	土器	壺	(19.4)	(9.0)	−	−	外面：口縁部にハケメ、口唇部に指頭圧痕。頸部に櫛描簾状文。内面：ハケ、指頭圧痕。	黄橙	砂質泥岩・砂岩 泥質砂岩・泥岩 ＢＷ型火山ガラス 石英・チャート	有	弥生中期
304	SK−24	土器	壺／甕	−	(5.6)	−	−	−	−	−	−	弥生前期末
305	SK−24	土器	壺	−	(4.7)	−	−	−	−	−	−	弥生前期末
306	SK−24	土器	壺	−	(5.2)	−	−	外面：ヘラ描直線文を施す。	−	−	−	細頸型 弥生前期末
307	SK−24	土器	壺／甕	−	(4.6)	−	−	−	−	−	−	弥生前期末
309	SK−24	土器	甕	(18.6)	2.2.4	−	(5.0)	外面：口唇部横ナデ、口唇以下縦ハケ。上胴部に7条構成の左曳ヘラ描沈線文帯。外底にはミガキ。内面：口縁～上胴部は横ハケ後横ナデ。中胴以下は横位のミガキ。下胴～底部は指頭圧痕、ナデ。	灰褐	泥質砂岩 砂岩 泥岩 ＢＷ型火山ガラス 石英砂岩 泥質結晶片岩 砂質泥岩 チャート	有	弥生前期末
310	SK−25	土器	壺	−	(3.5)	−	−	−	−	−	−	細頸型 弥生前期末
311	SK−26	土器	甕	−	(19.5)	−	(8.0)	外面：縦ハケ。内面：ナデ調整。	灰褐	チャート・泥岩 石英砂岩 シルト岩	無	弥生前期後葉
312	SK−27	土器	壺	−	(2.7)	−	−	−	−	−	−	弥生前期末
313	SK−27	土器	壺	−	(7.5)	−	−	−	−	−	−	弥生前期末
314	SK−29	土器	甕	15.6	(7.3)	−	−	外面：縦ハケ。内面：横ナデ。	橙	石英・砂質泥岩 チャート・黒雲母石英砂岩	無	弥生中期
315	SK−29	土器	壺／甕	−	(9.2)	−	(8.6)	外底は揚底状。	浅黄灰	石英・砂岩 砂質泥岩・泥岩 チャート・頁岩 白雲母	無	弥生
316	SK−30	土器	壺／甕	−	(4.1)	−	(5.1)	外面：接地部際まで縦ハケ。内面：ナデ調整。	灰橙	砂岩・チャート 石英混泥岩	無	弥生
317	SK−31	土器	甕	−	−	−	−	外面：口縁外端面に粘土帯を貼付し、縦刻目をヘラ刻する。	黄橙	石英混泥岩 石英単粒チャート アカホヤ ＢＷ型火山ガラス	有	弥生中期前半
318	SK−32	土器	壺	(15.8)	(4.9)	−	−	外面：磨耗が著しいが一部にハケが残る。	黄橙	石英砂岩 砂質泥岩・泥岩 砂岩チャート	無	弥生前期中葉
319	SK−32	土器	壺	−	−	−	−	外面：横～右傾のミガキ。３条構成のヘラ描直線文が横走。その上方にヘラ描縦線文を施す。ヘラ描縦線文の間に有軸木葉文をヘラ描する。	灰橙	砂質泥岩 チャート 頁岩 泥岩 砂岩 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生前期中葉
320	SK−32	土器	鉢	(20.2)	(6.9)	−	−	外面：縦斜のハケメ後ナデ。内面：横ハケに斜位のナデを施す。	浅黄灰	頁岩・石英・砂岩 チャート・泥岩	無	弥生
321	SK−32	土器	甕	(21.6)	(19.8)	−	−	外面：口唇部にヘラ状原体による断面Ｖ字の刻目。口縁以下横ハケ。内面：頸部横ハケ。上胴部に指頭圧痕。	黒褐	砂質泥岩 泥岩・砂岩 石英砂岩 チャート	無	弥生前期中葉
322	SK−32	土器	不明	−	−	−	11.4	外面：縦ハケメ調整。外底に植物圧痕多見。内面：ナデ調整。	黄灰	泥岩・磁鉄鉱 石英 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生
323	SK−32	土器	甕	(22.6)	(8.1)	−	−	外面；口唇部に粗い横位ハケメ。口縁端部直下に縦ハケメ。口胴界には指頭圧痕あり。口頸部以下には横ミガキ痕が遺る。内面：ミガキ痕が遺る。	黒褐	砂岩 チャート 砂質泥岩 頁岩 泥岩 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生
328	SK−33	土器	壺	(15.4)	(6.0)	−	−	外面：口唇以下に横ミガキ。内面：口頸部～口唇にかけて横ミガキ。	黄褐	チャート・泥岩 石英砂岩 泥質砂岩 石英結晶片岩 雲母	無	弥生前期前半～中葉
329	SK−33	土器	壺	(15.4)	(10.3)	−	−	外面：口唇に浅い1条の沈線。口縁部に右傾のハケ後密度の低いミガキ。頸部ハケ後ミガキ。頸胴界に扁平な突帯を浅く削り出し、横ナデ。内面：口縁部横ハケ、ヘラ痕。	浅黄橙	泥岩 シルト岩 石英砂岩 石英結晶片岩 砂質泥岩 チャート 黒雲母	無	弥生前期中葉
330	SK−33	土器	壺	(22.5)	(7.9)	−	−	外面：口唇部に断面Ｖ字の刻目を施す。口縁端下に径2mmの円孔を内側から穿つ。頸部外面に6条若しくはそれ以上のヘラ描沈線からなる直線文帯。その間にアーモンド形の刺突列点文を配す。内面：口頸界に縦ナデ。	橙	石英 泥岩 砂質泥岩 石英砂岩	無	弥生前期末

Tab.11　遺物観察表 11

図版No.	出土地点	器類	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴（手法等）	色調	含有岩片（鉱物）	0.1mm以上のアカホヤ（有・無）	備考
331	SK－33	土器	壺	(13.2)	(7.0)	－	－	外面：口唇部に1条の沈線を施した後、断面V字の深い縦刻目を一列。口縁外端直下から頸部にかけて縦ハケ。口頸界に1条の沈線を施した後、粘土帯を貼付し1条の突帯とする。突帯に押刻し刻目状に扁平型突帯とする。内面：ナデ調整。	浅黄灰	砂質泥岩 チャート 石英砂岩	無	細頸型 弥生前期末
332	SK－33	土器	壺／甕	－	(9.6)	－	(7.0)	外面：接地面際まで縦ハケ。内面：ナデ調整。	浅黄橙	頁岩 泥質砂岩・泥岩 砂質泥岩・砂岩 磁鉄鉱 石英砂岩・雲母？	無	弥生
333	SK－33	土器	鉢	－	(4.8)	－	－	外面：沈線文が横走。内面：横ナデ。	黄灰	石英砂岩・泥岩 砂岩・泥質砂岩 チャート	無	縄文晩期
334	SK－33	土器	浅鉢	(39.5)	(3.5)	－	－	全面磨研。	黒褐	泥岩・石英 角閃石・チャート 粘板岩・斜長石 火山ガラス	有	縄文晩期前半
337	SK－33	土器	甕	(25.0)	(9.8)	－	－	外面：口唇部に断面V字の刻目。口縁部に指頭圧痕。口胴界に2条のヘラ描沈線帯。胴部ハケ後ミガキ。内面：ナデ調整。紐巻は左旋回と推定。	黄灰	砂質泥岩 泥岩 石英結晶片岩 石英・チャート 泥質砂岩 泥質砂岩	無	弥生前期中葉
338	SK－33	土器	甕	－	(5.9)	－	－	外面：逆L字口縁の鍔部に対器面左旋回のナデ。口唇部口縁外端部に断面V字の刻目。胴部は縦位右傾のハケメ後多条の直線文帯をヘラ描する。	浅黄灰	チャート 泥岩 石英砂岩 石英	無	東瀬戸内型 逆L字 在地産 弥生前期末
339	SK－33	土器	甕	(19.8)	(8.9)	－	－	外面：口唇部に断面V字の刻目。口縁部に指頭圧痕。上胴部に2条のヘラ描直線文帯。胴部にヘラナデ、ハケメ。内面：ハケメ、ナデ調整。紐巻形成は左旋回と推定。	黒褐	泥岩・頁岩 泥質砂岩 砂質泥岩 石英 チャート 磁鉄鉱 ＢＷ型火山ガラス	－	弥生前期中葉
340	SK－33	土器	甕	(16.0)	(7.8)	－	－	外面：口唇部に断面V字の刻目。口縁端部以下に縦ハケ。胴部上端に3条の直線文帯をヘラ描する。内面：縦位のナデ。紐巻成形は左旋回と推定。	浅橙	泥岩 石英 泥質砂岩 チャート ＢＷ型火山ガラス 石英結晶片岩	有	弥生前期中葉
341	SK－33	土器	壺	－	(8.1)	－	(9.6)	外面：接地面際まで縦ハケ。下胴部に横ミガキ。内面：横斜のナデ。	黄灰	泥岩 シルト質砂岩 石英・チャート	無	弥生前期後半
342	SK－33	土器	甑	－	(4.4)	－	9.2	外面：接地面際まで縦ハケ。内面：横斜のナデ。外底に径12.5mmの孔を焼成後に穿つ。	黄灰	チャート 泥質砂岩 石英砂岩 泥岩・砂岩・石英	無	弥生
343	SK－33	土器	甑	－	(5.9)	－	7.7	外面：接地面際まで縦ハケ。外底に径8.5mmの孔を焼成後に穿つ。	橙	砂岩・チャート 石英・シルト岩 石英砂岩 泥岩・頁岩	無	弥生
344	SK－34	土器	甕	(11.2)	(11.3)	－	－	外面：口胴界に2条のヘラ描直線文帯。内面：ナデ調整。	橙	石英砂岩 砂質泥岩・泥岩 チャート 泥質砂岩	無	弥生前期末？
345	SK－34	土器	壺	(13.4)	(1.8)	－	－	外面：口唇部に断面V字の深い1条の沈線を施し、それを挟むように縦刻目を配す。口縁外端直下に縦ハケ。1条の沈線が遺存する。内面：横ハケ。	浅橙	砂質泥岩	無	細頸型 弥生前期末
346	SK－34	土器	壺	(11.6)	(5.2)	－	－	外面：ハケメ。口頸界と頸部にそれぞれ深めの1条沈線をヘラ描した後、沈線内に粘土帯を埋め込み上部を摘み出す。擬似刻目の連結列点文とする。列点文の間に4条の沈線からなる直線文帯を施す。内面：粗いハケ。	黄橙	チャート 石英砂岩 泥岩 泥質砂岩	無	細頸型 弥生前期末
347	SK－34	土器	甕	－	(2.8)	－	－	外面：断面三角の小突帯を貼付。突帯上半面に小圧痕が並ぶ。	黄灰	石英砂岩 砂岩	無	南四国型 多砂薄胎器 弥生中期
348	SK－34	土器	壺／甕	－	(5.8)	－	(6.9)	内面：指頭圧痕。	橙	石英砂岩 頁岩・泥質砂岩 砂岩・シルト岩 石英・泥岩	無	弥生
349	SK－35	土器	甕	(23.8)	(8.0)	－	－	外面：口唇部に断面V字の刻目。口縁外端以下に縦ハケ。口胴界～上胴部に6条構成のヘラ描直線文帯。内面：横ハケ、ナデ調整。	明黄灰	砂質泥岩 砂岩 シルト岩 石英砂岩 チャート 泥質砂岩	無	弥生前期末
350	SK－35	土器	甕	(17.4)	(14.7)	－	－	外面：口縁端に粘土帯を貼付し、断面三角の小突帯を摘み出す。頸部横ナデ。上胴部に4条の微隆起帯を摘み出す。内面：横ナデ。	黄灰	石英砂岩 チャート	無	南四国型 弥生前期末 ～中期後半
351	SK－35	土器	小型壺	－	(9.3)	－	5.6	内面：指頭圧痕、ナデ調整。	黄白	石英砂岩・泥岩 石英・チャート	無	弥生
352	Pit－100	土器	壺	－	(15.5)	－	－	外面：頸部下端に2条の左曳ヘラ描沈線、その直下に刺突列点文。頸胴部にミガキ。頸基部に2条のヘラ描沈線。沈線間に刺突列点文。内面：ナデ調整。	褐灰	チャート・石英 玄武岩質緑色岩 頁岩・泥岩・砂岩 石英砂岩 非団結泥岩 白雲母・磁鉄鉱	無	弥生前期中葉

Tab.12　遺物観察表 12

図版No.	出土地点	器類	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴（手法等）	色調	含有岩片（鉱物）	0.1㎜以上のアカホヤ（有・無）	備考
353	Pit－103	土器	壺	(24.0)	(2.7)	－	－	外面：外肥外傾口唇の中央に1条の左曳沈線。口唇下端に断面V字の刻目。内面：横ハケ。	褐	泥岩・泥質砂岩 石英・泥質砂岩	無	広口型 弥生前期末
354	Pit－148	土器	壺	－	(4.4)	－	－	外面：擬似刻目状突帯2帯を櫛描多条沈線帯に配し、下位には双線山形文を施す。	－	－	－	球胴型 弥生中期初頭
355	Pit－155	土器	甕	－	(3.8)	－	－	－	－	－	－	弥生前期後半
356	Pit－157	土器	壺	－	(3.6)	－	－	－	－	－	－	球胴型 弥生中期 初頭頃
357	SX－5	土器	壺	(28.1)	(10.6)	－	－	外面：口唇面は外傾する。	橙	泥岩・砂質泥岩 頁岩・泥質砂岩 砂岩・石英 チャート	無	弥生前期前半
358	SX－5	土器	壺	(14.0)	(14.7)	－	－	外面：口頚部に縦ハケ。口頚界に微段有り。頚部以下にミガキ。頚胴界に1条の沈線。内面：指頭圧痕、ナデ調整。	灰橙	泥質石英砂岩 砂質泥岩 石英砂岩 頁岩・泥岩 チャート	無	弥生前期中葉
359	SX－5	土器	壺	13.9	(6.1)	－	－	外面：口縁部横ナデ。口縁基部に断面V字の1条沈線。頚部上端に削り出し帯、直下に縦ハケ。内面：指頭圧痕。	黄灰	泥岩・頁岩 シルト岩 石英砂岩 チャート・石英	無	弥生前期中葉
360	SX－5	土器	壺	(8.2)	(4.9)	－	－	外面：指頭圧痕。口頚界に明確な段差有り。口縁指頭圧痕。	橙	泥質砂岩 有色砂岩 石英砂岩・砂岩 石英混泥岩 泥質結晶片岩 スコリア？ 石英・チャート	無	小型 弥生前期中葉
361	SX－5	土器	壺	(19.4)	(4.8)	－	－	外面：口唇部に1条の沈線。沈線の上下に断面V字の刻目。口唇下に径3mmの孔を穿つ。頚部に9条以上の多条沈線文帯を施した後、4条の沈線を隔て押圧列点付扁平突帯を貼付。内面：横ハケ、横ナデ。	灰褐	砂岩 石英 泥質砂岩 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生前期末
362	SX－5	土器	壺	14.7	(8.0)	－	－	外面：口縁部縦ハケ。口頚部に15～16条からなるヘラ描直線文帯をほどこす。内面：横ハケ、横ナデ。	黄灰	泥質砂岩 アルコース砂岩 石英混泥岩 泥岩・チャート	無	細頚型 弥生前期末
363	SX－5	土器	壺	(17.4)	(9.4)	－	－	外面：口唇下端よりに1条の沈線、後断面V字の刻目。口頚部にハケ後12条のヘラ描直線文帯。直線文帯の間に2条の刻目列点文帯を貼付。	浅橙	砂岩・泥岩 チャート 砂質泥岩 石英砂岩 ＢＷ型火山ガラス 角閃石・頁岩	有	弥生前期末
364	SX－5	土器	甕	(25.8)	(12.8)	－	－	外面：口唇部に断面V字の刻目。口唇以下ハケメ。内面：横ナデ。紐巻成形は左旋回。	橙	頁岩・砂岩 泥質砂岩・チャート 泥岩・石英砂岩 緑色片岩・石英	無	弥生前期前葉
365	SX－5	土器	甕	(26.4)	(9.0)	－	－	外面：ハケ調整。	橙	泥岩・頁岩 石英砂岩・砂岩 砂質シルト岩 チャート・雲母	無	弥生前期前葉 ～中葉
366	SX－5	土器	甕	(27.4)	(15.0)	－	－	外面：口唇端部に断面V字の刻目。口胴界に1条の沈線。口縁以下ハケ調整。内面：横ハケ。	橙	砂質泥岩・砂岩 泥質砂 チャート 石英砂岩	無	弥生前期前葉
367	SX－5	土器	甕	(19.2)	(15.7)	－	－	外面：口唇部に断面V字の刻目。口胴界に浅細の1条の沈線。胴部上位にハケメ。内面：指頭圧痕。	暗橙	砂質泥岩 砂質泥岩 石英砂岩 チャート・泥岩	無	弥生前期前葉
368	SX－5	土器	甕	(23.4)	(6.6)	－	－	外面：口唇部に断面V字の刻目。口胴界に1条の沈線、後ハケ調整。	浅橙	泥岩・砂岩・頁岩 石英砂岩 砂質泥岩 黒色ガラス ＢＷ型火山ガラス シルト岩・チャート	有	弥生前期前葉
369	SX－5	土器	甕	(23.2)	(9.5)	－	－	外面：口唇部に断面V字の刻目。口唇直下以下にハケ調整。胴部上端に断面V字の深い1条の左曳沈線。内面：指頭圧痕。	暗灰褐	石英砂岩・頁岩 泥質石英砂岩 石英・泥岩 赤褐色泥質砂岩 泥質砂岩 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生前期前葉
370	SX－5	土器	甕	(21.4)	(9.6)	－	－	外面：口唇部下端に断面V字の刻目を施す。口唇～口胴界は横ナデ。特に口胴界付近は指頭圧痕が顕著。上胴部に1条の沈線。沈線の上下に横倒アーモンド形の刺突列点文を一列。	黄灰	砂質泥岩・砂岩 シルト質砂岩 珪質細粒砂岩 泥質石英砂岩 泥質砂岩 泥質結晶片岩 細粒砂岩 チャート	無	弥生前期中葉
371	SX－5	土器	甕	(19.6)	(11.6)	－	－	外面：口唇下端に断面V字の刻目を施す。頚部に1条の浅細の沈線を施す。口唇以下に横位のミガキ、ナデ調整。内面：指頭圧痕、横ナデ。	橙	砂岩 泥質砂岩 赤褐色泥岩 砂質泥岩 石英 チャート	無	胴部刻圧痕 弥生前期中葉
372	SX－5	土器	甕	(24.7)	(4.0)	－	－	外面：口唇部に断面V字の刻。口縁部縦横のミガキ、横ナデ。上胴端に刺突列点文。上胴部縦ハケ。内面：口縁～口胴界にかけて横ハケ。口縁には横ナデを重ねる。	灰褐	砂岩 チャート 砂質泥岩 泥岩 泥質砂岩 泥質石英砂岩 石英	無	弥生前期中葉

Tab.13　遺物観察表 13

図版No.	出土地点	器類	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴（手法等）	色調	含有岩片（鉱物）	0.1mm以上のアカホヤ（有・無）	備考
373	SX−5	土器	甕	(25.3)	(13.9)	−	−	外面：口唇下端に断面V字の刻目。胴部上端に2条の沈線。沈線の直下に横長の列点文を刺突。口胴界以下に右傾ハケメ。内面：口縁部に横ミガキ。	黄橙	黒灰色砂質泥岩 赤色チャート 泥岩・砂岩 結晶型の石英混泥岩 赤褐色泥岩 泥質砂岩 赤色チャート砂岩 暗赤色泥岩 石英砂岩 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生前期中葉
374	SX−5	土器	甕	(24.4)	(6.3)	−	−	外面：口唇端部に断面V字の刻。口唇下端以下には縦位右傾のハケ。上胴部に2条の右曳ヘラ描沈線を施し、沈線間に横長刺突列点文を配す。内面：口縁〜口胴部にかけて横〜右傾のハケメを施す。胴部は右傾ナデ。	暗灰橙	アルコース砂岩 石英砂岩 泥岩 黒雲母 頁岩 砂岩 石英 チャート ＢＷ型火山ガラス	有	弥生前期中葉
375	SX−5	土器	甕	(23.0)	(4.8)	−	−	外面：口唇端部に断面V字の刻目。口唇直下に横ハケメ。上胴部に3条構成の直線文帯をヘラ描。横位のハケメ。内面：上胴部に指頭ナデ痕。横ハケメ。	黄灰	泥岩 砂岩 砂質泥岩 チャート 石英 斜長石 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生前期中葉
376	SX−5	土器	甕	(19.4)	(11.3)	−	−	外面：縦横のハケメ。内面：横ハケ、ナデ調整。	橙白	泥岩・砂質泥岩 石英砂岩・砂岩 石英砂岩 黒雲母・チャート	無	弥生前期中葉
377	SX−5	土器	甕	(26.0)	(8.0)	−	−	外面：口唇部に断面V字の刻目。上胴部に２条のヘラ描沈線。	橙	砂質シルト岩 石英・泥岩 チャート 石英砂岩 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生中期中葉
378	SX−5	土器	壺	(18.4)	(8.0)	−	−	外面：口縁外端直下に指頭圧痕。口唇部から頚胴界にかけて右傾の縦ハケ。上胴端に断面V字の縦刻目を一列。	淡黄	石英砂岩 砂岩 チャート 泥質砂岩	無	弥生中期 中葉頃？
379	SX−5	土器	壺	−	(2.3)	−	−	−	−	−	−	弥生前期 中葉？
380	SX−5	土器	壺	−	(3.3)	−	−	外面：重弧文を施す	−	−	−	弥生中期中葉
381	SX−5	土器	甕	(26.2)	(7.9)	−	−	外面：口唇部に断面V字の刻目。口唇直下に横ハケ。上胴部に2条のヘラ描沈線。沈線施上後に各々の直上に管状原体による小刺突帯を配する。胴部には横〜右傾のハケメ。内面：横ハケ。	暗橙	石英砂岩 粘板岩・頁岩 チャート・泥岩 砂質泥岩 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生前期 中葉頃
382	SX−5	土器	甕	(20.3)	(12.8)	−	−	外面：口唇部に断面V字の刻目。口唇部以下に縦横のハケメ。内面：口縁〜上胴にかけて横、横位右傾のハケメ。	浅橙	泥岩・泥質砂岩 石英・頁岩 赤灰色泥質物混石 石英砂岩 チャート・緑色岩 雲母・黒雲母 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生前期前葉 〜中葉
383	SX−5	土器	甕	(17.0)	(5.0)	−	−	外面：口唇部に左傾する刻目。上胴端にヘラ削りを施し、4〜6ｍｍの平凹帯を巡らす。口縁中位以下に縦ハケ。内面：指頭圧痕、口胴界以上に横ハケ。	暗黄橙	緑色鉱物の 集合体・泥岩 多色砂岩 石英砂岩 緑色片岩・石英 頁岩・円磨粒子から なる砂岩	無	弥生前期前葉
384	SX−5	土器	甕	(21.5)	(4.0)	−	−	外面：口縁部に2条の微隆起線文を左回りで摘み出す。	黒灰	砂岩・泥質砂岩 石英？	無	南四国型 弥生前期末？
385	SX−5	土器	甕	(15.8)	(6.1)	−	−	外面：口縁端部に断面三角形の外肥帯を貼付し、その層稜を挟んで断面三角の刻目を施す。内面：指頭圧痕。	浅黄	石英混泥岩 石英・砂岩 砂質泥岩	無	南四国型 弥生中期
386	SX−5	土器	甕	(21.4)	(7.5)	−	−	外面：口唇下端に素地紐を貼付し、断面三角の鋭い外肥帯に摘み出す。内面：指頭圧痕。	黄灰	石質砂岩 泥質石英砂岩 砂岩・チャート	無	南四国型 弥生前期末 〜中期前半頃
387	SX−5	土器	甕	(20.2)	(6.7)	−	−	外面：口縁端部より３条の微隆起帯線文を上弦型弧形に下垂させ、断面三角形に摘み出す。貼付による細小な瘤状浮文。内面：ナデ。	黄橙	砂岩 石英砂岩 チャート	無	弥生前期末
388	SX−5	土器	鉢	(15.6)	(4.8)	−	−	外面：右傾ハケメ。内面：横ミガキ、ナデ調整。	灰褐	泥質砂岩 砂質泥岩 珪質砂岩 チャート ＢＷ型火山ガラス	有	弥生前期 前葉頃
389	SX−5	土器	甕／壺	(7.2)	−	−	(7.4)	外面：接地部際まで縦ハケ。外底は輪高台状の揚底。内面：斜位のナデ調整。	黄灰	泥質砂岩 緑色砂質泥岩 石英結晶片岩 砂質泥岩・砂岩	無	弥生
390	SX−5	土器	甕／壺	−	(7.1)	−	(6.2)	外面：接地部際まで縦ハケ。内面：ナデ。	暗橙	砂岩・頁岩 砂質泥岩・泥岩	無	弥生
391	SX−5	土器	壺	−	(6.6)	−	(8.2)	外面：縦ハケ、後ミガキ。 内面：横ナデ、横ミガキ。	黄灰	砂質泥岩・泥岩 砂質砂岩・砂岩 石英結晶片岩 頁岩・チャート	無	弥生前期中葉 〜後半
392	SX−5	土器	甕／壺	−	(10.9)	−	(8.0)	外面：接地面まで右傾斜のミガキ。内面：指頭圧痕、ナデ。紐巻成形は左旋回と推定。	黄橙	石英混泥岩 泥岩・頁岩 泥質石英砂岩 珪質砂岩 ＢＷ型火山ガラス	−	弥生前期中葉 〜後半

Tab.14　遺物観察表 14

図版No.	出土地点	器類	器種	法量（cm）				特徴（手法等）	色調	含有岩片（鉱物）	0.1mm以上のアカホヤ（有・無）	備考
				口径	器高	胴径	底径					
393	SX−5	土器	甕／壺	−	(8.6)	−	(15.0)	外面：接地面際まで縦ハケ。内面：指頭圧痕。紐巻成形は左旋回。	橙	チャート・頁岩 砂質泥岩・石英	無	弥生
394	SX−5	土器	甕／壺	−	(15.4)	−	8.0	外面：接地面際まで縦ハケ。	橙	石英混泥岩 石英結晶片岩 砂岩・泥岩 チャート	無	弥生
395	SX−5	土器	甕／壺	−	(8.6)	−	7.3	外面：接地面際まで縦ハケ。外底はナデ調整。内面：横ナデ。	灰褐	珪質砂岩・石英 泥岩・千枚岩 チャート	無	弥生
396	SX−5	土器	甕／壺	−	(5.0)	−	7.2	外面：接地面際まで縦ハケ。	浅橙	泥質砂岩 泥質砂岩・泥岩 石英砂岩 チャート ＢＷ型火山ガラス	有	弥生
397	SX−5	土器	甕／壺	−	(6.4)	−	6.0	外面：ヘラ調整。内面：ワラ状の植物体による深い縦ナデ。	橙	頁岩・雲母・泥岩 チャート・石英 泥質緑色片岩 緑色結晶片岩	無	弥生後期？
398	SX−5	土器	壺	−	(6.0)	−	8.0	外面：接地面際までハケ、後横ミガキ。外底に籾圧痕。内面：指頭圧痕、ナデ調整。	黄灰	泥岩・石英砂岩 チャート 砂質泥岩 泥質石英砂岩	無	外底籾圧痕 弥生前期中葉 〜後半
399	SX−5	土器	甕／壺	−	(10.6)	−	7.9	外面：接地面際まで縦ハケ。内面：ナデ調整。	黄灰	泥岩・石英	無	弥生
400	SX−5	土器	小型壺／甕	−	(6.4)	−	(1.6)	外面：叩目・縦ハケメ。内面：指頭圧痕。丸底型。	黄灰	チャート・泥岩 石英結晶片岩 石英砂岩 砂質泥岩 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生終末〜 古墳初頭
401	SX−5	土器	甕／壺	−	(2.4)	−	(7.8)	外面：指頭圧痕。外底に網代圧痕。紐巻成形は右旋回と推定。	灰桃	砂岩・チャート 砂質泥岩 石英砂岩	無	南四国型 網代圧痕 弥生中期
402	SX−5	土器	鉢	−	(4.7)	−	(4.6)	外面：平行叩目。輪高台状の外底には指頭圧痕が並ぶ。	橙	石英砂岩・泥岩 砂質泥岩・砂岩 石英結晶片岩 チャート 泥質砂岩	無	弥生後期中葉
407	SX−7	土器	鉢	(12.4)	8.7	−	(4.0)	外面：底部際に横ナデ調整。内面：指頭圧痕。全面右傾ナデ調整。	黒灰	砂岩・シルト岩 泥質砂岩・泥岩 頁岩・石英 チャート	無	弥生前期初頭？
408	包含層（A2）	土器	壺	(42.0)	(12.4)	−	−	外面：口頚部に、断面三角形の突帯を巡らす。ハケメ後ミガキ。内面、：口縁部から口頚部にかけて横ハケメ。口縁端部ではさらに横ナデを重ねる。頚部内面には横ミガキ。	浅橙	石英混泥岩 石英砂岩 チャート 砂質泥岩 泥質石英砂岩 泥岩・砂岩	無	大型 弥生前期前葉
409	包含層（A2）	土器	壺	(13.8)	(5.3)	−	−	外面：口縁部に縦ハケメ。口頚界に1条の沈線が巡る。内面：指頭圧痕。	黄橙	石英混泥岩 泥岩・シルト岩 石英砂岩チャート 砂質泥岩	無	弥生前期前葉 〜中葉
410	包含層（A2）	土器	壺	(18.6)	(5.3)	−	−	外面：口頚界に断面不等辺三角の突帯を貼り付け、その後縦ハケ。突帯には左傾の刻。内面：口縁〜口唇にかけて横ナデ。	橙	砂質泥岩・砂岩 泥質砂岩・石英 砂質泥岩 石英砂岩 石英混泥岩 ＢＷ型火山ガラス チャート	有	弥生前期後葉
411	包含層（A2）	土器	壺	(17.0)	(6.5)	−	−	外面：口縁外端直下に縦ハケ。	黄灰	チャート 砂質泥岩 泥質砂岩・泥岩 石英砂岩・頁岩	無	弥生中期
412	包含層（A2）	土器	ミニチュア壺	−	(4.7)	−	(3.0)	外面：ハケメ、口頚部に少なくとも2条の沈線で構成する直線文帯。頚胴界に2条の沈線。底部側面には縦位のミガキ。紐巻成形は左旋回と推定。	黄灰	泥岩・砂岩 泥質石英砂岩 チャート	無	弥生前期中葉
413	包含層（A2）	土器	壺	11.9	38.0	−	9.6	外面：縦ハケ後ミガキ。頚胴界に四角〜台形の突帯を貼付。突帯上面に断面V字の擬刻目。内面：口縁部は右傾の横ハケ後左傾のミガキ。胴部はナデ。	灰褐	チャート 泥質砂岩 砂質泥岩 泥岩・頁岩 ＢＷ型火山ガラス 石英砂岩 チャート質砂岩	有	弥生前期中葉
414	包含層（A2）	土器	壺	(14.6)	(5.5)	−	−	外面：口唇外端下に縦ハケメ。内面：横ミガキ。	浅黄灰	石英砂岩・石英 砂質泥岩 ＢＷ火山ガラス	−	弥生前期後葉 〜中期
415	包含層（A2）	土器	壺	(13.8)	(5.4)	−	−	外面：口唇部は横ミガキ及び横ナデ。口縁部右傾の縦ハケ、横ナデ、一部横ミガキ。口頚界にヘラ描きした2条の右曳沈線間に円形刺突文帯を一列する。内面：口縁部に3〜4条構成の縦位直線文帯をヘラ描。口頚部横ミガキ。	黄橙	角閃石 チャート 暗赤色チャート 褐色砂岩 暗赤色砂岩 暗赤色泥岩 チャート質砂岩 黄灰色砂岩 石英混泥岩 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生前期中葉
416	包含層（A2）	土器	壺	(10.6)	(3.6)	−	−	外面：口唇部横ナデ。口縁外端下に縦ハケ。頚部外面多状の沈線文帯。内面：横ナデ。	暗灰褐	泥岩・石英	無	細頚型 弥生前期末
417	包含層（A2）	土器	壺	(14.6)	(5.2)	−	−	外面：縦ハケ、頚部３条構成の直線文帯をヘラ描。	黄橙	石英混泥岩 石英・泥岩 シルト岩	無	弥生前期後葉

Tab.15　遺物観察表 15

図版No.	出土地点	器類	器種	法量（cm）				特徴（手法等）	色調	含有岩片（鉱物）	0.1㎜以上のアカホヤ（有・無）	備考
				口径	器高	胴径	底径					
418	包含層(A2)	土器	壺	(25.0)	(5.9)	－	－	外面：口唇部に断面V字の縦刻目。口縁部には縦ハケ、指頭圧痕。内面：指頭圧痕。	黄灰	石英混泥岩 石英・石英砂岩 チャート	無	広口型 弥生前期末 ～中期初頭
419	包含層(A2)	土器	壺	(16.0)	(3.6)	－	－	外面：口唇部に縦線状の刻目をヘラ描で押刻する。口縁部には縦ハケ。	黄灰	泥岩・石英砂岩 ＢＷ型火山ガラス	－	弥生中期末
420	包含層(A2)	土器	壺	－	－	－	－	外面：横位右傾のハケメ後横ナデ。左旋回の回転台を用い7条構成の直線文帯、更に下方に5条以上で構成される直線文帯をヘラ描し、その間に双線山形文を施す。	黄白	泥質砂岩 砂質泥岩 石質砂岩 チャート ＢＷ型火山ガラス	－	弥生前期末
421	包含層(A2)	土器	壺	－	－	－	－	外面：櫛描または、ヘラ描直線文帯。	黄白	チャート・アカホヤ 石英砂岩	有	弥生前期末 ～中期初頭
422	包含層(A2)	土器	壺	(14.2)	(9.8)	－	－	外面：口唇部横ナデ、口縁～頚部縦ハケ、頚部～胴部縦ハケ後横ミガキ。頚部中位に4条の右曳ヘラ描沈線。内面：頚部中位に横ミガキ、頚胴界に指頭圧痕、ナデ。素地紐巻の施向は左向き。	橙	石英砂岩 泥質石英砂岩 泥岩・砂岩 チャート 砂質泥岩 赤色砂岩	無	弥生前期後葉
423	包含層(A2)	土器	壺	13.9	34.7	24.1	9.5	外面：頚部ハケ後、5条のヘラ描沈線帯。胴部ハケ、4条ヘラ描沈線帯。	黄橙	砂岩・チャート チャート質砂岩 砂質泥岩・泥岩 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生前期後葉
424	包含層(A2)	土器	鉢	(15.2)	(7.6)	－	－	外面：口唇以下は縦ハケメ。内面、口縁部左上位の指頭圧痕。左巻成形。	橙	泥岩・砂岩 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生前期 中葉頃？
425	包含層(A2)	土器	甕	(16.0)	(3.9)	－	－	外面：口胴界に左巻成形時の指頭圧痕。口縁以下に横斜のハケメ。内面：口縁部横ナデ、胴部横ハケメ。	暗褐	泥質石英砂岩 砂質泥岩 石英砂岩 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生後期？
426	包含層(A2)	土器	甕	(16.4)	(5.7)	－	－	外面：口唇部に断面V字の縦刻目。刻の内部にはヘラ描原体の木理を留める。胴部は右傾縦ハケ、胴部上位に2条構成の右曳直線文帯をヘラ描。内面：口胴界以上に横斜のハケメ。胴部内面右傾のナデ。	橙	白色泥岩 （有色岩片混） 泥質石英砂岩 チャート 砂質泥岩 石英砂岩 泥岩	無	弥生前期中葉
427	包含層(A2)	土器	甕	(14.4)	(4.6)	－	－	外面：口唇部に断面V字の縦刻目。口縁～上胴部にかけて縦ハケ。上胴部に2条の沈線を双線描。内面：口胴界に横ハケ。	橙	砂岩・チャート 砂質泥岩 泥質砂岩	無	弥生前期中葉
428	包含層(A2)	土器	甕	(16.2)	(6.0)	－	－	外面：口唇部に断面V字の縦刻目。頚部横ナデ。口胴界に2条構成のヘラ描直線文、沈線間に円管刺突烈点を一列。内面：口胴部に指頭圧痕とナデ。成形時の素地接合は外傾とする。	暗黄橙	緑色片岩 泥質結晶片岩 磁鉄鉱 ＢＷ型火山ガラス 砂岩・粘板岩 チャート・石英 石英砂岩	有	弥生前期中葉
429	包含層(A2)	土器	甕	－	(3.1)	－	－	外面：口唇部に断面V字の縦刻目。刻目の内部にはハケ状原体の木理が微留する。口胴界下には右傾ハケメ。胴部上位2条のヘラ描直線文が横走し、その間に管状の刺突列点文を施す。	黄橙	チャート赤色砂岩暗赤色泥岩 赤褐色砂岩 泥岩・チャート 石英砂岩・頁岩 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生前期中葉
430	包含層(A2)	土器	甕	(16.0)	(4.9)	－	－	外面：口唇部に断面V字の縦刻目。口胴界に指頭圧痕、横ナデ。縦ハケメが微留。胴部上位に5条の沈線によって構成される直線文帯。左巻による成形。	黄灰	頁岩・泥岩 砂質泥岩 砂岩・チャート	無	弥生前期後葉
431	包含層(A2)	土器	壺	－	(5.0)	－	－	外面：口縁外端以下に縦ハケメ。口頚界には横ナデ。頚部に扁平な突帯を貼付するか、或いは削りだした後、その内部にヘラ描直線紋帯を横走する。内面：口縁部は横ハケ後横ナデ。頚部内面は横ミガキ。	黄橙	泥岩 泥質石英砂岩 泥質砂岩	無	細頚型 弥生前期末
432	包含層(A2)	土器	甕	－	(4.5)	－	－	－	－	－	－	弥生前期中葉～末期
433	包含層(A2)	土器	壺	－	－	－	－	外面：口縁部ナデ、頚部縦ハケ後8条のヘラ描沈線を巡らす。内面：口縁部ナデ。ミガキ。	浅橙	チャート 砂質泥岩・泥岩 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生前期後葉
434	包含層(A2)	土器	壺	－	－	－	－	外面：櫛描直線文帯。	－	チャート アカホヤ・泥岩 石英混泥岩	有	弥生中期初頭
435	包含層(A2)	土器	壺	－	－	－	－	外面：右傾ハケメ後、12条構成のヘラ描直線文帯、その直上に双線山形文を施す。内面：横ナデ。	黄橙	ＢＷ型火山ガラス 泥岩・チャート	有	弥生
436	包含層(A2)	土器	甕	(18.0)	(3.4)	－	－	口縁外端に断面V字の縦刻目を一列。口唇下端以下に縦ハケ。内面：口縁から胴部に横ナデ。左巻成形？	浅黄橙	泥質砂岩 暗赤色泥質砂岩 シルト岩 石英砂岩	無	逆L字型 在地産 弥生前期後半 ～中期初頭頃
437	包含層(A2)	土器	小鉢	(8.4)	(7.9)	－	(4.4)	外面：一部に縦ハケメが残る。仕上げ調整はミガキ。口縁端下に径3.5㎜の円孔を内面から外面側に斜貫。焼成前穿孔。	黄橙	泥質岩・頁岩 砂岩・シルト岩 チャート・石英	無	有孔 弥生前期？
438	包含層(A2)	土器	壺	－	(6.3)	－	(9.6)	外面：縦斜のハケメ後斜位のミガキ。内面：縦横のハケメにミガキが重なる。	橙灰白	泥質石英砂岩 珪質砂岩 石英砂岩 石英・泥岩 ＢＷ型火山ガラス	－	弥生
439	包含層(A2)	土器	壺	－	(6.5)	－	(8.8)	外面：ミガキ。内面：指頭圧痕後縦斜のナデ。	橙	泥質石英砂岩 泥岩・石英 頁岩・砂岩	無	弥生前期

Tab.16　遺物観察表 16

図版No.	出土地点	器類	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴（手法等）	色調	含有岩片（鉱物）	0.1㎜以上のアカホヤ（有・無）	備考
439	包含層(A2)	土器	壺	－	(6.5)	－	(8.8)	外面：ミガキ。内面：指頭圧痕後縦斜のナデ。	橙	泥質石英砂岩 泥岩・石英 頁岩・砂岩	無	弥生前期
440	包含層(A2)	土器	壺	－	(6.9)	－	(6.0)	外面：ミガキ。内面：前面に横ミガキ。	橙	黒灰色砂混泥岩 砂岩・砂質泥岩 チャート・石英	無	弥生
441	包含層(A2)	土器	甕／壺	－	(6.8)	－	(6.8)	外面：右傾のハケメ。内面：底に指頭圧痕。	黄橙	砂岩・泥岩 チャート	無	弥生
442	包含層(A2)	土器	甕／壺	－	(4.1)	－	(14.2)	内外面ともに成形・調整を留めない。	黄橙	赤色風化殻 チャート	無	多砂器 弥生
443	包含層(A2)	土器	甕／壺	－	(4.6)	－	(6.8)	外面：縦ハケ。外底に顕著な揚底。内面：植物繊維によるナデ痕を留める。	橙	泥岩・砂岩 チャート	無	弥生
444	包含層(A2)	土器	甕／壺	－	(3.5)	－	(8.2)	外面：右上位の縦ハケメ。外底に稲籾圧痕。	橙	粗粒砂岩 砂岩・泥岩 多色チャート	無	稲籾圧痕付 弥生
445	包含層(A2)	土器	甕／壺	－	(3.8)	－	(7.6)	外面：接地部際まで縦ハケ。内面：風化により調整痕を留めない。	橙	チャート	無	弥生
446	包含層(A2)	土器	甕／壺	－	(6.0)	－	(7.2)	外面：左上位のハケメが接地部際に及ぶ。	明褐	泥岩 多色チャート	無	弥生
447	包含層(A2)	土器	甕／壺	－	(4.0)	－	(8.0)	外面：縦位のハケメが接地部際に及ぶ。外底に穿孔途中箇所あり。	黄橙	泥岩 多色チャート	無	弥生
448	包含層(A2)	土器	甕／壺	－	(4.2)	－	(6.8)	外面：右上位の縦ハケメが接地面際まで及ぶ。	橙灰	砂岩・緑色片岩 多色チャート	無	弥生
449	包含層(A2)	土器	甕／壺	－	(3.8)	－	(8.6)	外面：右傾斜のハケメを施す。	明赤褐	砂岩・チャート	無	弥生
450	包含層(A2)	土器	甕／壺	－	(3.8)	－	(8.0)	外面：左上位の縦ハケメが接地部際に及ぶ。内面：指頭圧痕。	灰白	泥岩 多色チャート	無	弥生
451	包含層(A2)	土器	甕／壺	－	(5.3)	－	(8.0)	内面：ヘラ調整痕。	黄橙	砂岩・泥岩 多色チャート	無	弥生
471	SK－36	土器	壺	(13.6)	(32.5)	23.9	－	口縁外端部以下に横ハケ後縦ハケ。頚胴界に1条の沈線を巡らした後、直下に断面V字の縦長列点文を一列。内面：頚部以下に指頭圧痕。頚部に横ハケ。	褐	頁岩 チャート 泥岩・砂岩 石英混泥岩 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生前期末 ～中期
475	SK－41 Pit－164	土器	甕	(22.0)	25.2	－	(8.0)	外面：口唇面に断面V字の縦刻目。上胴部端以下に縦ハケ。口縁～胴部界に横ナデ。内面：口縁部横ナデ。	暗褐	チャート 石英混泥岩 泥岩 ＢＷ型火山ガラス 石英単粒	有	弥生前期中葉 ～後葉
476	SK－41 Pit－164	土器	甕	(25.0)	(6.0)	－	－	外面：口唇下端直下に指頭圧痕。口唇下端以下に縦位右傾のハケメ。上胴部に1条の沈線を巡らす。	暗橙	石英砂岩・砂岩 チャート 泥質砂岩・泥岩 ＢＷ型火山ガラス アカホヤ	有	弥生前期前葉
477	SX－8	土器	壺	(18.2)	(8.5)	－	－	外面：口唇部に指頭圧痕、頚胴界に1条の沈線が巡り、その直上に断面Ｖ字の刺突列点文が一列。内面：口縁部に指頭圧痕。	灰褐	砂岩・泥岩 チャート・石英 角閃石 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生中期前葉頃
478	SX－8	土器	甕	(20.6)	(8.7)	－	－	外面：口唇部に断面Ｖ字の縦刻目。口唇下端下には右傾ハケメ、口唇下に横ナデ。胴部には右傾ハケメ。内面：口縁～口胴界に横ナデ。	暗橙	砂質泥岩・砂岩 石英・チャート	－	弥生前期前葉 ～中葉
479	SX－8	土器	甕	(19.8)	(14.8)	－	－	外面：口唇部に断面Ｖ字の縦位左傾の刻目。口唇下端以下に縦ハケ。上胴に1条の突帯を貼付した後、断面Ｖ字の縦刻目を施す。突帯の上下に浅細な沈線が並走して施文帯を区画する。内面：外面の突帯文位置の裏側に指頭圧痕が高密度に遺存する。	黄白	泥質砂岩・泥岩 チャート・石英	無	弥生前期前葉
480	SX－8	土器	甕	(11.6)	(8.7)	－	－	口縁外端に扁平な外肥帯を貼付し、断面Ｖ字の縦刻目を一列する。頚胴界に2条の突帯を並走貼付し、断面Ｖ字の刻目を縦貫。内面：頚部と胴部に指頭圧痕。	灰橙	泥岩・チャート 泥質砂岩 正長石 石英砂岩	無	南四国型 弥生中期
481	SX－8	土器	壺	－	(9.0)	－	(7.5)	外面：縦位のミガキ。外底にミガキの形跡微留。内面：ナデ調整後ミガキ。	黄褐	石英混泥岩 砂岩・泥岩・石英 黒雲母 ＢＷ型火山ガラス	有	弥生前期
487	SK－57	土器	甑	－	(6.1)	－	8.3	外面：縦ハケ。内面：指頭圧痕、ナデ調整。外底に不整円形の孔を焼成後に内外面から敲打によって穿孔する。	黄灰	泥岩・泥質砂岩 石英砂岩 チャート・雲母 砂質泥岩・砂岩	無	弥生
489	SK－75	土器	甕	23.8	39.4	27.4	8.5	外面：ハケ調整。口頚部の最終調整は横ミガキ。口頚界に粘土帯貼り付け後断面三角に摘み出す。	黄橙	泥質石英砂岩 チャート ＢＷ型火山ガラス	有	南四国型 弥生中期中葉頃?
490	SK－81	土器	甕	(26.6)	(19.0)	－	－	外面：口唇部に強い右爪の指頭状圧痕。口唇部界以下に縦斜のハケメ。上胴部に指頭状刺突（右下爪）を巡らす。内面：口縁部横ハケ、頚部横斜のナデ調整。内面：横ハケ、頚部内面に横ミガキ。	黄灰	チャート・泥岩 頁岩・砂岩 泥質砂岩 石英砂岩 アルコース砂岩	無	南四国型の祖型 弥生前期末
491	包含層(A4)	土器	鉢	(12.8)	9.7	－	(7.0)	外面：器面全体にミガキ。内面：ミガキ。口縁下の対称位置に焼成前に双孔を穿つ。	明黄褐	泥岩・砂質泥岩 シルト岩・砂岩	無	有双孔 弥生前期前半
492	包含層(A4)	土器	壺	－	－	－	－	外面：口唇面に矢羽文を刻む。口唇下端に縦ハケ。頚部にヘラ描直線文を施す。	黄灰	石英砂岩・泥岩 砂岩・チャート ＢＷ型火山ガラス	有	弥生前期末頃

Tab.17　遺物観察表 17

図版No.	出土地点	器類	器種	法量（cm）				特徴（手法等）	色調	含有岩片（鉱物）	0.1㎜以上のアカホヤ（有・無）	備考
				口径	器高	胴径	底径					
493	包含層（A4）	土器	深鉢	－	－	－	－	内外面ともに横位の状痕文。	黄	チャート質砂岩 ＢＷ型火山ガラス 泥岩・アカホヤ	有	縄文晩期
501	縄文包含層（A4）	土器	深鉢	－	－	－	－	内外面ともに状痕文。	橙	チャート質砂岩 チャート・泥岩 石英砂岩 ＢＷ型火山ガラス 石英・磁鉄鉱	有	縄文晩期
502	縄文包含層（A4）	土器	深鉢	－	－	－	－	外面：状痕文。内面：縦横ナデ。	黄	泥岩・泥質砂岩 シルト岩 ＢＷ型火山ガラス 石英・チャート	有	縄文晩期
503	縄文包含層（A4）	土器	浅鉢	－	(5.3)	－	－	全面を磨研とする。	暗灰褐	石英砂岩・泥岩 泥砂岩・チャート 石英単粒 ＢＷ型火山ガラス	有	縄文晩期中葉
504	縄文包含層（A4）	土器	浅鉢	(31.5)	(4.2)	－	－	全面を横位の磨研とする。	灰褐	石英脈・チャート チャート質砂岩 ＢＷ型火山ガラス	有	縄文晩期前半
505	縄文包含層（A4）	土器	浅鉢	－	(7.0)	－	－	全面を横位の磨研とする。	暗灰褐	チャート 石英混泥岩 泥質石英砂岩 石英砂岩・角閃石	無	縄文晩期
506	表採	土器	壺	(13.8)	(3.6)	－	－	外面：口縁部に外肥口縁帯を貼付。直下に縦ハケ。	橙	チャート 泥岩・砂岩	無	弥生中期後半
507	表採	土器	壺	－	(6.0)	－	－	外面：緩弧形の1条沈線線文が区画沈線文帯の上端を切っている。上胴部に粘土帯を貼付、ヘラ描沈線で3帯に削り出し、さらに上帯と下帯に押圧列点を配す。突帯の上部に2条のヘラ描沈線、下部に4条のヘラ描沈線が巡る。内面：指頭圧痕。	黄橙	泥質砂岩・砂岩 砂質泥岩 チャート・石英 石英砂岩 ＢＷ型火山ガラス	有	細頸球胴型？ 弥生前期末
508	表採	土器	壺	(16.8)	(10.6)	－	－	外面：口唇部に指頭圧痕。口縁外端直下に横ナデ。頚胴界の上下に縦ハケ。	橙	チャート・石英 砂岩・泥岩 砂泥岩・白雲母	無	直口型 弥生前期末
509	表採	土器		－	(4.4)	－	－	－	－	－	－	弥生
510	表採	土器	甕	－	(3.5)	－	－	－	－	－	－	弥生前期後葉～末期
511	表採	土器	甕／壺	－	(5.4)	－	－	外面：櫛描による多条沈線帯。	浅橙	チャート混泥岩 泥岩・石英砂岩 砂質泥岩 チャート・石英 ＢＷ型火山ガラス	－	～中葉
512	表採	土器	壺	－	(1.1)	－	－	外面：沈線間に櫛描簾状文。	黄灰	石英砂岩 チャート・石英	無	弥生中期前葉～中葉
513	表採	土器	壺	－	(2.9)	－	－	－	－	－	－	弥生中期初頭
514	表採	土器	甕／壺	－	(3.8)	－	(9.2)	外面：縦ハケ。内面：ハケ調整。	灰褐	チャート 粗粒砂岩・砂岩	無	弥生
519	表採	土製品	土錘	－	－	－	－	楕円形。径5mmの円孔が直通する。	黄白	チャート 泥砂岩・泥岩	無	短円管型 時期不明
520	表採	土師器	羽釜	(27.6)	(4.6)	－	－	外面：鍔基部直下から口唇面にかけて、横ナデ。鍔基部から上胴部にかけてハケ調整。	灰褐	チャート ＢＷ型火山ガラス	－	古代
521	表採	土師器	羽釜	(18.4)	(4.0)	－	－	外面：縦ハケ後横ナデ。	暗灰褐	チャート・砂岩 ＢＷ型火山ガラス	有	古代
522	表採	土師器	杯	(11.6)	3.0	－	(5.4)	内外面に回転ナデ痕が微に残る。外底は、回転ヘラ切りに近い。	浅桃	砂質泥岩 チャート・石英 ＢＷ火山ガラス	－	古代
523	表採	須恵器	壺	－	(6.8)	－	－	外面：半ば剥落した緑灰色の自然釉層が覆う。内面：底面は粗いナデ。	緑灰	－	－	古代
524	表採	窯道具	ハマ	－	1.2	－	－	厚さ7mmの身部は、円筒形の素地から合わせ引きの糸切りによって切り取る。身部下面には、3個のハリを貼付。内2個は先端を先折する。	黄白	－	－	外径5.7cm 近世末～近現代
525	表採	窯道具	ハマ	－	1.8	－	－	厚さ約18mmの身部は円筒形の素地から合わせ引きの糸きりによって切り取る。中央付近には径約28mmの円孔を切り抜き環形の蛇の目形とする。	赤褐	－	－	外径7.0cm 孔径2.8cm 近世末～近現代
526	表採	須恵器	甕	－	(6.7)	－	－	外面：平行叩目。内面：同心円文。	灰	石英砂岩 チャート 石英単粒 ＢＷ型火山ガラス	有	古代
527	表採	陶器	丸碗	－	(4.7)	－	高台径(5.2)	外面：旋削整形痕。輪高台内には、轆轤左旋回の削痕が残る。内面：見込み中央を除く内面は轆轤目で覆われる。中央部分は轆轤右旋回の水引痕が残留し、螺旋状に窪む。	浅黄白	無色珪質粒子を小含	無	能茶産 近現代

Tab.18　遺物観察表 18

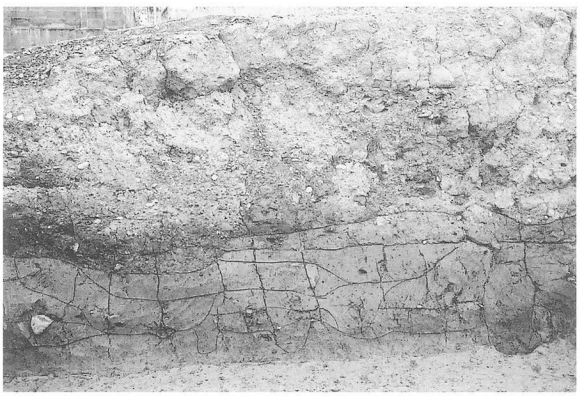
図版No.	出土地点	器種	型式	法量				石材	備考
				全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)		
96	SD－17	不明	有孔	61.5	13.5	6.5	8.05	硬質砂質泥岩	
97	SD－17	石斧	無抉式小型方柱状片刃	73.5	12.5	18.0	29.23	緑色片岩	
98	SD－17	石斧	小型方柱状片刃	(57.0)	12.5	13.5	21.15	緑色片岩	
99	SD－17	石斧	磨製ノミ状両刃	(44.0)	17.0	8.0	7.63	硬質砂質泥岩或いは頁岩	
100	SD－17	石斧	太型蛤刃	104.5	30.0	21.0	119.32	結晶質緑色片岩	
101	SD－17	石鏃	打製凹基式	23.0	19.0	3.5	1.38	サヌカイト	
102	SD－17	石庖丁	直線刃半月形	105.0	55.0	6.0	53.21	赤色凝灰質頁岩	双孔
106	SR－1	石斧	磨製扁平片刃	74.0	41.0	14.0	83.65	蛇紋岩或いは付随の岩石	
107	SR－1	石斧	局部磨製ノミ状片刃	76.0	15.5	10.0	19.02	頁岩転礫	
109	SR－2	石斧	ノミ状	64.0	28.0	9.0	24.04	砂岩	
127	ST－1(A1)	石鏃	打製凹基無茎式	(20.5)	(13.0)	4.2	0.67	サヌカイト	
144	ST－2(A1)	敲石	－	125.0	53.0	30.0	355.－	結晶質緑色片岩	
145	ST－2(A1)	石斧	磨製Ⅱ類無抉式柱状片刃	138.0	18.0	23.0	110.44	緑色片岩	
151	SK－3	勾玉	－	21.5	8.0	4.0	1.18	タルク	有疵・完形
156	SK－4	筋砥石	－	115.0	53.5	37.0	260.－	アルコース砂岩	
174	SK－6	石斧	磨製扁平片刃	58.0	39.0	9.5	47.69	超塩基性緑色岩類	有疵・完形
175	SK－7	石斧	局部磨製太型蛤刃	(120.0)	40.0.	17.5	155.－	結晶質緑色片岩	
203	SK－17	石鏃	打製平基無茎式	19.0	13.5	3.0	0.50	サヌカイト	完形
204	SK－17	石鏃	打製平基無茎式	17.0	16.5	3.5	0.83	緑灰色チャート	完形
209	SK－18	石鏃	打製凹基無茎式	(32.5)	(18.0)	3.0	1.93	サヌカイト	
223	Pit－68	石斧	扁平片刃	103.5	55.5	20.0	220.－	蛇紋岩	大型
224	Pit－68	石斧	ノミ状	55.0	18.5	10.0	15.01	頁岩	小型
225	Pit－68	石庖丁	磨製直線刃半月形片刃Ⅱ類	92.0	40.0	7.0	40.35	結晶質泥質片岩或は玻璃質頁岩	三孔
226	Pit－68	石庖丁	磨製直線刃半月形片刃Ⅱ類	84.0	35.5	6.0	33.52	泥質頁岩（黒色）	双孔
239	SX－2	石斧	磨製扁平片刃	57.0	31.0	8.0	25.46	超塩基性緑色岩類に属し、蛇紋岩或いは付随の岩石	有疵・完形
271	包含層(A1)	石斧	磨製有抉式柱状片刃Ⅱ類	(119.5)	33.5	14.0	83.41	結晶質緑色片岩	縦断剥離片
272	包含層(A1)	石鏃	打製凹基無茎式	28.5	17.5	3.0		サヌカイト	完形
273	包含層(A1)	石鏃	打製凹基式	18.5	13.7	3.0	0.46	サヌカイト	
274	包含層(A1)	石鏃	打製凹基無茎式	27.0	15.5	2.5	0.87	サヌカイト	
275	包含層(A1)	石庖丁	磨製直線刃形両刃Ⅴ－A類	122.5	43.0	8.0	74.46	砂・泥岩が高圧変成を受けた結晶片岩	
276	包含層(A1)	刃器	打製	81.0	48.0	14.0	74.07	粗粒砂岩（灰色）	片面押圧剥離
277	包含層(A1)	不明	研磨錐形	141.0	61.0	46.5	500.－	石英砂岩	
278	包含層(A1)	石斧	ノミ状片刃	100.0	21.0	9.7	28.90	玄武岩質緑色岩	
279	包含層(A1)	石斧	磨製扁平	65.5	38.0	7.0	28.93	硬質砂質泥岩或いは頁岩	
280	包含層(A1)	石斧	ノミ状両刃	48.0	17.5	6.0	7.20	泥岩(灰色)	
281	包含層(A1)	不明	磨製	74.0	15.0	5.0	10.25	頁岩（黒灰色）	
282	包含層(A1)	不明	研磨錐形	101.5	25.5	8.5	33.84	頁岩（黒灰色）	
283	包含層(A1)	石錘	－	51.0	10.3	11.0	6.10	玄武岩質緑色岩	
284	包含層(A1)	砥石	－	116.0	65.0	17.5	155.－	凝灰質砂岩(灰白色)	
285	包含層(A1)	不明	小型石製品	30.5	11.0	2.3	1.76	泥質細粒砂岩（深緑灰色）	
296	ST－1(A2)	石斧	太型蛤刃平基式Ⅱ類	128.0	52.0	(25.0)	300.－	結晶質緑色片岩	
297	ST－1(A2)	敲石	－	90.0	91.0	4.8	545.－	石英斑岩(白色)	
298	ST－2(A2)	紡錘車	Ａｂ類	(57.5)	(30.0)	7.0	16.41	粘板岩	
308	SK－24	石斧	有抉式柱状片刃Ⅰ類	(88.5)	48.0	10.0	75.73	緑色片岩	剥離片
324	SK－32	石斧	磨製ノミ状両刃	(30.0)	10.5	(7.5)	2.66	硬質砂質泥岩或いは頁岩	転礫
325	SK－32	石斧	磨製ノミ状両刃	51.5	15.5	8.5	11.02	灰白色泥岩	転礫・完形

Tab.19　石器・石製品観察表１

図版No.	出土地点	器種	型式	法量				石材	備考
				全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	重量(g)		
326	SK - 32	石包丁	－	49.5	42.0	(0.8)	6.81	粘板岩（黒灰色）	有孔・剥離片
327	SK - 32	石庖丁	磨製直線刃半月形	110.0	47.0	8.5	61.70	硬質砂岩	双孔
335	SK－33	石鏃	打製凹基式	22.0	14.0	4.5	1.09	サヌカイト	
336	SK－33	石斧	局部磨製両刃	99.0	39.0	10.0	69.88	粘板岩（黒灰色）	
403	SX－5	筋砥石	－	(55.0)	(56.0)	(16.5)	54.56	砂岩	
404	SX－5	石斧	ノミ状両刃	70.0	15.0	6.5	10.82	泥岩(暗灰色)	
405	SX－5	紡錘車	A類	47.5	(34.0)	4.5	9.47	粘板岩（黒灰色）	
406	SX－5	石鏃	磨製平基式	24.0	17.0	2.0	1.35	頁岩（灰色）	無疵・完形
452	包含層(A2)	紡錘車	Ｂｂ類	44.0	38.0	7.0	9.98	砂岩・石英砂岩	土器転用
453	包含層(A2)	石鏃	打製凹基式	17.0	16.5	4.2	0.72	サヌカイト	無疵・完形
454	包含層(A2)	石鏃	打製凹基無茎式	22.5	16.5	3.5	0.67	サヌカイト	
455	包含層(A2)	石鏃	打製凹基式	18.0	21.5	3.0	1.11	サヌカイト	
456	包含層(A2)	石鏃	打製凹基無茎式	(32.0)	(19.5)	3.0	2.06	サヌカイト	大型
457	包含層(A2)	剥片	－	39.0	36.0	12.5	12.92	黒曜石（黒色）	
458	包含層(A2)	石斧	磨製尖基型扁平Ｉ－Ａ類	98.0	46.0	15.0	109.82	緑色片岩	
459	包含層(A2)	石斧	扁平片刃	75.5	44.0	13.5	76.35	蛇紋岩に伴う暗青色の超塩基性岩	大型
460	包含層(A2)	石斧	扁平片刃	55.0	29.5	11.0	34.95	凝灰質頁岩(灰白色)	中型
461	包含層(A2)	石斧	扁平片刃	56.5	28.0	10.5	32.38	蛇紋岩	中型
462	包含層(A2)	石斧	扁平片刃	61.5	35.0	8.0	28.39	蛇紋岩に伴う黒青色の超塩基性岩	
463	包含層(A2)	石斧	磨製扁平片刃	61.5	22.5	8.0	17.01	緑色片岩	転礫
464	包含層(A2)	石斧	両刃	76.0	25.0	14.0	45.39	玄武岩質緑色岩	
465	包含層(A2)	石斧	扁平片刃 (未完品或いは、刃潰を受けた製品)	80.0	45.0	15.0	89.25	塩基性結晶片岩（暗灰色）	
466	包含層(A2)	石庖丁	磨製直線刃片刃	(88.0)	53.0	8.0	60.35	粘板岩	有孔
467	包含層(A2)	石庖丁	外弯刃型	99.0	51.0	8.0	56.93	粘板岩	単孔
468	包含層(A2)	石庖丁	磨製片刃	(120.0)	(55.5)	8.0	80.09	粘板岩	有孔・大型
469	包含層(A2)	石庖丁	打製	87.0	56.0	10.5	54.83	粗粒砂岩	未製品
470	包含層(A2)	勾玉	子持型	18.0	10.0	4.3	1.21	タルク	無疵・完形
472	SK－36	石鏃	打製凹基無茎式	25.0	13.0	3.0	0.74	サヌカイト	完形
473	SK－36	石庖丁	磨製　Ｖ－Ａ類？	(64.5)	(45.0)	7.0	27.10	粘板岩	有孔
474	SK－37	石庖丁	Ｖ－Ａ類？	(78.5)	59.0	9.2	73.51	泥質砂岩（黒色）	未製品
482	SX－8	石斧	ノミ状両刃	71.5	28.0	9.5	33.62	玄武岩質緑色岩	
483	SX－8	石斧	扁平片刃	60.5	37.0	13.0	60.44	蛇紋岩に伴う黒青色の超塩基性岩	
484	SX－8	石鏃	磨製有茎式	39.5	14.5	4.0	3.86	頁岩（黒灰色）	
485	包含層(A3)	石斧	扁平片刃	65.5	45.5	14.0	77.87	超塩基性緑色岩類蛇紋岩	
486	包含層(A3)	管玉	－	7.0	4.5	4.5	0.13	軟玉類	有疵
488	SK－58	石庖丁	打製Ⅱ－B類（抉付）	82.0	69.0	18.0	141.57	硬質粗粒砂岩（灰色）	
494	包含層(A4)	紡錘車	Ｂｂ類	27.0	28.0	6.0	4.16	－	土器転用
495	Pit - 215	砥石	－	68.0	39.0	10.3	23.68	パミス	
496	包含層(A4)	石鏃	打製凹基式	14.5	15.0	2.0	0.33	サヌカイト	
497	包含層(A4)	砥石	－	93.5	48.0	20.0	125.00	石英砂岩	
498	包含層(A4)	石斧	ノミ状両刃	60.5	19.0	7.0	12.55	硬質粘板岩（黒灰色）	
499	包含層(A4)	石斧	扁平片刃	70.0	36.0	9.5	35.46	蛇紋岩に伴う 黒青色の超塩基性岩	中型
500	包含層(A4)	石斧	扁平片刃	72.0	41.5	13.5	66.56	砂岩（青灰色）	中型
515	表採	石鏃	打製凹基無茎式	22.0	16.0	2.0	0.55	サヌカイト	完形
516	表採	石斧	局部磨製両刃	79.5	32.5	12.5	46.57	結晶質砂岩或いは砂質片岩	
517	表採	石斧	局部磨製ノミ状	40.5	15.5	11.5	8.70	硬質砂質泥岩或いは頁岩	転礫・小型
518	表採	石庖丁	磨製直線刃半月型片刃Ⅱ類	(62.0)	(32.5)	5.5	18.99	凝灰質硬質泥岩或いは凝灰質頁岩	

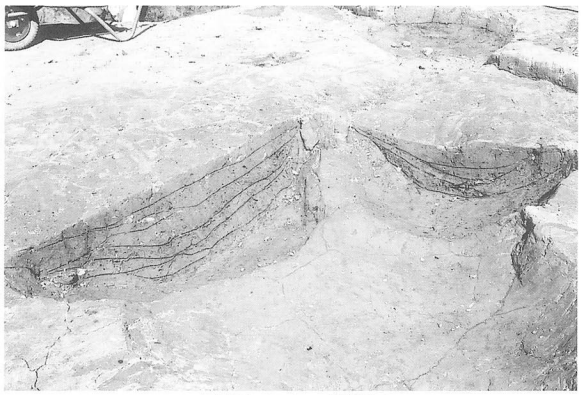
Tab.20　石器・石製品観察表 2

写真図版



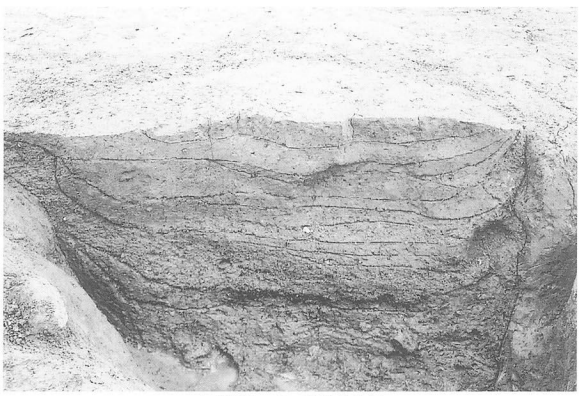
A4区　西壁断面

A区SD－17バンク5　東壁断面



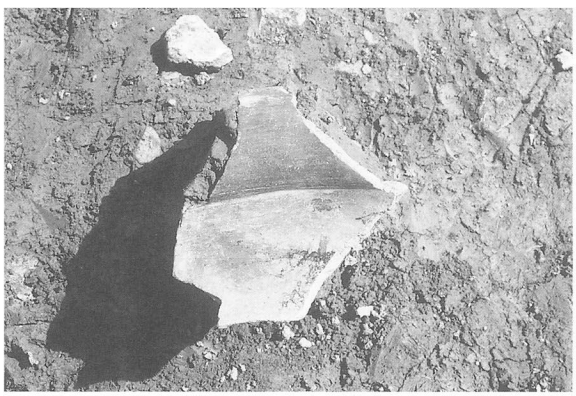
A2区SK－25・26　東壁断面

A2区SK－33　西壁断面



A4区SK－53　東半截状況

A2区SX－5　弥生前期土器壷出土（Fig.74 No359・360）



A4区縄文包含層　晩期浅鉢出土

A4区縄文包含　晩期深鉢出土（Fig.82 No501）

A区遺構・遺物出土